

空港南部工業団地 埋蔵文化財調査報告書 2

— 山武郡芝山町上宿遺跡・大堀切遺跡 —

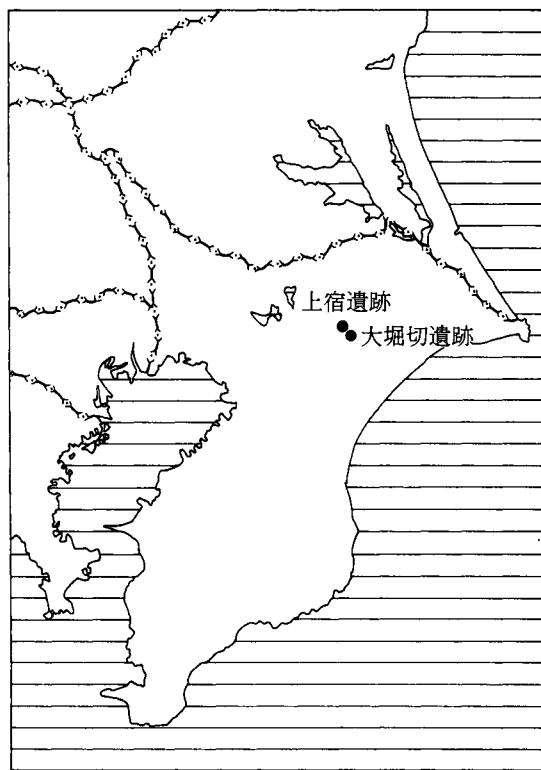
平成11年3月

千葉県企業庁

財団法人 千葉県文化財センター

空港南部工業団地 埋蔵文化財調査報告書 2

— 山武郡芝山町上宿遺跡・大堀切遺跡 —



平成 11 年 3 月

千葉県企業庁
財団法人 千葉県文化財センター

序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第353集として、千葉県企業庁の空港南部工業団地造成事業に伴って実施した山武郡芝山町上宿遺跡・大堀切遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文時代早期から晩期までの遺物や、近世の集落に伴う方形竪穴遺構や方形に区画する土坑列など、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また文化財の保護、普及のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係者の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした補助員の皆様に心から感謝の意を表します。


平成11年3月31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長 中村好成


凡 例

- 1 本書は、千葉県企業庁による空港南部工業団地造成に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、以下のとおりである。
上宿遺跡 千葉県山武郡芝山町岩山字上宿（遺跡コード409-015）
大堀切遺跡 千葉県山武郡芝山町岩山字大堀切（遺跡コード409-016）
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県企業庁の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、東部調査事務所成田調査室長鳴田浩司と主任技師安井健一が担当した。
- 6 近世陶磁器については瀬戸市埋蔵文化財センター藤澤良祐氏に御教示いただいた。
- 7 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県企業庁東総建設事務所、芝山町教育委員会の御指導、御助言を得た。
- 8 本書に使用した地形図は、下記のとおりである。
第1図 芝山町発行 1/2,500 都市計画図（No.5, 9, 10, 13, 14）
第2図ほか 千葉県企業庁作成 1/500
第4図 国土地理院発行 1/25,000「東金」（NI-54-19-11-4）
- 9 周辺航空写真は、京葉測量株式会社による昭和58年撮影のものを使用した。
- 10 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 11 本書で使用しているスクリーントーンは、以下のとおりである。

[遺構]

炉火床部 

[遺物]

石器敲打痕 

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の概要	1
1	調査の経緯と経過	1
2	調査の方法	7
第2節	遺跡の位置と環境	7
第2章	上宿遺跡の調査	17
第1節	旧石器時代	17
第2節	縄文時代	29
1	遺構	29
2	グリッド出土遺物	33
第3節	中近世	52
1	遺構	52
2	遺物	63
第3章	大堀切遺跡の調査	88
第1節	旧石器時代及び縄文時代	88
1	遺構と出土遺物	88
2	グリッド出土遺物	89
第2節	中近世	99
1	遺構	99
2	遺物	99
第4章	まとめ	102
第1節	縄文時代	102
第2節	中近世	103
抄録		巻末

挿図目次

はじめに	第5図	A地区遺構配置図(1/500)	12	
第1図	空港南部工業団地内遺跡配置図及びグリッド配置図	第6図	C地区遺構配置図(1/500)	13
		第7図	D地区遺構配置図(1/800)	14
第2図	上宿遺跡年度別調査地点	第8図	D地区遺構配置図(部分)(1/500)	15
第3図	大堀切遺跡年度別調査地点	第9図	旧石器時代ブロック配置図(1/1,000)	16
第4図	遺跡位置図	第10図	第1ブロック器種別遺物分布図	18
上宿遺跡		第11図	第1ブロック母岩別遺物分布図	19

第12図	第1ブロック出土遺物(1)……………20	第46図	土坑(4)、その他……………60
第13図	第1ブロック出土遺物(2)……………21	第47図	SX-4・馬骨出土状況……………61
第14図	第2ブロック器種別遺物分布図……………22	第48図	SX-5……………62
第15図	第2ブロック母岩別遺物分布図……………23	第49図	焙烙・火鉢・竈敷輪……………64
第16図	第2ブロック出土遺物(1)……………24	第50図	カワラケ……………65
第17図	第2ブロック出土遺物(2)……………25	第51図	碗・皿類……………67
第18図	第3ブロック遺物分布図……………26	第52図	鉢・皿・香炉・瓶・蓋・灯明皿・徳利…69
第19図	第3ブロック出土遺物……………27	第53図	土人形・泥めんこ……………70
第20図	単独出土遺物……………27	第54図	播鉢……………71
第21図	縄文時代遺構(1)……………30	第55図	甕類……………72
第22図	縄文時代遺構(2)……………31	第56図	砥石(1)……………74
第23図	縄文時代遺構(3)……………32	第57図	砥石(2)、石臼……………75
第24図	グリッド出土縄文土器(1)……………34	第58図	銭貨拓影図(1)……………76
第25図	グリッド出土縄文土器(2)……………35	第59図	銭貨拓影図(2)……………77
第26図	グリッド出土縄文土器(3)……………36	第60図	金属製品、賽子……………78
第27図	グリッド出土縄文土器(4)……………37	第61図	土師器……………79
第28図	グリッド出土縄文土器(5)……………39	大堀切遺跡	
第29図	グリッド出土縄文土器(6)……………40	第62図	遺構配置図……………87
第30図	グリッド出土縄文土器(7)……………41	第63図	旧石器時代遺物出土状況……………88
第31図	グリッド出土縄文土器(8)……………42	第64図	縄文時代遺構……………90
第32図	グリッド出土縄文土器(9)……………43	第65図	P-007土坑出土遺物……………90
第33図	グリッド出土縄文土器(10)……………45	第66図	P-007土坑付近出土遺物(1)……………91
第34図	グリッド出土縄文土器(11)……………46	第67図	P-007土坑付近出土遺物(2)……………92
第35図	グリッド出土縄文土器(12)……………47	第68図	P-007土坑付近出土遺物(3)……………93
第36図	A地区縄文土器出土分布(1)……………48	第69図	グリッド出土縄文土器(1)……………95
第37図	A地区縄文土器出土分布(2)……………49	第70図	グリッド出土縄文土器(2)……………96
第38図	A地区縄文土器出土分布(3)……………50	第71図	グリッド出土縄文土器(3)……………97
第39図	グリッド出土縄文時代、石器……………51	第72図	グリッド出土縄文時代土製品……………97
第40図	M-01……………52	第73図	グリッド等出土縄文時代石器……………98
第41図	土坑列1……………54	第74図	近世遺構……………100
第42図	土坑列1土層断面……………55	第75図	土師器、カワラケ、皿、鉢、砥石……………101
第43図	土坑(1)……………57	第76図	銭貨拓影図……………101
第44図	土坑(2)……………58	まとめ	
第45図	土坑(3)……………59	第77図	カワラケ編年図……………103

目 次

はじめに	第9表	検出遺構一覧	80
第1表 上宿遺跡発掘調査面積一覧	第10表	出土陶磁器一覧(1)	81
第2表 大堀切遺跡発掘調査面積一覧	第11表	出土陶磁器一覧(2)	82
第3表 空港南部工業団地内埋蔵文化財調査 組織表	第12表	出土陶磁器一覧(3)	83
	第13表	出土陶磁器一覧(4)	84
上宿遺跡	第14表	出土砥石一覧	85
第4表 第1ブロック出土石器属性表	第15表	出土銭貨一覧	86
第5表 第2ブロック出土石器属性表	第16表	陶磁器以外の焼物の出土点数	86
第6表 第3ブロック出土石器属性表	大堀切遺跡		
第7表 単独出土石器属性表	第17表	出土石器属性表	97
第8表 旧石器時代終末～縄文時代石器属性表	第18表	出土銭貨一覧	101

図 版 目 次

図版1 遺跡周辺航空写真	図版19	グリッド出土縄文土器(8)、グリッド出土 縄文時代石器
上宿遺跡	図版20	中近世土器、陶磁器(1)
図版2 遺跡遠景、調査前近景、上層遺構検出状況	図版21	中近世陶磁器(2)
図版3 旧石器時代遺物出土ブロック、縄文時代遺 構(1)	図版22	中近世陶磁器(3)
図版4 縄文時代遺構(2)、遺物包含層	図版23	土製品、賽子砥石、石臼、土師器
図版5 近世遺構(1)	図版24	銭貨(1)
図版6 近世遺構(2)	図版25	銭貨(2)、金属製品
図版7 近世遺構(3)	大堀切遺跡	
図版8 近世遺構(4)	図版26	調査前近景、確認調査状況
図版9 近世遺構(5)	図版27	旧石器時代遺物出土地点、上層遺構
図版10 旧石器時代遺物(1)	図版28	旧石器時代遺物、P-007土坑出土遺 物、P-007土坑付近出土遺物(1)
図版11 旧石器時代遺物(2)	図版29	P-007土坑付近出土遺物(2)
図版12 旧石器時代遺物(3)、グリッド出土縄文土 器(1)	図版30	P-007土坑付近出土遺物(3)、グリッ ド出土縄文土器(1)
図版13 グリッド出土縄文土器(2)	図版31	グリッド出土縄文土器(2)、縄文時代土製 品、石器(1)
図版14 グリッド出土縄文土器(3)	図版32	グリッド等出土縄文時代石器(2)、土師 器、陶磁器、砥石、銭貨
図版15 グリッド出土縄文土器(4)	文中写真	P-007土坑遺物出土状況
図版16 グリッド出土縄文土器(5)		90
図版17 グリッド出土縄文土器(6)		
図版18 グリッド出土縄文土器(7)		

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

千葉県企業庁は先端技術産業を中心に導入を図る目的指向型の工業団地の造成を、山武郡芝山町岩山に計画した。この空港南部工業団地は、千葉新産業三角構想の一プロジェクトとして策定された臨空工業団地の核となる。当地は新東京国際空港の南約1kmで、東京都心からは約60km、千葉市中心部から約30kmに位置する。団地全体面積は約41.1haで、工業用地面積はそのうち約31.0haを占める。

まず、事業に先立って昭和58年に千葉県企業庁長から事業地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会あて提出された。同年千葉県教育委員会教育長名で「縄文土器散布地6か所」がある旨の回答があった。そこで関係諸機関と協議した結果、現状保存が困難なため記録保存の措置を講ずることとなり、調査は財団法人千葉県文化財センターが担当することとなった。なお、昭和61年には、古宿・上谷遺跡内で新たに追加照会があり、千葉県教育委員会から「古墳時代集落跡1か所」がある旨の回答があった。

事業地内には南から順に古宿・上谷遺跡、大堀切遺跡、上宿遺跡、井森戸遺跡の合計4遺跡が所在する。上宿遺跡、大堀切遺跡の調査面積及び調査組織は以下の一覧表のとおりである。古宿・上谷遺跡及び大堀切遺跡は調査を完了しているが、上宿遺跡には若干の未調査地があり、また、井森戸遺跡には全く調査の手が入っていない。古宿・上谷遺跡については平成9年度に「空港南部工業団地埋蔵文化財発掘調査報告書1」として報告書が刊行されている。また、上宿遺跡、大堀切遺跡及び井森戸遺跡は、事業地内を通過する主要地方道成田松尾線及び国道296号線建設に伴って、当センターによって発掘調査が行われており、一部は成果が報告されている。

第1表 上宿遺跡発掘調査面積一覧(単位：㎡)

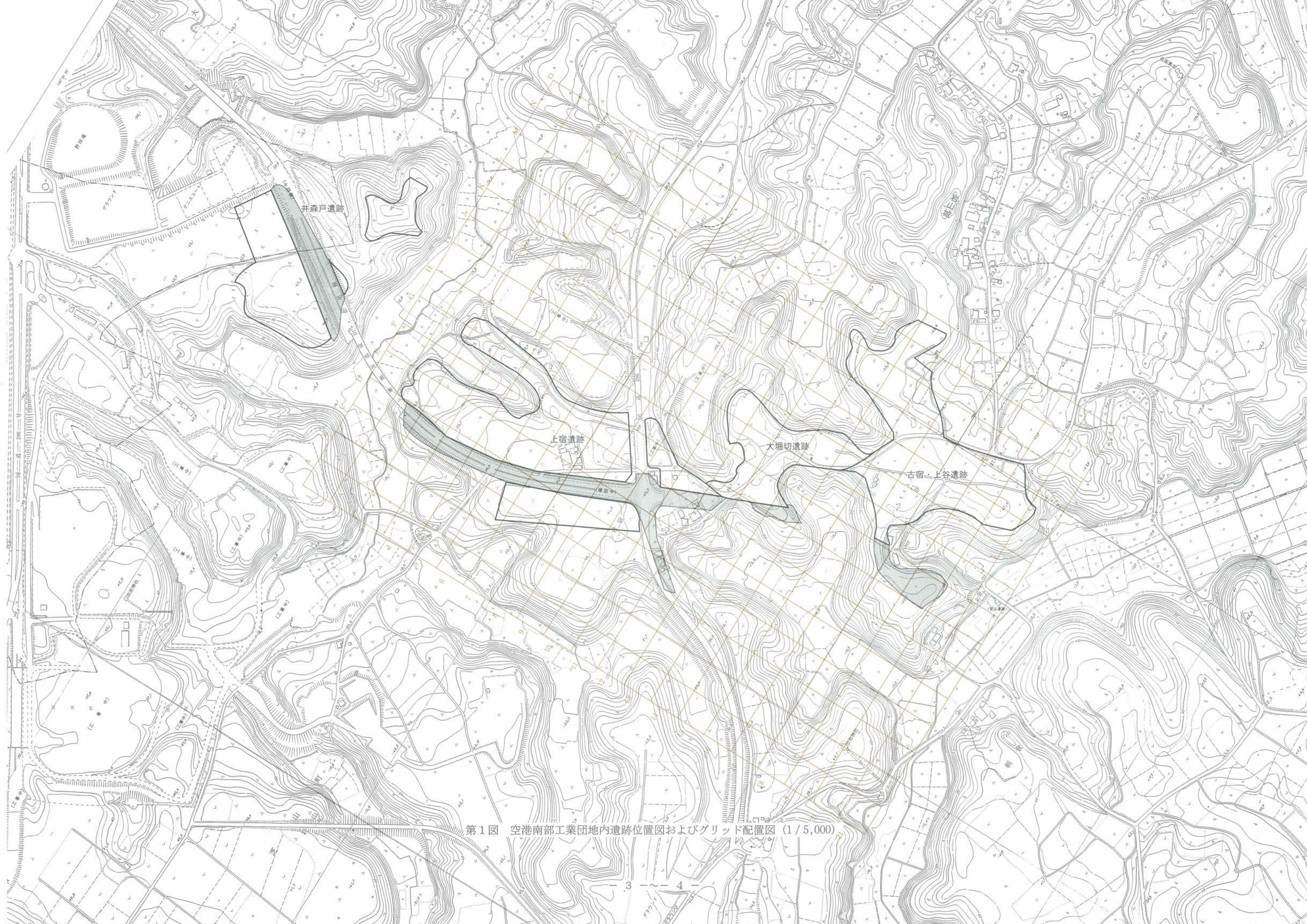
調査年度	対象面積	確認調査 上層・下層	本調査 上層・下層	備 考
昭和58	33,200	3,320・1,328	…	確認調査のみ
昭和59	9,600	…	9,600(上・下層)	昭和58年度の確認調査結果に基づく本調査
昭和60	1,500	150・60	0・0	本調査不要
昭和62	1,800	180・72	56・136	
平成2	900	0・36	900・0	
平成3	1,500	177・60	0・0	本調査不要
合計	38,900	3,827・1,556 計 5,383	10,556・136 計 10,692	発掘面積総計 16,075

第2表 大堀切遺跡発掘調査面積一覧(単位：㎡)

調査年度	対象面積	確認調査 上層・下層	本調査 上層・下層	備 考
昭和58	4,800	480・192	0・0	本調査不要
昭和60	7,000	700・280	0・0	本調査不要
合 計	11,800	1,180・472 計 1,652	0・0 計 0	発掘面積総計 1,652

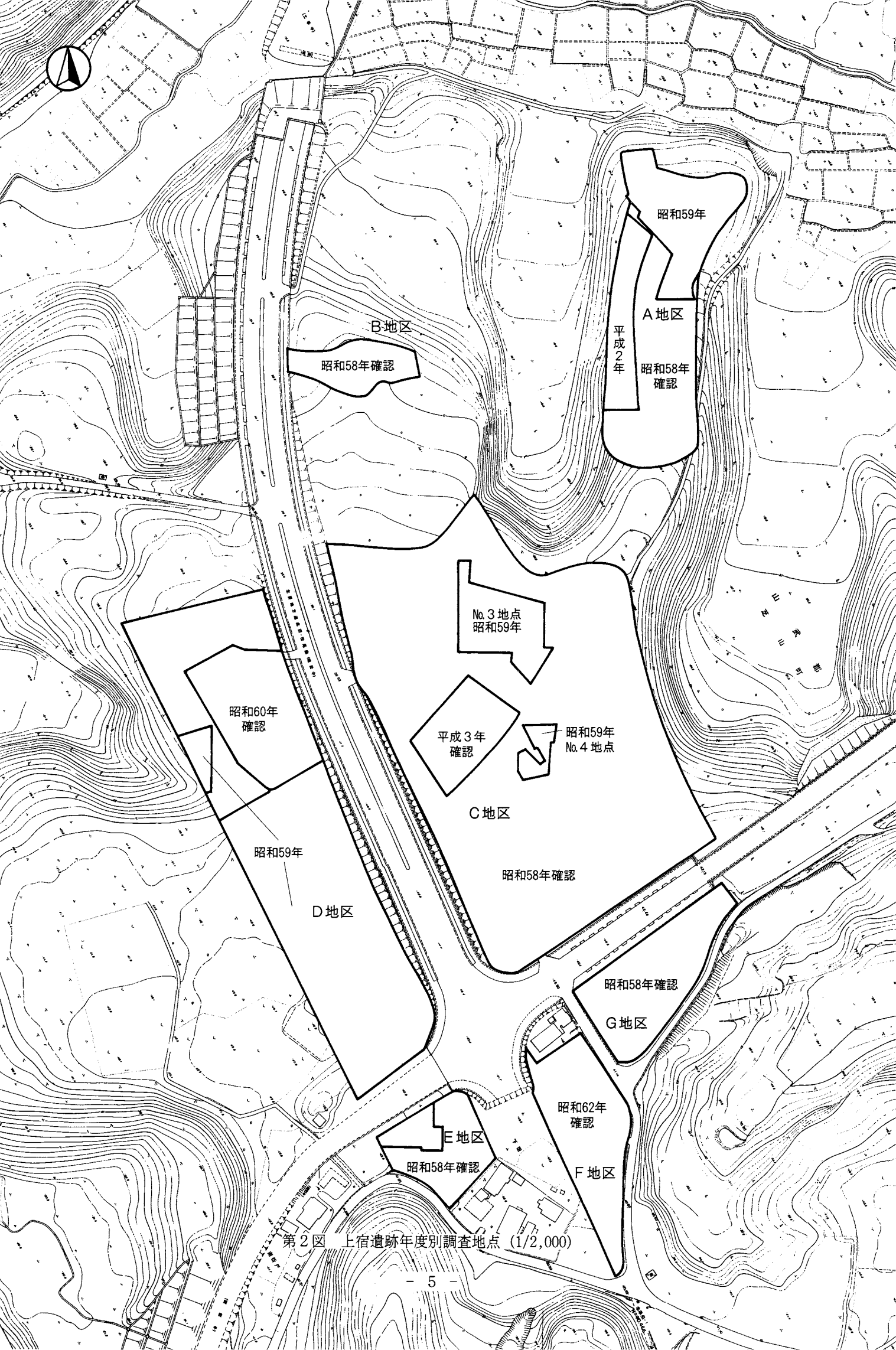
第3表 空港南部工業団地内埋蔵文化財調査組織表

年 度	遺 跡 名	業務内容	調査部長	班 長 (平成5年度から所長)	担当調査員
昭和58	上宿遺跡 大堀切遺跡 古宿・上谷遺跡	発 掘	白石竹雄	斎木 勝	鈴木定明 鈴木文雄
昭和59	上宿遺跡 大堀切遺跡 古宿・上谷遺跡	発 掘	鈴木道之助	斎木 勝(~9) 石田廣美(10~)	鳴田浩司 鈴木文雄
昭和60	古宿・上宿遺跡	発 掘	鈴木道之助	高橋賢一	小久貫隆史 鈴木文雄 小畑 巖
昭和61	古宿・上谷遺跡	発 掘	鈴木道之助	高橋賢一	橋本勝雄 鳴田浩司 新田浩三
昭和62	上宿遺跡	発 掘	堀部昭夫	矢戸三男	永沼律朗 鈴木文雄
昭和63	古宿・上谷遺跡	発 掘 整 理	堀部昭夫	矢戸三男	岡田誠造 太田文雄 麻生正信
平成2	古宿・上谷遺跡 上宿遺跡	発 掘	堀部昭夫	藤崎芳樹	麻生正信
平成3	上宿遺跡	発 掘	天野 努	宮 重行	豊田秀治
平成7	古宿・上谷遺跡	整 理	西山太郎	石田廣美	岡田光広
平成8	古宿・上谷遺跡 大堀切遺跡	整 理	西山太郎	石田廣美	鳴田浩司
平成9	古宿・上谷遺跡 上宿遺跡 大堀切遺跡	刊 行 整 理	西山太郎	石田廣美	鳴田浩司 安井健一
平成10	上宿遺跡 大堀切遺跡	刊 行	沼澤 豊	三浦和信	



第1図 空港南部工業団地内遺跡位置図およびグリッド配置図 (1/5,000)

3-4



第2図 上宿遺跡年度別調査地点 (1/2,000)



第3図 大堀切遺跡年度別調査地点 (1/2,000)

2. 調査の方法

まず、公共座標（第Ⅸ座標系）に従い調査区域に対してグリッドを設定した。方眼の設定に当たっては座標 $X = -29.150$ 、 $Y = 51.400$ を起点として、両軸をそれぞれ50m間隔で区切り大グリッドとした。さらにグリッドの中を $5\text{ m} \times 5\text{ m}$ の100個の小グリッドに分割した。大グリッドはY軸が北から南に向かって1, 2, 3, 4... 20、X軸が西から東に向かってA, B, C, D,... Oという順序で呼称している。すなわち北西隅の大グリッドはA 1グリッド、逆に南東隅の大グリッドはO20グリッドになる。そしてそれらの大グリッド中の小グリッドは北西隅小グリッドを始点にして、Y軸が北から南に向かって00, 10, 20, ... 90、X軸が西から南に向かって00, 01, 02, 03, ..., 09という順序で呼称する。つまり北西隅の小グリッドから南東へと対角線上で見ると00, 11, 22, ..., 99というように進んでいくことになる。すべてのグリッドは北西隅に打たれた杭にそのグリッドの呼称を付帯させている。つまり先の方眼設定の起点となった座標 $X = -29.150$ 、 $Y = 51.400$ はA1-00グリッド北西隅の点となる（第1図）。

なお、このグリッドの設定は事業地内に所在する上宿遺跡、大堀切遺跡、古宿・上谷遺跡の計3遺跡をすべて包含するものであり、したがってこれら遺跡間でグリッド番号が重複することはない。また、事業地内の成田松尾線及び国道296号線の路線敷内は、先に述べたように既に当センターによって発掘調査が行われているが、このときのグリッドは任意に設定したものであるため、今回はこれは踏襲しなかった。

発掘調査の方法は、まず上層については10%の、下層については4%の確認調査を実施した。本調査については山林や草地のようなⅡa層が残存している地点については、表土層のみ重機で除去し、後は手作業で掘り進んだ。Ⅱ層が残存していない地点については、Ⅲ層上面まで重機で除去し、遺構の確認を行った。旧石器時代や縄文早期の遺物を出土する包含層がある地点はグリッドごとに遺物を取り上げた。土坑や方形竪穴、溝などの遺構は任意に土層観察用のベルトを残し調査した。年度別の調査地点は第2、3図のようである。

第2節 遺跡の位置と環境（第4図）

山武郡芝山町は新東京国際空港の南東側に南北に細長く伸びる内陸部の町である。北は成田市、東は多古町、南は横芝町、松尾町、山武町そして西は富里町に接している。下総台地の東部に位置し、北辺部は栗山川水系の高谷川や木戸川の水源地となり、両河川は北西から南東に向かって流れ、九十九里海岸平野を経て太平洋に注いでいる。事業地は新東京国際空港のすぐ南側に位置し、空港を境に成田市と接する。事業地内には南から順に古宿・上谷遺跡、大堀切遺跡、上宿遺跡、井森戸遺跡の合計4遺跡が所在する。いずれの遺跡も高谷川支流の河川によって開析された小支谷に面した台地上から緩斜面部に立地する。その内古宿・上谷遺跡では台地上で標高42m前後に達する。

芝山町には多数の埋蔵文化財が所在し、古くから多くの遺跡の発掘調査が行われてきた。また、隣接する成田市域でも空港を中心に広大な面積の調査がなされており、近年その様子が解明されつつある。特に、この周辺は旧石器時代から縄文時代早期にかけての遺跡が多いことで知られる¹⁾。

旧石器時代の遺跡ではⅨ層～Ⅹ層中から台形様石器を出土した岩山中袋遺跡（空港No.2遺跡）や御田台遺跡、香山新田中横堀遺跡（空港No.7遺跡）などがあげられる。Ⅶ層からⅥ層の石器群を出土した遺跡に

は香山新田中横堀遺跡、山田出口遺跡、香山新田新山遺跡（空港No.10遺跡）、遠野台・長津遺跡などがある。Ⅴ層からⅣ層下部の石器群を出土した遺跡には宝永作遺跡、岩山中袋遺跡、小池木戸脇遺跡、井森戸遺跡、香山新田新山遺跡などがある。角錐状石器、ナイフ形石器を主体とし、礫群を伴うことが特徴である。Ⅳ層上部からⅢ層中部の石器群を出土した遺跡には岩山中袋遺跡、香山新田中横堀遺跡、香山新田新山遺跡などがある。ナイフ形石器、尖頭器、東内野型有樋尖頭器を主体としている。Ⅲ層中部からⅢ層上部の石器群を出土した遺跡には香山新田新山遺跡がある。小型化したナイフ形石器を主体とする。Ⅲ層上部の石器を出土した遺跡には小池木戸脇遺跡、香山新田中横堀遺跡、香山新田新山遺跡などがある。これは尖頭器が主体となる。Ⅲ層上面の石器を出土した遺跡には香山新田新山遺跡がある。細石刃、細石刃石核を主体としている。

縄文時代では、天浪浪丘遺跡（空港No.19遺跡）からは田戸上層式の竪穴住居2軒と井草式の時期の竪穴住居1軒が検出されている。天浪大里遺跡（空港No.18遺跡）からは田戸上層式の時期の竪穴住居1軒、香山新田中横堀遺跡からは井草式と子母口式の竪穴住居が検出されたほかに縄文前期と中期の土器が出土している。さらに、東三里塚吉野台遺跡（空港No.3、51、52遺跡）からは早期の竪穴住居9軒と中期の土器が検出されており、空港周辺には早期の竪穴住居群が多く見られる。また、井森戸遺跡では田戸下層式を伴う礫群と茅山式を伴う土坑を検出している。上宿遺跡からは夏島式、井草式土器等が出土し、また、宝永作遺跡からは花輪台式、子母口式土器が出土した。木の根拓美遺跡（空港No.6遺跡）からは稲荷台式～木の根式が出土し、南三里塚宮園遺跡（空港No.4遺跡）でも早期～中期の土器と加曾利E式の竪穴住居が1軒検出されている。宝永作遺跡では早期～後期までの土器が、山田出口遺跡では中期～後期の遺物が検出されている。

弥生時代の遺跡では芝山町遠野台・長津遺跡で弥生時代中期宮ノ台期、後期久ヶ原期、弥生町期の住居が検出されている。また、御田台遺跡周辺では中期後半から後期中葉の土器が発見されている。

古墳時代の遺跡としては木戸川流域に殿塚・姫塚で有名な芝山古墳群、196基の古墳からなる山田宝馬古墳群、高谷川上流には大里田辺台古墳群、大殿台古墳群、大里古墳群、上吹入古墳群がある。一方で、集落遺跡では香山新田中横堀遺跡からは6世紀後半の竪穴住居が、岩山中袋遺跡では13棟の製鉄工房集落が発見されている。後期の集落遺跡では小原子遺跡群、坂志岡・尼ヶ谷遺跡、井森戸遺跡、上宿遺跡などがあげられるが、いずれも竪穴住居の数は少なく、大規模な集落の検出はない。古墳時代後期の大集落は木戸川をやや下った小池地区に見られるようになる。

奈良・平安時代の集落は、坂志岡・尼ヶ谷遺跡で竪穴住居が4軒発見されているのみである。古墳時代から奈良・平安時代にかけて周辺に製鉄関連の遺跡が密集して見られる。沖ノ台遺跡では7世紀の鍛冶工房が検出され、箱形の製練炉の存在も確実視されている。香山新田中横堀遺跡では箱形の製練炉をはじめとして鉄滓集中地点、炭窯、炭置場、粘土採掘坑等製鉄関連遺構が検出された。

中世の遺跡としては城館跡が多く見られる。高谷川は栗山川支流の一つであるが、この栗山川は下総の国と上総国との国境となっていた重要な河川である。この河川流域には大小の城館が連続して見られる。^{2,3,4)} 特に高谷川右岸には山室氏の飯櫃城、井田氏の大台城、和田氏の山中北・南城が並ぶ。井田氏は文安年間（15世紀半ば）にこの地に土着した。山室氏の客将であった井田刑部大輔がその祖であると言われている。山室氏は山室城を本拠地として、16世紀半ば以降に飯櫃城に、井田氏は田向城、大台城、坂田城に移ったと言われている。井田氏は当初は千葉氏に仕えていたが、16世紀半ば以降は後北条氏と直接被官

関係になり、同氏自身も三谷氏・椎名氏・村山氏などの在地領主を被官化させて領域を経営していた。井田氏系の城の充実した縄張り構造は後北条氏の影響であったと考えられる。田向城跡は高谷川支流の舌状台地の先端部に占地する約250m×500mの大規模な城である。『総州山室譜伝記』によれば、天文14年（1545）、井田因幡守友胤によって築造され、同17年には大台城を改築して移ったと伝えられている。以降天正18年まで坂田城主井田氏の番城であったと言われている。発掘調査の結果、構造は主要部分が空堀によって2つの曲輪に分かれ、尾根続きに曲輪を配置し、周囲に多数の腰曲輪を造っていることがわかった。中世遺構には掘立柱建物群、空堀23条、方形竪穴建物2軒、地下式坑2基、柵列・ピット群・溝などが見られる。遺物にはカワラケ・青磁・染付・瀬戸・常滑・板碑・五輪塔・宝篋印塔・茶臼・鉄鏃・切羽・鉄砲玉・中国銭などが出土している。山室城は『総州山室譜伝記』によれば天文元年（1532）に山室氏が飯櫃城に移ったとされている。発掘調査により16世紀代の瀬戸・美濃産陶器や常滑大甕などが出土しており、16世紀後半まで使われていたようである。飯櫃城には主要な3つの曲輪があり、山室城同様にⅡ・Ⅲ郭が主郭を取り囲むように配置されており、後北条氏の影響と考えられる明確な折り歪みや出升形がある。周囲の低地に「根古屋」や「宿」地名があることや、確認調査ではこの根古屋地区からも16世紀後半の遺物が出土したことから、山室氏が山室城から飯櫃城へ本城を移動した伝承は大筋合っていることがわかった。古宿・上谷遺跡に隣接する岩山城は、尾根の先端よりやや奥まった細尾根上に占地する。直線連郭で、主格部は標高42m、東西50m、南北20mの楕円形に近いプランで、西側に高さ1.5mの土塁を伴う。縄張りを見ると城内を小さい面積の曲輪に細かく分けて、別々に配置していることから、発掘調査はされていないものの占地地形と合わせて周辺の大規模な城と比較して古い段階に築かれ、使用されたものと考えられている。

『総州山室譜伝記』によれば、岩山城は「岩山柵」と見えており、城主は「斉藤助四郎長谷部清長」とされる。天正18年（1590）後北条氏が滅亡すると、北条氏方の上総・下総の諸将は滅亡し、房総には徳川家康の家臣団が入る。

近世には岩山地区は幕府や旗本の相給地となった。村内には幕府直営の佐倉七牧の一つ取香牧の捕込が設置され、捕馬の時には幕府役人や牧士が来村して宿泊した⁵⁾。

注1 『芝山町史 通史編 上』 平成7年11月 芝山町

2 『芝山町史 資料集2 中世編』 平成6年3月 芝山町

3 井上哲朗「房総の領主と城」『房総考古学ライブラリー8 歴史時代2』 平成6年（財）千葉県文化財センター

4 遠山成一「両総国境に分布する城館跡について—栗山川・高谷川水系を中心に—」『千葉城郭研究第3号』 1994

5 竹内理三編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』 昭和59年 角川書店

事業地内遺跡

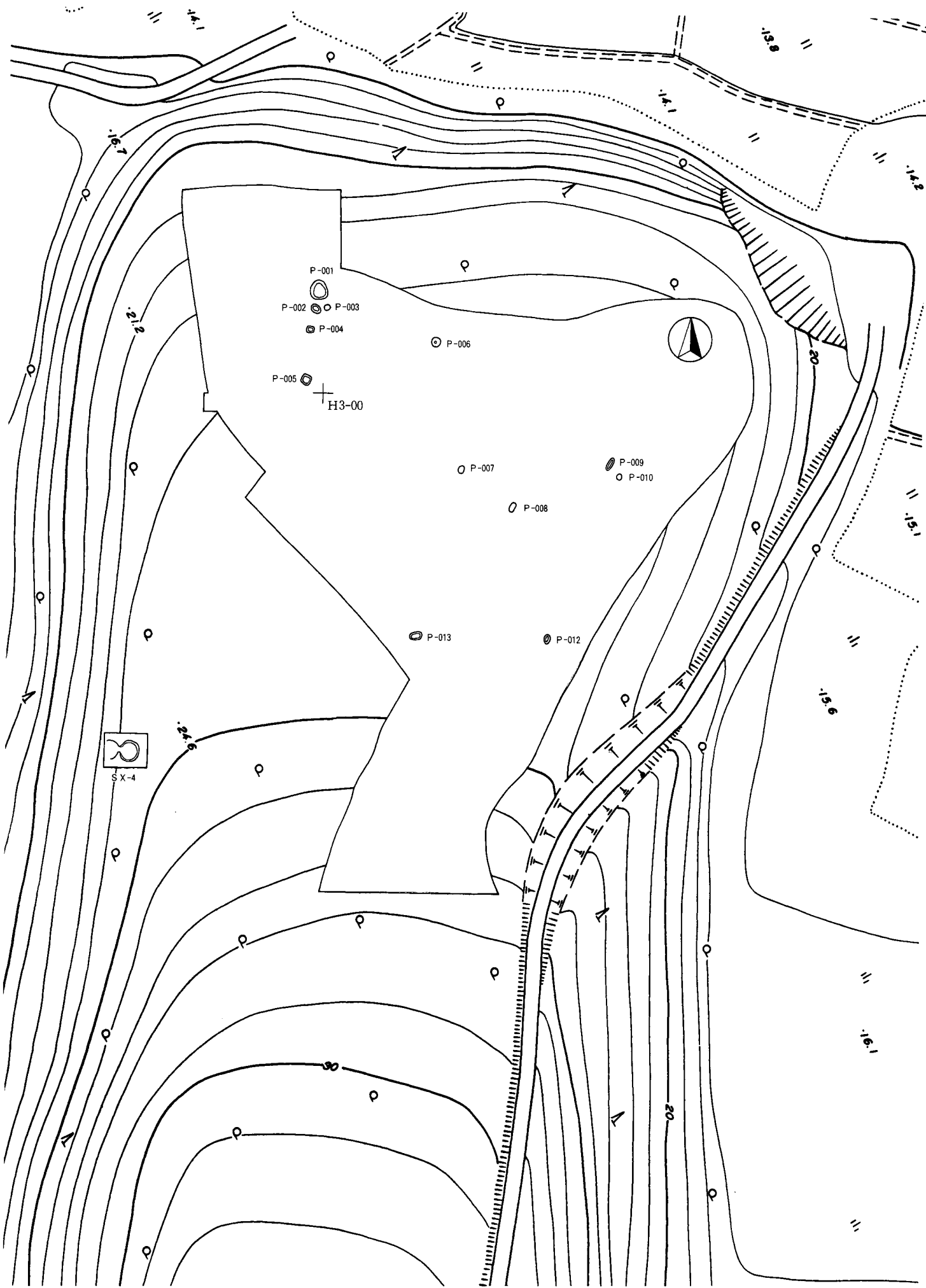
- 1 古宿・上谷遺跡
- 2 大堀切遺跡
- 3 上宿遺跡
- 4 井森戸遺跡

周辺遺跡

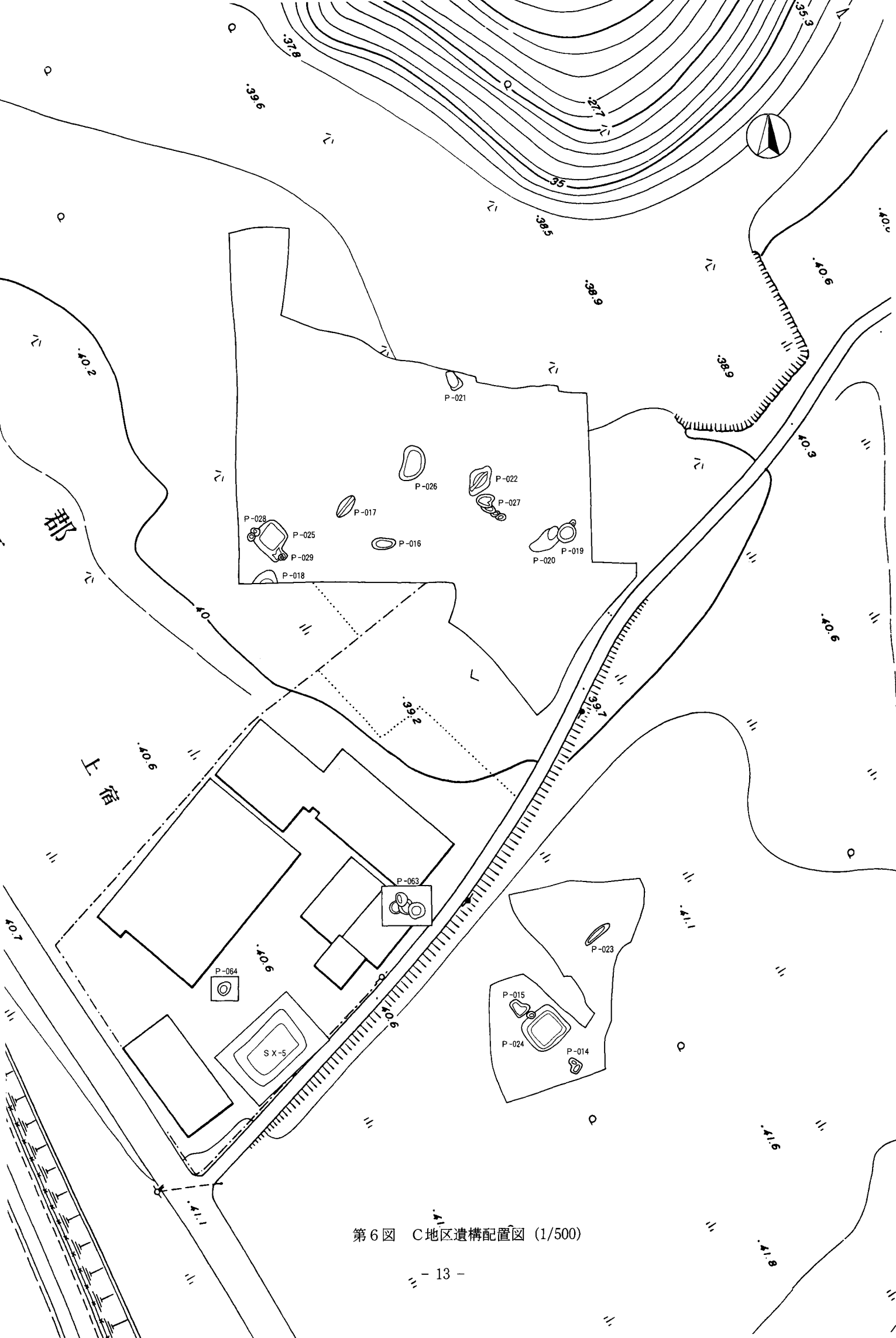
- 5 岩山中袋遺跡（空港No.2遺跡）
- 6 御田台遺跡
- 7 香山新田中横堀遺跡（空港No.7遺跡）
- 8 山田出口遺跡
- 9 香山新田新山遺跡（空港No.10遺跡）
- 10 遠野台・長津遺跡
- 11 宝永作遺跡
- 12 小池木戸脇遺跡
- 13 天浪浪丘遺跡（空港No.19遺跡）
- 14 天浪大里遺跡（空港No.18遺跡）
- 15 東三里塚吉野台遺跡（空港No.3、51、52遺跡）
- 16 木の根拓美遺跡（空港No.6遺跡）
- 17 南三里塚宮園遺跡（空港No.4遺跡）
- 18 芝山古墳群
- 19 山田宝馬古墳群
- 20 大里田辺台古墳群
- 21 大殿台古墳群
- 22 大里古墳群
- 23 上吹入古墳群
- 24 小原子遺跡群
- 25 坂志岡・尼ヶ谷遺跡
- 26 沖ノ台遺跡
- 27 岩山城
- 28 飯櫃城
- 29 大台城
- 30 田向城
- 31 山中北・南城



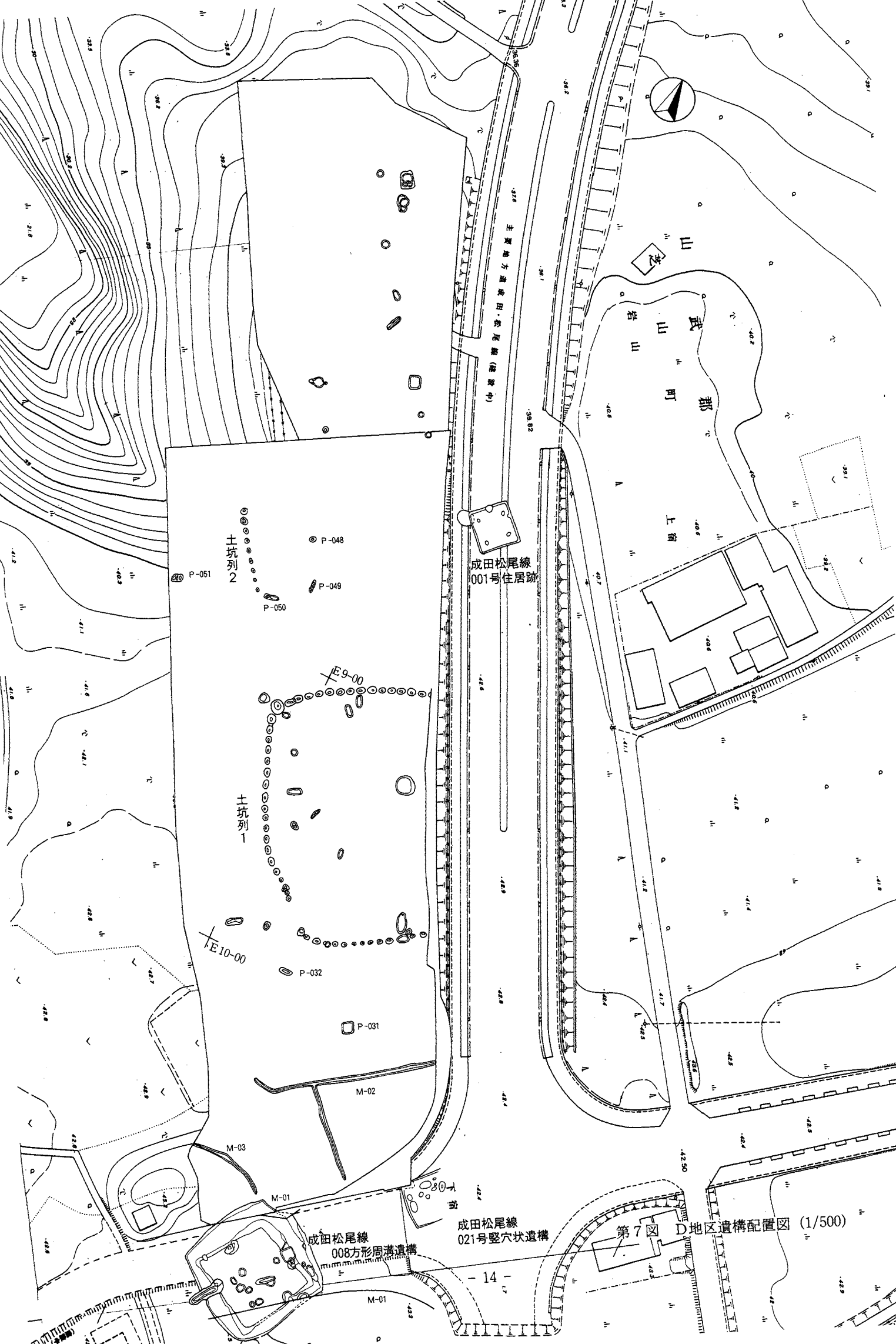
山内 第4図 遺跡位置図 (1/50,000)



第5図 A地区遺構配置図 (1/500)



第6図 C地区遺構配置図 (1/500)



主要地方道成田・松尾線(建設中)

成田松尾線
001号住居跡

土坑列2

土坑列1

P-048

P-049

P-051

P-050

P-032

P-031

M-02

M-03

M-01

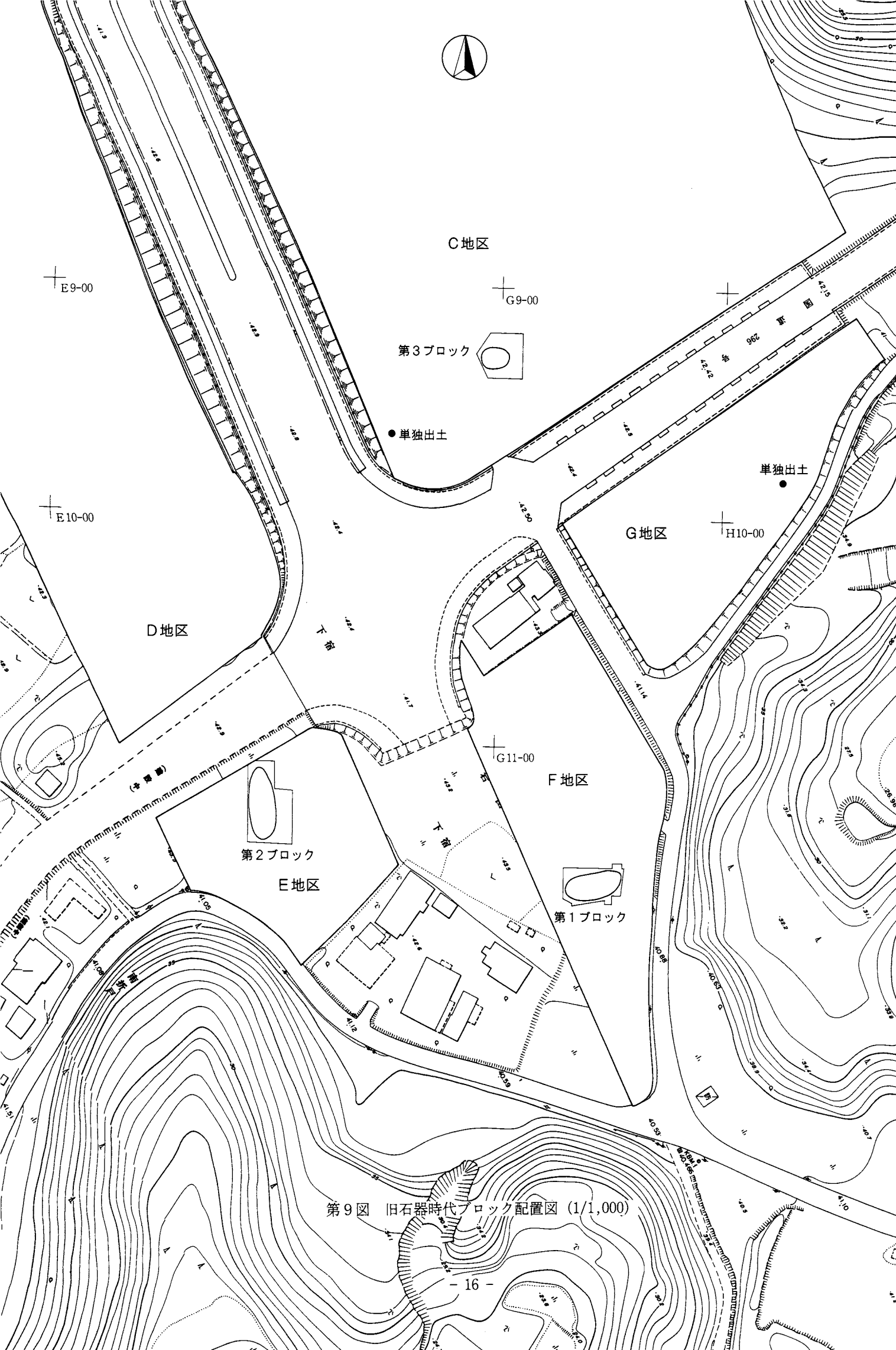
成田松尾線
008方形周溝遺構

成田松尾線
021号竪穴状遺構

第7図 D地区遺構配置図 (1/500)



第8図 D地区遺構配置図 (部分) (1/500)



第9図 旧石器時代ブロック配置図 (1/1,000)

第2章 上宿遺跡の調査

第1節 旧石器時代

旧石器時代の石器集中地点（ブロック）は、遺跡の立地する台地の東側及び南側から入り込む谷に面して検出されている。文化層は2枚に分離され、Ⅸ層下部からⅩ層にかけての第1文化層、Ⅵ層下部の第2文化層としたが、いずれも規模は小さい。第1文化層からは第1、第2ブロック、第2文化層からは第3ブロックの合計3ブロックが検出されており、ほかに単独出土地点が2か所存在する（図9）。

1 第1ブロック（第10～13図、図版3、10）

出土状況 F地区南側の、G11-53・54・55・63・64・65グリッドに位置する。

グリッド杭G11-64付近を中心として、東西12m、南北4mの範囲から全部で21点の遺物が出土した。出土層位は幾つか外れているものもあるが、おおむねⅨ層下部からⅩ層にかけて集中している。

遺物 1、2は二次加工のある剥片（以下R剥片と略記）である。1は両側縁からの二次加工が顕著である。何の製作を意図したかは不明である。2は小型の横長剥片を素材とする。3～6は微細剥離痕のある剥片（以下U剥片と略記）である。3は基部が折断されている。7～9は剥片である。10は剥片の接合資料で、それぞれ個別に剥片剥離されたものである。11は石核の接合資料である。

2 第2ブロック（第14～17図、図版3、11）

出土状況 E地区中央部の、E11-19・29・39・49、F11-30区に位置する。

E11-19・29グリッドを中心とするグループと、E11-39、F11-30グリッドを中心とするグループとに分けられる。両者を別のブロックとみなすことも可能であるが、帰属する文化層が同一と考えられることや、極めて近接していることから、同一のブロックとした。いずれも直径5mほどの小規模なもので、全部で23点の遺物が出土している。出土層位はⅨ層下部からⅩ層にかけてである。

遺物 1は楔形石器である。背面側に先端方向からの剥離痕が顕著に観察される。2、3、5はR剥片である。2は左側縁に連続した二次加工が施される。3は先端部に二次加工が施される。5は先端側からの剥離痕も見られる。6はU剥片である。4、8は石核である。9は剥片の接合資料で、打面再生ないしは打面入れ替えの後、剥片剥離が行われる。

3 第3ブロック（第18、19図、図版12）

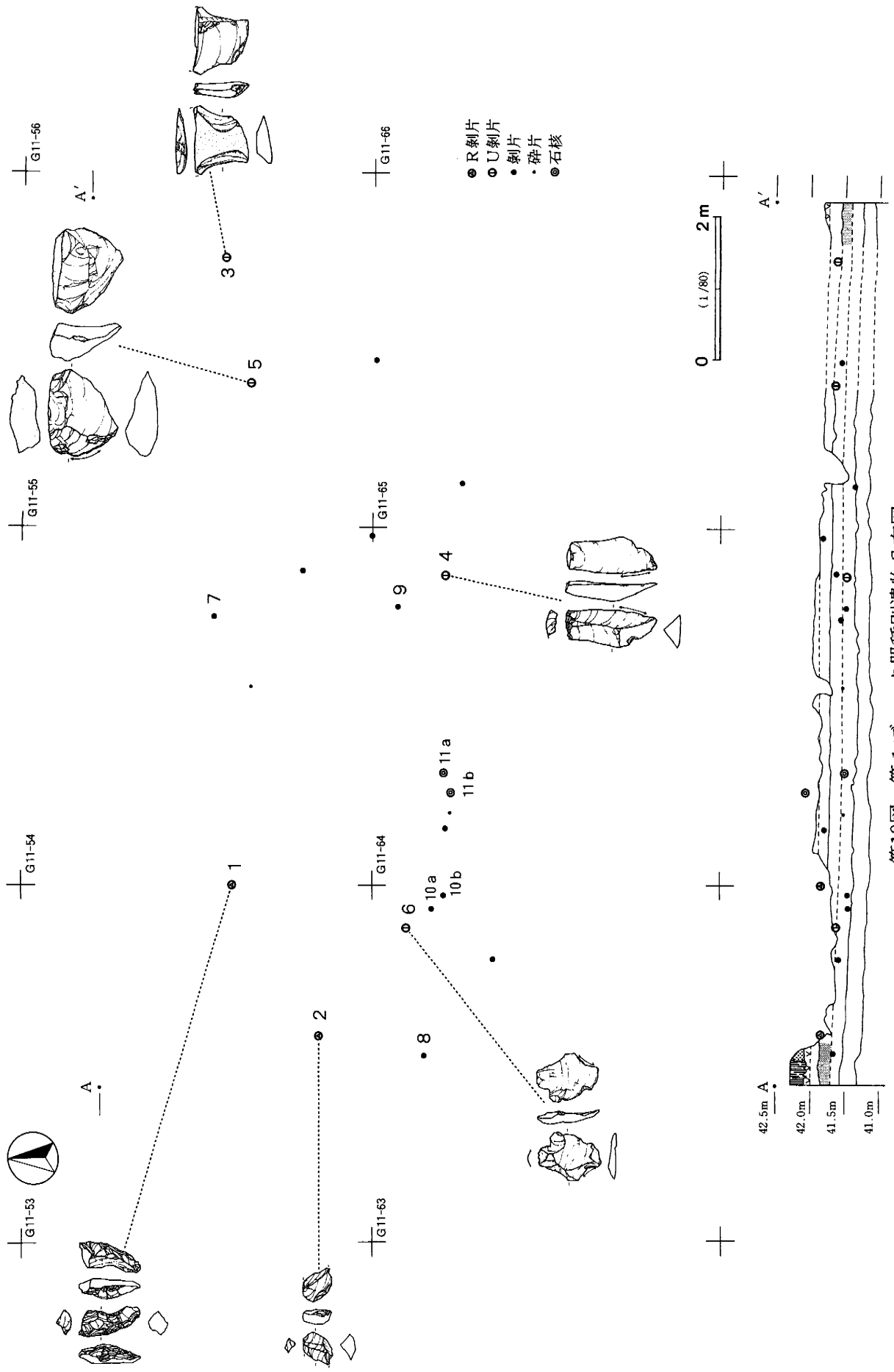
出土状況 C地区南側の、F9-29・39、G9-20グリッドに位置する。

3点のみ出土の散漫なブロックである。おおむねⅥ層下部の出土と考えられる。

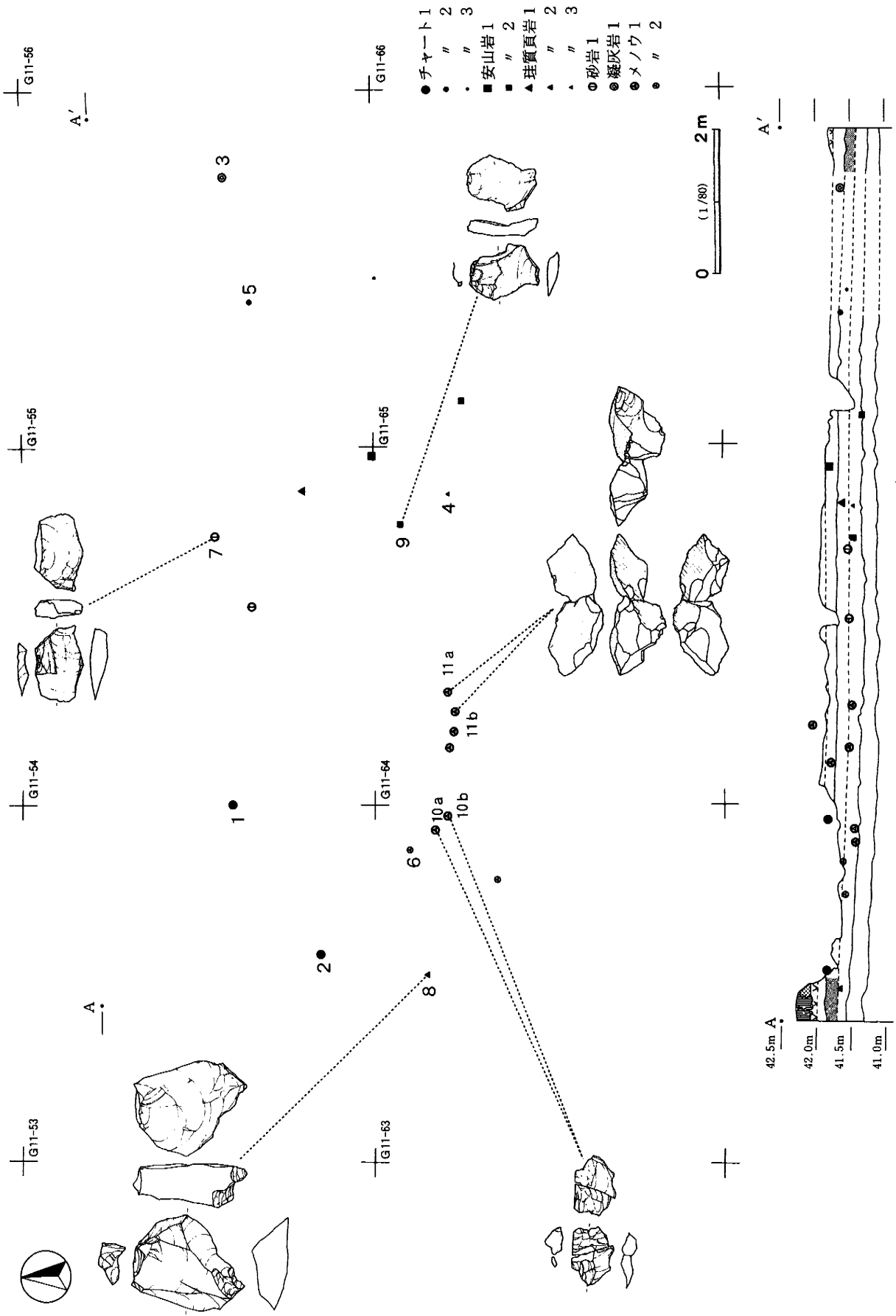
遺物 1は楔形石器である。右側縁には二次加工も施される。

4 単独出土（第20図、図版12）

F5-65とH9-82の各グリッドから、R剥片がそれぞれ1点出土している。1は黒曜石を素材とするもので、出土層位はⅢ層中部である。右側縁に二次加工が施される。2はチャート素材のもので、出土層位はⅨ層である。先端部に連続した二次加工痕が観察される。

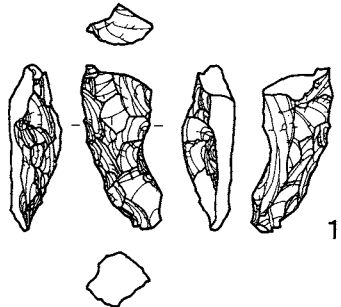


第10図 第1ブロック器種別遺物分布図

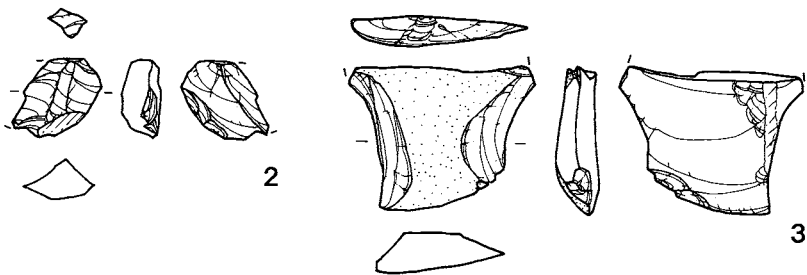


第11図 第1ブロック母岩別遺物分布図

チャート1



凝灰岩1



珪質頁岩3

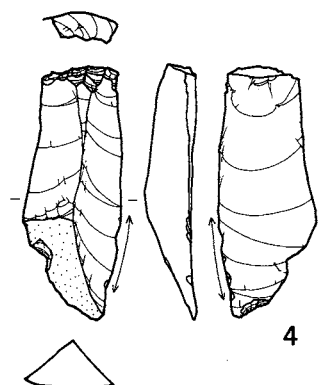
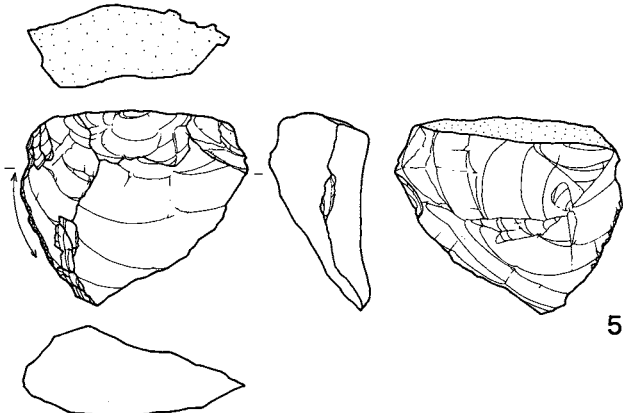
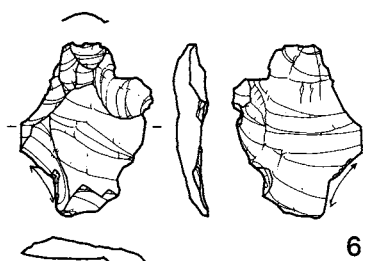


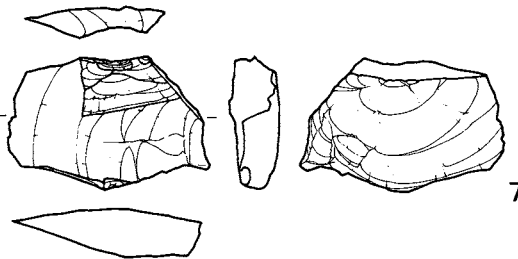
チャート2



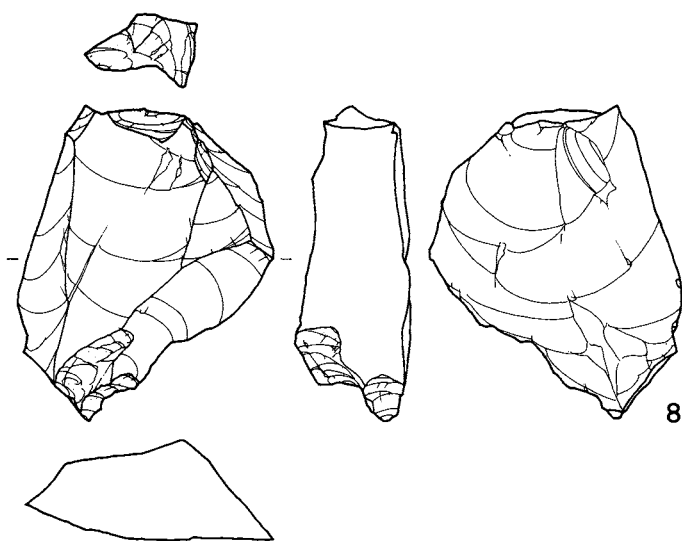
メノウ2



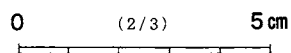
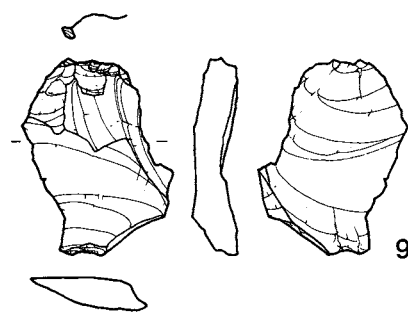
砂岩1



珪質頁岩2

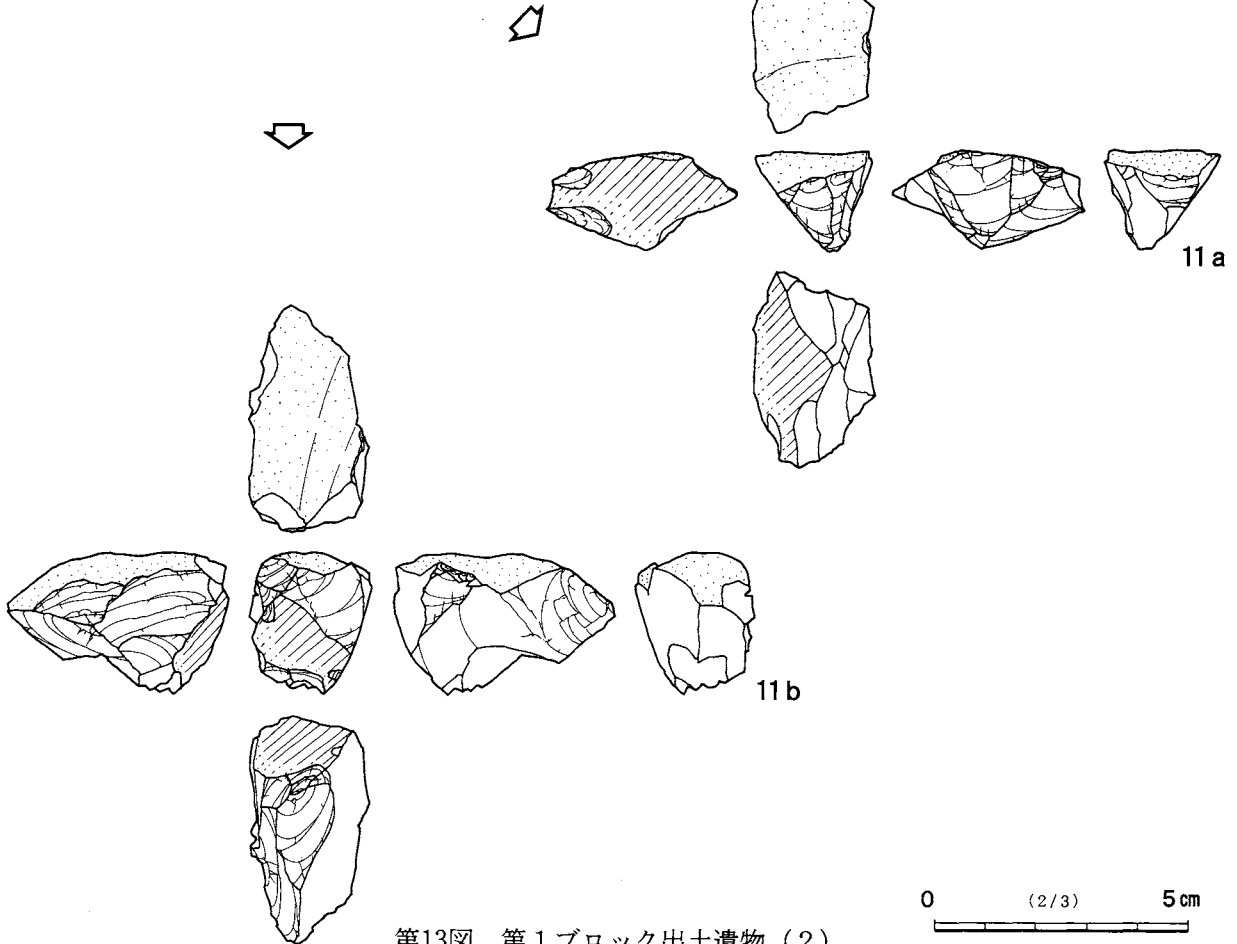
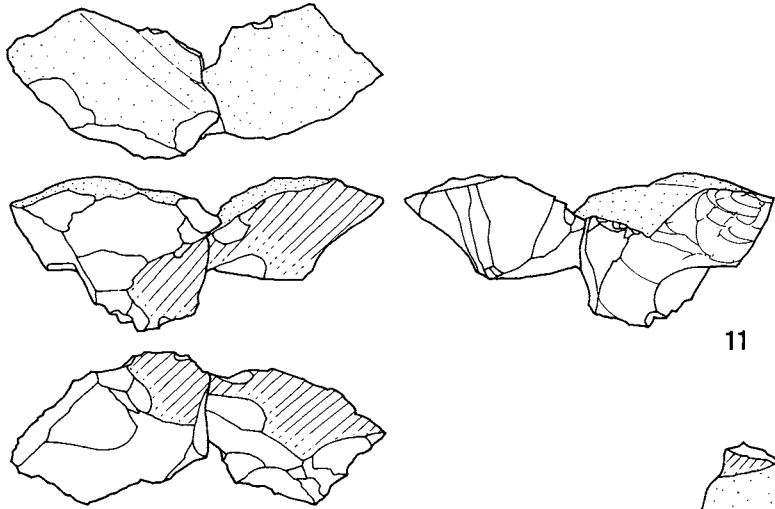
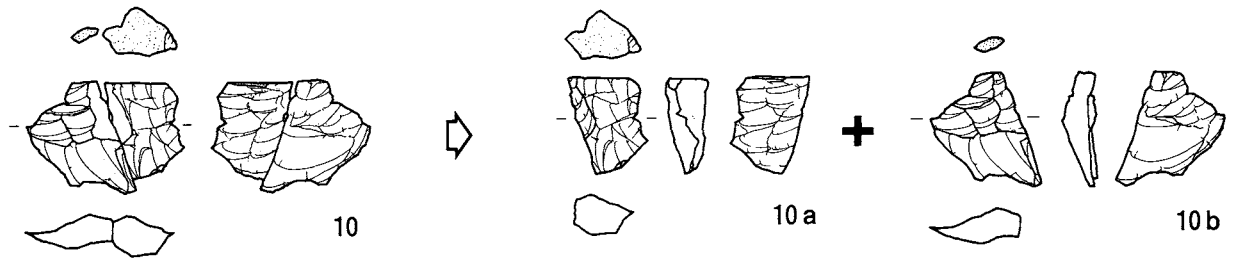


安山岩2



第12図 第1ブロック出土遺物 (1)

メノウ1

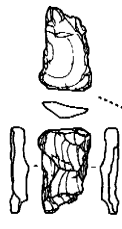


第13図 第1ブロック出土遺物 (2)

0 (2/3) 5 cm



A' |
E11-19

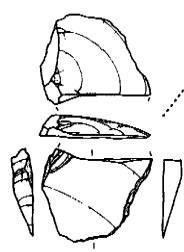


1 ●
5 ●
8 ●

| F11-10

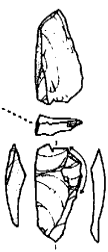
- 楔形石器
- R 剥片
- U 剥片
- ◎ 石核
- 剥片
- 碎片
- ◎ 礫

| E11-29



3 ●
4 ●
6 ●

| F11-20



| E11-39

9 d ●
9 c ●

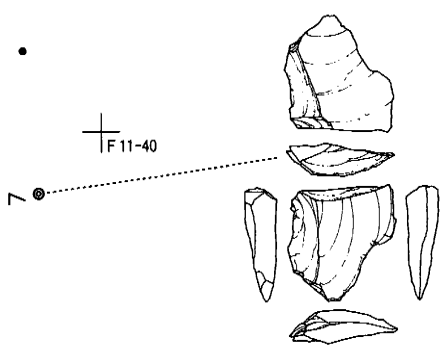
9 b ●

| F11-30

9 a ●

| E11-49

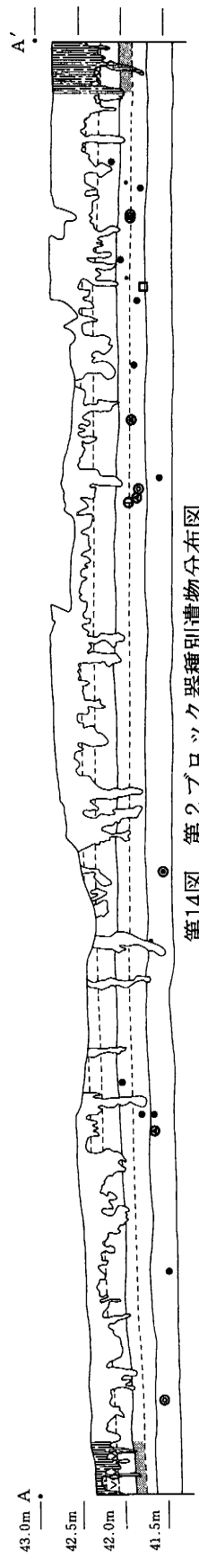
A |



7 ●

| F11-40

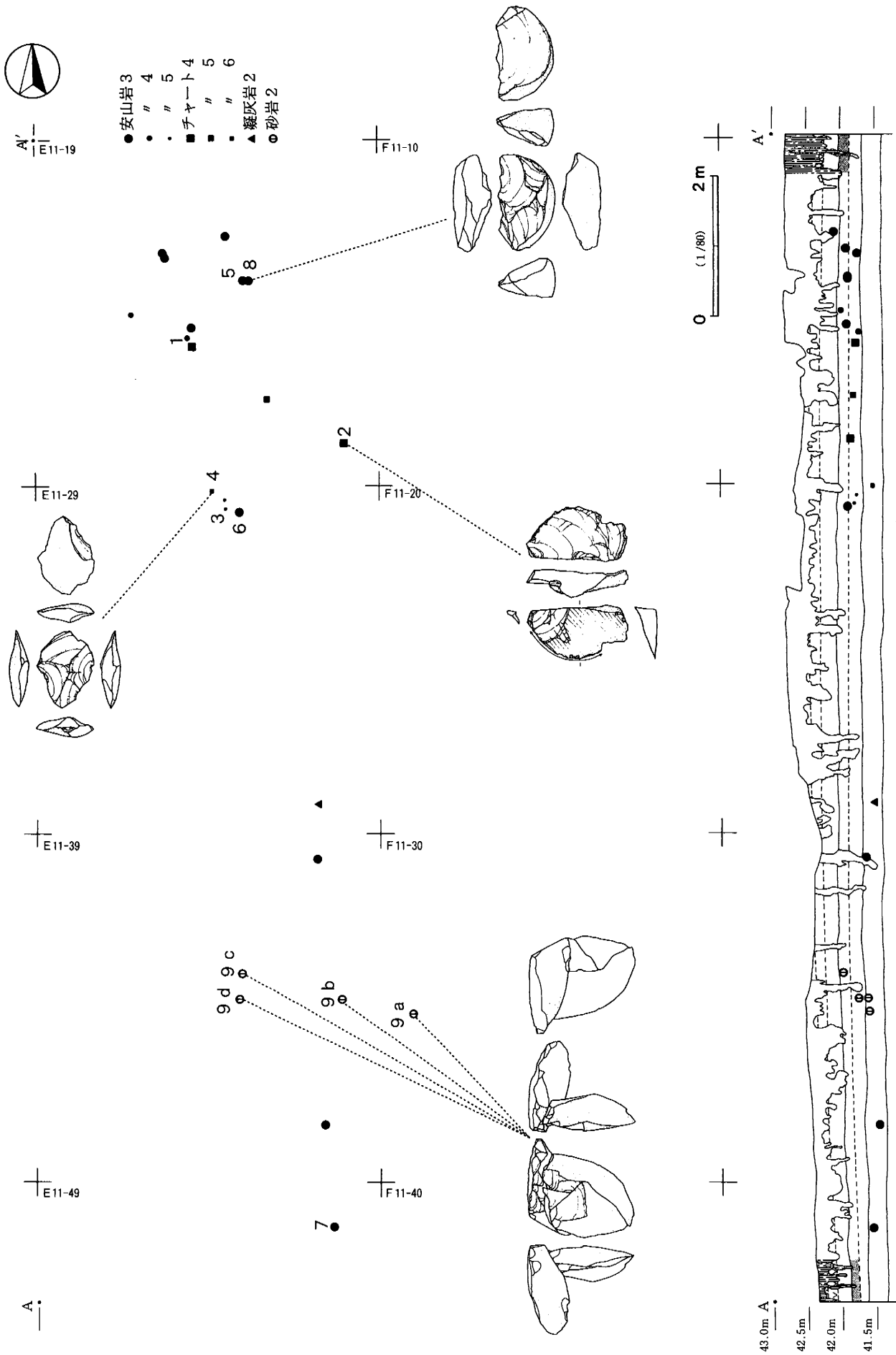
0 (1/80) 2 m



第14図 第2ブロック器種別遺物分布図

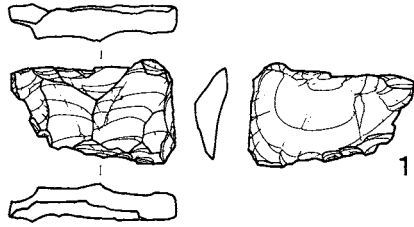


- 安山岩 3
- " 4
- " 5
- チャート 4
- " 5
- " 6
- ▲ 凝灰岩 2
- 砂岩 2



第15図 第2ブロック母岩別遺物分布図

安山岩 2



安山岩 3

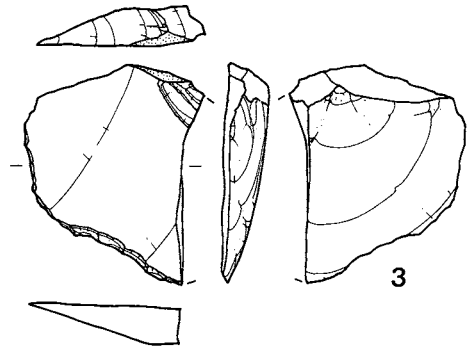
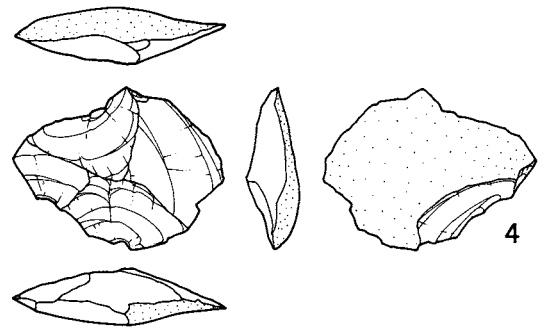
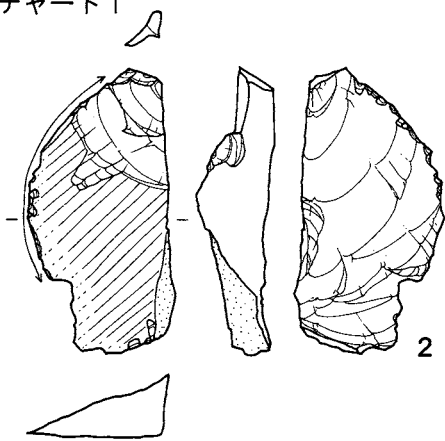
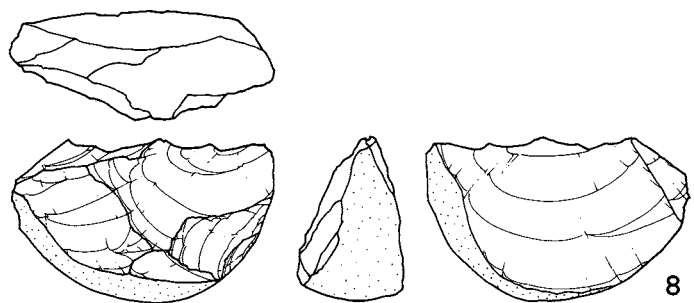
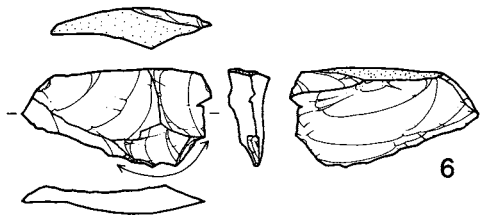
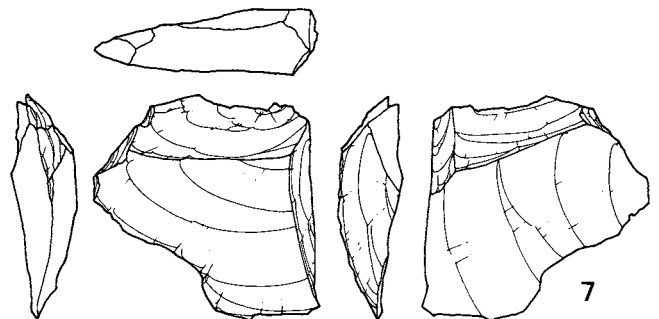
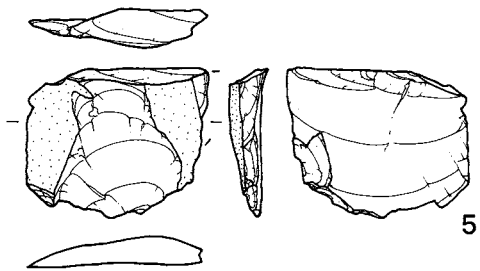


チャート 1



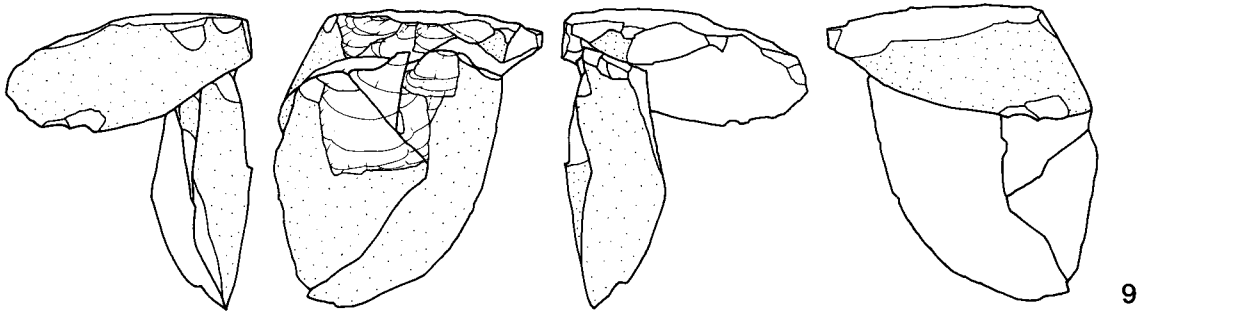
安山岩 1



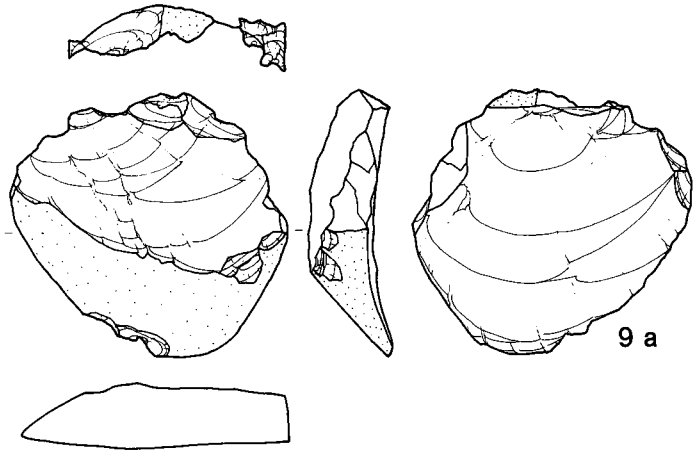
0 (2/3) 5cm

第16図 第2ブロック出土遺物(1)

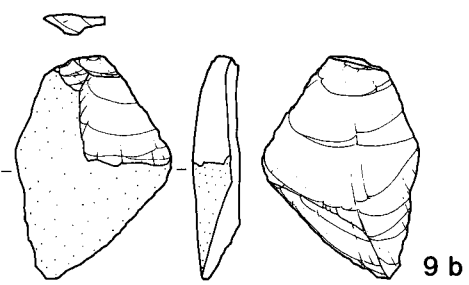
砂岩 1



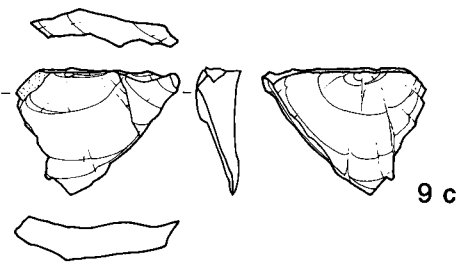
(打面再生or入れ替え)



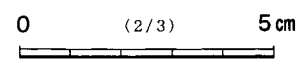
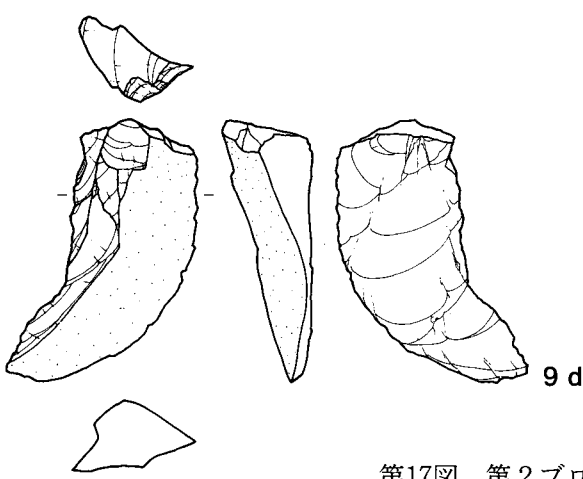
(剥片剥離 1)



(剥片剥離 2)



(剥片剥離 3)



第17図 第2ブロック出土遺物 (2)

母岩別

—| F 9-29



—| G 9-20

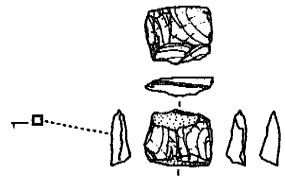


器種別

—| F 9-29



—| G 9-20



—| F 9-39

—| G 9-30

—| A

—| A'

- 安山岩 1
- チャート 1
- 安山岩 2
- ▲ 珪質頁岩 1

—| F 9-39

—| G 9-30

—| A

—| A'

- 楔形石器
- 剥片
- 剥片

—|

42.5m A

0 (1/80) 2m

—| A'

—|

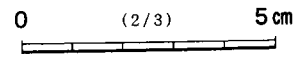
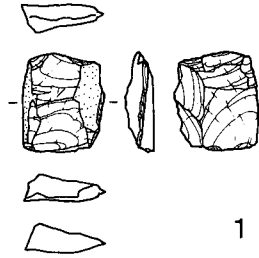
42.5m A

0 (1/80) 2m

—| A'

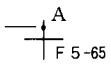


第18図 第3ブロック遺物分布図

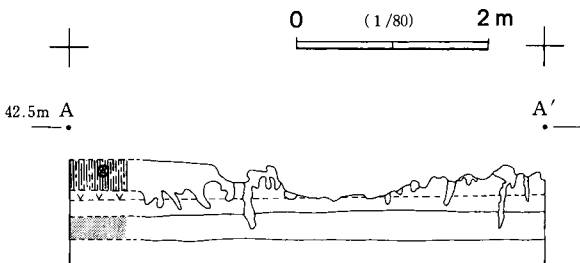
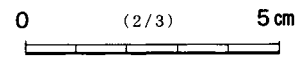
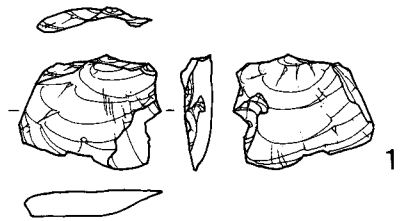


第19図 第3ブロック出土遺物

F 5-65グリッド



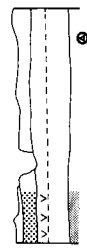
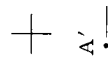
● 1



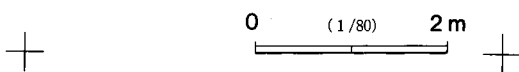
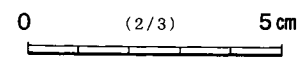
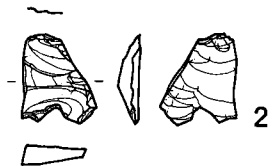
H 9-82グリッド



● 2



42.0m



第20図 単独出土遺物

第4表 第1ブロック出土石器属性表

No.	遺物番号	器種	長さ × 幅 × 厚さ (mm)	重量 (g)	図版 番号	打面 種類	打面 調整	頭部 調整	背面構成	背面 種類	打角 (°)	折面 部位	母岩番号
1	G11-53-001	R剥片	15.8 × 17.5 × 7.5	1.8	2	平	×	○	I. III	b	120	L	チャート1
2	G11-54-001	剥片	11.1 × 19.5 × 5.8	0.9					I. II	c		H	安山岩1
3	002	剥片	32.8 × 24.3 × 8.8	5.6		線	×	○	I. III. IV. C	d			珪質頁岩1
4	003	剥片	25.8 × 40.5 × 9.8	10.4	7	平	×	○	I. II	c	135		砂岩1
5	004	破片	8.1 × 20.0 × 5.0	0.8					II. IV	d		H	砂岩1
6	005	R剥片	32.6 × 16.2 × 10.0	4.1	1				I. II	c		H	チャート1
7	G11-55-001	U剥片	39.3 × 36.8 × 9.1	9.5	3				II. IV. C	d		H	凝灰岩1
8	002	U剥片	39.0 × 45.1 × 17.9	25.9	5	C	×	○	I	a	125		チャート2
9	G11-63-001	剥片	24.2 × 16.7 × 5.7	1.8	10b	C	×	○	I. IV	c	90	L	メノウ1
10	002	剥片	19.2 × 15.6 × 8.1	1.8	10a	C	×	×	II	c	85		メノウ1
11	003	U剥片	33.1 × 25.9 × 4.5	3.5	6	線	×	○	I. II. III	d			メノウ2
12	004	剥片	38.4 × 30.7 × 7.5	12.7		平	×	×	I. IV	c	75		メノウ2
13	005	剥片	60.3 × 50.0 × 22.4	49.1	8	平	×	○	I. III	b	110		珪質頁岩2
14	G11-64-001	剥片	37.3 × 28.9 × 8.4	6.5	9	線	×	○	I. II. III	d			安山岩2
15	002	U剥片	49.0 × 19.9 × 9.3	7.2	4	平	×	○	I. C	a	120		珪質頁岩3
16	003	石核	27.0 × 24.0 × 44.0	25.3	11b								メノウ1
17	004	石核	19.5 × 23.4 × 37.7	13.5	11a								メノウ1
18	005	破片	15.7 × 7.0 × 8.0	1.0		C	×	×	I	a			メノウ1
19	006	剥片	21.5 × 27.3 × 10.0	4.5		平	×	○	I. IV	c	145	B	メノウ1
20	G11-65-001	剥片	36.6 × 26.8 × 8.0	7.7		平	×	×	I	a	115		チャート3
21	002	剥片	18.5 × 15.1 × 4.4	1.6		線	×	○	I. IV	c	115		安山岩2

第5表 第2ブロック出土石器属性表

No.	遺物番号	器種	長さ × 幅 × 厚さ (mm)	重量 (g)	図版 番号	打面 種類	打面 調整	頭部 調整	背面構成	背面 種類	打角 (°)	折面 部位	母岩番号
1	E11-19-003	破片	6.9 × 15.3 × 1.7	0.2									安山岩3
2	004	剥片	24.3 × 25.2 × 13.2	8.1		線	×	×	I. II. C	c		L	安山岩3
3	005	剥片	20.1 × 23.8 × 9.0	4.1		線	×	×	II. IV	d		R	安山岩4
4	007	破片	7.8 × 5.3 × 1.5	0.1									安山岩3
5	008	剥片	33.8 × 34.8 × 22.6	32.2		C	×	×					チャート4
6	009	R剥片	28.0 × 35.8 × 6.7	6.9	5	平	×	×	III. C	b	65		安山岩3
7	009	石核	31.5 × 52.0 × 20.7	34.5	8								安山岩3
8	010	R剥片	54.8 × 29.0 × 13.3	14.5	2	平	×	○	I. II	c	125		チャート4
9	011	剥片	17.3 × 18.1 × 13.8	4.3		多	×	×	I. III. C	b	75		チャート5
10	012	剥片	28.2 × 22.5 × 8.5	4.1									安山岩3
11	013	楔形石器	24.5 × 32.3 × 5.7	4.1	1								安山岩4
12	E11-29-003	U剥片	18.8 × 37.0 × 7.4	4.3	6	多	×	×	II. IV	d	100		安山岩3
13	004	R剥片	43.5 × 35.5 × 7.8	10.8	3	多	×	○	IV	c	135		安山岩5
14	005	石核	31.2 × 41.4 × 9.5	9.2	4								安山岩5
15	006	剥片	23.4 × 26.6 × 6.3	3.5		C	×	×	II. C	c	80		チャート6
16	007	礫片	40.8 × 26.0 × 12.8	13.2									凝灰岩2
17	E11-39-003	剥片	51.1 × 58.6 × 12.1	44.1		平	×	○	I. II. C	c	140	B	安山岩3
18	005	剥片	42.7 × 26.0 × 9.0	10.6	9b	平	×	○	I. C	a	105		砂岩2
19	006	剥片	50.5 × 37.6 × 16.5	17.0	9d	多	○	○	I. IV. C	c	120		砂岩2
20	007	剥片	24.6 × 31.6 × 8.0	4.2	9c	平	×	×	I. C	a	90		砂岩2
21	008	破片	13.2 × 7.0 × 1.7	0.2									安山岩3
22	E11-49-003	石核	43.4 × 44.0 × 12.9	19.3	7								安山岩3
23	F11-30-001	R剥片	50.8 × 54.7 × 13.0	39.6	9a	多	○	×	I. C	a	120		砂岩2

第6表 第3ブロック出土石器属性表

No.	遺物番号	器種	長さ × 幅 × 厚さ (mm)	重量 (g)	図版 番号	打面 種類	打面 調整	頭部 調整	背面構成	背面 種類	打角 (°)	折面 部位	母岩番号
1	F09-29-003	碎片	7.6 × 8.5 × 2.3	0.2					II. IV	d		H	安山岩
2	004	剥片	17.8 × 18.8 × 6.7	1.7					I	a		H	チャート1
3	F09-39-(不明)	楔形石器	19.5 × 16.3 × 5.5	2	1				C	a			チャート2
4	G09-30-001	剥片	30.5 × 25.7 × 4.5	3		平	×	○	I. II	c	110		珪質頁岩

第7表 単独出土石器属性表

No.	遺物番号	器種	長さ × 幅 × 厚さ (mm)	重量 (g)	図版 番号	打面 種類	打面 調整	頭部 調整	背面構成	背面 種類	打角 (°)	折面 部位	母岩種類
1	F05-65-001	R剥片	21.6 × 28.0 × 6.0	2.8		多	×	×	I. II	c	105		黒曜石
2	H09-82-001	R剥片	17.0 × 14.7 × 4.0	0.9		線	×	○	I. II	c			チャート

第2節 縄文時代

縄文時代の遺構は、炉穴1基、陥穴11基、土坑2基が検出された。また、A地区からは遺物包含層が検出されており、北端部は本調査となっている。遺構のほとんどはC地区の台地中央部から検出されている。なお、遺構から出土した遺物はなかった。

1 遺 構

P-062 炉穴 (第21図、図版3) G3-77グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸1.1m、短軸0.8m、深さ0.1mを測る。南北の壁際に焼土が堆積する。

P-009 土坑 (第21図、図版3) H3-06グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、長軸1.3m、短軸0.5m、深さ0.3mを測る。本来は陥穴であったかもしれない。

P-010 土坑 (第21図、図版3) H3-06グリッドに位置する。掘り方は径0.6mの円形で、深さ0.3mを測る。中期に見られる円形土坑に類似するが、遺物がなく決め手に欠ける。

P-008 陥穴 (第21図、図版3) H3-28に位置する。楕円形を呈し、上場規模1.8m×0.8m、深さ0.8mを測る。断面形は逆台形を呈する。

P-017 陥穴 (第21図、図版4) F6-84・85グリッドに位置する。楕円形を呈し、上場で2.8m×1.3m、深さ2.1mを測る。断面形は長軸方向に袋状となる。

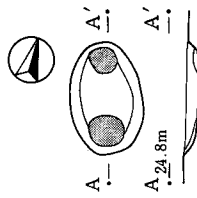
P-020 陥穴 (第22図、図版3) F6-99グリッドに位置する。長楕円形を呈し、上場で3.8m×1.7m、深さ2.2mを測る。上場と下場の軸方向がずれており、北側にはさらに一段深い掘込みがある。

P-021 陥穴 (第21図、図版3) F7-57・67グリッドに位置する。不整長方形を呈し、上場規模2.1m×1.0m、深さ1.9mを測る。坑底は長方形を呈し、中央部がなだらかに窪む。

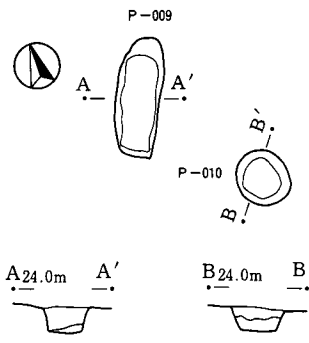
P-022 陥穴 (第22図、図版4) F6-77・78・87・88グリッドに位置する。楕円形を呈し、3.3m×2.3m、深さ2.3mを測る。断面形は短軸方向で坑底が狭くV字状となる。坑底は3.0m×0.4mの長方形に平坦となる。

P-023 陥穴 (第22図、図版4) G7-70・80グリッドに位置する。長楕円形を呈し、3.1m×0.7m、深さ2.1mを測る。断面形は短軸方向で壁がほぼ垂直に立ち上がる。長軸は両側とも坑底付近で40cm

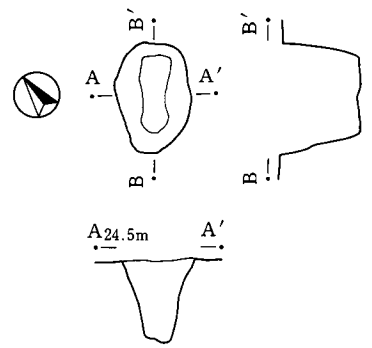
P-062



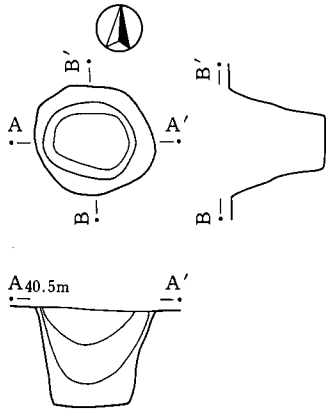
P-009, 010



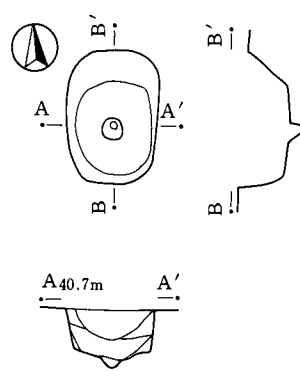
P-008



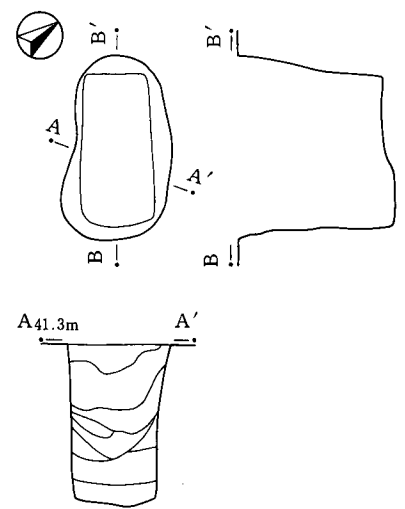
P-043



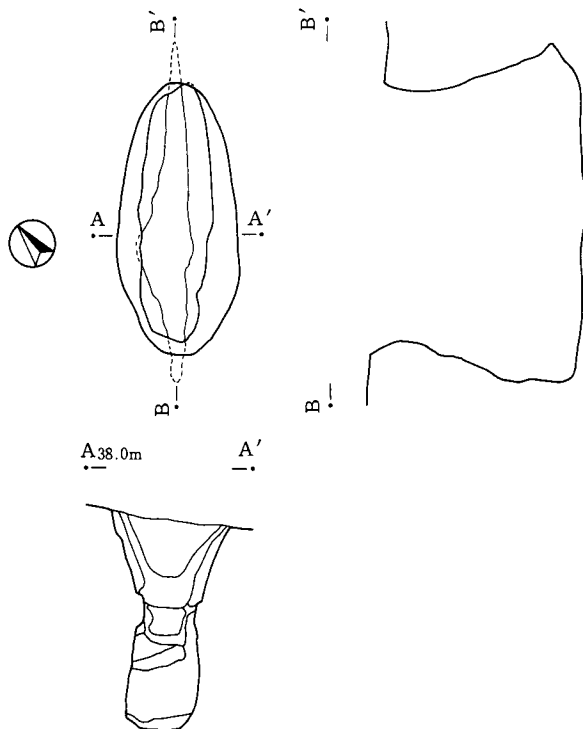
P-033



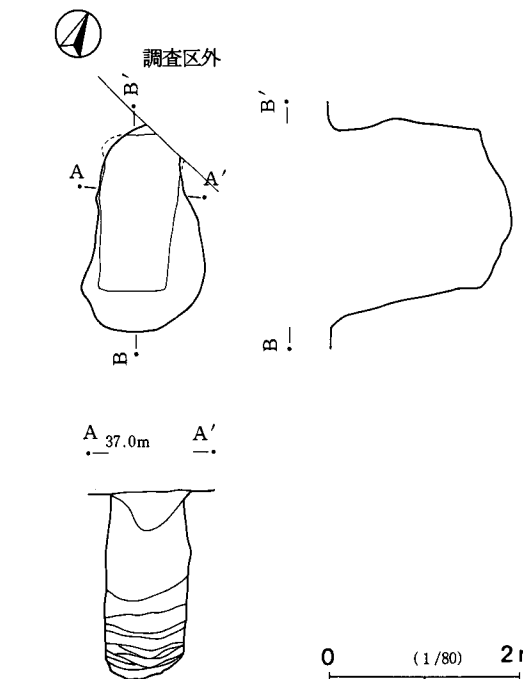
P-055



P-017



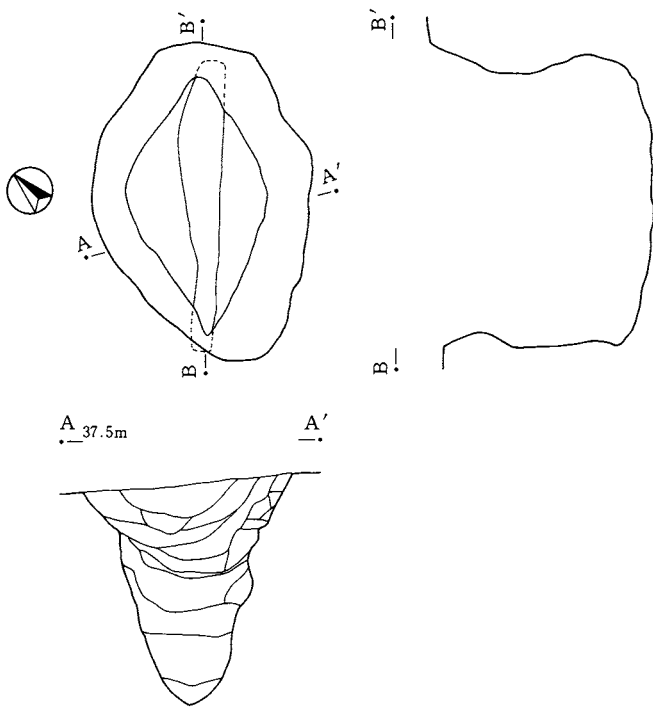
P-021



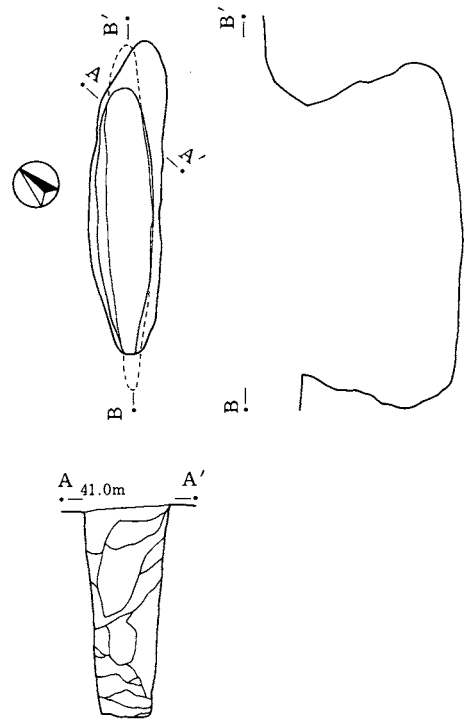
0 (1/80) 2m

第21図 縄文時代遺構 (1)

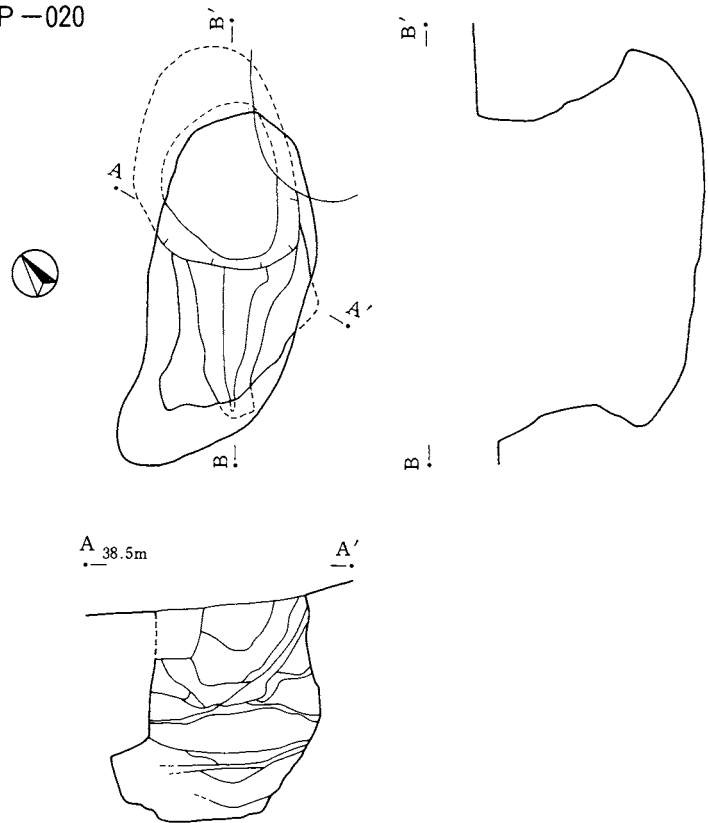
P-022



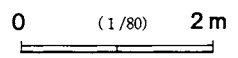
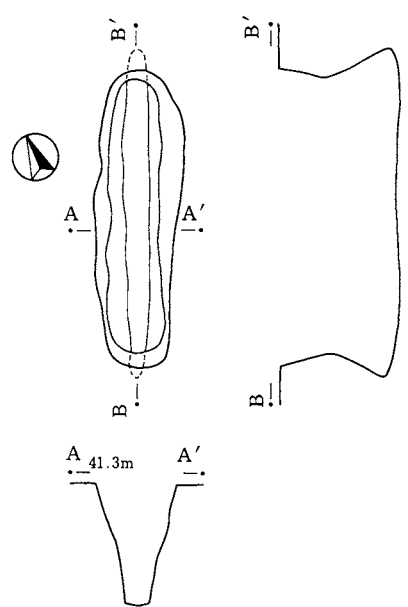
P-023



P-020



P-056



第22図 縄文時代遺構(2)

ほど膨らむ。

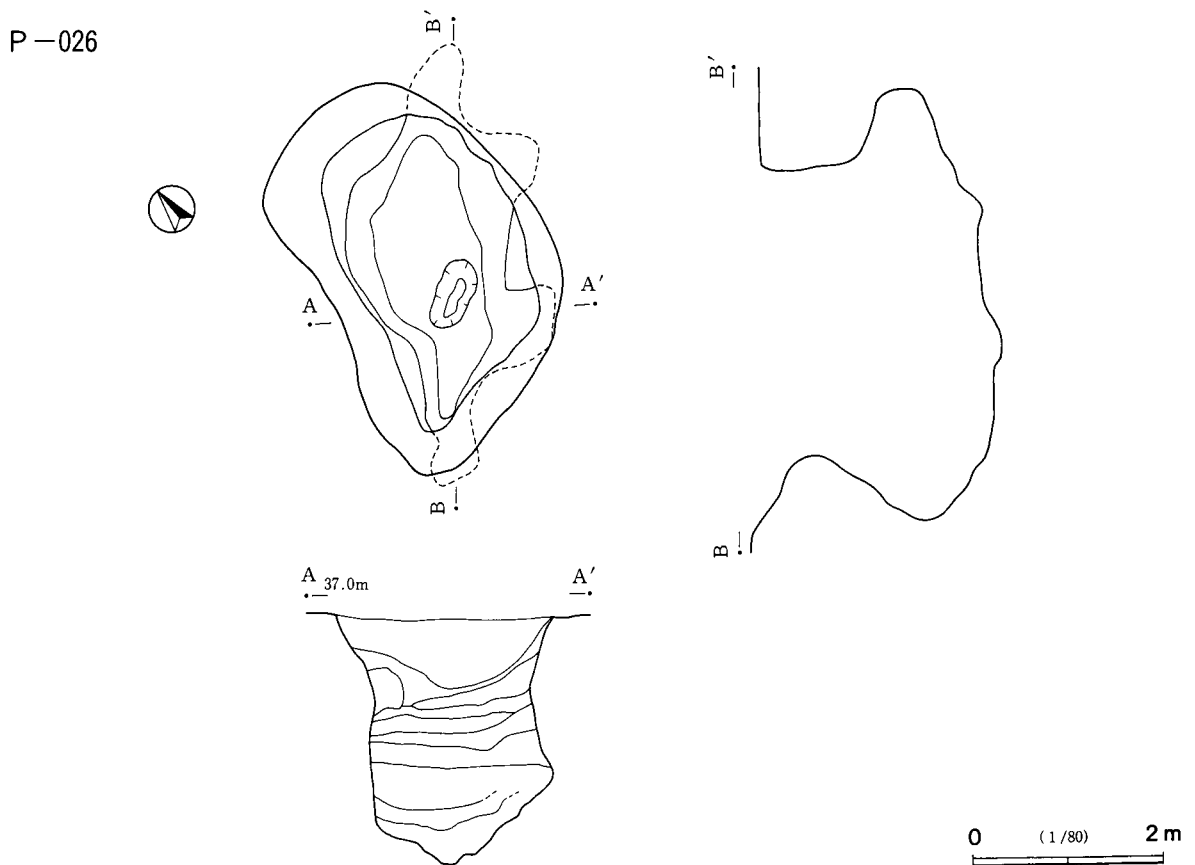
P-026 陥穴 (第23図、図版4) F6-76・86グリッドに位置する。不整形形状を呈し、4.0m×2.4m、深さ2.5mとかなり規模が大きい。坑底付近の壁面に不規則な凹凸が目立つが、人為的なものかどうかは不明である。坑底中央部に0.8m×0.4mの浅い掘込みが観察されるが、これも人為的なものかどうか明らかではない。

P-033 陥穴 (第21図、図版4) E9-81グリッドに位置する。隅丸長方形を呈し、1.4m×1.0m、深さ0.5mを測る。坑底中央部に円形の浅いピットが観察される。

P-043 陥穴 (第21図、図版4) D9-29、E9-20グリッドに位置する。楕円形を呈し、1.7m×1.1m、最大の深さ1.0mを測る。坑底はほぼ平坦で、壁がやや開くように立ち上がる。長軸の方向はほぼ東西方向である。

P-055 陥穴 (第21図、図版4) D7-66グリッドに位置する。長方形を呈し、1.9m×1.1m、深さ1.7mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底も平坦である。

P-056 陥穴 (第22図、図版4) D7-76グリッドに位置する。長楕円形を呈し、3.0m×0.8m、深さ1.2mを測る。坑底は幅が30cmに満たないほど狭い。



第23図 縄文時代遺構 (3)

2 グリッド出土遺物

縄文時代の遺物は調査区全体から出土しているが、特にA地区北側に良好な包含層が残存していた（第36図～第38図、図版4）。

第Ⅰ群土器

縄文時代早期の土器群である。

第1類（1～47、図版12）

撚糸文土器である。全部で270点ほど出土し、H3-43グリッド付近を中心とした直径25mほどの範囲から集中的に出土した。1～15は口唇部が大きく外反し、口唇上に原体が圧痕される。口唇直下は横方向の縄文や指頭圧痕、横ナデなどが観察される。胴部は縦方向に縄文が施文される。井草Ⅰ式である。16～26は口唇部の外反が弱くなり、口唇直下から胴部に直に縄文が施文される。井草Ⅱ式である。27～33はやや間隔のあいた撚糸文が施されるもので、夏島式である。

第2類（48～65、図版12）

沈線文系土器群である。全部で90点ほど出土しているが、他の土器群と違い最も多く出土したのは南側のE、F地区である。48は器形復元できたもので、口径は約30cmの円錐形を呈する。細い沈線が斜格子状に施文される。49は無文土器である。口径は約25cmで、やはり円錐形を呈すると考えられる。胎土は砂粒を多量に含み、横方向のケズリ調整が顕著である。50は細沈線が格子状に施されるもの、51～60は、太い円形の棒状工具によって横方向あるいは格子状に沈線が施文される。三戸式から田戸下層式に比定される。61、62は無文土器で、胎土は粗く石英粒を多量に含む。成田松尾線の調査区から、同一個体と考えられる砲弾型の無文土器が出土している。64、65は底部である。

第3類（66～71、図版12）

いわゆる条痕文系土器であるが、早期末の茅山式だけに限定することはできない。全部で70点ほどと少ない。いずれも条痕ではなく擦痕により調整される。

第Ⅱ群土器

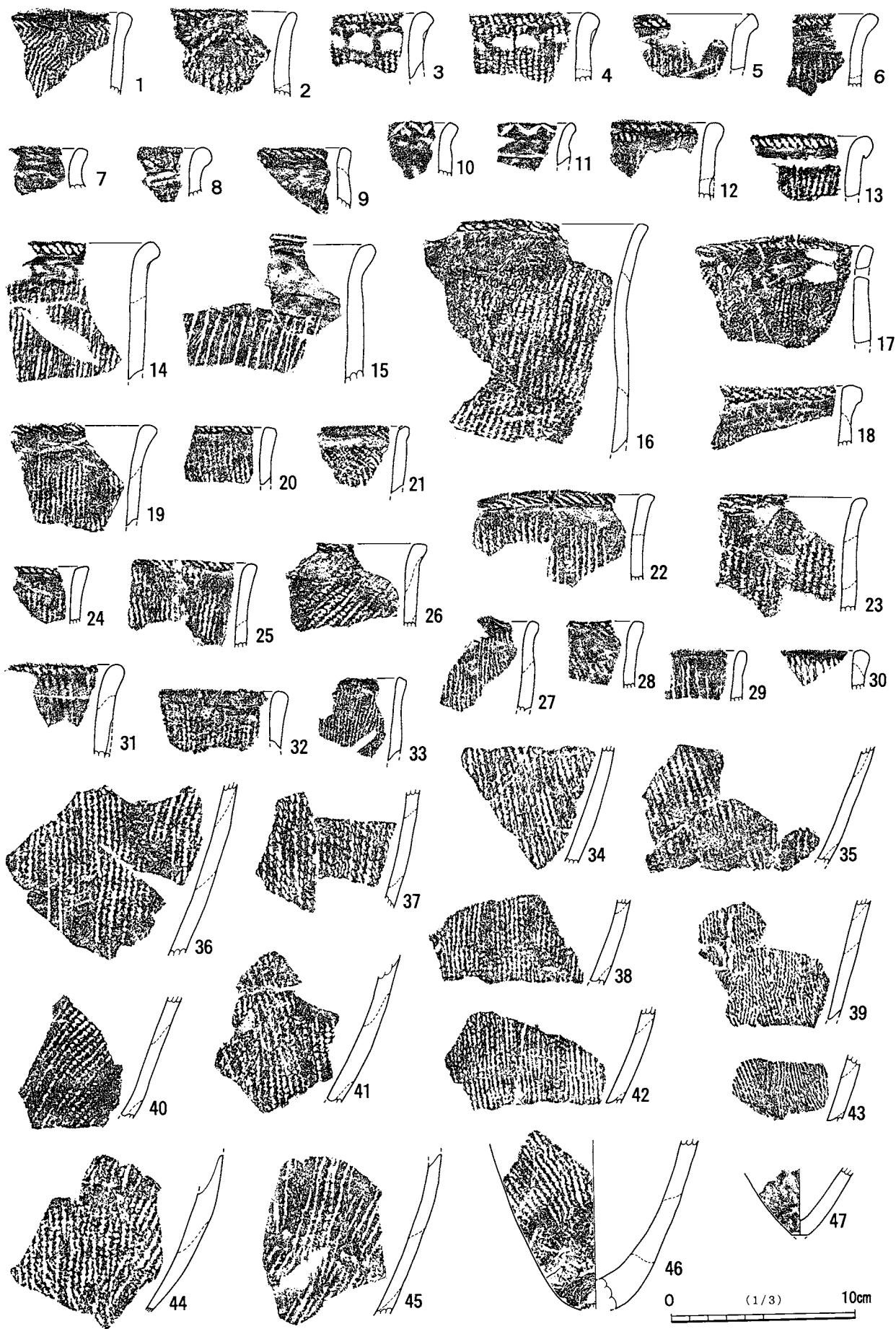
縄文時代前期の土器群である。

第1類（72～133、図版13）

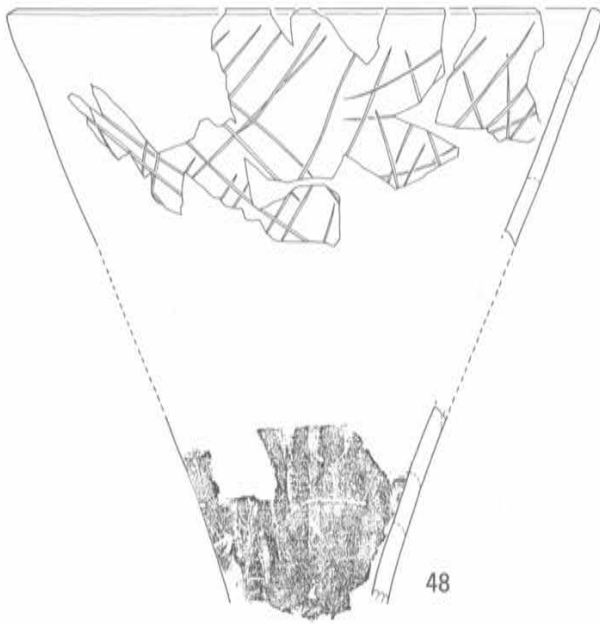
前期前半の羽状縄文系土器を一括した。全部で350点ほど出土しており、特にH3-30グリッド付近に集中する。72～87は多段のループ文が施されるもので、72～74は口唇に沿って短沈線が巡らされる。89～93は組み紐文が施される。94～98は附加条縄文を主体とする。100～102は中空の棒状工具による連続刺突が施される。114～126は縄文が施される。133は底部である。黒浜式を特徴づける諸要素のうち、縄文系の施文が多用され、沈線系や爪形文系の施文は少ないのが特徴といえる。黒浜式初頭から中葉までが主体である。

第2類（134～161、187、図版13、14）

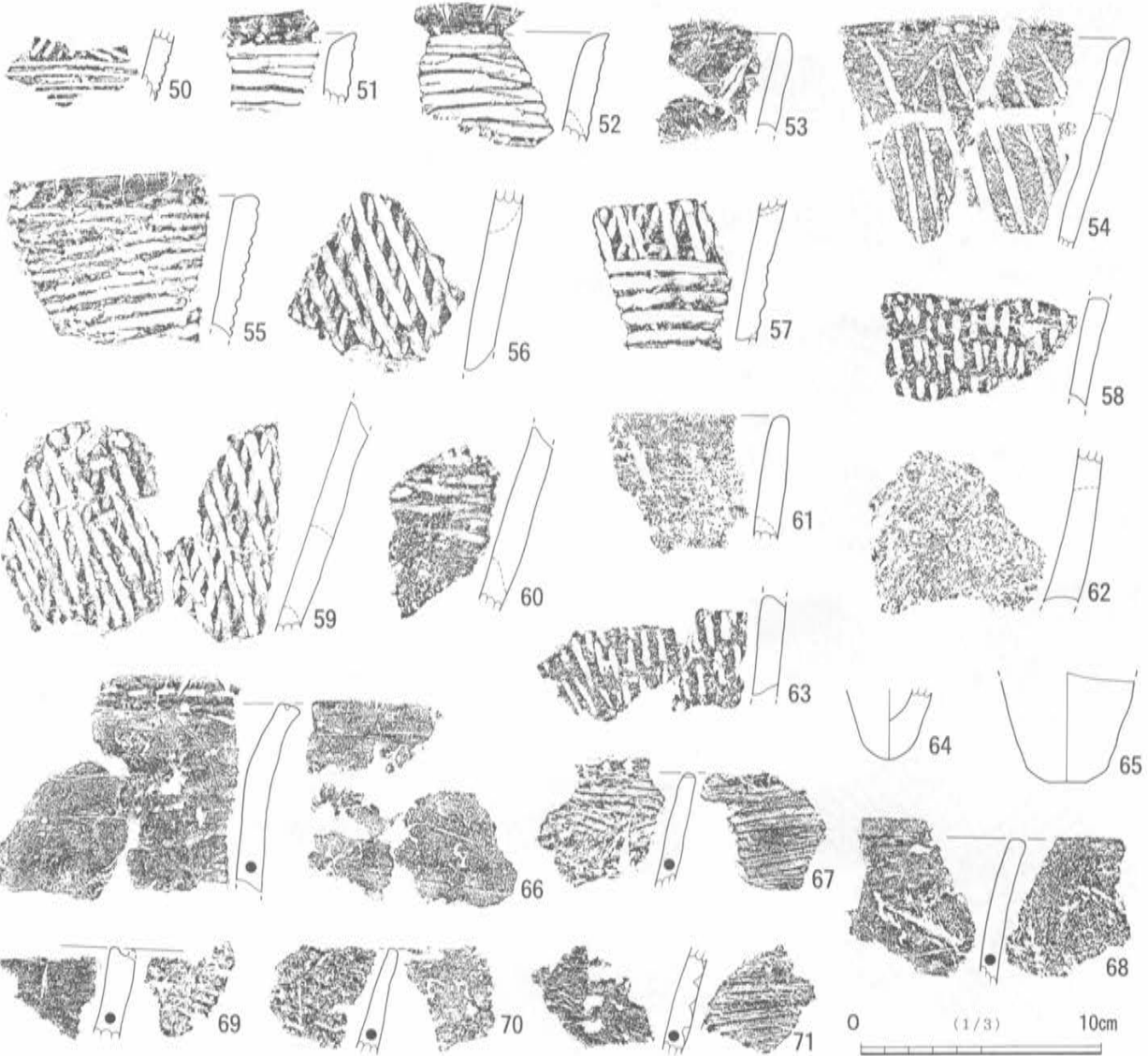
前期後半の竹管文系土器を一括した。全部で80点ほどと少ない。134～138は連続爪形文が施される。139～147は半截竹管による沈線文が施される。148～153、157は半截竹管による変形爪形文が施される。154～156、158は貝殻腹縁による変形爪形文が施されるものである。187は器形復元ができるもので、小型の深鉢形土器である。直径は約17.3cmで、半截竹管による粗雑な幾何学文が施される。



第24図 グリッド出土縄文土器 (1)

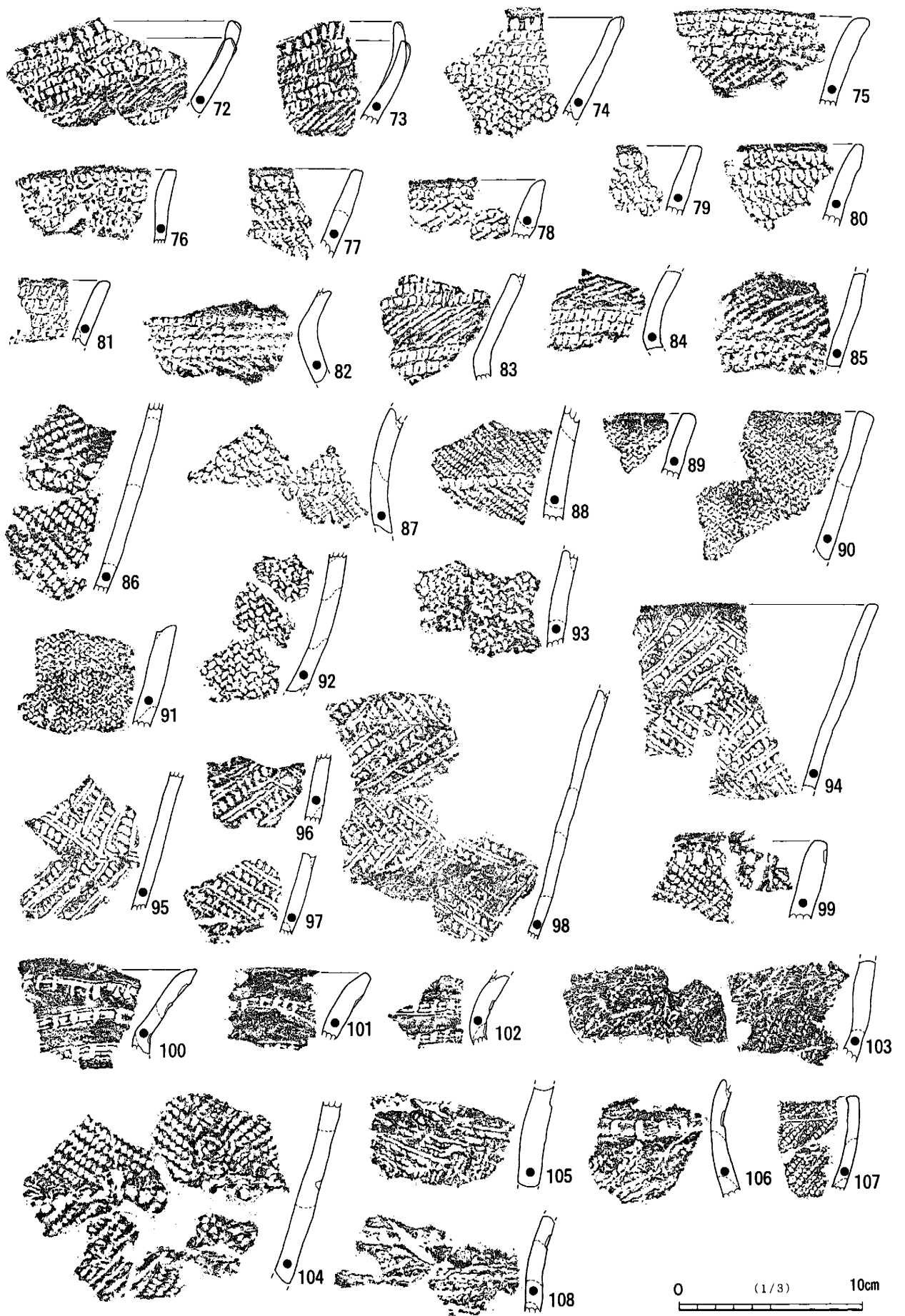


0 (1/4) 10cm

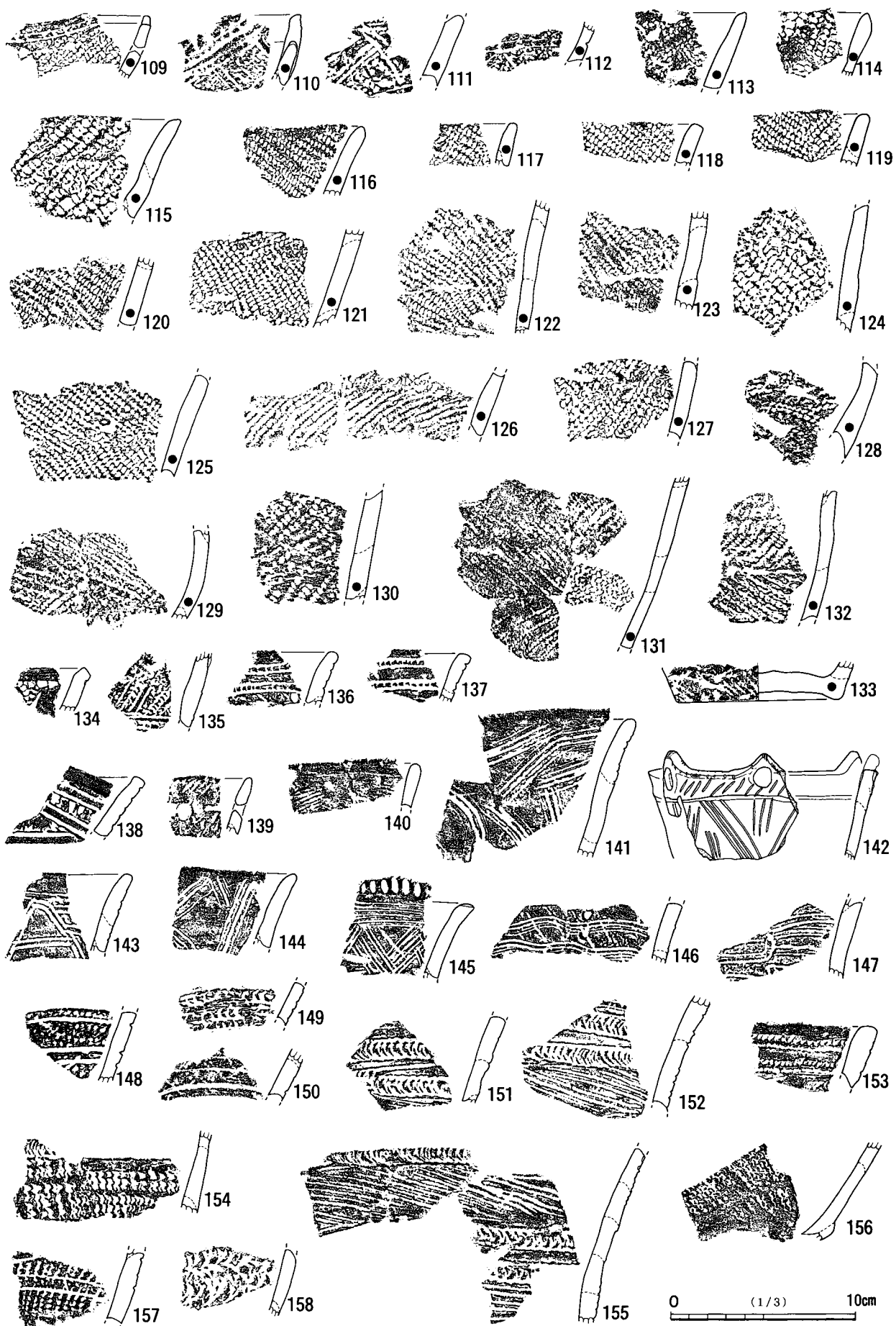


0 (1/3) 10cm

第25図 グリッド出土縄文土器 (2)



第26図 グリッド出土縄文土器 (3)



第27図 グリッド出土縄文土器 (4)

第Ⅲ群土器

縄文時代中期の土器群である。

第1類 (162～186、188～190、図版14)

中期初頭から前半の土器である。約100点ほど出土している。162～169は横方向に綾線文が施される。170は原体圧痕される。177～179は隆起線に沿って角押文が施される。184、189は曲線的な隆起線と結節沈線が組み合わされる。

第2類 (191～206、211、図版15)

縄文時代中期後半の加曾利E式土器である。総数35点と極めて少ない。191～198は太い隆帯ないしは沈線によって区画された文様帯をもつもので、加曾利E式の中でも古い段階の特徴を有している。202～205は沈線に区画された磨消縄文が施される。206は口縁に添って沈線が施される。211は細い沈線に区画された縦位の磨消縄文が施される。沈線は曲線主体で、胴部はH状の区画文を呈するものと考えられる。

第Ⅳ群土器

縄文時代後期の土器である。本遺跡の主体的な時期で、特に加曾利B式に属する資料は約1,250点を数える。

第1類 (207～210、212～217、図版15)

称名寺式土器及び堀之内式土器である。全部で50点ほど出土している。216は器形復元ができるものであるが、胎土が砂質土化しているため極めてもろい。沈線と列点が組み合わされるものであるが、胴部下半分は摩耗が著しく詳細は不明である。214は胴部破片で、棒状工具による集合沈線が施されるものである。

第2類 (218～222、225～282、図版15、16)

加曾利B式の精製土器である。施文法をもとに、いくつかに分ける。

1種 (218～222、225～240、244、247)

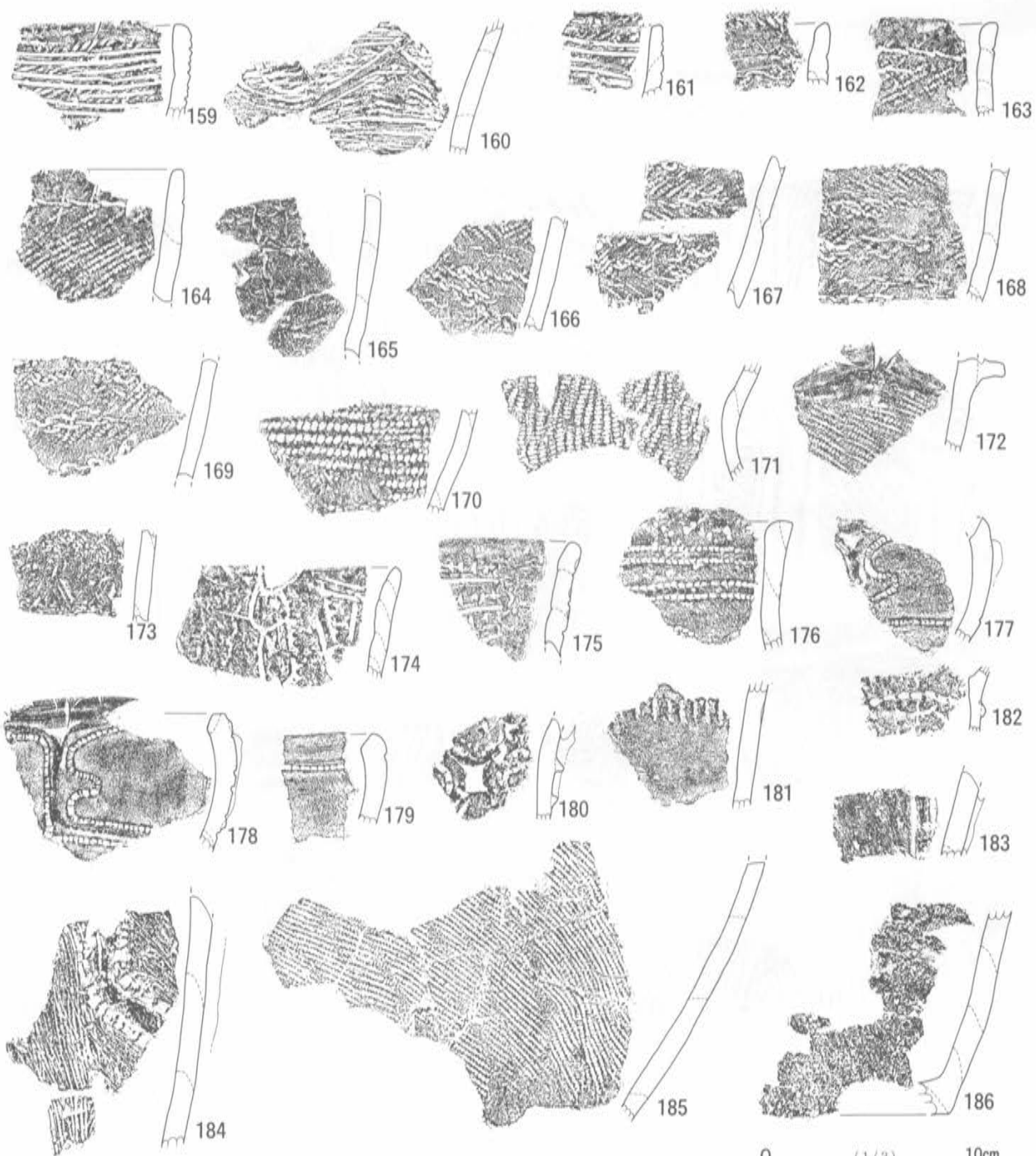
帯状の磨消縄文を主体とする精製土器である。磨消縄文にならないものでも、平行沈線が施されるものはここに含めた。深鉢は底部から器壁が開き気味に立ち上がり、胴部でいったんすぼまり、口縁部に向かって大きく開く器形を呈するものが多い。218は波状口縁の深鉢で、直径約22.4cm、器高約26.7cmである。胎土に砂粒をやや多く含み、灰褐色を呈する。220～222は鉢形土器である。220は口径約22.5cmで、縄文帯の上側を削るように無文化している。焼成は良好で、内面には丁寧なミガキ調整が施される。221は遺存率が少ないが、口径約23.6cmで復元した。222は胴部下半分で、やはり丁寧なミガキ調整が施される。

2種 (245、246、248～255、259)

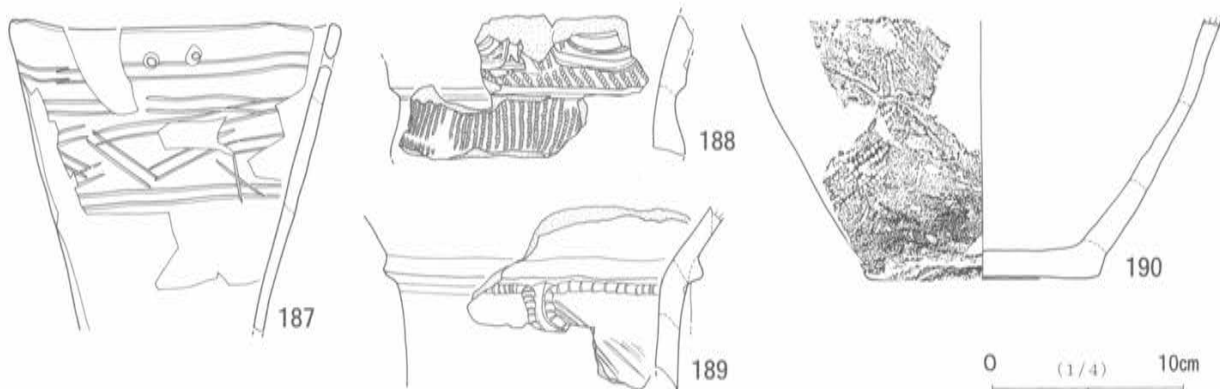
曲線的な沈線と磨消縄文が組み合わされる精製土器である。ただし破片資料については1種と区別できないものが多いため、分布図は両方合わせて数えた。1種と2種合わせて100点あまり出土している。245、246、248～250は縄文地紋に沈線を施すもので、部分的に縄文が磨消されている。251～255は胴部に強い屈曲を持つもので、磨消縄文は弧状に施された沈線によって区画される。259は口縁部が無文帯となるものである。

3種 (256～258、260～267、269、270)

縄文施文の精製土器である。粗製土器と区別できたもののみを掲載している。

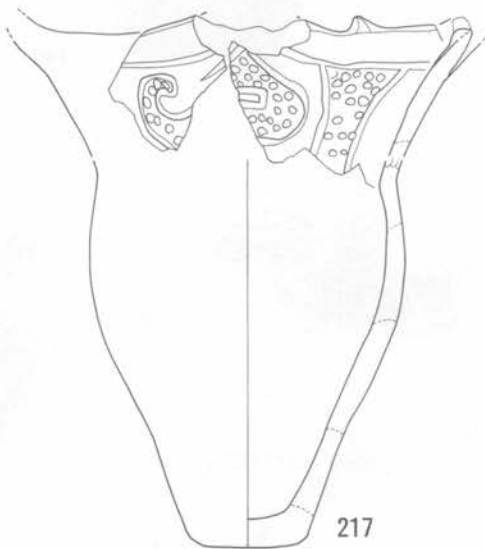
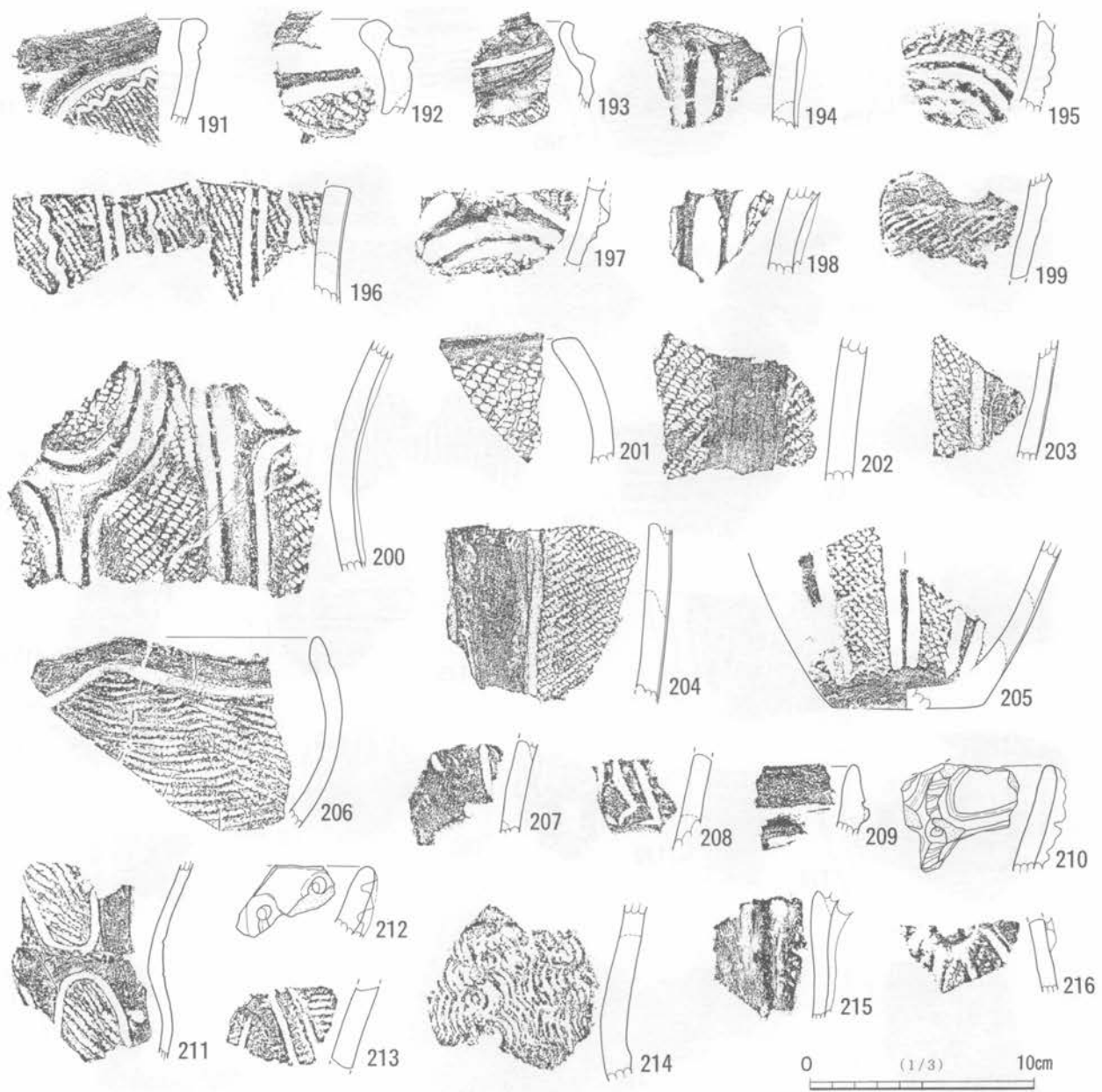


0 (1/3) 10cm

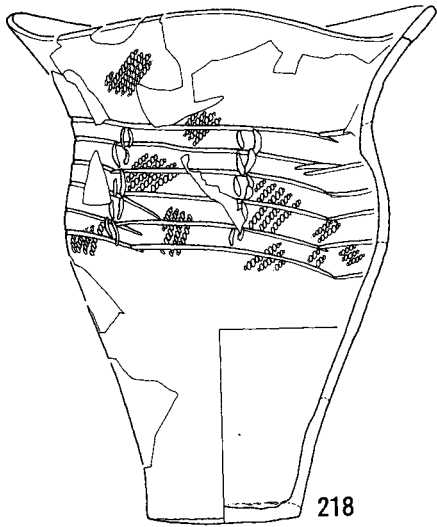


0 (1/4) 10cm

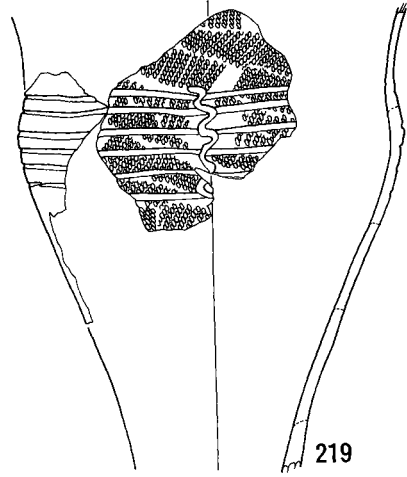
第28図 グリッド出土縄文土器 (5)



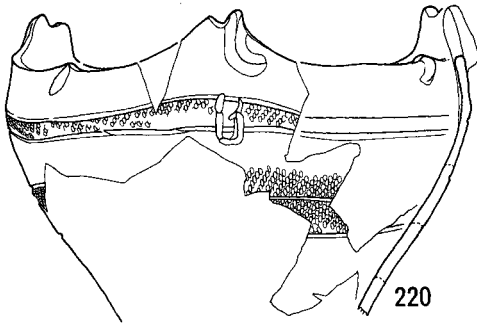
第29図 グリッド出土縄文土器 (6)



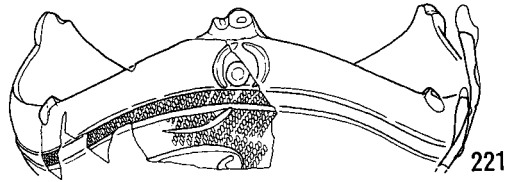
218



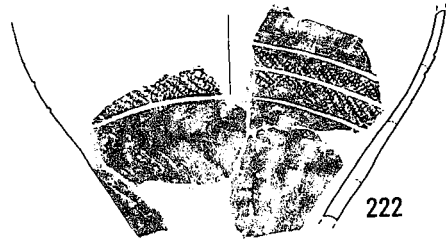
219



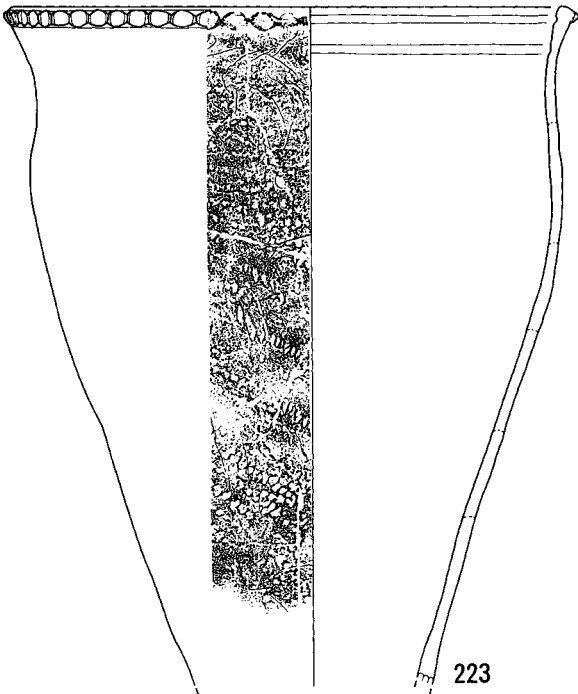
220



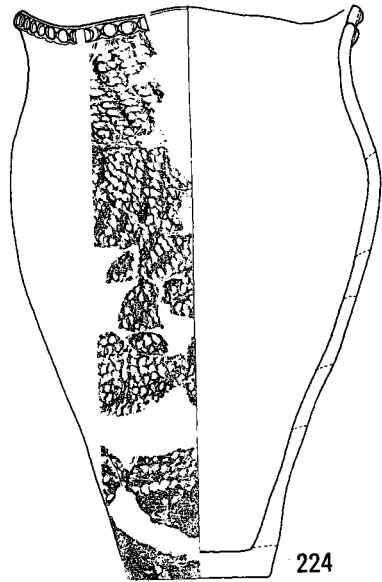
221



222



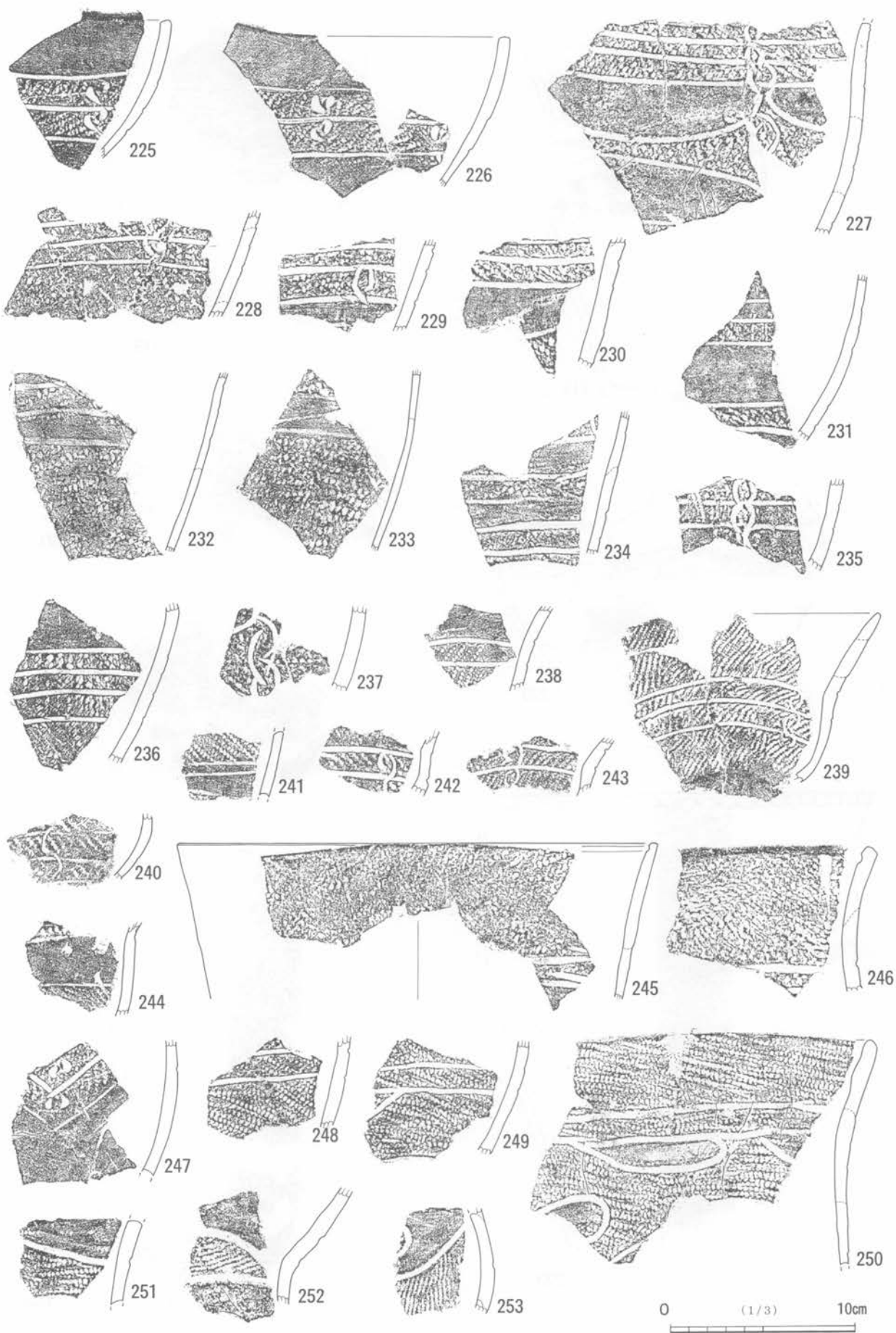
223



224

0 (1/4) 10cm

第30図 グリッド出土縄文土器 (7)



第31図 グリッド出土縄文土器 (8)



第32図 グリッド出土縄文土器 (9)

4種 (271～278、281、282)

沈線のみないしは無文のもので、小さい底部から大きく広がるように器壁が立ち上がり、口縁部直下で強く屈曲する鉢形土器を含む。全部で370点ほどを数え、H3-62グリッド付近から最も多く出土している。278は穿孔の痕跡が見られるもの、277は口唇上にキザミが入るものである。

5種 (268、277～280、282)

浅鉢を一括した。全部で40点弱と少なく、器形復元できるものもなかった。

第3類 (223、224、283～314、図版16～18)

加曾利B式の粗製土器である。縄文施文で明確に精製土器と判断できないものもここに含めている。全部で730点ほどと最大多数を占める。これらの一群は、調査区全体から多量に出土しているが、グリッドごとに取り上げられたのはA地区北側のみであるため、他地区については細かい分布状況は不明である。A地区北側では、H3-62グリッド付近に集中域が存在する。223、224、298～306はおおよそ器形復元ができたもので、口径は223が約29.0cm、224が約17.8cm、298が約42.8cm、299が約31.8cm、301が約12.6cm、303は約29.0cm、305が約15.4cm、306が約25.6cmである。299と300、303と304はそれぞれ同一個体と考えられる。

第4類 (315～321、図版19)

後期安行式である。総数は11点と極めて少ない。315～317、319～321は精製土器で、口縁に沿って帯縄文が巡らされる。318は粗製土器である。

第V群土器 (322、323、図版19)

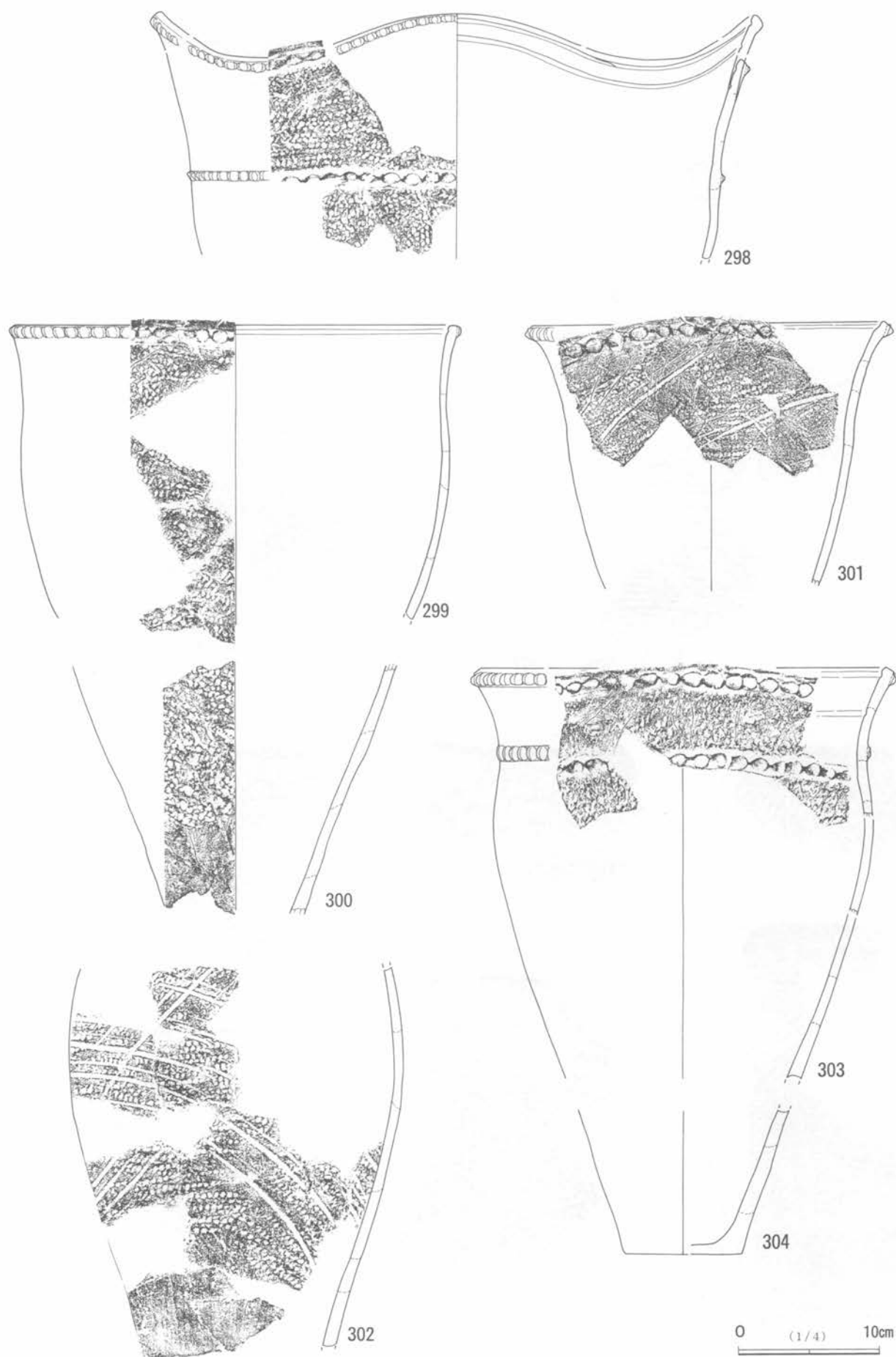
縄文時代晩期の土器である。図示したものがほとんどすべてである。322は「の」の字文が施されるもので、晩期前半に属する。323は撚糸文が施されるもので、晩期終末に位置付けられる。

第VI群土器 (324～336、図版18、19)

底部を一括した。全部で70点ほど出土している。いずれも調整は、外面はヘラ状工具による横方向のケズリ、内面は縦方向のケズリによって成形される。時期は不明であるが、加曾利B式を中心とした後期のものとみられる。

石器 (第36図、図版19、第8表)

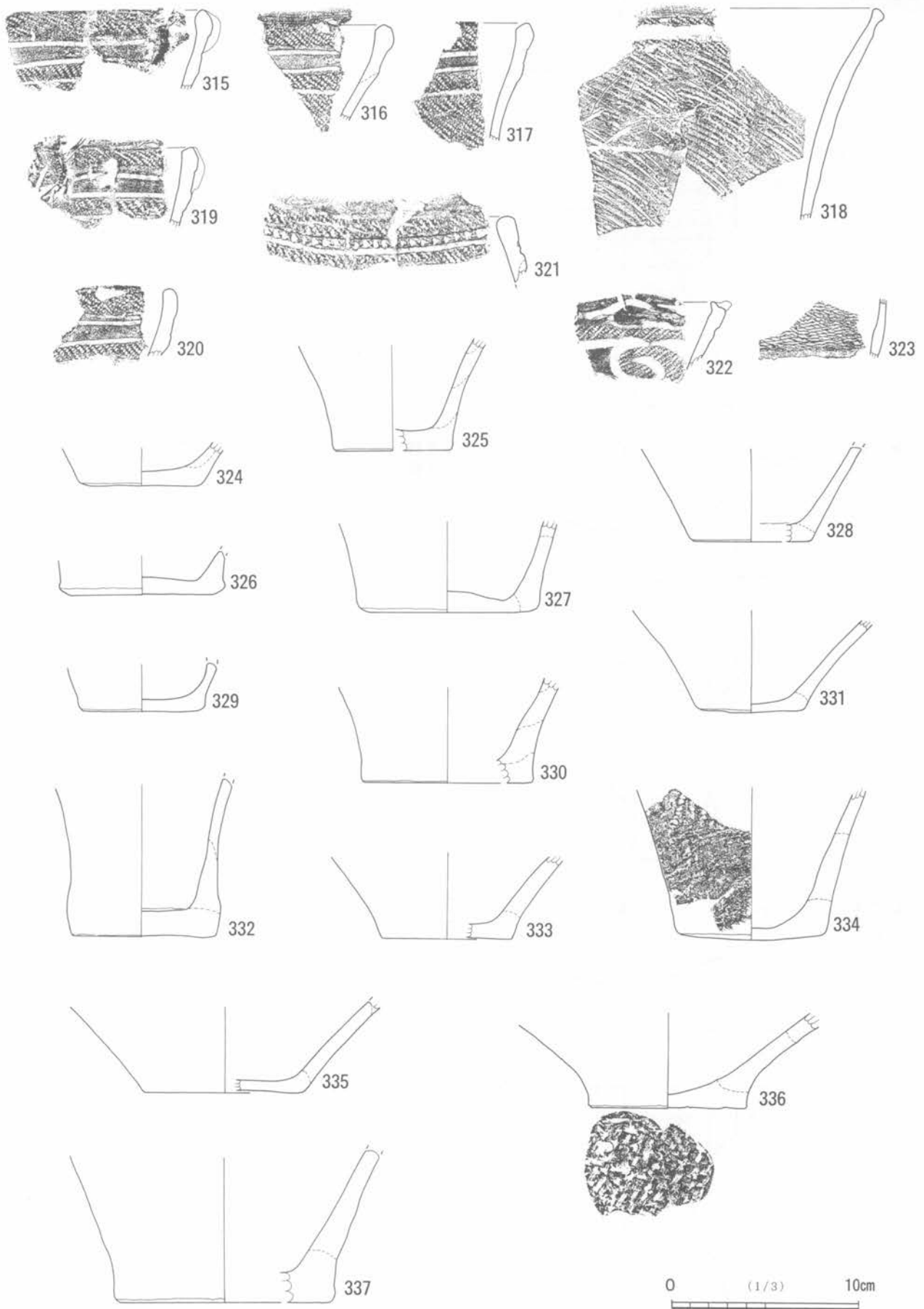
石器は土器の量に比べると少ない。1～3は旧石器時代終末から縄文時代草創期にかけてとみられる石器群である。特に1は富里町南大溜袋遺跡などの出土例が知られている、いわゆる植刃の素材と考えられる特徴的な尖頭器の範疇に含まれる資料である。5～7は石鏃、8は石鏃未成品である。4は二次加工のある剝片で、やはり石鏃未成品と考えられる。9は敲石、10は打製石斧、11は凹石、12は石錘である。なお、このほかに礫片なども出土しているが、熱を受けているものがほとんどなく、集石などのような遺構として認識されるべき出土状況を呈しているものも全く見られなかった。



第33図 グリッド出土縄文土器 (10)

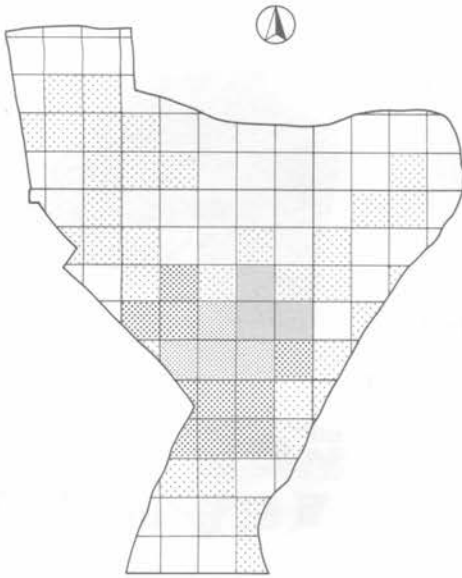


第34図 グリッド出土縄文土器 (11)

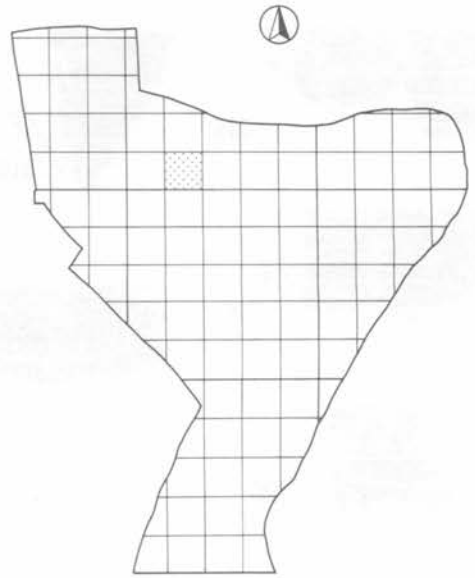


第35図 グリッド出土縄文土器 (12)

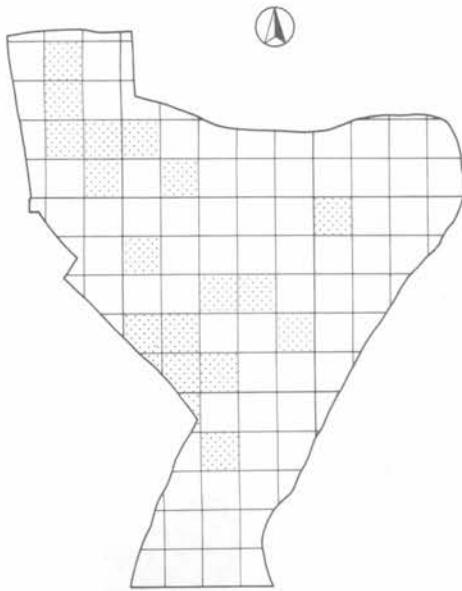
第I群
第1類



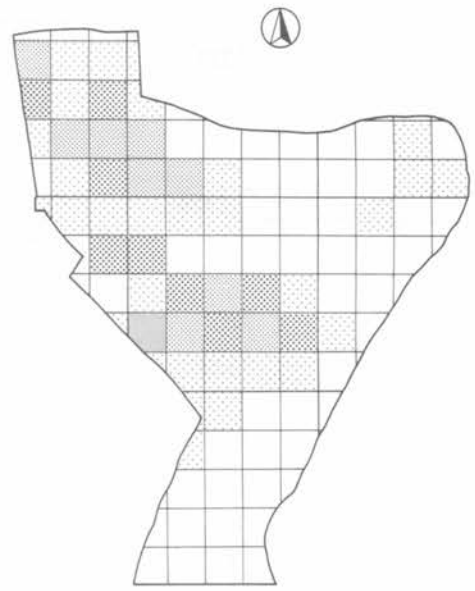
第I群
第2類



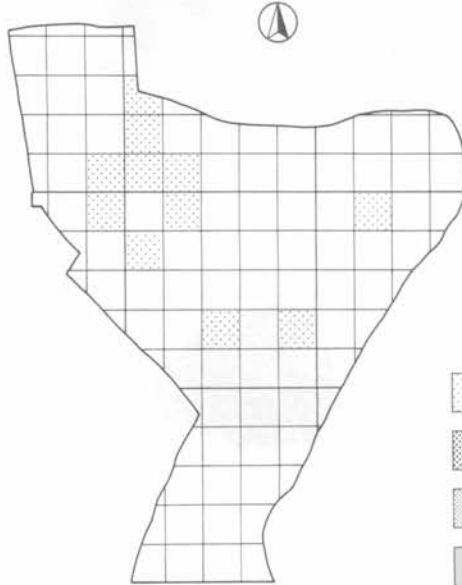
第I群
第3類



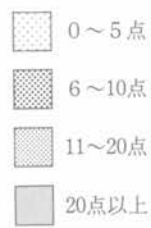
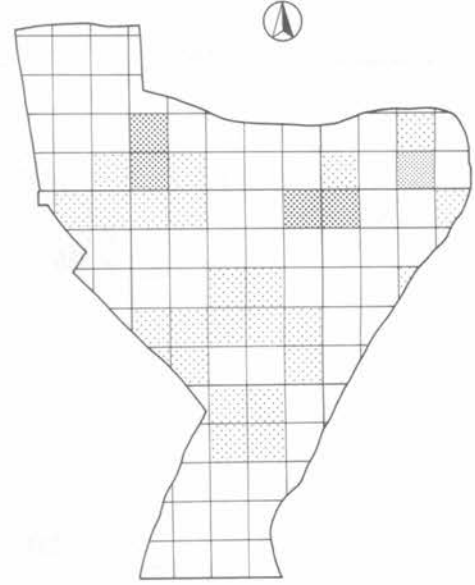
第II群
第1類



第II群
第2類

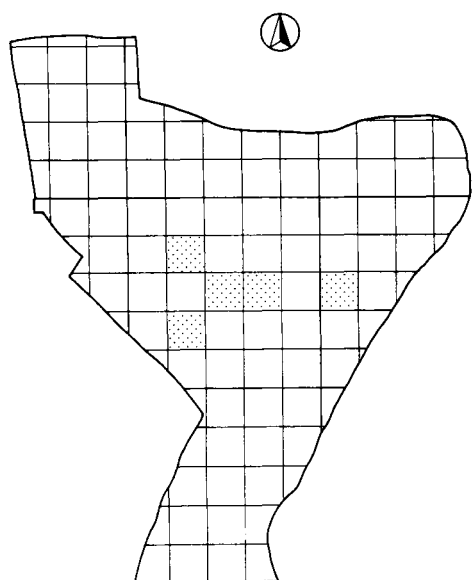


第III群
第1類

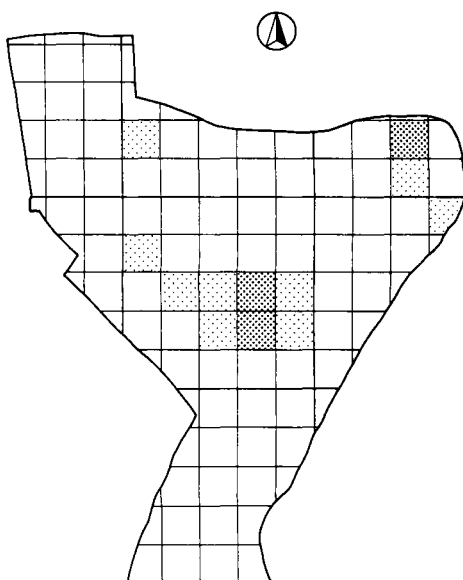


第36図 A地区縄文土器出土分布(1)

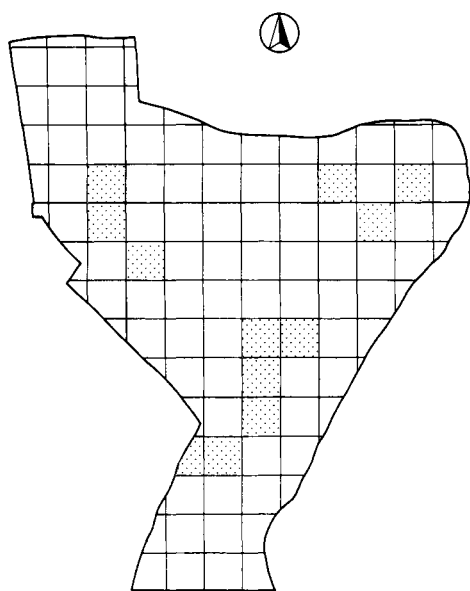
第Ⅲ群
第2類



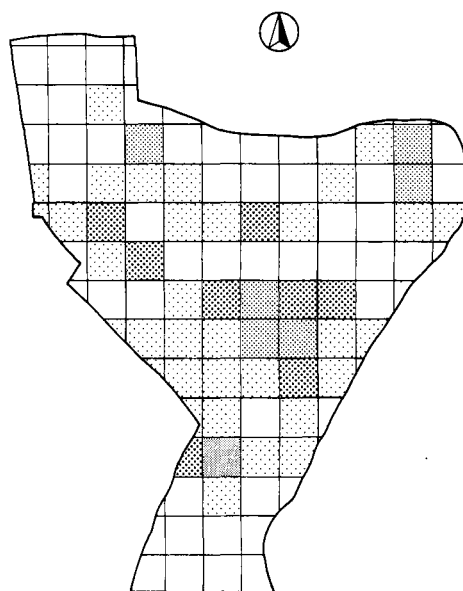
第Ⅳ群
第1類



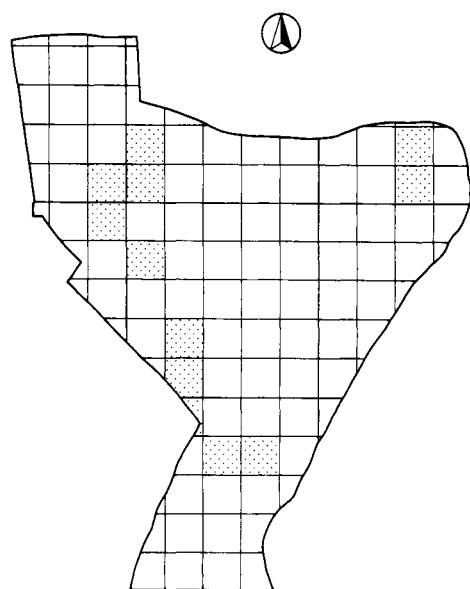
第Ⅳ群
第2類
1、2種



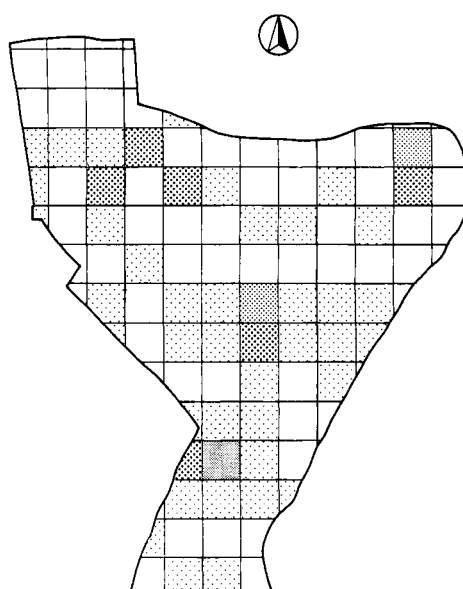
第Ⅳ群
第2類
4種



第Ⅳ群
第2類
5種

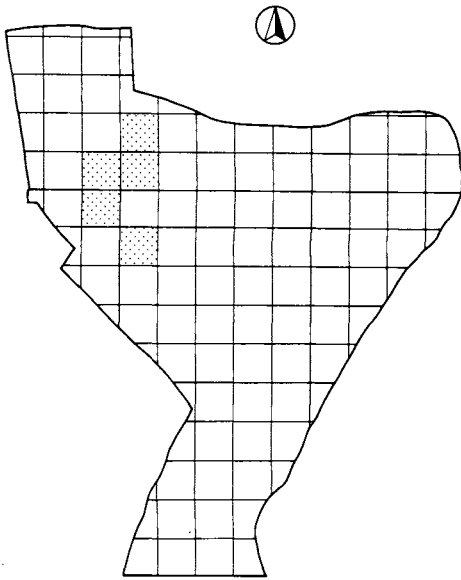


第Ⅳ群
第2類
3種
第3類

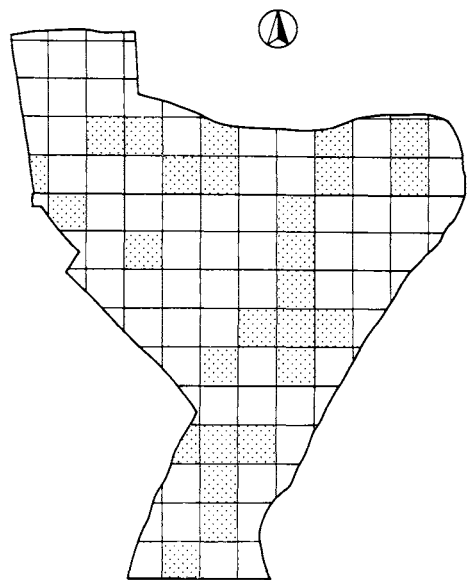


第37図 A地区縄文土器出土分布(2)

第IV群
第4類
第V群



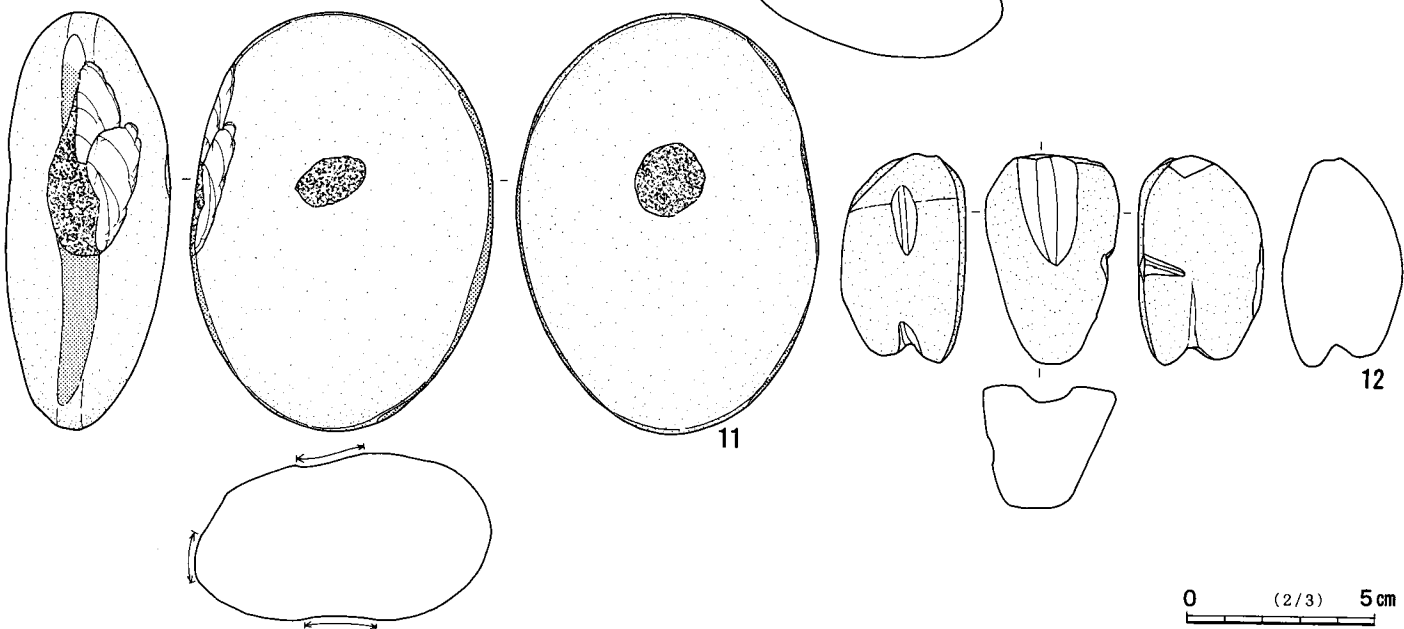
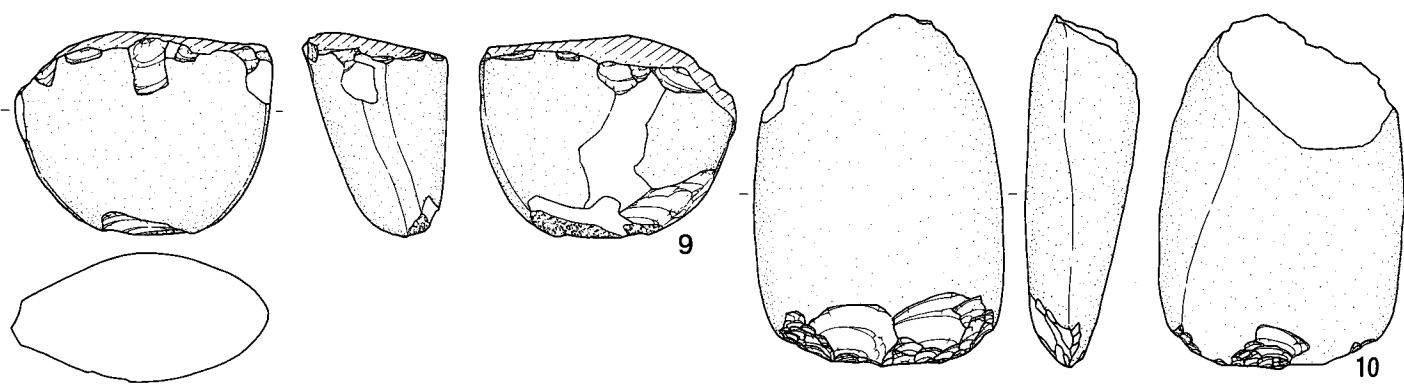
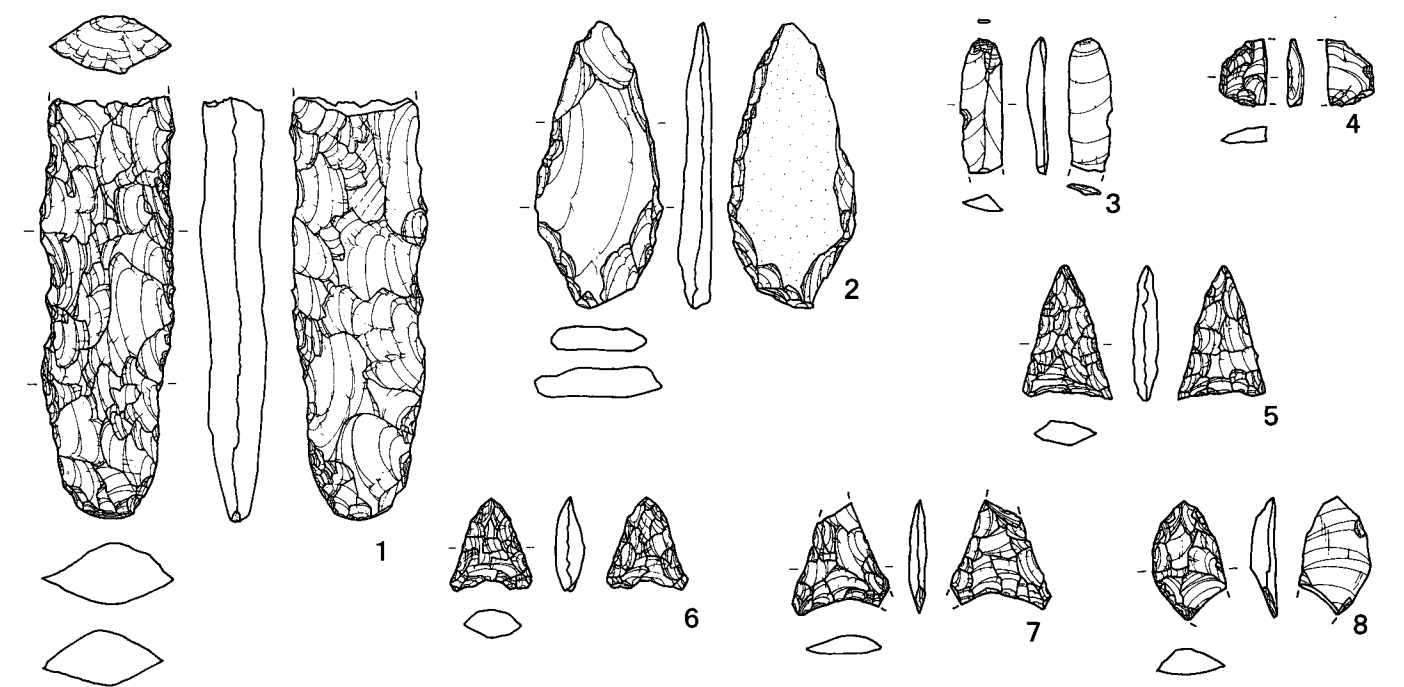
第VI群



第38図 A地区縄文土器出土分布(3)

第8表 旧石器時代終末～縄文時代石器属性表

No.	遺物番号	器種	長さ × 幅 × 厚さ (mm)	重量 (g)	挿図 番号	打面 種類	打面 調整	頭部 調整	背面構成	背面 種類	打角 (°)	折面 部位	石 材
1	H7-64-004	尖頭器	83.0 × 27.0 × 11.8	30.3	1								安山岩
2	H3-30-046	尖頭器	57.0 × 25.5 × 6.8	11.2	2								緑泥片岩
3	M01-012	細石刃	27.0 × 8.3 × 4.0	0.7	3	平	×	○	I	a	115	B	珩質頁岩
4	G10-90-001	石鏃	17.8 × 16.3 × 6.0	1.2	6								黒曜石
5	H3-22-006	石鏃	25.8 × 17.5 × 5.0	1.7	5								チャート
6	H3-11-006	石鏃	21.0 × 19.3 × 3.8	1.1	7								安山岩
7	F11-01-一括	石鏃未成品	22.5 × 14.5 × 5.3	1.4	8								黒曜石
8	K16-70-001	R剥片	13.5 × 9.5 × 3.3	0.4	4								黒曜石
9	H3-64-003	敲石	53.0 × 67.7 × 36.7	155.0	9								砂岩
10	H3-30-040	打製石斧	90.6 × 65.5 × 28.3	192.4	10								黒色緻密質安山岩
11	G4-79-001	凹石	108.0 × 79.6 × 43.0	532.7	11								砂岩
12	D7-24-不明	石錘	53.5 × 34.8 × 32.9	65.2	12								石英ハン岩



第39図 グリッド出土縄文時代土製品、石器

第3節 中近世

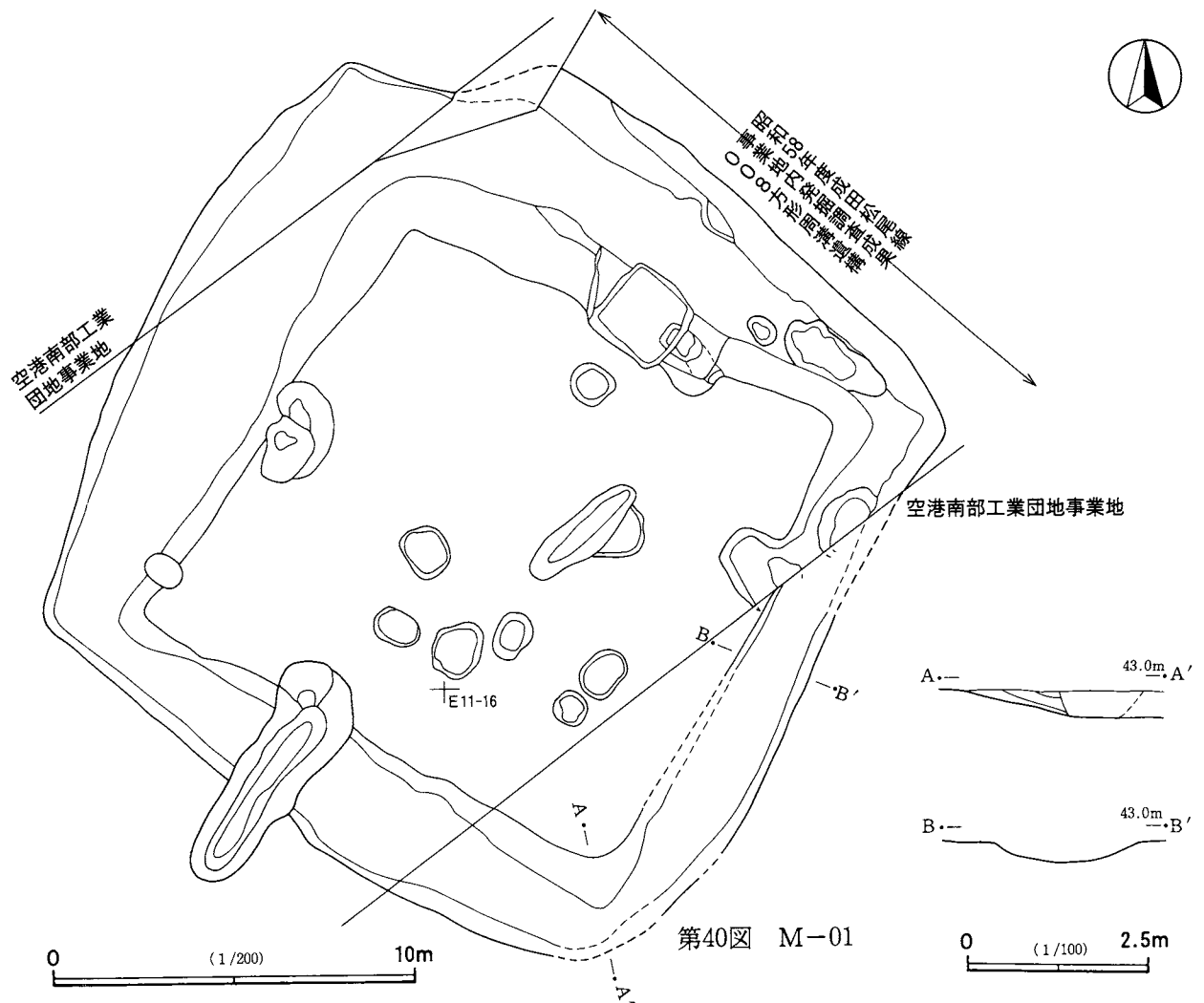
1 遺構

明瞭に中世と断定できる遺構は無く、縄文時代以外の遺構はほとんどが近世のものである。土坑に関してはすべて第9表にまとめた。表に記載しなかったほかの遺構及び表中の一部の土坑について以下に説明する。

(1) 溝

M-01 (第40図、図版5)

D地区とE地区にまたがり、主軸を北東から南西にもつ方形周溝状遺構である。昭和58年度に主要地方道成田松尾線事業地内の上宿遺跡発掘調査時にその中央部を検出している。今回の調査で南東及び北西コーナーを確認し、その結果全体像が判明した。全体の規模は20.5m×21.5mを測る。周溝の幅は最も狭い南西コーナーで2.0m、最も広い北西コーナーで5.5mを測る。深さは0.5mほどで、底面は平坦で浅く、硬化面はない。北西コーナーは攪乱を受けているためか、掘り方平面がかなり歪んでいる。南側の周溝内に周溝と直交するようなかたちで、長円形の土坑が、また、対面する北側の周溝内には方形の地下式坑が、また、周溝で囲まれた中央の平坦面には11基の土坑がある。成田松尾線の調査時には、近世遺物が出土しているの、近世遺構であろうが、性格は判然としない。



M-02 (第7図、図版5)

D地区の南に土坑列1と平行に延びる。おそらく土坑列と何らかの関連がある遺構と考えられる。幅は0.8m～1.2m、深さは0.1mを測り、非常に浅く、細い溝である。覆土中に硬化面は見られない。

M-03 (第7図、図版5)

D地区南端に、先端をM-01に向けている。ほぼ東西方向に延びる溝である。幅1.0m、深さ0.1mを測る。M-02と関連性のある溝である。覆土中に硬化面は見られない。

(2) 土坑列

土坑列1 (第41、42図、図版5)

D地区に位置する。図面上では49基の連続した土坑列であるが、調査時には極めて浅い溝の底面に等間隔で土坑が掘られていたのを確認している。土坑列は調査地内ではコの字型に廻る。土坑に囲まれた範囲の面積は約1,160㎡(352坪)になる。北東側は成田松尾線の路線内に入るように見えるが、路線の発掘調査報告書には何も触れられていない。南西コーナーには土坑が一端途切れる範囲があり、ここが土坑に囲まれた区域内への出入口になると考えられる。この両端の土坑間の距離は心心距離で、6.3m(1.8mを1間とすると3.5間)になる。土坑の大きさは最小のもので直径0.7m×0.7m、深さ0.2m、最大のもので直径2.3m×2.5m、深さ0.6mを測る。隣接する土坑の間隔は心心距離で1m～2.7mを測る。土坑の埋土は底面近くにロームを含む層があり、中位から上位にかけては黒色土の単一層で、一時に埋め立てたものでもなければ、杭状のものを立てていたものでもなく、自然埋没のように見受けられる。したがって、この遺構は溝底面中に等間隔で土坑を掘ったままの形で露出していたようである。北西端のコーナーの土坑は他に比べて規模が大きく、播鉢状になる。その外側に隅丸方形の土坑(P-047)がある。

土坑列の内側には、極めて浅い土坑を11基確認した。性格についてははっきりしない。

土坑列2 (第7図)

土坑列1と並ぶようにその北側17mに位置する。掘り込みが極めて浅いために南西側の一部を残すのみで、残りの大半の土坑は遺構検出時には削平されてしまっていたようである。列の方向は土坑列1と一致する。

(3) 竈

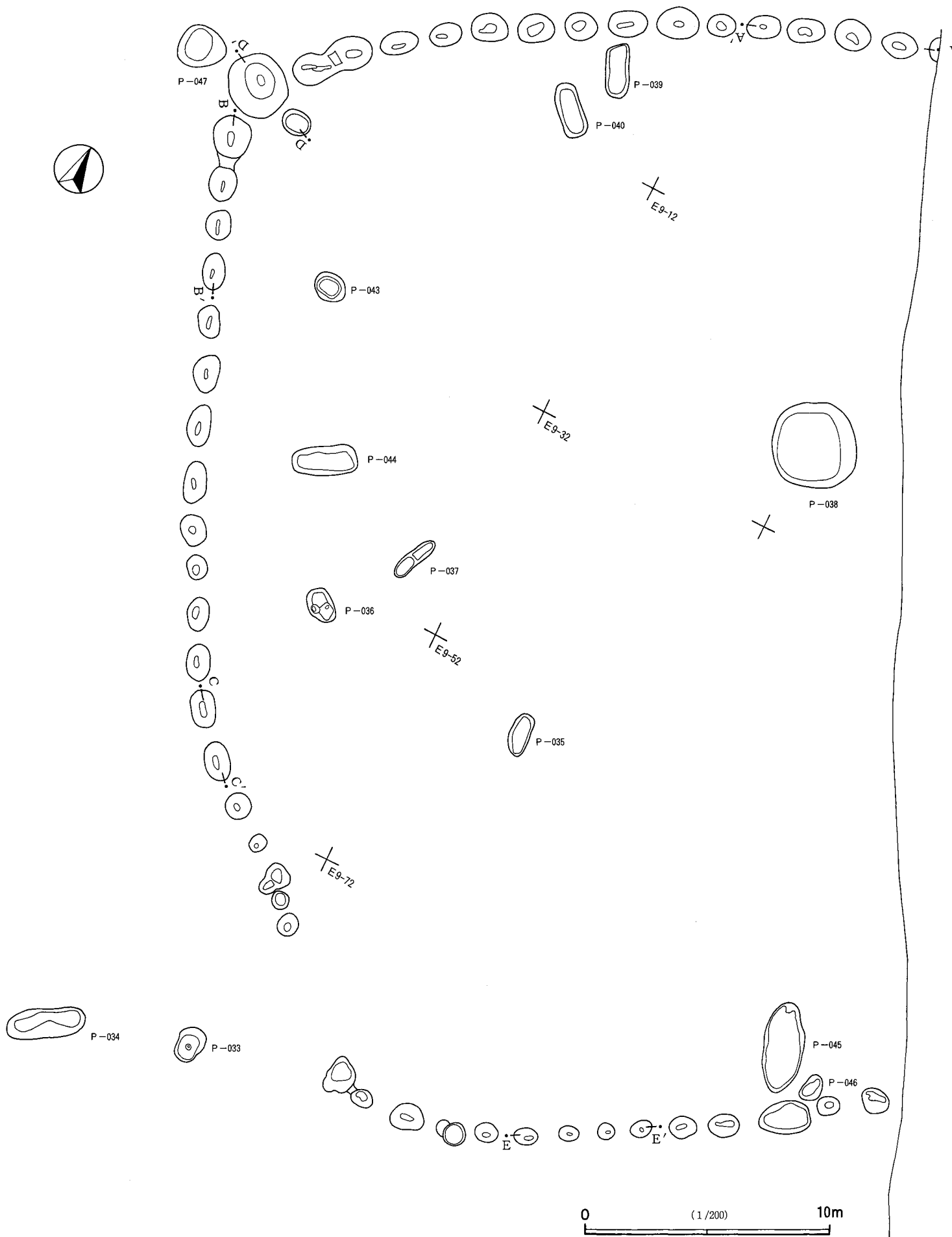
SX-3 (第46図、図版5)

2基の竈が並列したものである。竈の焚口が土間(地面)より下に掘り下げて造られる半地下式である。煉瓦は使用しておらず、粘土や山砂を用いて構築している。大きさは焚き口から向かって左側のは内面で直径0.7m、深さ0.6m、右側のは深さ0.4mを測る。やや左側のものが大きい。

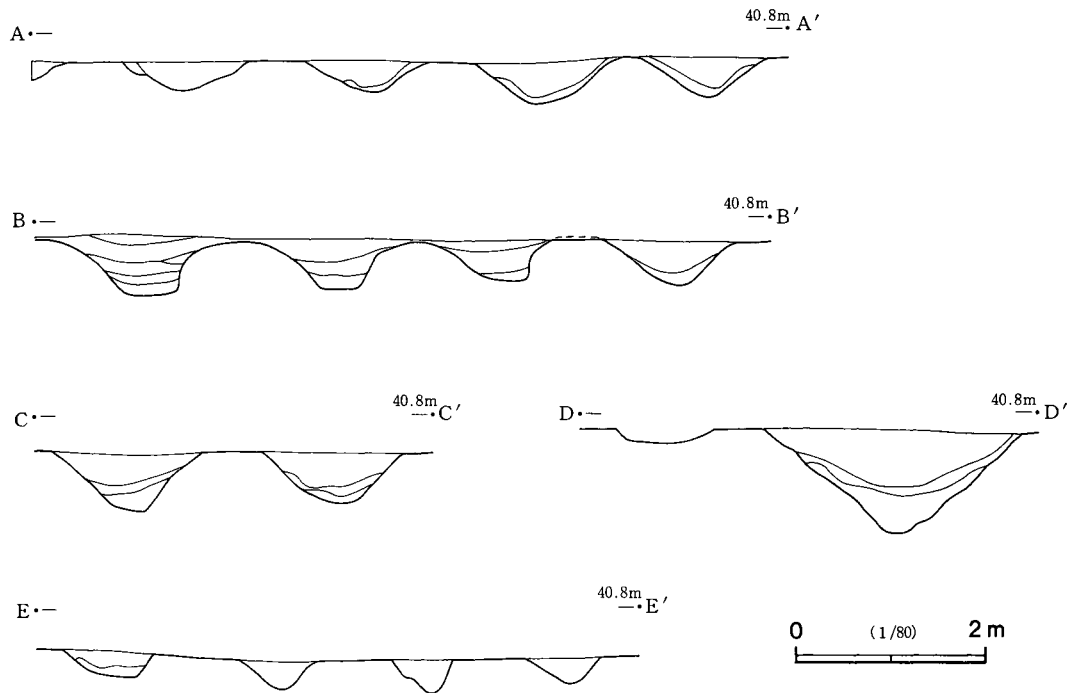
(4) 粘土貼り土坑

P-015 (第43図、図版6)

C地区F7-98グリッドに位置する。北東壁がふくらんだ長方形で、幅1.2m～1.6m、長さ1.9m、深さ0.2mを測る。10cm前後の厚さで灰白色粘土を掘り方全面に貼り付けている。近世陶磁器が出土している。



第41图 土坑列1



第42図 土坑列1土層断面

P-057 (第46図、図版9)

D地区D8-09グリッドに位置する。直径1.0m、深さ0.5mの円筒形の土坑である。床面は平滑で、床面に厚さ5cmの白色粘土を貼り付けている。

P-058 (第46図、図版9)

D地区D8-08グリッドに位置する。直径1.0m、深さ0.4mの円筒形の土坑である。床面は平滑で、床面に厚さ7cmの白色粘土を貼り付けている。

P-060 (第46図、図版9)

P-060は粘土を壁面と底面に貼り付けた円筒形の粘土貼り土坑である。底面には鉄製の唐鍬の先端部がほぼ完形で確認された。粘土は壁面で厚さ10cm~15cm、底面で厚さ2cm~3cmを測る。粘土内側に木製の桶を埋め込んでいたかどうかは不明であるが、おそらく水を溜めていた施設のようなものである。

(5) 土坑

P-014 (第43図、図版6)

C地区F8-19グリッドに位置する。2基の隅丸方形の土坑が直交する。大きい方は幅1.0m、長さ1.6m、深さ0.2mを測る。小さい方は幅0.8m、長さ1.0m、深さ0.4mを測る。近世陶磁器が多く出土する。

P-024 (第44図、図版7)

C地区F8-09グリッドを中心とする地点に、主軸を北西-南東に向けた、隅丸方形の土坑である。壁が2段になっており、出入口部が張り出し、床面が硬く締まっている。大きさは最大4.6m×4.1mで、底面は2.9m×2.5m、深さは0.75mである。覆土中から比較的多くの陶磁器類が出土している。底面は平坦で締まりがある。日常的に使用する作業場の空間か、倉庫のようなものであろう。

P-025 (第44図)

C地区F6-93グリッドを中心とする地点に、主軸を北西-南東に向けた、隅丸方形の土坑である。覆土は各層とも良く締まっており、特に掘り方床面は平坦で非常に硬く締まっている。大きさは最大3.2m×3.2mで、底面は2.5m×2.2m、深さは0.5mである。覆土中から比較的多くの陶磁器類が出土している。P-024と同様の遺構である。

P-031 (第44図、図版7)

D地区E10-05グリッドに位置する。主軸を北西-南東に向けた、隅丸方形の土坑である。大きさは2.0m×1.9m、深さ0.25mを測る。床面は堅く締まり、部分的に赤褐色の鉄分が沈着している。

P-038 (第45図、図版8)

D地区の土坑列1に囲まれた範囲にある。直径3.6m、深さ0.5mの円形の浅い土坑である。床面中央でわずかに窪む。掘り方床面は極めて硬く締まり、赤褐色の鉄分が沈着している。覆土中には灰や炭が見られる。

P-047 (第45図、図版8)

D地区土坑列1の北西コーナーの土坑の外側に位置する。幅1.1m×1.4m、深さ0.8mを測る。床面が西側に、袋状に15cmほど抉れている。床面から60cmほどのところで大きく開口する。

P-053 (第45図、図版8)

D地区D7-98グリッドに位置する。幅2.3m、長さ2.5m、深さ0.5mを測る。床面は平滑で、壁は垂直ではなく斜めに真っ直ぐに立ち上がる。近世陶磁器を出土する。作業場であろう。

(6) 井戸

P-052 (第45図、図版8)

直径0.95m、深さは0.8m以上の円筒形の井戸である。土坑列1の内側のE9-61グリッドに位置する。確認面から20cm下より上部に向かってやや開く。

P-064 (第46図)

直径0.7m、深さは0.5m以上の円筒形の井戸である。家の屋敷地内にある。

(7) 炭焼窯

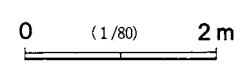
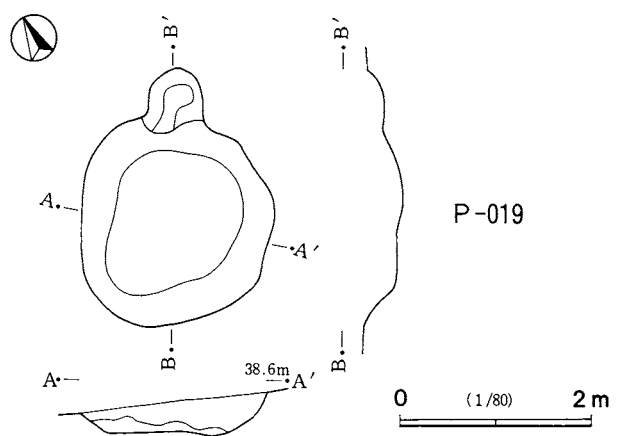
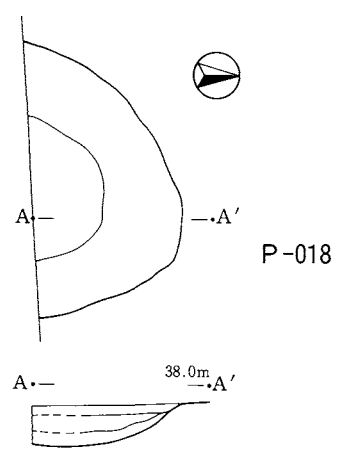
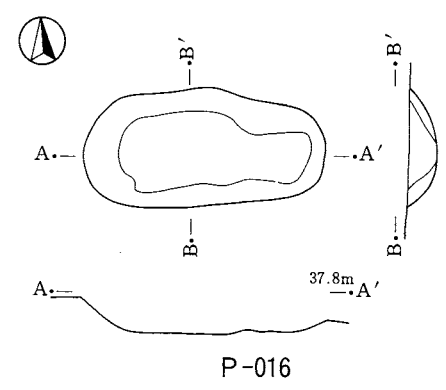
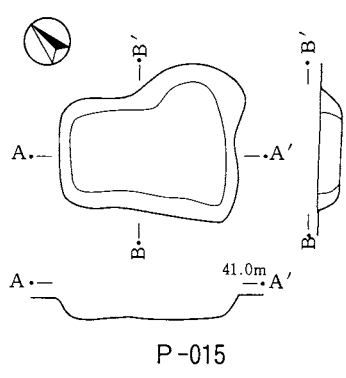
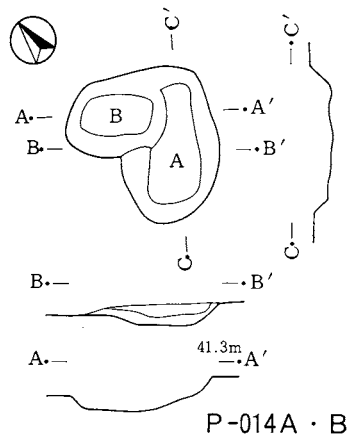
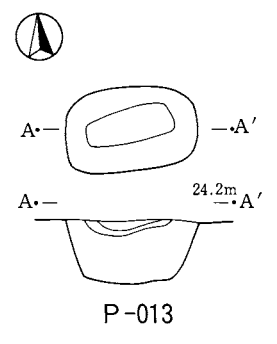
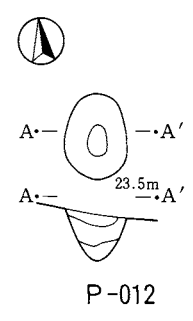
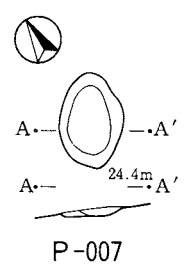
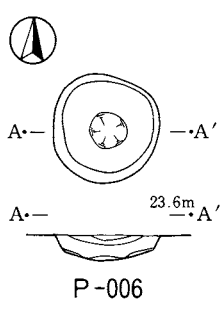
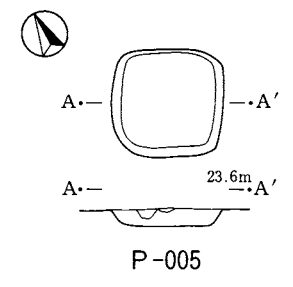
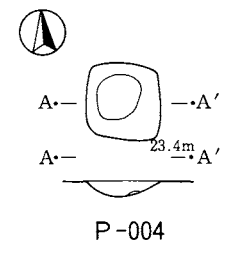
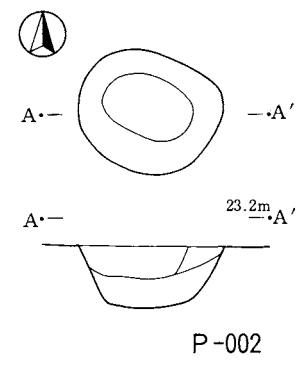
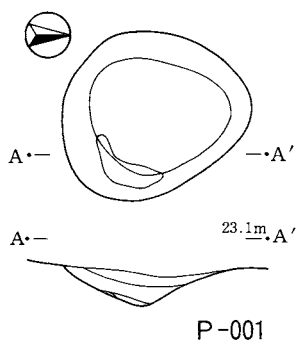
SX-2 (第46図、図版9)

D地区D8-05グリッドに位置する。焚口の幅は0.4m、焼成室の直径は1.7m、煙道部の奥行きは0.6m、最大幅は0.2mを測る。焼成室中央床面直上から美濃登窯第7小期に当たる灰釉丸碗や肥前産の内面に緑釉、外面に透明釉を掛け分けた皿が出土している。この遺構の時期は18世紀後半ごろであろう。

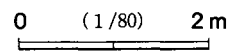
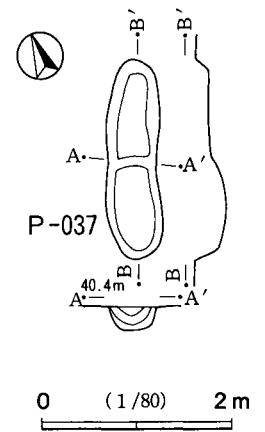
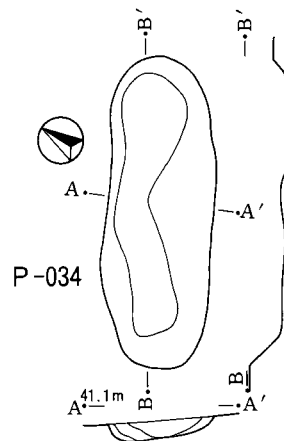
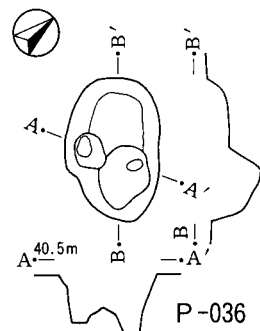
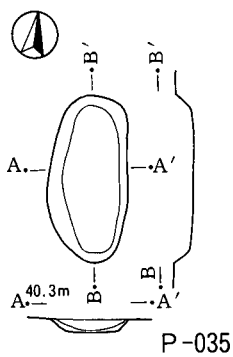
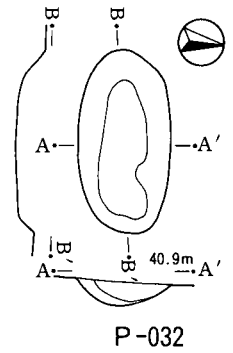
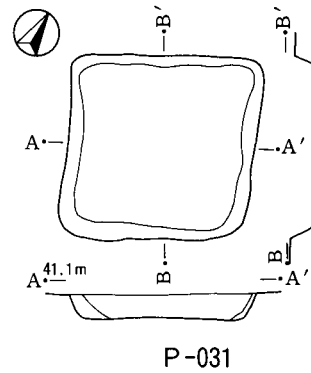
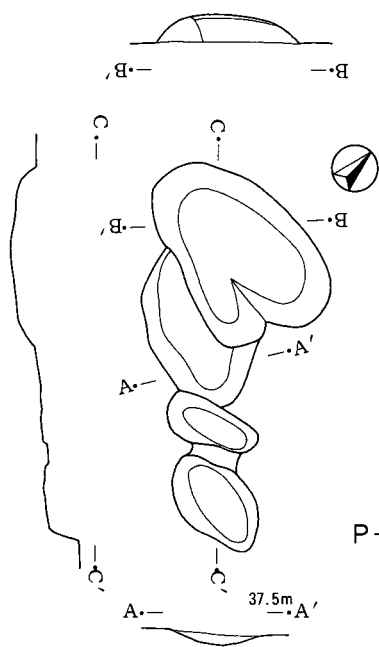
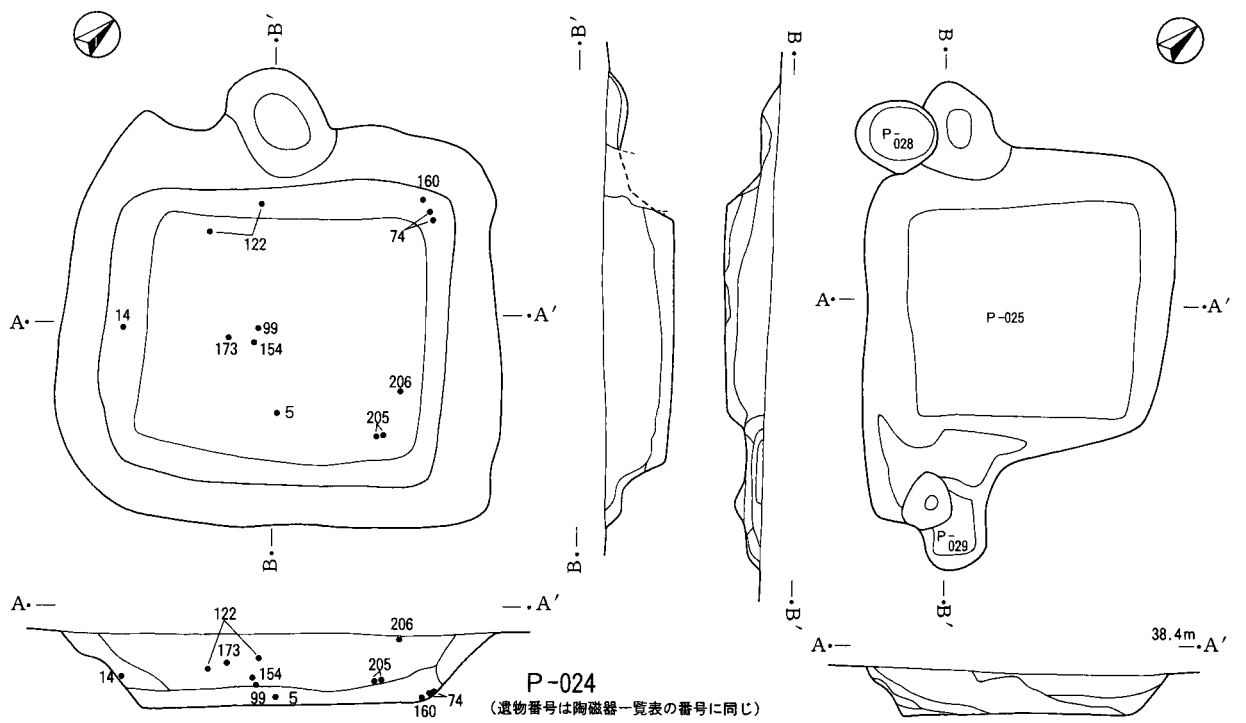
SX-4 (第47図、図版9)

A地区に位置する。焚口の幅は0.35m、焼成室の直径は1.5mを測る。焼成室最奥部から1体の馬の骨が出土した。馬は体を南北方向に横たえ、首と前足を折り曲げるような状態であった。使われなくなった炭窯に捨てられたものと考えられる。

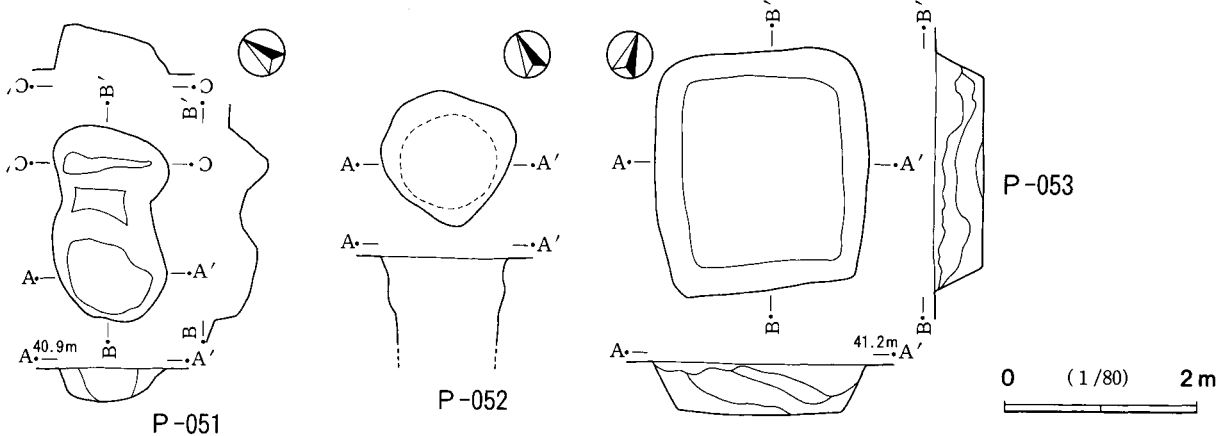
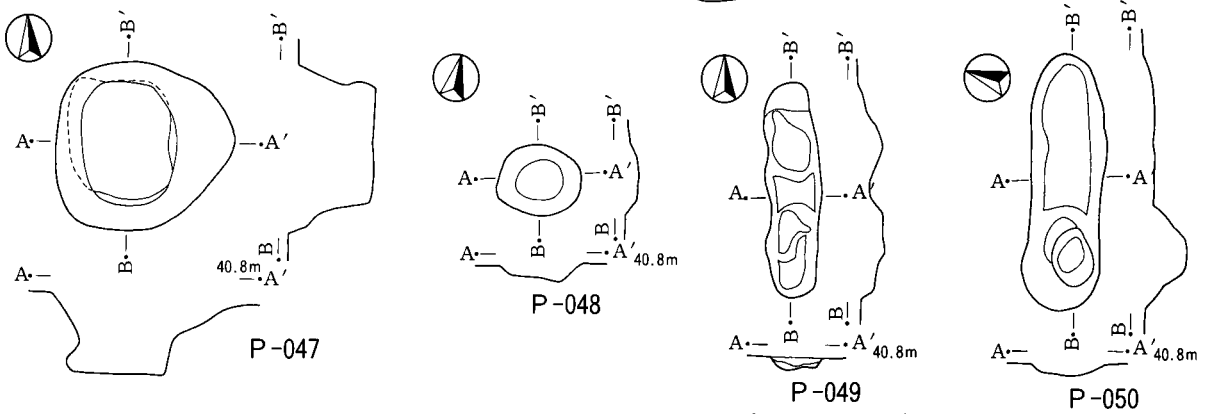
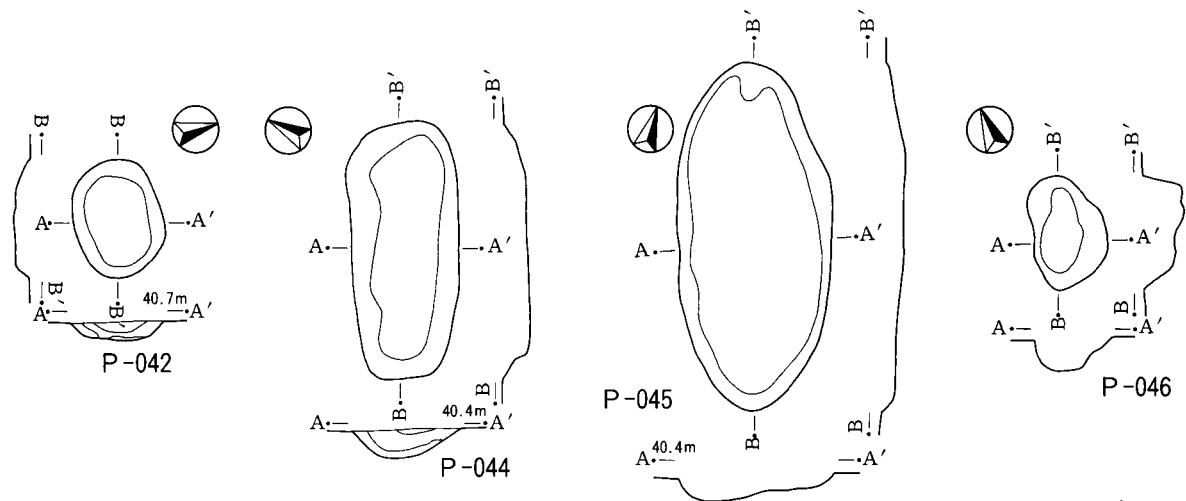
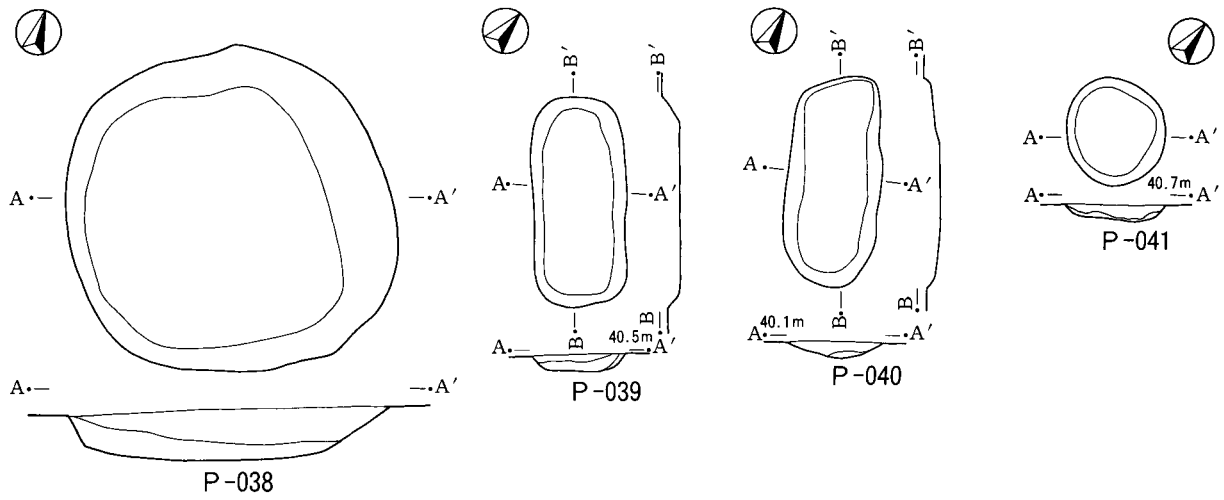
(8) 土蔵



第43图 土坑 (1)

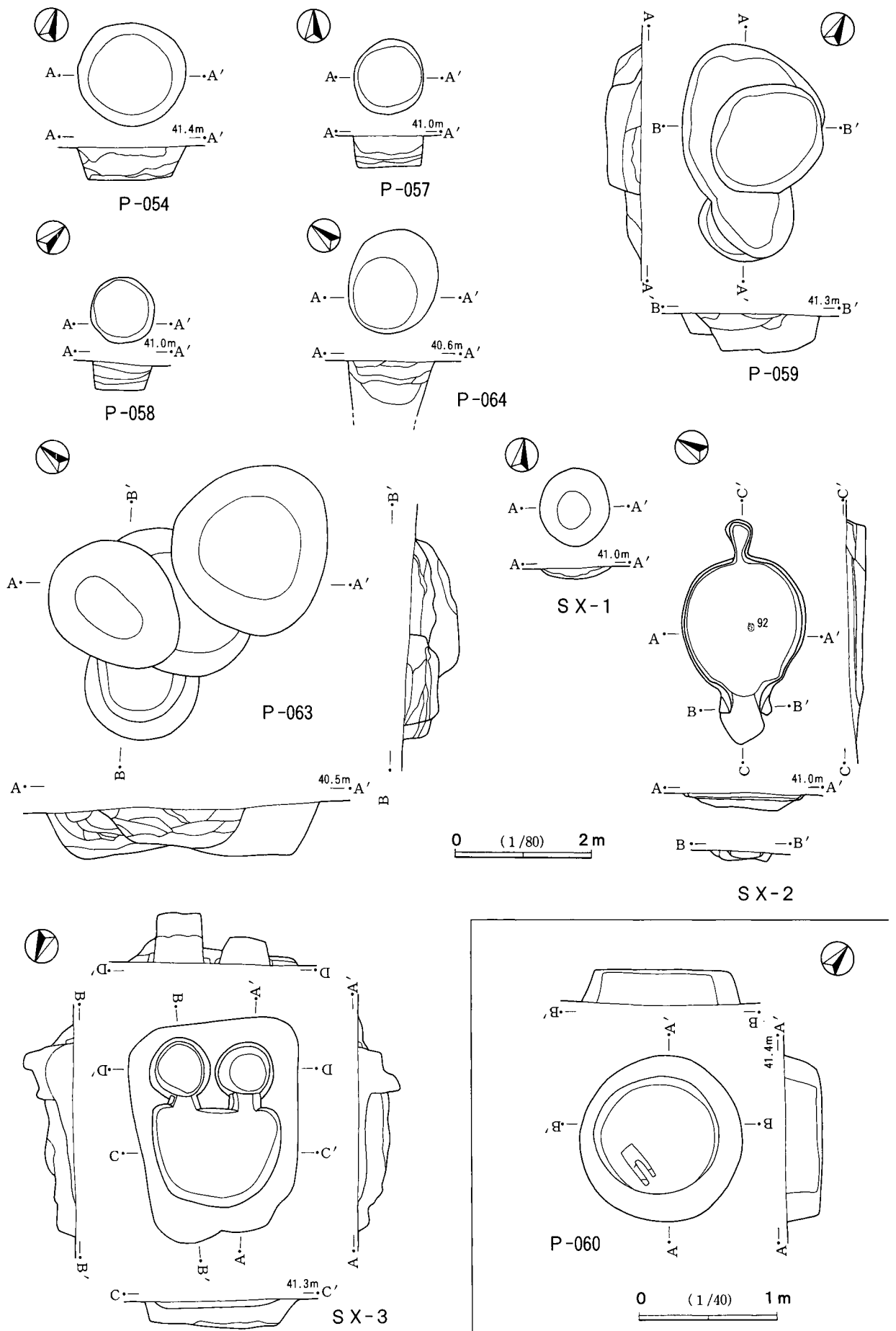


第44図 土坑 (2)

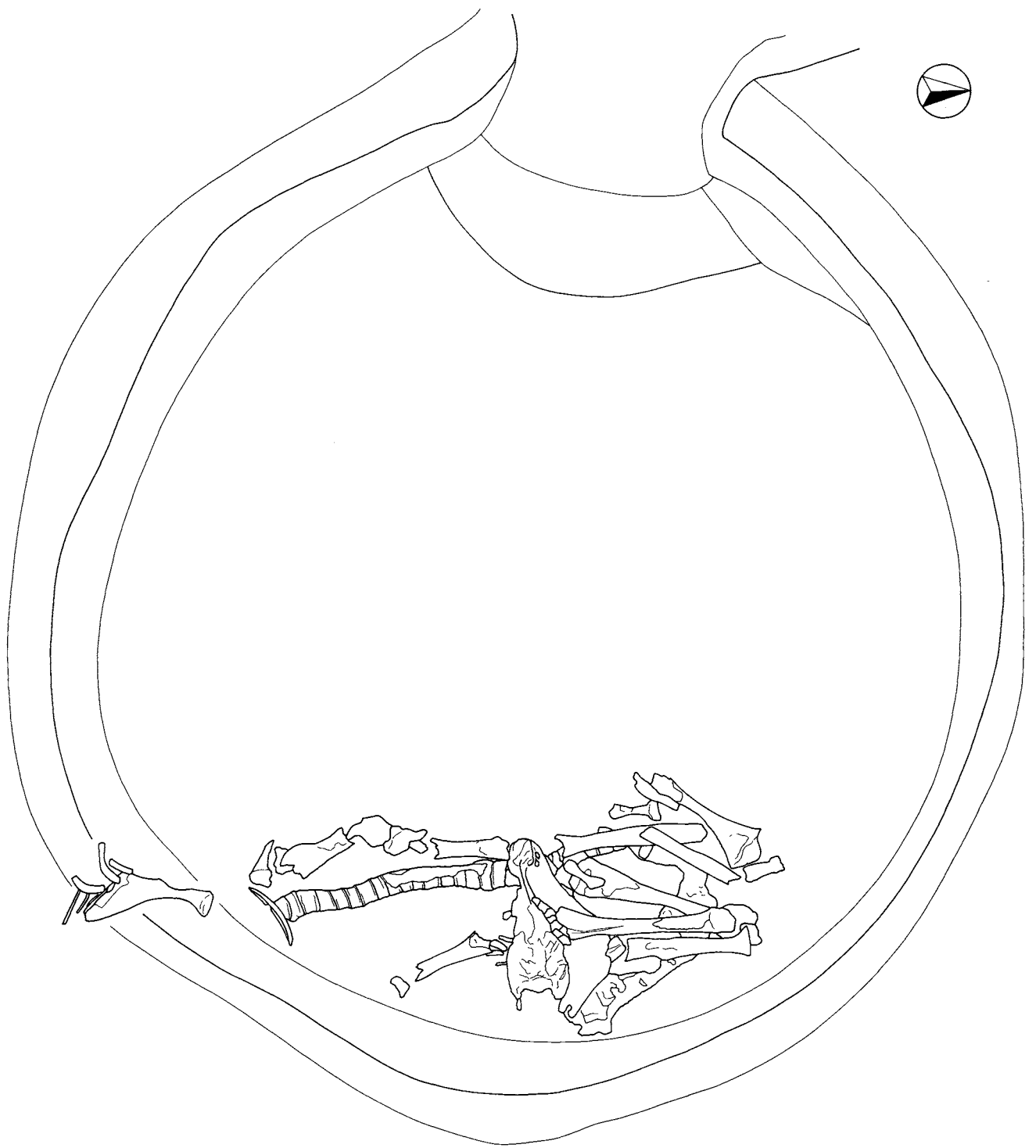


0 (1/80) 2m

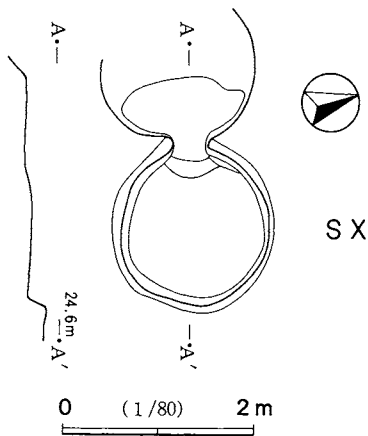
第45图 土坑 (3)



第46図 土坑(4), その他



0 (1/10) 50cm



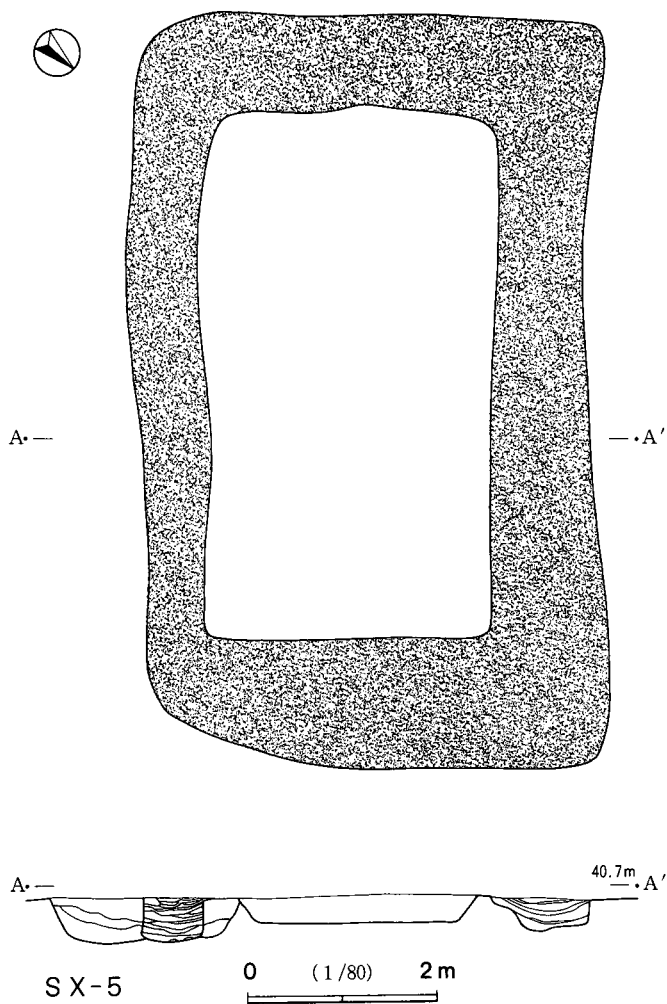
SX-4

0 (1/80) 2m

第47図 SX-4・馬骨出土状況

S X-5 (第48図)

C地区に位置する。長軸7.8m、短軸4.7mで、深さ0.5m、幅0.6mの布堀地業をしている。おそらく四間×二間半の規模の土蔵であつたろう。布堀内は貝殻、ロームブロック、山砂の互層を成し、かなり堅牢な造りをしている。また、土蔵内部の床面はロームブロックを多量に含む単一層であるが、あまり締まりがない。



第48図 SX-5

2 遺物

近世の遺物には土器・陶磁器・石製品・金属製品・鉄滓などがある。近世の遺物は遺構が集中するC地区本調査地点やD地区本調査地点を中心に散在して見られる。陶磁器についてはすべての破片を第12～15表に、陶磁器以外の焼物についてはその出土点数を第16表にまとめた。

(1) 土器

焙烙 (第49図、図版20)

在地産と呼ばれる素焼きの土器の中で、最も多いのが焙烙の破片である。次に多く見られるのが土師質小皿のいわゆるカワラケである。前者が総破片数171点を、後者が48点を数える。

1から12はすべて焙烙の破片だが、口縁端から底部まで完全に復元できるものは一点もない。1は団子状の丸い粘土塊を貼り付けた内耳で、穴は正円形に近い。底部は丸底で、体部は全体に肥厚し、緩やかに外反する。口縁端は丸く仕上げられている。2から5も1と同様な体部の形態をしている。そのうち2は幅の広い粘土紐を内耳としている。3、4は口縁の破片で内耳部分が不明である。1、4はC地区No.4地点出土である。2、3はNo.3地点の北側表採である。5は2に体部形態は似ているが、2に比べ内耳部分の作りが板状で非常に丁寧である。6は丸底で、体部が器高の1/2に満たない。やや内湾するような感じである。外面には離れ砂の痕跡がはっきりと残る。7はやはり丸底で、内耳部分は指で広げたものか、かなり大きく、対する体部外面が大きく膨らんでいる。口縁端はシャープな平坦面を作り出している。外面には指頭痕が見られる。8は平底で立上がり部が明瞭である。体部は緩やかに内湾し、口縁端は平坦面を作り出している。外面には指頭痕が明瞭に残る。内耳部は細く、対する外面が大きく膨らんでいる。出土位置が不明である。9は団子状の内耳部分の破片で1と同形態である。10は丸底で、体部は低く内耳が口縁端から底部に接合している。12は体部が直立するような形態で、内耳は口縁端から体部最下部に付けられ、底部には接合しない。

1、2、3、5、7、8は土師質、4、6は瓦質である。7、8は供伴関係は不明だが、18世紀半ばごろと考えられる。10～12も同時期ころで、その他1～7、9は供伴遺物から18世紀後半～19世紀初頭と考えられる。

火鉢 (第49図、図版20)

13は土師質の火鉢で、口縁端で外側に三角形の円帯を作る。14は瓦質の火鉢で口縁端が丸く、13と同時期が想定される。15は土師質の火鉢で口縁端が内側に張り出すものである。

焜炉 (第49図、図版20)

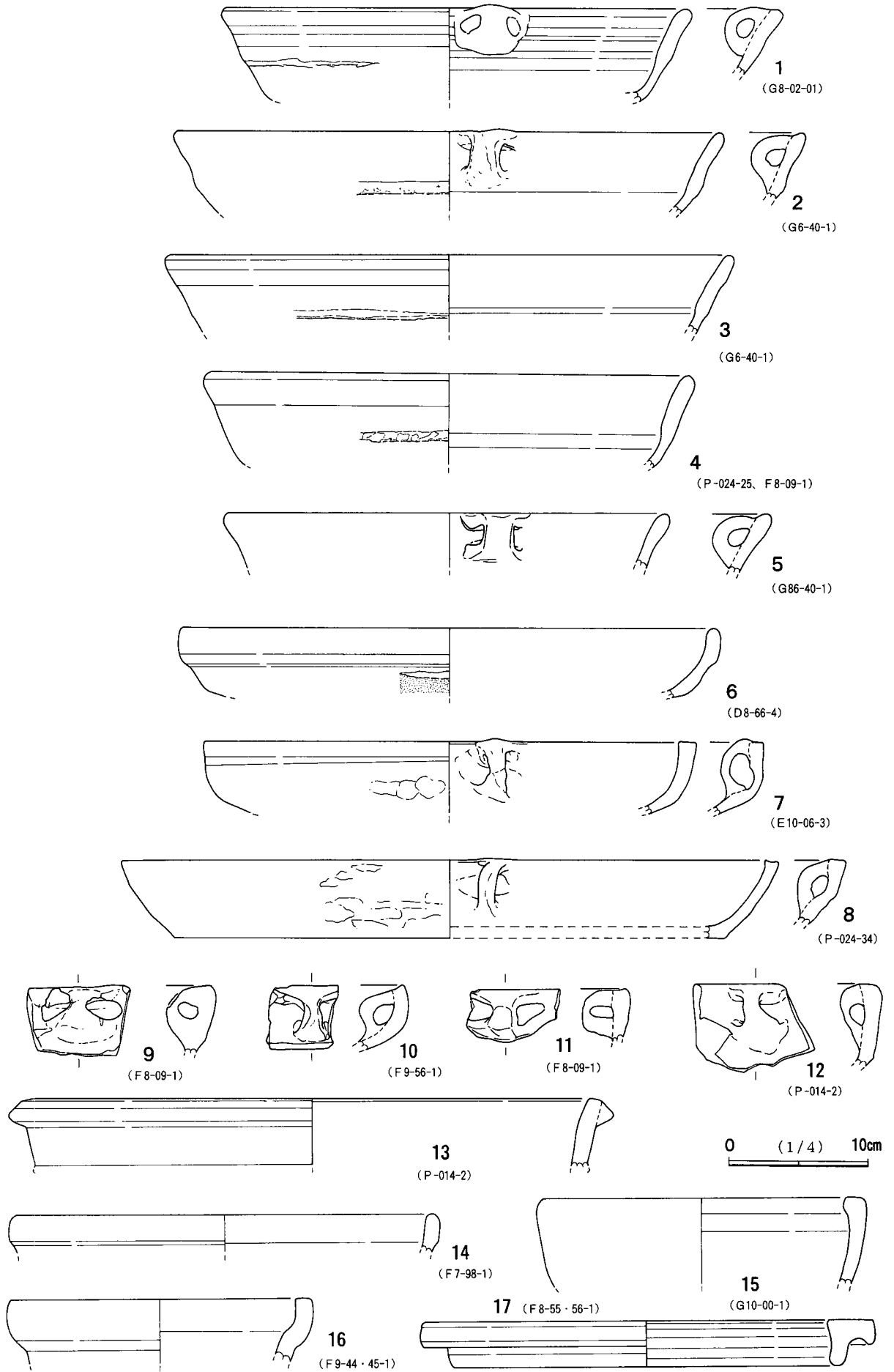
16は瓦質の焜炉である。口径16.5cmを測る。

竈敷輪 (第49図、図版20)

17は竈に使う土師質の敷輪で、口径38.4cm、最大径43.6cm、器高8.6cmを測る。

カワラケ (第50図、図版20)

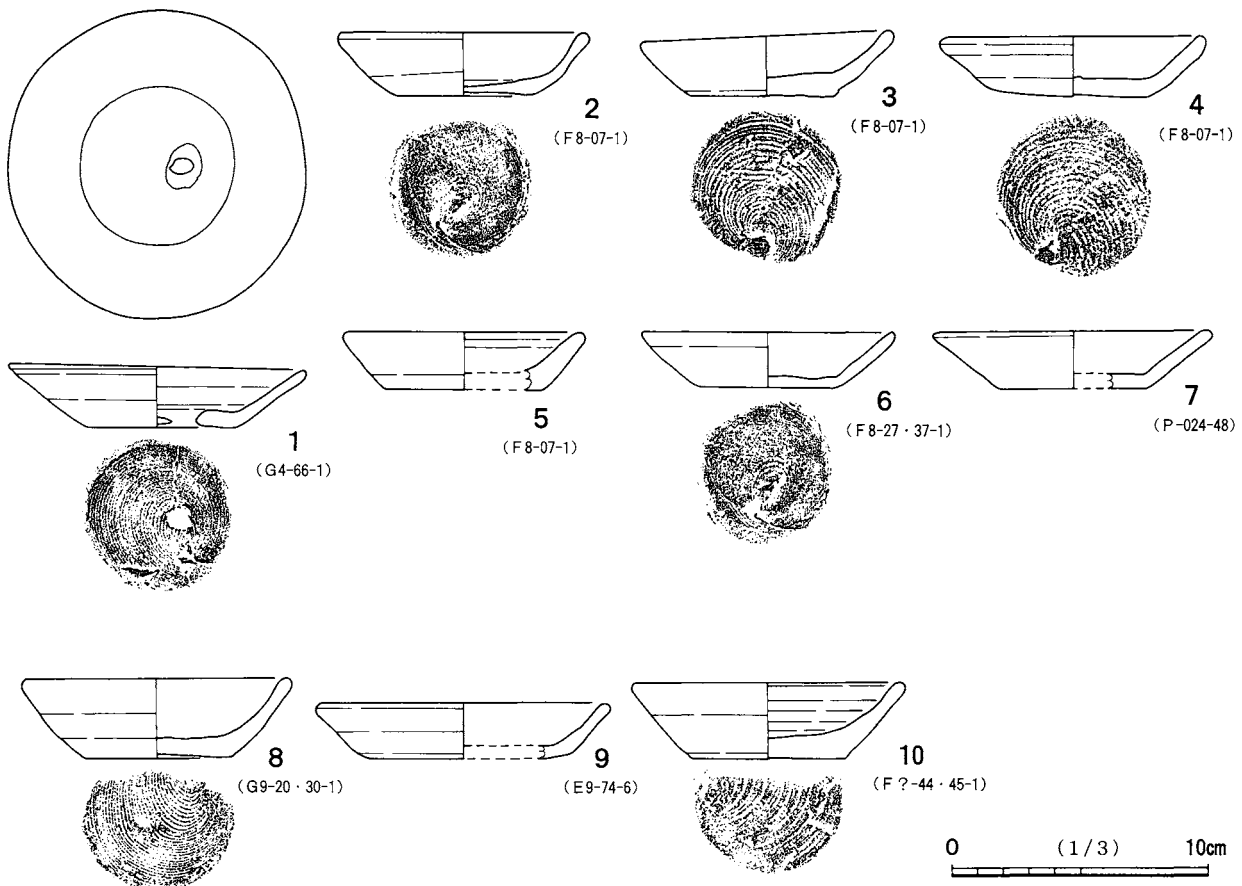
1は底部を打ち欠いて直径3mm～5mmの穴をあけている。体部は直線的で内面中央部に稜が見られる。



第49図 焙烙・火鉢・電敷輪

口縁端は比較的鋭角につまみ出される。胎土は金雲母細粒を多量に含み褐色を呈する。2は体部が途中で内側に折れ、口縁端が肥大する。胎土は灰褐色で砂粒が多い。3は底部が比較的厚く、部分的に高台状に残す。また、体部も比較的厚く、やや内湾する。胎土は褐色から黒褐色で微砂粒を多く含む。4は底部と体部の厚さがほとんど変わらず、体部外面がやや外反する。口縁部端がやや肥厚する。胎土は薄い褐色で微砂粒を多量に含む。5は小形のカワラケで、胎土は褐色で、微砂粒・鉄分粒を多く含む。6は内面立上がり部と底面が明瞭に窪んでいる。体部はほぼ直線的に延びる。胎土は薄い褐色で雲母細粒や鉄分粒を多量に含む。7も6とほぼ同様な器形である。8は全体に厚手で、内面に太い螺旋状の指ナデ痕を残す。立上がり部分は、内面がやや溝状に窪む。底部はやや高台状に残している。口縁端はやや肥厚する。9は全体の1/5からの復元なので、直径がはっきりしない。2次的に被熱し、内外面とも器面が剥落している。10は内面が底部中央から口縁にかけて緩やかに弧を描く。器厚は厚い。口縁端がやや肥厚する。胎土は白色微砂粒や鉄分粒を多量に含む。

7は供伴遺物から18世紀半ば～19世紀初め頃におさまり、6も7とほぼ同時期のものと考えてよいであろう。一方、2、3、4、5は器壁が厚く、6、7に比べてやや古い様相を呈する。17世紀半ばから18世紀にかけてのものであろう。また、10は出土位置も不明で、他に比べやや古い様相を示す。中世的で15世紀前後のものであろうか。



第50図 カワラケ

(2) 陶磁器

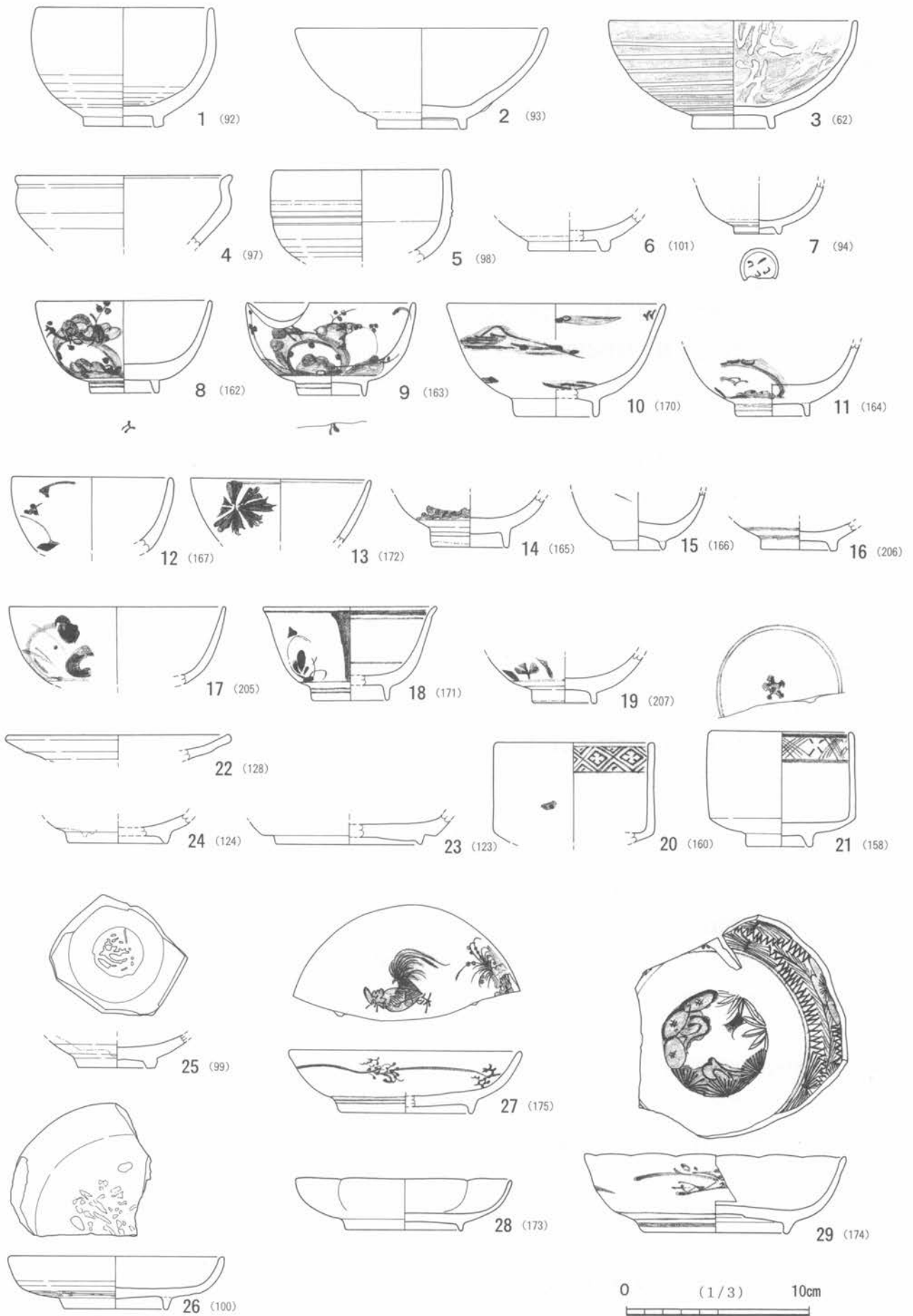
近世陶器には瀬戸・美濃産、肥前産、その他常滑産や産地不明のものが見られる。磁器には肥前産、瀬戸美濃産や産地不明のものが見られる。

碗 (第51図、図版20、21)

1は美濃産の灰釉丸碗である。高台畳付けのみ無釉でその他全面に灰釉を施すが、貫入が著しい。登窯第7小期に当たる。2は瀬戸産の緑釉(呂宋)茶碗である。高台は削り出し風で、外面立ち上がり部から内面にかけて厚く銅緑釉が掛かる。登窯第9小期に当たる。3は肥前産の雑巾掛け碗である。内面は灰オリーブ色の釉の上に淡黄色の釉を掛ける。外面は灰オリーブ色の釉の上に7mm間隔で、3mm幅の淡黄色の釉を線状に施釉する。高台と高台裏は無釉である。18世紀半ころのものである。4は天目茶碗の体部片である。胎土は硬質で、灰色でガリガリした感じである。内外面とも鉄釉を掛ける。登窯第7小期ごろと考えられる。5は瀬戸産の腰鑄湯呑(掛け分け茶碗)の体部片である。体部上位の沈線から下が鉄釉で、それより上位から内面にかけては白濁釉を施す。胎土は白色でザックリした感じである。器体が歪んでいるためか、復元すると口径がかなり狭くなる。18世紀第2～第3四半期ごろと考えられる。6は京都・信楽系の陶器碗の底部片である。外面には高台よりやや上面から内面にかけて灰色の釉を掛ける。貫入が認められる。17世紀後半から18世紀代のものである。7は京都・信楽系の陶器碗の底部片である。高台は小型で、外面は高台よりやや上面で透明釉を掛ける。高台裏には墨書が見られるが、判読できない。17世紀後半から18世紀代のものである。8から15は肥前産の染付碗である。8、9は染付碗で、外面に梅花文・高台裏には変形字銘が描かれる。10は大型の端反碗で、瀬戸美濃産の可能性もある。11、12は9と同タイプの碗である。13は体部が直線的に延びる比較的薄手の碗である。15は小碗で、17世紀から18世紀代のものである。16、17、19は瀬戸美濃産の陶胎染付である。18は瀬戸美濃産の染付端反碗である。19世紀前半ころである。20は肥前産の磁器筒形碗で外面には青磁釉が、内面には透明釉が掛かる。内面口縁部には四方禪文が見られる。18世紀第3四半期ころである。21は肥前産の磁器筒形碗で、外面には薄い青磁釉が、内面には透明釉が掛かり、見込みには崩れ五弁花文が、口縁部には四方禪文が見られる。18世紀第3四半期ころである。

皿 (第51図、図版21)

22は瀬戸美濃産の陶器皿の口縁部の破片である。志野(長石)釉が掛かり、体部途中で内屈する。17世紀前半ころのものである。23は灰釉反皿で、削り出し高台は断面三角形である。全面に灰釉が施される。美濃登窯第3・4小期に当たる。24は美濃産の志野皿で、高台より上部に志野釉が施される。貫入が見られる。登窯第1・2小期に当たる。25は見込み釉ハギの肥前唐津産の皿である。高台は回転ヘラ削り調整で、外面には白濁釉が、内面にはオリーブ灰釉が掛かる。高台径は先端部で4.3cmを測る。17世紀後半から18世紀前半ころと考えられる。26は美濃産の灰釉摺絵皿で、内面に草花文が描かれる。また、2か所にワドチの痕跡が見られる。高台は付け高台で、外面立ち上がり部から内面にかけて灰釉を掛ける。27は肥前産染付皿の破片である。内面には鶏の絵が、外面には唐草文を施す。28は白磁輪花皿である。瀬戸美濃産の可能性もある。29は蛇ノ目凹形高台の染付輪花皿で、内面には松竹梅文が描かれる。18世紀後半から19世紀ころであろう。



第51図 碗・皿類 () は陶磁器一覧表の番号に対応

鉢（第52図、図版20、21）

1は瀬戸美濃産の片口鉢である。削り出し高台で、高台より上面から内面にかけて灰釉を掛ける。内面には3か所の重ね焼き痕がある。片口は1か所である。美濃窯登窯第8小期に当たる。2は灰釉片口である。口縁部は外側に折り返されている。高台は削り出し高台で、高台より上面から口縁にかけて灰釉を施すが、内面は無釉である。見込みにはリング状の重ね焼き痕が残る。美濃窯登窯第7小期に当たる。3は黄瀬戸鉢で、内面には波状に6本の櫛描が見られる。外面から内面にかけて黄瀬戸釉が施され、内面には部分的に黄緑色釉が掛かる。また、内面には釉ハゲが見られる。4は肥前唐津産の三島手の鉢の破片である。胎土は茶色で硬質・砂質である。17世紀後半～18世紀前半ころに当たる。5は瀬戸美濃産の鉢の底部片である。内面では志野釉に緑釉が斑点状に掛かる。また、内面には窯道具の付着痕が3か所で残る。美濃窯登窯第1・2小期ころと考えられる。6は瀬戸美濃産の石皿で、内面には灰色の釉を掛けるが、部分的に釉を削り落としている。瀬戸窯登窯第9小期ころと考えられる。7は肥前産染付小鉢である。8は肥前唐津産鉢である。胎土は薄い褐色で、灰褐色釉を内外面に掛ける。内面には窯道具痕が残る。9は瀬戸産の煙硝摺の口縁部破片である。口縁部に鉄釉を掛ける。登窯第5小期ころに当たる。

蓋（第52図、図版21）

18は灰釉の蓋で、つまみが貼り付けられている。内面と外面の一部に灰釉が掛けられる。完形品である。

香炉（第52図、図版21）

10は灰釉筒形香炉で、外面にはノミによる半菊文が彫られる。3足の足をもち、足は両端を指で押さえつけた簡単なものである。内外面に灰釉を掛ける。藤沢分類の香炉I類で、登窯第7小期ころに当たる。11から14もほぼ同時期の灰釉筒形香炉の破片である。15は袴腰の青磁香炉で、退化した三足の獣足が付く。口縁は外側に折り返されている。オリーブ灰色の青磁釉が高台脇から口縁まで掛けられる。

瓶（第52図、図版21）

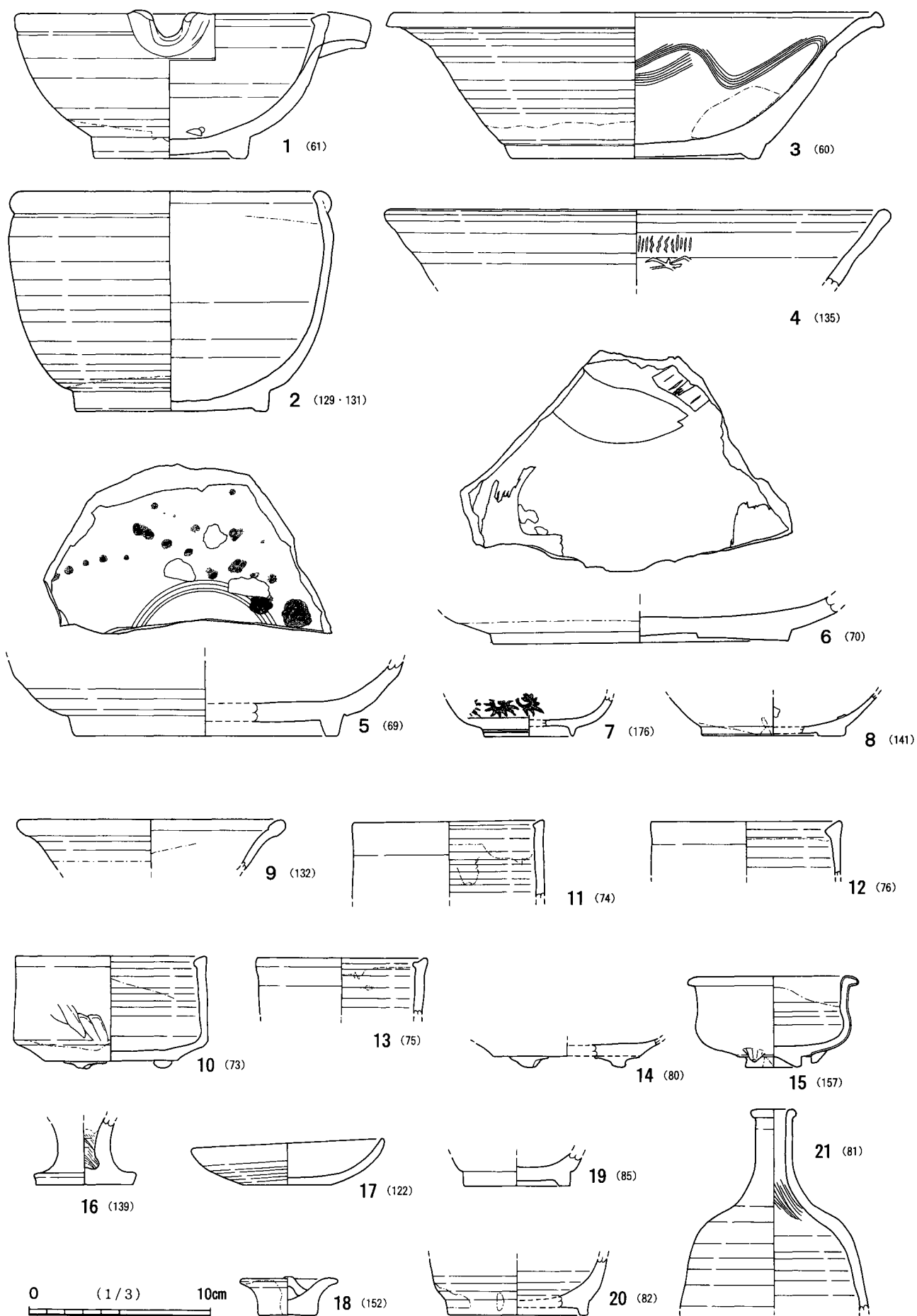
16は美濃産の掛け分け仏花瓶の脚部片である。外面は鉄釉で、内面には上部に白濁釉が残る。底部は回転糸切り痕が残り、鉄釉を拭き取っている。

灯明皿（第52図、図版21）

17は美濃産の錆釉灯明皿である。内外面とも鉄釉で、底部とその周辺では釉を拭き取っている。底部内外面及び口縁端には重ね焼き痕が残る。

徳利（第52図、図版21）

19は瀬戸美濃産の壺か徳利の底部で、内面には鉄分が厚く付着していて、お歯黒壺として使われていたようである。20は美濃産の鉄釉徳利の底部片である。褐色の釉が付着している。登窯第5～7小期に当たる。21は美濃産の錆釉徳利の片部から上の破片である。いわゆるペコカン徳利の形態で、外面には鉄釉が



第52図 鉢・皿・香炉・瓶・蓋・灯明皿・徳利 () は陶磁器一覧表の番号に対応

掛けられる。登窯第8・9小期に当たる。

播鉢（第54図、図版22）

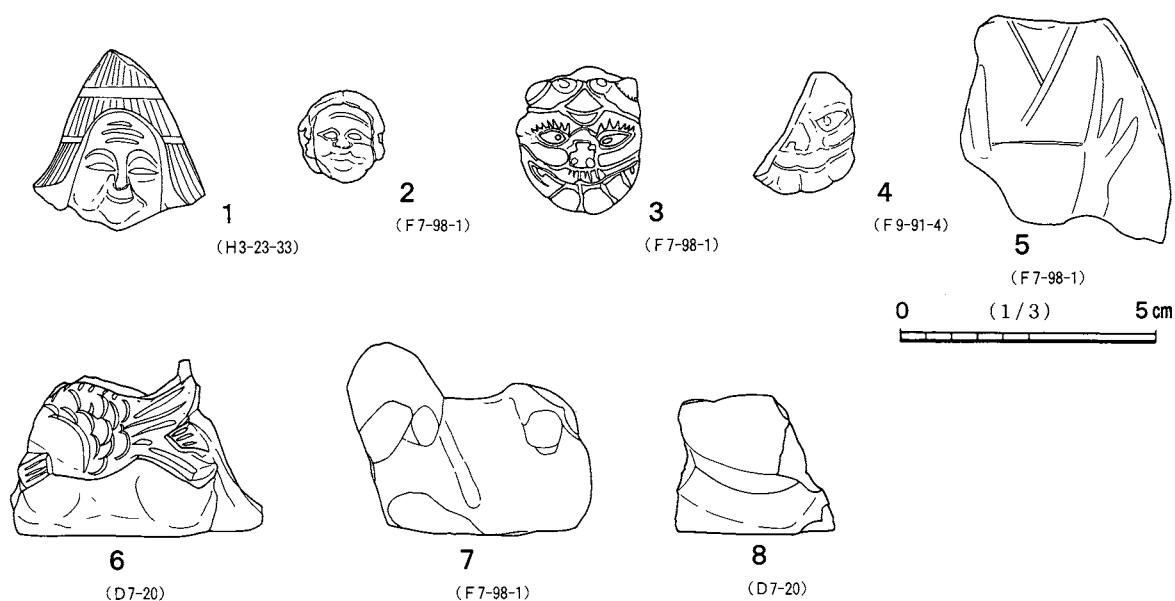
1から16は瀬戸産の鉄釉・錆釉の播鉢である。1・2は共に登窯第8小期に当たる。2点ともに完形に近い。17から20は堺産播鉢の破片である。17は18世紀後半ぐらいになる。図示していないが、胎土から備前産と考えられるものもあり、これらは備前・堺産とした。

甕類（第55図、図版22）

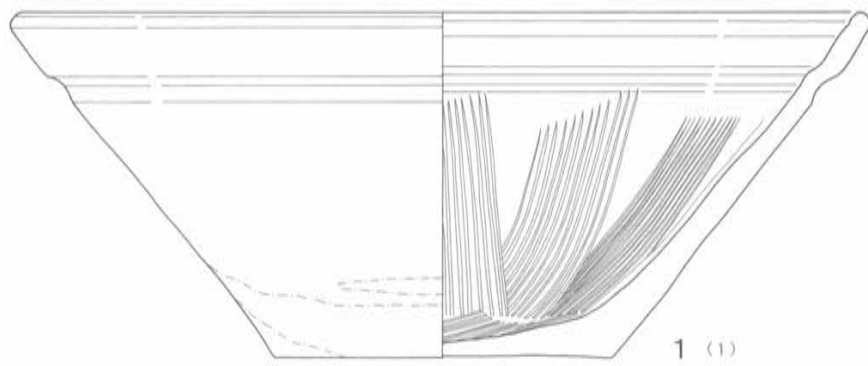
1から3は瀬戸美濃産の半胴甕の破片である。内外面ともに鉄釉を掛ける。4は瀬戸産の甕で、口縁端を緩やかに折り返す。全面に黒褐色の釉を分厚く掛ける。登窯第9小期に当たる。5は常滑産と考えられる甕の底部片である。砥石などに転用されていたものか、内面がかなり摩滅している。6は瀬戸産の鉄釉甕の底部片である。大柄な高台をもち、内外面に鉄釉を掛ける。内面にはトチンの跡が残る。高台径最大19.4cmを測る。登窯第8・9小期に当たる。7は瀬戸産の緑釉（呂宋）瓶掛の底部片である。外面には緑釉が掛かる。登窯第9小期に当たる。8・9は瀬戸産の水瓶の破片である。外面には灰釉を主体とし、まだらに緑釉を掛ける。

（3）土製品（第53図、図版23）

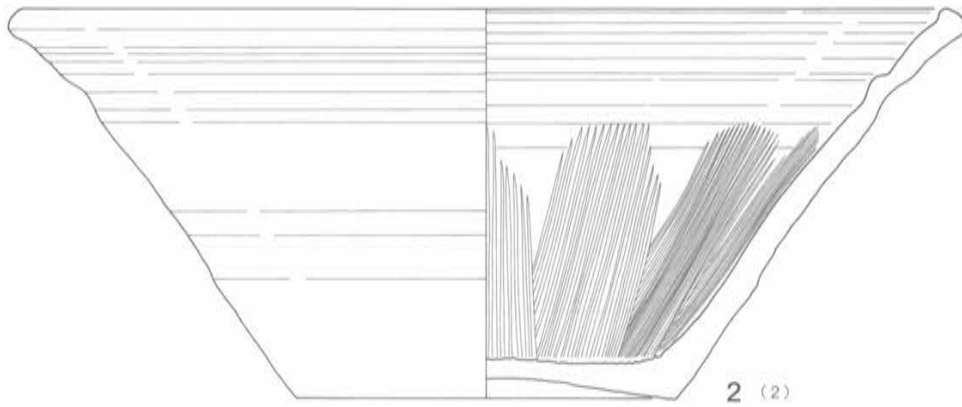
土人形の破片が5点出土している。1は型押しで獵師の泥メンコ、2は七福神の一人大黒天の顔の泥メンコである。3及び4は獅子の形相をしている泥メンコである。5から8は型押し・張り付け人形の体の破片で、6は大黒天の手から膝にかけての部分と鯛になる。いずれも薄い褐色を呈する。



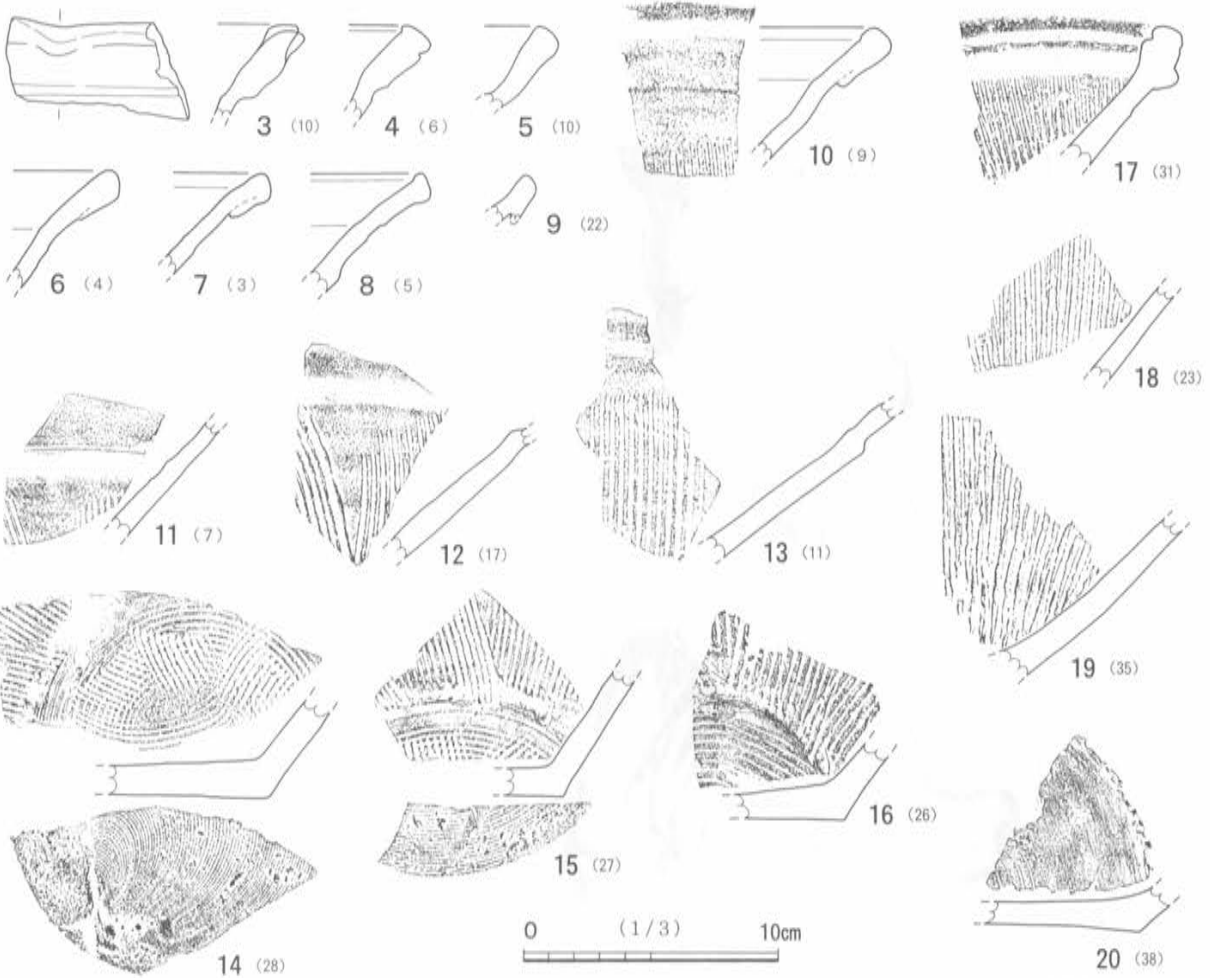
第53図 土人形・泥めんこ



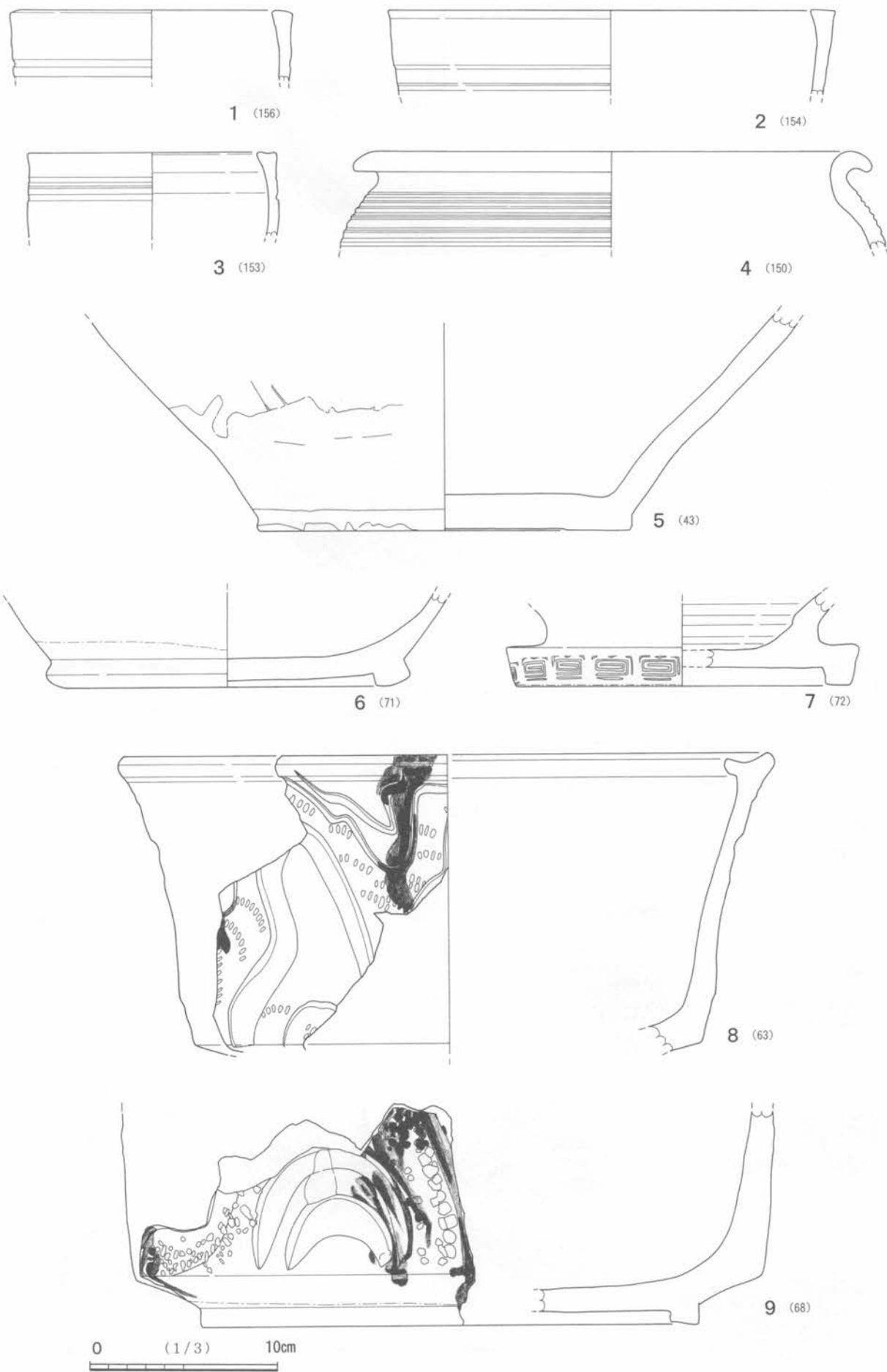
1 (1)



2 (2)



第54図 揃鉢 () は陶磁器一覧表の番号に対応



第55図 甕類 () は陶磁器一覧表の番号に対応

(4) 石製品

砥石 (第56、57図、図版23、第11表)

石製品では圧倒的に砥石が多い。36点中7点には櫛歯状工具痕がある。未使用状態では断面が方形で、使用により側面形態が山形になるものが多く認められる。これらは手に持って使う提砥であろう。砥石については第14表にまとめたが、石材から見ると大半は凝灰岩質で、砂岩が若干見られる。

石臼 (第57図、図版23)

約1/5が残存する石臼の下臼である。石材は砂岩で、直径推定24cm、高さ16cmを測る。

賽子 (第60図、図版23)

一辺14mmの石製の賽子である。重量は5.5gを量る。

(5) 銭貨 (第58、59図、図版24、25、第10表)

出土銭貨は総数35点で、内訳は北宋銭1点、いわゆる古寛永5点、文銭3点、新寛永14点、波銭4点、鉄銭1点、天保通宝1点、その他詳細が不明な寛永通寶7点である。初鑄年が最も古いのが聖宋元寶(1101)で、最も新しいのが天保通寶(1835)である。寛永通寶の細分類は実施していないが、寛永通寶の出土量は前年度報告した古宿・上谷遺跡と同様に、本遺跡の土器・陶磁器の年代別出土傾向と良く符合する。

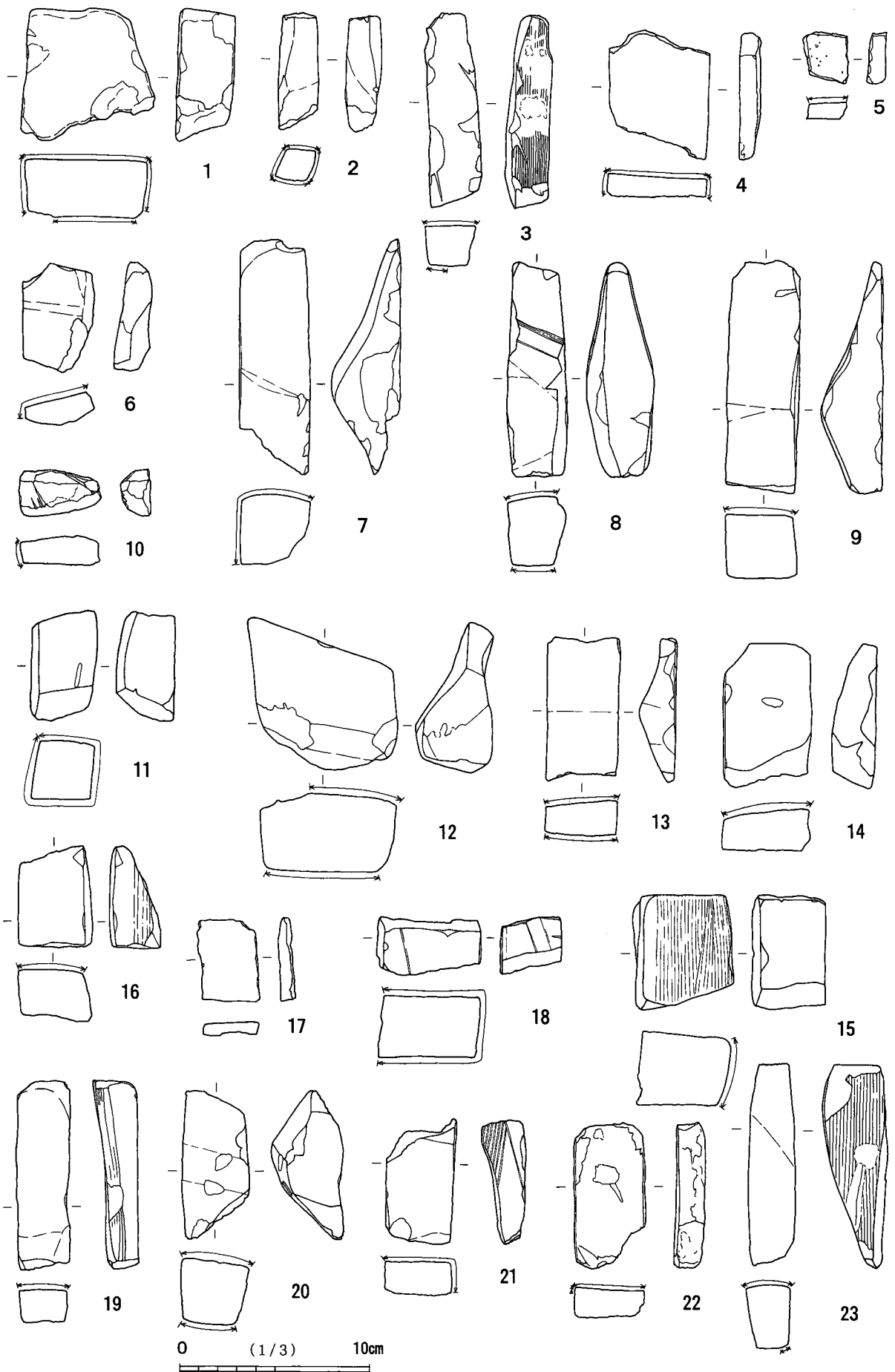
(6) 金属製品 (第60図、図版25)

金属製品で判別できるものには唐鍬、釘、包丁、鉄鍋、煙管雁首などがある。その他多数あるがいずれも残存状況が悪い。

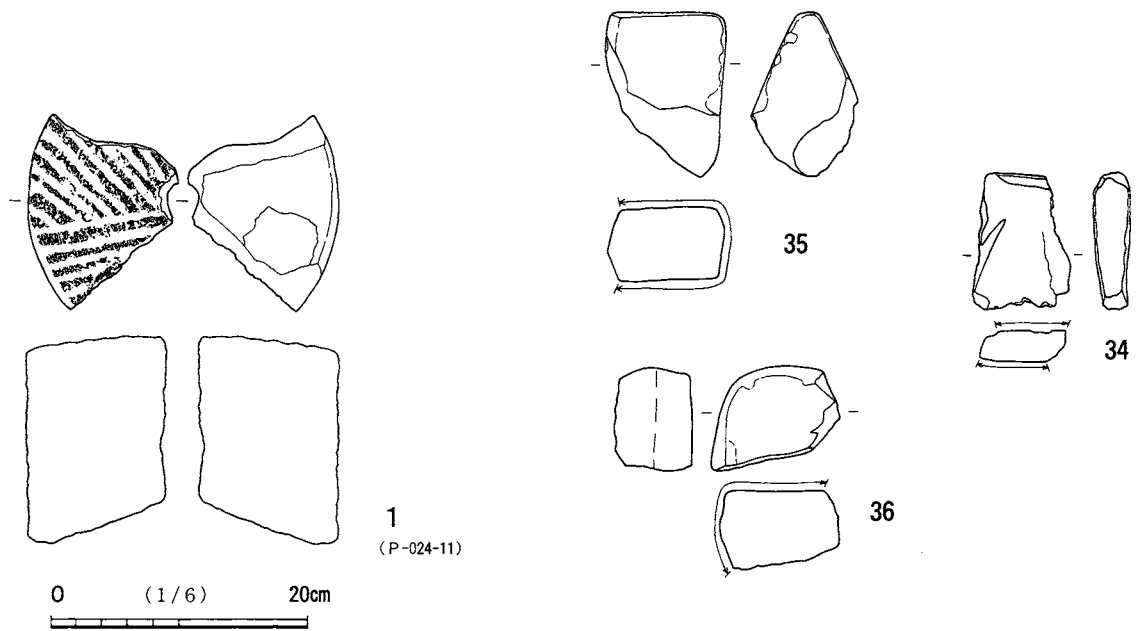
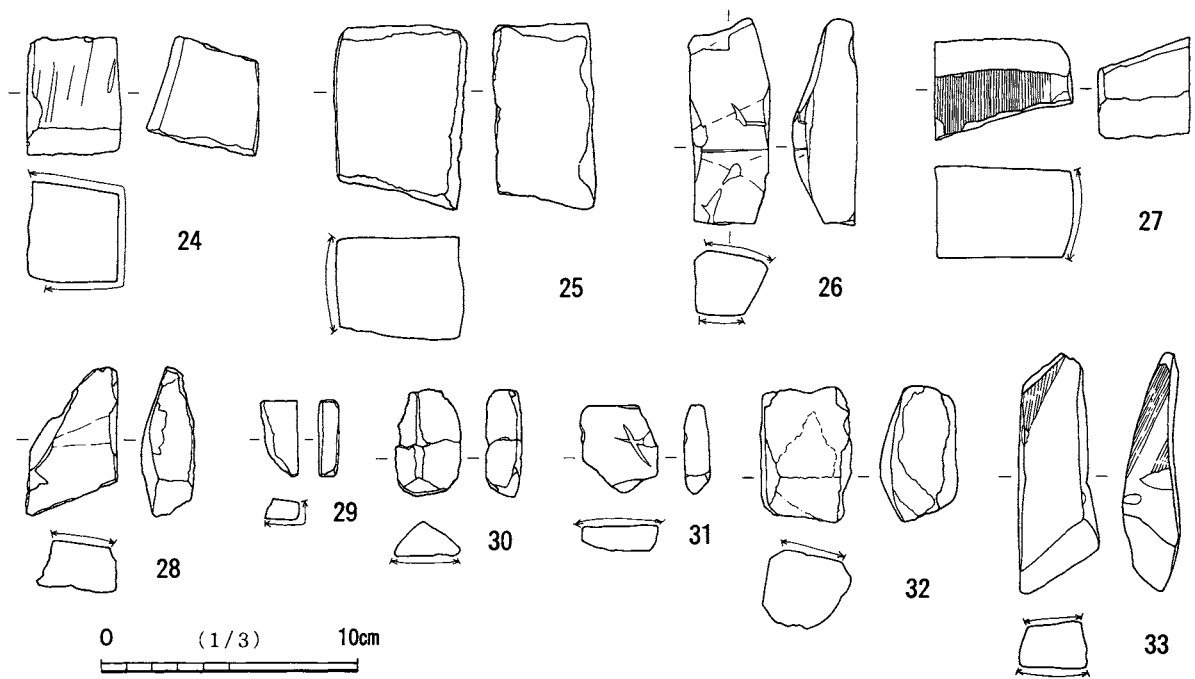
(7) その他 (第61図、図版23)

遺構は全く検出されていないが、古墳時代から平安時代の土師器・須恵器が出土している。

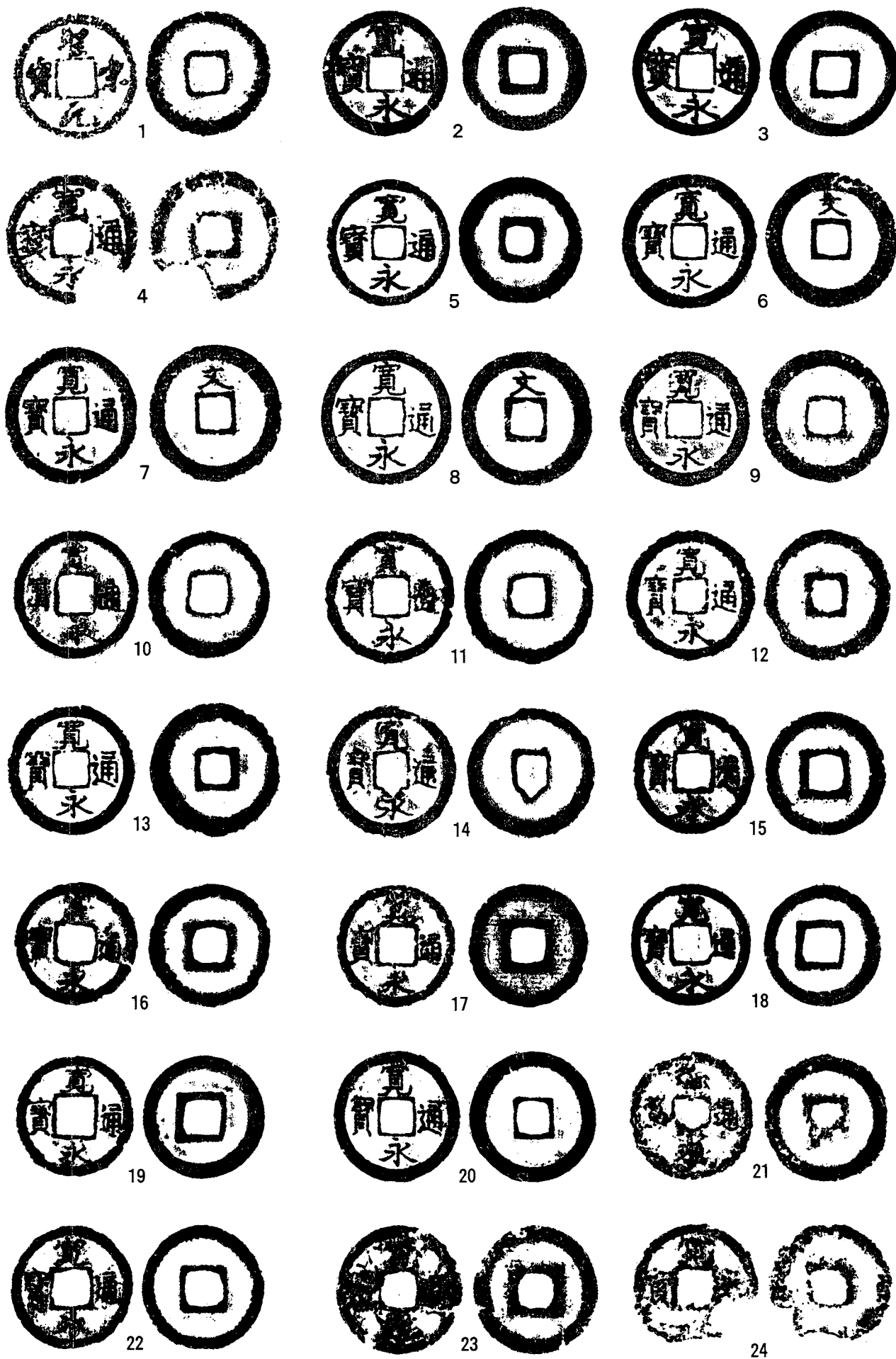
1は土師器杯で、胎土中には砂粒を多量に、鉄分粒を少々含む。器面はザラザラしている。口径13.6cm、器高は5.2cmを測る。外面は体部をヘラケズリ、内面をナデ調整している。2は全面赤採の土師器杯である。胎土は微砂粒を含み、薄い褐色を呈する。表面は赤彩されているために茶褐色を呈する。灯明具として使用されていたものか、内面口縁部に煤が付着している。底部及び立上がり部はヘラケズリ調整を施す。3は土師器杯の底部片である。底部は回転糸切り痕を残す。胎土中には白色微砂粒を多量に含む。硬質である。4は土師器かめの口縁から肩部にかけての破片で、口頸部は大きく外反し、口縁端で折れ曲がり直立する。胎土中には白色砂粒と鉄分を含む。薄手で硬質である。口頸は10.7cmを測る。5は土師器杯の体部片である。外面にはヘラケズリ、内面は粗いヘラミガキを施す。胎土中には鉄分粒・微砂粒を含む。復元口径は11.3cmを測る。6は土師器杯の底部片である。底部及び立上がり部はヘラケズリ調整を施す。胎土中には微砂粒を多量に含む。硬質である。7は県内産の須恵器甕の口縁部の破片である。胎土中には黒色微砂粒やガラス質の微砂粒を多く含む。表面は灰色、断面は薄い褐色を呈する。復元口径は



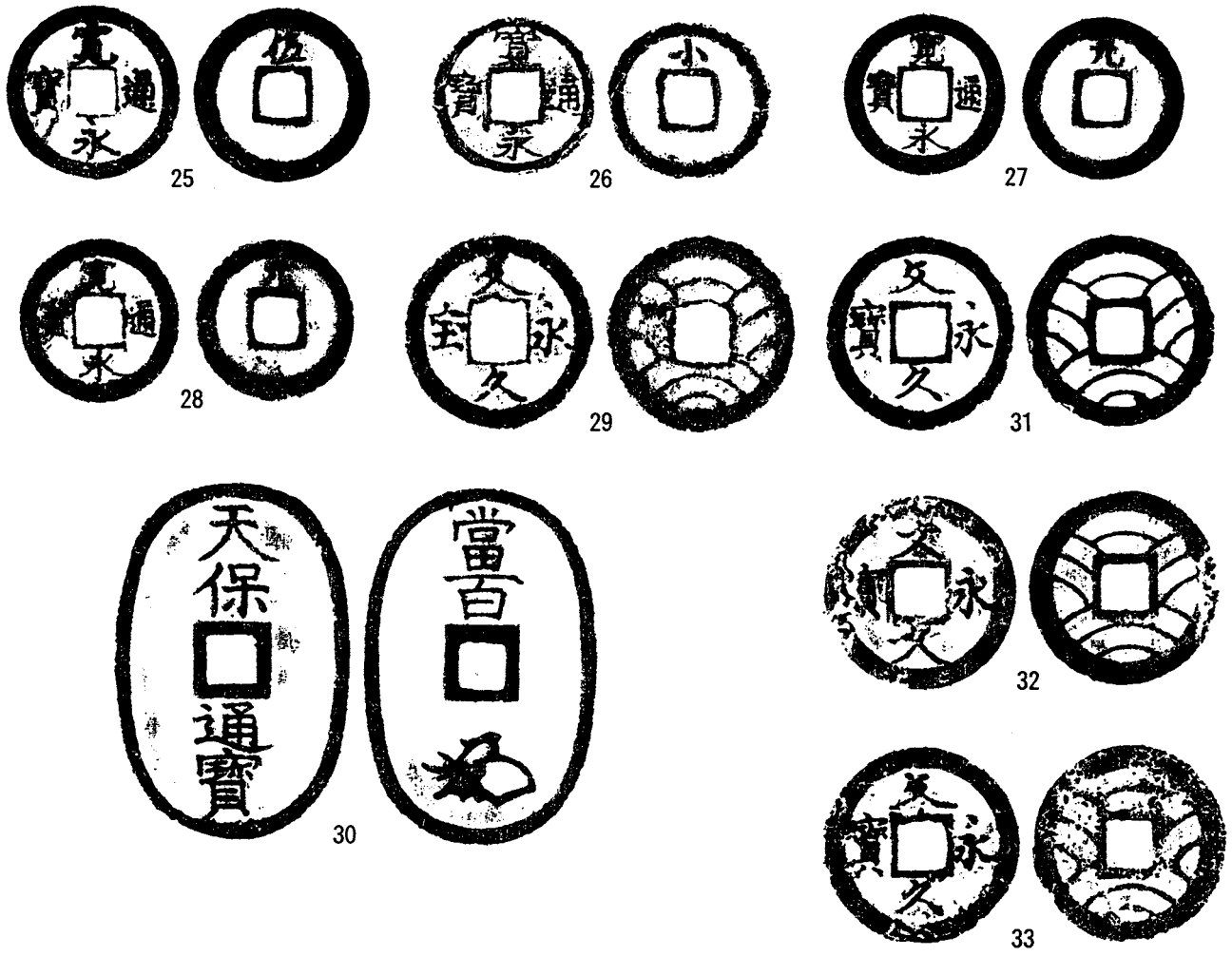
第56图 砥石 (1)



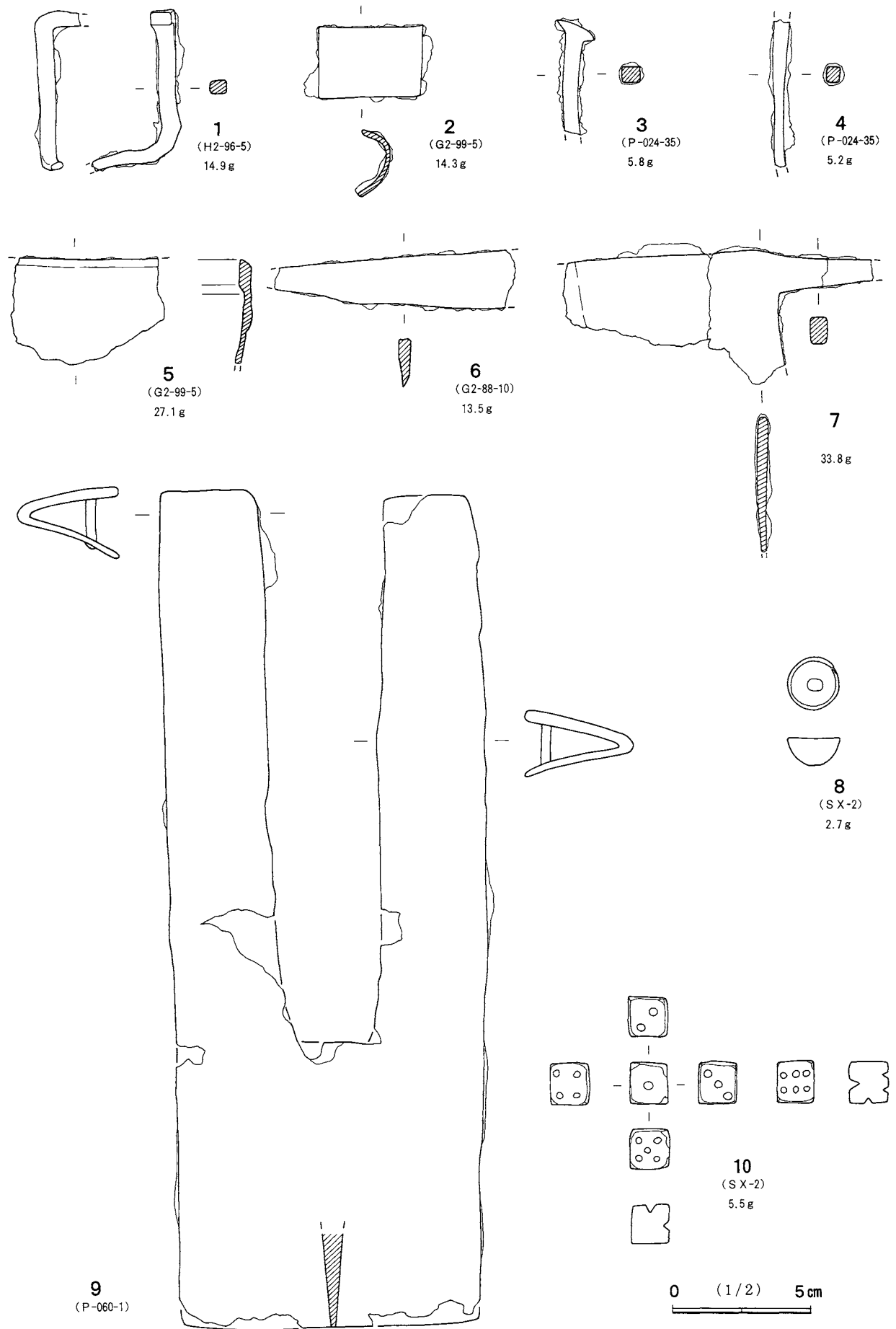
第57图 砥石(2), 石臼



第58圖 錢貨拓影圖 (1) (1/1)

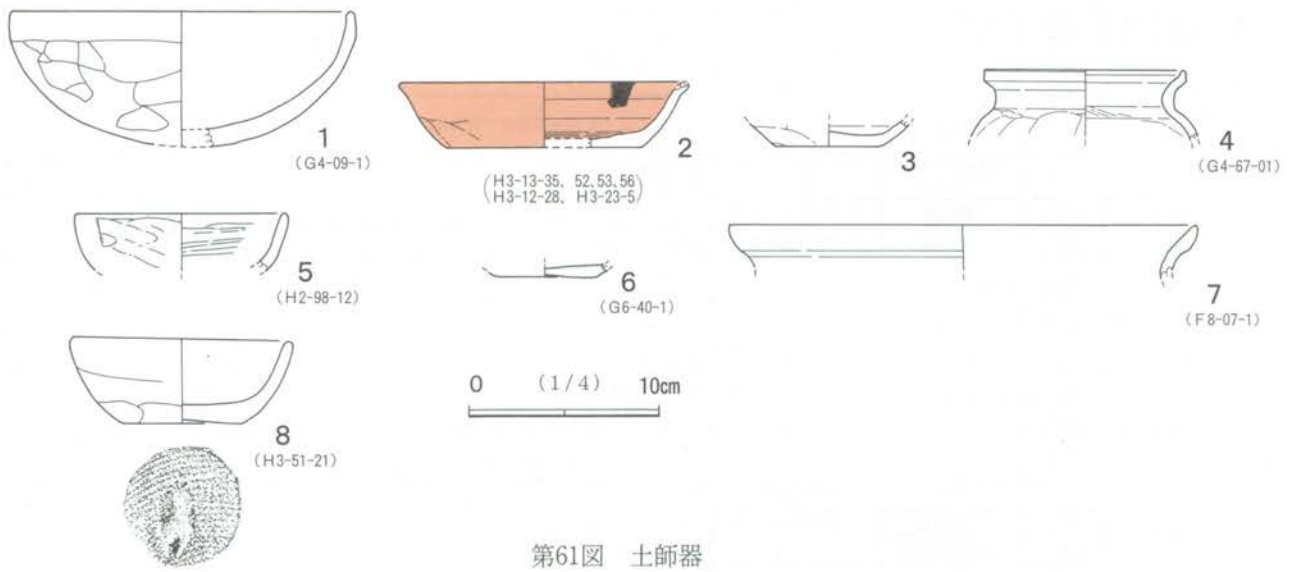


第59図 錢貨拓影図 (2) (1/1)



第60図 金属製品・賽子

24.7cmを測る。8は小型の土師器杯で、底部は静止糸切りの後立上がり部をヘラケズリ調整している。口径8.7cm、器高3.3cm、底径4.6cmを測る。胎土中には砂粒を多量に含む。表面がザラザラしている。体部に粘土接合痕が残る。



第61図 土師器

第9表 検出遺構一覧

遺構番号	地区	時期	形態	規模	備考	性格	出土遺物
P 1	A	縄文?	円形	1.70×2.00×0.40	立ち上がり焼土塊有り、炭化物有り		
2	A	不明	円形	1.30×1.50×0.70			
4	A	不明	方形	0.80×0.80×0.20	炭化物粒含む		
5	A	不明	隅丸方形	1.10×1.10×0.20	焼土・灰・少量の炭化物粒含む		
6	A	不明	円形	1.10×1.10×0.30	底面に小ピット有り		
7	A	不明	不整形	0.60×1.00×0.10	焼土化した山砂を含む		
8	A	縄文	楕円形	0.80×1.80×0.80	断面逆台形	陥穴	
9	A	縄文?	長楕円形	0.50×1.30×0.30		陥穴?	
10	A	縄文?	円形	0.60×0.60×0.30	中期か?		
11	A	不明	円形	0.30×0.30×0.45	柱穴状		
12	A	不明	楕円形	0.60×0.90×0.50	地山ハードルーム		
13	A	不明	長方形	0.90×1.40×0.65	覆土上位に砂鉄を含む層有り		
14A	C	近世	隅丸長方形	1.00×1.60×0.20			26, 36, 73, 98, 104, 108, 110, 115, 130, 145, 148, 152, 158, 161, 162, 163, 164, 166, 169, 173, 182, 189, 205
14B	C	近世	隅丸方形	0.80×1.00×0.40	灰白色の粘土を10cm厚前後で掘方全面に貼り付けている。		
15	C	近世	北東壁が膨らんだ長方形	1.2~1.6×1.90×0.20	床面平坦、壁面に灰白色粘土と灰褐色焼土を混ぜたものを10cm厚で貼り付ける		10, 62, 63, 68, 72, 95, 144, 146, 147
16	C	不明	長円形	1.20×2.50×0.30			
17	C	縄文	楕円形	1.30×2.80×2.10	長軸方向に袋状になる。	陥穴	
18	C	近世	円形	2.8以上×-×0.50	半面は調査区域外、床面は緩やかに傾斜、最下層は焼土や焼砂含み、締まりが強くなる。作業空間か?	作業空間	
19	C	近世?	円形	2.20×2.10×0.40	床面は平滑ではない。北側に付属する遺構か時期不明の小さなピット付く。		
20	C	縄文	長楕円形	1.70×3.80×2.20	上場と下場の軸方向にズレがある。	陥穴	
21	C	縄文	不整形長方形	1.00×2.10×1.90	坑底は長方形で、中央部がなだらかにくぼむ。	陥穴	
22	C	縄文	楕円形	2.30×3.30×2.30	断面形は短軸方向でV字状となる。	陥穴	
23	C	縄文	長楕円形	0.70×3.10×2.10	断面形は短軸方向で壁が垂直に立ち上がる。	陥穴	
24	C	近世	方形	4.60×4.10×0.75	壁が2段となっている。出入り口部が張り出し、床面が硬く締まっている。掘方床面に薄く鉄錆付着。床面平坦。		5, 14, 30, 74, 99, 106, 119, 122, 137, 142, 154, 159, 160, 173, 205
25	C	近世?	方形	3.20×3.20×0.50	覆土は各層とも硬く締まっている。特に掘方床面は平坦で非常に硬く締まっている。		
26	C	縄文	不整形円形	2.40×4.00×2.50	壁面に不規則な凹凸がある。	陥穴	
27	C	近世?	不整形円形の連続	—×—×—	覆土は軟質		
28	C	近世	円形	0.60×0.90×0.40			
29	C	近世	不整形	0.70×0.90×0.20	覆土は散葉状に薄く積まれている。硬く締まっている。中央にピット有り。柱の基礎か?	柱の基礎	
31	D	近世	方形	2.00×1.90×0.25	床は硬く締まり、部分的に赤褐色の鉄錆が付着する。覆土は2層に分かれるのみ。	作業場	
32	D	近世?	楕円形	1.00×1.90×0.25	床は船底状。立ち上がり緩やか。		
33	D	縄文	隅丸長方形	1.00×1.40×0.50	陥穴。床面平坦。床面に直径0.2m、深さ0.15mほどの円形ピット有り。全体に覆土に締まり有り。	陥穴	
34	D	近世以降	瓢箪形	1.20×3.20×0.35	底面は船底状。立ち上がり不明瞭。覆土は軟質。		
35	D	近世以降	楕円形	0.90×1.75×0.10	底面は比較的平坦。覆土最下層は比較的硬質。立ち上がり緩やか。		
36	D	近世以降	楕円形	1.00×1.50×0.25	床面に2つの柱穴状ピットを伴う。		
37	D	近世?	細長い円形	0.55×2.10×0.30	床面は船底状。覆土は堅くしめる。長軸方向に2段となる。立ち上がり緩やか。		
38	D	近世	円形	3.60×3.60×0.50	床面はわずかに中央にくぼむ。掘方床面は極めて重くしめ、赤褐色の鉄錆が沈着している。灰や炭を推している。		
39	D	近世以降	長方形	1.00×2.20×0.20	床面はソフトローム面で軟質。床面は平坦で立ち上がり緩やか。	作業場	
40	D	近世	長円形	1.00×2.20×0.20	床面はソフトローム面で軟質。床面は平坦で立ち上がり緩やか。		
41	D	近世?	円形	1.10×1.20×0.20	床面はソフトローム面で凸凹あり。覆土はしまっている。		
42	D	近世?	楕円形	1.00×1.20×0.20	床面は軟質。覆土はしめる。		
43	D	縄文	長楕円形	1.00×2.50×1.20	両端を袋状に抉る。底面に2つの小ピットあり。		
44	D	近世	細長い円形	1.10×2.60×0.35	長軸方向に2段となる。床面は船底状。覆土は軟	陥穴	
45	D	近世	楕円形	1.70×3.60×0.50	床面は硬くしめりあり。凸凹があつて平坦ではない。		
46	D	近世以降	不整形	0.80×1.20×0.40	覆土は締まりない。ローム粒・ロームブロック含		
47	D	不明	長方形	1.10×1.40×0.80	覆土については不明、床面が西側で袋状に15cmほど抉れている。床面から60cm程の高さまで大きく開口する。		
48	D	不明	楕円形	0.80×0.90×0.20	攪乱あり		
49	D	近世以降	長方形	0.60×2.30×0.1~0.3	複数の土坑が重複したものか?最下層には炭化物が堆積する。		
50	D	近世以降	細長い円形	0.80×2.60×0.50	西側で床面にピット状の土坑あり。覆土には炭化物を含む。		
51	D	不明	不整形	1.20×2.00×0.50	2つの土坑が連結したものか?		
52	D	近世	円形	0.95×0.95×0.80	確認面から20cm下より上部に向かってやや開く。	井戸	新元と旧元は異なるようだが、確認せず。
53	D	近世?	方形	2.30×2.50×0.50	床面平滑。壁は垂直ではなく、斜めにまっすぐに立ち上がる。	作業場	21, 107, 111, 116, 123, 125, 128, 133, 185, 194, 204
54	D	不明	円形	1.50×1.60×0.50	床面平滑。覆土中に山砂を多量に含む。		
55	D	縄文	長方形	1.10×1.90×1.70	壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦。	陥穴	
56	D	縄文	細長い長方形	0.80×3.00×1.20	坑底は幅が30cmに満たない。	陥穴	
57	D	近世	円形	1.00×1.00×0.50	円筒形。床面は平滑。床面に厚さ5cmの白色粘土を敷く。		
58	D	近世	円形	1.00×1.00×0.40	円筒形。床面は平滑。床面から7cmの高さに、厚さ7cmの白色粘土を敷く。		
59	D	近世	不整形	2.00×3.20×0.55	複数の土坑の重複か?		
60	D	近世以降	円形	1.20×1.20×0.25	床面平滑。床面に厚さ2cm程、壁面に厚さ15cm程の黄白色粘土を貼り付けている。遺構内より数個の陶片が出土。	溜桶	81, 170
62	A	縄文	楕円形	0.80×1.10×0.10	南北の壁際に焼土が堆積する。	炉穴	
63	C	近世	4つの円形土坑	0.8~1.2×0.8~1.2×0.25~0.4	炭化物粒や焼土粒を多く含む。		
64	C	近世	円筒形	0.70×0.80×0.6以上		井戸	

第10表 出土陶磁器一覽(1)

番号	器種	残存状況	釉薬	出土遺構・グリッド	地区	備考	実測	時期(産地)
1	播鉢	口縁一部欠	錆釉			遺跡一括	○	登窯第8小期(瀬戸)
2	播鉢	1/2残存	鉄釉	F8-09	C		○	登窯第8小期(瀬戸)
3	播鉢	口縁片	錆釉	F8-09-1	C		○	登窯第7小期(瀬戸)
4	播鉢	口縁片	鉄釉	D7-34	D		○	登窯第7小期(瀬戸)
5	播鉢	口縁片	鉄釉	P-024-67	C		○	登窯第9小期(瀬戸)
6	播鉢	口縁片	鉄釉	F7-98-1	C		○	登窯第7小期(瀬戸)
7	播鉢	体部片	鉄釉	F8-09-1	C		○	(瀬戸美濃)
8	播鉢	体部片	鉄釉	F7-98-1	C		○	(瀬戸美濃)
9	播鉢	口縁片	鉄釉	F8-55-1	C		○	登窯第7小期(瀬戸)
10	播鉢	口縁片	鉄釉	P-015-2	C		○	登窯第7小期(瀬戸)
11	播鉢	体部片	鉄釉	F7-98-1, F7-99-1	C		○	(瀬戸美濃)
12	播鉢	体部片	鉄釉	F8-55・65-1	C		○	登窯第9小期(瀬戸)
13	播鉢	体部片	鉄釉	G7-00-1	C		○	(瀬戸美濃)
14	播鉢	口縁片	鉄釉	P-024-5	C		○	登窯第8小期(瀬戸)
15	播鉢	体部片	鉄釉	SX-3	D			(瀬戸美濃)
16	播鉢	体部片	鉄釉	M-001-5	E			(瀬戸美濃)
17	播鉢	体部片	鉄釉	F8-09-1	C		○	登窯第9小期(瀬戸)
18	播鉢	体部片	鉄釉	F7-98-1	C			(瀬戸美濃)
19	播鉢	底部片	鉄釉	F7-99-1	C			(瀬戸美濃)
20	播鉢	体部片	錆釉	SX-3	D			(瀬戸美濃)
21	播鉢	体部片	錆釉	SK-53	D			(瀬戸美濃)
22	播鉢	口縁片	錆釉	SX-3	D		○	登窯第3小期(瀬戸)
23	播鉢	体部片	錆釉	D7-30	D		○	不明
24	播鉢	体部片	鉄釉	G8-77・87-1	C		○	(瀬戸美濃)
25	播鉢	体部片	鉄釉	F8-09-1	C			(瀬戸美濃)
26	播鉢	底部片	鉄釉	P-014-2	C		○	(瀬戸美濃)
27	播鉢	底部片	鉄釉	F8-09-1	C		○	(瀬戸美濃)
28	播鉢	底部片	鉄釉	D8-00-1	D		○	(瀬戸美濃)
29	播鉢	体部片		G8-32・42-1	C			(備前・堺)
30	播鉢	底部片		P-024-42	C			(備前・堺)
31	播鉢	口縁片		G3-9?-3	A			(備前・堺)
32	播鉢	体部片		G8-32・42-1	C		○	18世紀後半(備前・堺)
33	播鉢	体部片		G3-08-7	A			(堺)
34	播鉢	体部片		G3-08-7	A			(堺)
35	播鉢	体部片		F7-99-1	C		○	(備前・堺)
36	播鉢	体部片		P-014-2	C		○	不明
37	播鉢	体部片	鉄釉	G8-06-1	C			19世紀後半(益子)
38	播鉢	底部片		G8-77・87-1	C		○	(堺)
39	播鉢	口縁片	鉄釉	F7-97-1	C			19世紀後半(益子)
40	播鉢	底部片		G3-08-7	A			(堺)
41	播鉢	底部片		G3-08-7	A			(堺)
42	播鉢	体部片		G3-08-7	A			(堺)
43	甕	底部片		F8-09-1	C		○	(常滑)
44	甕	体部片		F8-09-1, G6-50-1	C			(常滑)
45	甕	体部片		F8-09-1	C			(常滑)
46	甕	体部片		F8-09-1	C			(常滑)
47	甕	体部片		F8-09-1	C			(常滑)
48	甕	体部片		F8-09-1	C			(常滑)
49	甕	体部片		F8-09-1	C			(常滑)
50	甕	体部片		F8-09-1	C			(常滑)
51	甕	体部片		F8-09-1	C			(常滑)
52	甕	体部片		D7-34	D	軟質		(常滑)
53	甕	体部片		F8-55・65-1	C	タタキ目(備子) 甕器か?		不明

第11表 出土陶磁器一覽(2)

番号	器種	残存状況	釉薬	出土遺構・グリッド	地区	備考	実測	時期(産地)
54	甕	体部片		F7-98-1	C			(常滑?)
55	甕	体部片		G2-69-4	A			(常滑?)
56	甕	体部片		F8-55・65-1	C			不明
57	甕	体部片		F8-22・37-1	C			不明
58	甕	体部片		F8-55・65-1	C	須恵器か?		不明
59	甕	体部片		F8-55・65-1	C	須恵器か?		不明
60	鉢	1/2残存	黄瀬戸	E9-61-3	D		○	登窯(6)7小期(美濃)
61	片口	口縁1/2欠損		出土地点不明			○	登窯第8小期(美濃)
62	ハケ目碗	口縁3/4欠損		P-015-2	C	京焼風	○	(肥前)
63	水甕	体部片		P-015-2?	C		○	登窯第8小期(瀬戸)
64	水甕	底部片		G6-50-1	C			(瀬戸)
65	水甕	体部片		G?-02-1	C			(瀬戸)
66	水甕	体部片		F7-98-1	C			(瀬戸)
67	水甕	口縁片		F8-09-1	C			(瀬戸)
68	水甕	底部		P-015-2	C		○	登窯第8・9小期(瀬戸)
69	鉢	底部	黄瀬戸	G7-00-1	C		○	登窯第1・2小期(美濃?)
70	石皿	底部		F7-99-1	C		○	登窯第9小期(瀬戸)
71	甕	底部	鉄釉	F7-99-1	C		○	登窯第8・9小期(瀬戸)
72	(呂宋)瓶掛	底部		P-015-2	C		○	登窯第9小期(瀬戸)
73	香炉	口縁~底部	灰釉	P-014-2, P-024-41, F7-99-1	C	74と同一個体	○	登窯第7小期(美濃)
74	筒形香炉	口縁		P-024-40	C	73と同一個体	○	登窯第7小期(美濃)
75	香炉	口縁	鉛釉	F8-09-1	C			登窯第7小期(美濃)
76	香炉	口縁	灰釉	D7-46	D	79と同一個体		登窯第8小期(美濃)
77	香炉	口縁		F7-99-1	C			(瀬戸美濃)
78	香炉	口縁	灰釉	D7-46	D	76と同一個体		登窯第8小期(美濃)
79	香炉	底部		F7-99-1	C			(瀬戸美濃)
80	香炉	底部		G2-77-9	A		○	不明
81	德利	口頸部	錆釉	SK-60	D		○	登窯第8・9小期(美濃)
82	德利	底不	鉛釉	D7-46	D		○	登窯第5~7小期(美濃)
83	德利	体部	灰釉	D7-88	D			(瀬戸美濃)
84	德利	体部	錆釉	F7-98	C			(瀬戸美濃)
85	德利	底部		H3-72・82-1	A	内面鐵錆付着・お黒	○	不明
86	德利	体部	錆釉	F7-98	C			(瀬戸美濃)
87	德利	体部		F8-27・37-1	C	内面鐵錆付着		(瀬戸美濃)
88	德利	体部	内外面黄白色釉	G6-40-1	C			不明
89	德利	体部	外面灰釉	E9-61-3	D			(瀬戸美濃)
90	德利	体部	外面灰釉	G6-50-1	C			(瀬戸美濃)
91	德利	体部	外面灰釉	F7-98-1	C			(瀬戸美濃)
92	丸碗	1/3欠損	灰釉	SX-2-1	D		○	登窯第7小期(美濃)
93	緑釉(呂宋)茶碗	1/3欠損	内外面濃緑色釉	不明			○	登窯第9小期(瀬戸)
94	京焼系小碗	底部	透明釉	F8-08-1	C		○	
95	碗	口縁片	内外面濃緑色釉	P-015-2	C	被熱		(瀬戸美濃)
96	天目茶碗	口縁片	鉄釉	F9-44・45-1	D			(瀬戸美濃)
97	天目茶碗	口縁片		F7-98-1	C		○	登窯第4小期(瀬戸)
98	腰錆茶碗	口縁片		P-014-2	C		○	登窯第8小期(瀬戸)
99	輪刺皿	底部片	内面緑釉外面白濁釉	P-024-55	C		○	肥前
100	摺絵皿	1/4残存	鉄摺絵, 灰釉	不明	C			登窯第6小期(美濃)
101	碗	底部		G9-02-1	C		○	(京都・信楽系)
102	皿	口縁片	内面緑釉, 外面透明釉	SX-2	D			(肥前?)
103	皿	体部片	内面緑釉, 外面透明釉	SX-2	D			(肥前?)
104	中鉢	体部片	透明釉, 貫入	P-014-2	C			(肥前?)
105	小杯	体部片	透明釉, 貫入	D7-46	D			(肥前?)
106	丸碗	口縁片	透明釉, 貫入	P-024-62	C			(肥前?)

第12表 出土陶磁器一覧(3)

番号	器種	残存状況	釉薬	出土遺構・グリッド	地区	備考	実測	時期(産地)
107	碗?	体部片	透明釉	SK-53	D			(肥前?)
108	碗?	口縁片	灰白色釉	P-014-2	C			(瀬戸美濃)
109	碗	体部片	外面緑色の絵付け,貫入	D7-46	D			(京焼系)
110	鉢?	体部片	内外面灰釉	P-014-2	C			(瀬戸美濃)
111	皿	口縁片	内面鉄釉,外面透明釉	SK-53	D			(瀬戸美濃)
112	陶器?	体部片	内外面飴釉	D7-46	D			(瀬戸美濃)
113	碗?	口縁片	内外面灰釉	SX-3	D			(瀬戸美濃)
114	皿	口縁片	内外面灰釉	D7-34	D			(瀬戸美濃)
115	碗	体部片	透明釉,貫入	P-014-2	C			(京焼系)
116	端反碗	口縁片	鉄釉	SK-53	D			(瀬戸美濃)
117	碗	体部片	内面透明,外面濃緑色釉	F7-98-1	C			(瀬戸美濃)
118	碗	口縁片	白濁釉	G9-05-1	C			(肥前)
119	皿or鉢	口縁片	灰釉	P-024-19	C			(瀬戸美濃)
120	灯明皿	底部片	鉄釉	F8-55・65-1	C			(瀬戸美濃)
121	灯明皿	口縁片	鉄釉	F7-98-1	C			(瀬戸美濃)
122	灯明油皿	1/4残存	錆釉	P-024-46・51	C		○	登窯第8・9小期(美濃)
123	灰釉反皿	底部残存	灰釉	SK-53	D		○	登窯第3・4小期(美濃)
124	皿	底部残存	志野	SX-2	D		○	登窯第1・2小期(美濃)
125	皿	底部残存	灰釉	SK-53	D			(瀬戸美濃)
126	皿	底部残存	無釉	F7-99	C		○	不明
127	皿	体部残存	志野	F7-99	C			17世紀(瀬戸美濃)
128	皿	口縁残存	志野	SK-53	D		○	17世紀(瀬戸美濃)
129	片口	口縁残存	灰釉	G6-50-1	C	131と同一個体		登窯第7小期(美濃)
130	片口	体部残存	灰釉	P-014-2	C			(瀬戸美濃)
131	片口	体部~底部/残存	灰釉	G6-50-1	C	129と同一個体		(瀬戸美濃)
132	煙硝播	口縁片	鉄釉	SX-3	D		○	登窯第5小期(瀬戸)
133	煙硝播	体部片	鉄釉	SK-53	D			(瀬戸美濃)
134	鉢?	口縁片	透明釉	F8-27・37-1	C			(瀬戸美濃)
135	鉢	口縁片	三島手	F8-09-1	C		○	(肥前)
136	鉢	口縁片	ハケ目	G8-77・87-1	C			(肥前)
137	播鉢	口縁片	鉄釉	P-024-53	C			(瀬戸美濃)
138	播鉢	体部片	鉄釉	F7-98-1	C			(瀬戸美濃)
139	仏花瓶	底部片	鉄釉,内面灰釉	F8-55・65-1	C		○	登窯第7小期(美濃)
140	壺?	胴部片	貫入	F7-98-1	C			(京都・信楽系)
141	鉢or瓶類	底部片		F6-50-1	C		○	(肥前)
142	甕	胴部片	漆黒色	P-024-29	C			(常滑)
143	甕	胴部片		F8-55・65-1	C	胎土緻密		不明
144	壺or瓶類	胴部片	飴釉	P-015-2	C			(瀬戸美濃)
145	皿	体部片		P-014-2	C			(肥前)
146	筒形碗	口縁片	(被熱)	P-015-2	C	147と同一個体		不明
147	筒形碗	口縁片	(被熱)	P-015-2	C	146と同一個体		不明
148	ビンダライ	底部片	透明釉	P-014-2	C			(瀬戸美濃)
149	瓶類	底部片	鉄釉	F8-55・65-1	C	硬質・重い		(瀬戸美濃)
150	甕	口縁片	鉄釉	F7-98-1	C		○	登窯第9小期(瀬戸)
151	土瓶	底部片		F6-50-1	C			不明
152	蓋	完形	灰釉	P-014-2	C		○	登窯第5~7小期(美濃)
153	半胴甕	口縁片	鉄釉	F8-55・65-1	C		○	登窯第8小期(瀬戸)
154	半胴甕	口縁片	鉄釉	P-024-20	C		○	登窯第8小期(瀬戸)
155	半胴甕	口縁片	鉄釉	F8-55・65-1	C			(瀬戸美濃)
156	半胴甕	口縁片	鉄釉	F7-98-1	C		○	登窯第8小期(瀬戸)
157	香炉	1/3残存	青磁	F7-98-1	C		○	(肥前)
158	筒形碗	1/2残存	青磁染付	P-014-2	C	18C後半		(肥前)
159	染付筒形碗	口縁~底部片		P-024-42	C			(肥前)

第13表 出土陶磁器一覧(4)

番号	器種	残存状況	釉薬	出土遺構・グリッド	地区	備考	実測	時期(産地)
160	染付筒形碗	口縁~底部片		P-024-42	C		○	(肥前)
161	染付碗	底部片		P-014-2	C			(肥前)
162	染付碗	1/3残存		P-014-2	C		○	(肥前)
163	染付碗	1/2残存		P-014-2	C		○	(肥前)
164	染付碗	1/3残存		P-014-2	C		○	(肥前)
165	染付碗	底部残存		G8-32-1	C		○	(肥前)
166	染付小碗	底部残存		P-014-2	C		○	(肥前)
167	染付碗	口縁片		F7-99-1	C		○	(肥前)
168	染付碗	底部片		D7-88	D			(肥前)
169	染付碗	口縁片		P-014-2	C			(肥前)
170	染付碗	1/3残存		SK-60	D			(肥前)
171	染付端反碗	底部残存		F7-99-1	C	177と同一個体	○	(瀬戸美濃)
172	染付碗	口縁片		F8-09-1	C		○	(肥前)
173	白磁輪花皿	1/2残存		P-014-2,P-024-13	C	型押し	○	不明
174	染付型皿	2/3残存		F6-50-1	C		○	不明
175	染付皿	1/2残存		F8-09-1	C		○	(肥前)
176	染付皿	底部残存		F8-08-1	C		○	(瀬戸美濃)
177	染付端反碗	口縁片		F7-99-1	C	171と同一個体	○	(瀬戸美濃)
178	染付碗	口縁片		F8-27・37-1	C			(瀬戸美濃)
179	染付碗	底部片		F8-27・37-1	C			(肥前)
180	染付碗鉢	底部片		D8-00-1	D			(肥前)
181	染付碗	底部片		F7-98-1	C			(肥前)
182	染付皿	口縁片		P-014-2	C			(肥前)
183	染付皿	底部片		F8-27・37-1	C			(肥前)
184	染付皿	口縁片		F8-27・37-1	C			(肥前)
185	染付皿	体部片		SK-53	D			(肥前)
186	染付皿	口縁片		D8-00-1	D			(肥前)
187	染付碗	体部片		P-014-02	C			(肥前)
188	染付皿	口縁片		D8-00-1	D			(肥前)
189	染付碗	体部片		F7-98-1	C			(肥前)
190	染付皿	口縁片		D8-00-1	D			(瀬戸美濃)
191	染付筒形碗	体部片	青磁染付	F8-09-1	C			(肥前)
192	染付小碗	体部片		F8-27・37-1	C			(肥前)
193	染付碗	口縁片		F6-50-1	C			(肥前)
194	染付碗	口縁片		SK-53	D			(肥前)
195	染付皿	体部片		F8-09-1	C			(瀬戸美濃)
196	染付杯	口縁片		SK-60	D			(瀬戸美濃)
197	染付碗	口縁片		P-014	C			(肥前)
198	染付碗	口縁片		SK-3	D			(瀬戸美濃)
199	染付碗	口縁片		F6-50	C			(瀬戸美濃)
200	染付碗	体部片		F8-27・37-1	C			(肥前)
201	染付碗	体部片		D8-00-1	D	二重網目文		(肥前)
202	染付鉢	体部片		F6-50	C			(瀬戸美濃)
203	染付皿	体部片		D8-00-1	D			(肥前)
204	染付碗	口縁片		SK-53	D			(肥前)
205	陶胎染付小中碗	口縁片		P-024-59・60,P-014-2	C		○	登窯第8小期(瀬戸)
206	陶胎染付碗	底部		P-024-34	C		○	(瀬戸美濃)
207	陶胎染付小中碗	底部		F7-98-1	C		○	登窯第8・9小期(瀬戸)
208	染付瓶	体部		F7-99-1	C			(肥前)
209	染付瓶	体部		F7-98-1	C			(肥前)
210	染付瓶	体部		F7-98-1	C			(瀬戸美濃)
211	染付瓶	体部		F8-27・37-1	C			(瀬戸美濃)
212	染付瓶	体部		F7-99-1	C			(瀬戸美濃)

第14表 出土砥石一覧

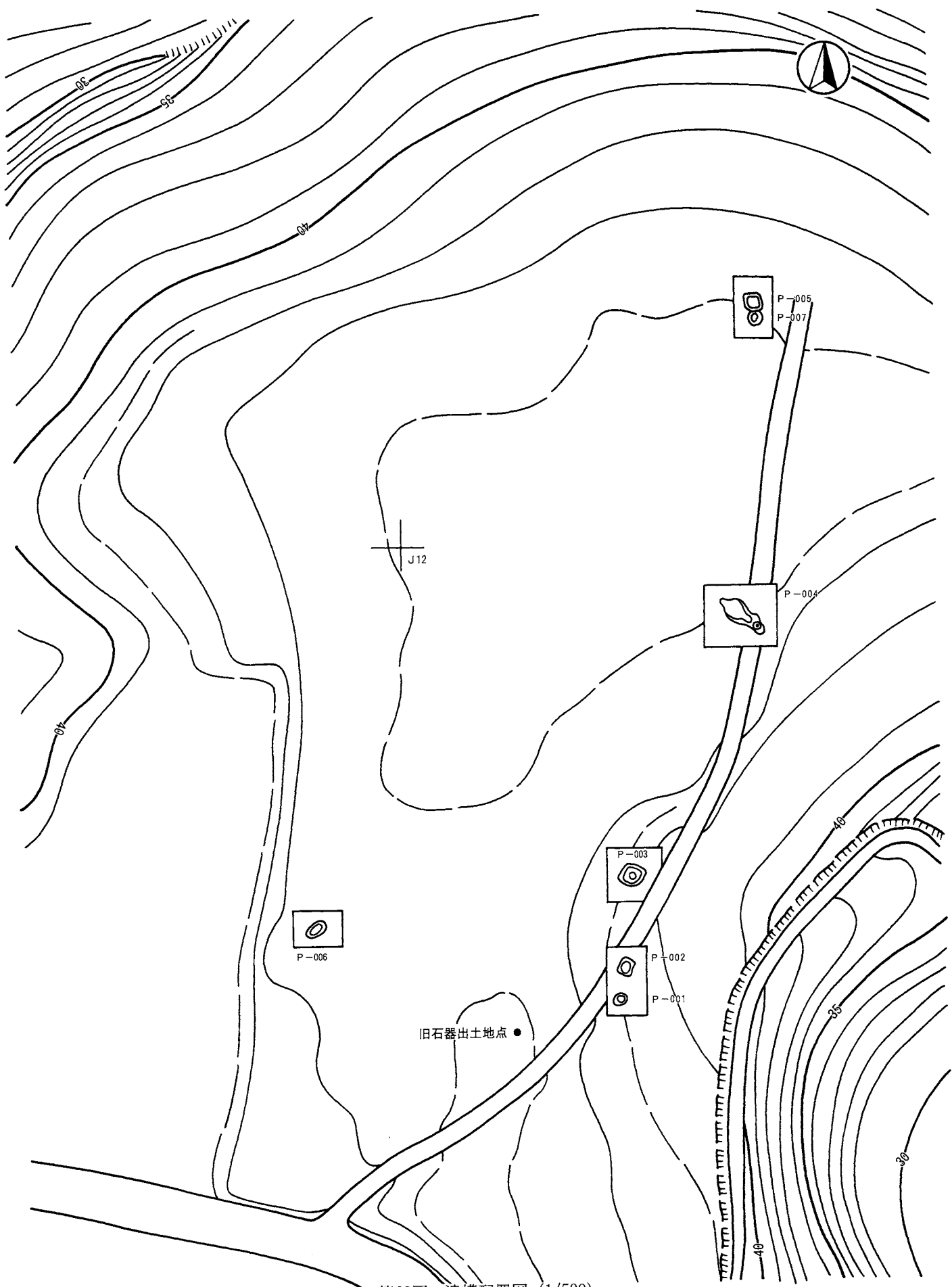
番号	遺構・グリッド番号	石材	重量 (g)	備 考
1	G7-00-1	硬質砂岩	221.5	
2	G7-00-1	凝 灰 岩	33.1	
3	G7-00-1	凝 灰 岩	93.6	櫛歯状工具痕
4	G7-00-1	凝 灰 岩	57.2	
5	P-014-2	凝 灰 岩	8.7	
6	P-014-2	凝 灰 岩	38.9	
7	P-014-2	凝 灰 岩	147.7	
8	P-014-2	凝 灰 岩	173.0	
9	P-014-2	凝 灰 岩	184.5	
10	P-024-15	凝 灰 岩	18.0	
11	P-024-17	凝 灰 岩	88.9	
12	P-024-27	凝 灰 岩	256.7	
13	P-024-36	凝 灰 岩	69.8	
14	P-024-66	凝 灰 岩	110.8	
15	P-024-69	凝 灰 岩	183.3	櫛歯状工具痕
16	F7-98-1	凝 灰 岩	67.3	櫛歯状工具痕
17	F7-98-1	凝 灰 岩	15.0	櫛歯状工具痕
18	F7-98-1	凝 灰 岩	70.4	
19	F7-98-1	凝 灰 岩	92.1	
20	F7-98-1	凝 灰 岩	104.6	
21	F7-98-1	凝 灰 岩	61.5	櫛歯状工具痕
22	F7-99-1	凝 灰 岩	67.1	
23	F7-99-1	凝 灰 岩	110.5	櫛歯状工具痕
24	F8-09-1	凝 灰 岩	111.4	
25	F8-09-1	凝 灰 岩	241.1	
26	F8-09-1	凝 灰 岩	76.0	
27	F8-09-1	凝 灰 岩	93.5	櫛歯状工具痕
28	G8-77-87-1	凝 灰 岩	39.3	被熱
29	F8-27-37-1	凝 灰 岩	4.9	
30	D7-34	凝 灰 岩	14.4	
31	D7-22	凝 灰 岩	13.8	櫛歯状工具痕
32	E10-15-3	凝 灰 岩	74.4	
33	G10-27-37-1	凝 灰 岩	61.7	櫛歯状工具痕
34	D7-44	凝 灰 岩	33.7	
35	F8-07-1	砂 岩	119.0	
36	F8-55-66-1	砂 岩	73.3	

第15表 出土銭貨一覧（直径・重量は小数点以下2桁目を四捨五入）

挿図番号	遺構番号・グリッド-遺物番号	銭貨名	種類	初鑄年	直径(cm)	重量(g)	備 考
1	M-001-15	聖宋元寶	北宋	1101	2.4	2.3	
2	F7-98-1	寛永通寶	古寛永	1639	2.4	2.4	
3	SX-2-6	寛永通寶	古寛永		2.4	3.0	炭焼き窯出土
4	D7-54	寛永通寶	古寛永		2.5	2.0	
5	H3-16-12	寛永通寶	古寛永		2.4	2.9	
6	G6-40-1	寛永通寶	文銭	1668	2.5	2.9	
7	F7-08-1	寛永通寶	文銭		2.5	2.5	
8	H2-87-5	寛永通寶	文銭		2.5	3.8	
9	H3-05	寛永通寶	新寛永	1697	2.5	3.4	
10	E9-55-1	寛永通寶	新寛永		2.4	2.5	
11	D8-08	寛永通寶	新寛永		2.5	2.5	
12	表探	寛永通寶	新寛永		2.4	2.8	
13	F8-27・37-1	寛永通寶	新寛永		2.4	3.0	
14	F9-44・45-1	寛永通寶	新寛永		2.5	2.7	
15	H3-15-3	寛永通寶	新寛永		2.3	2.8	
16	H3-73-14	寛永通寶	新寛永		2.3	2.0	
17	SX-2-1	寛永通寶	新寛永		2.3	2.7	炭焼き窯出土
18	SX-2-3	寛永通寶	新寛永		2.3	2.0	炭焼き窯出土
19	SX-2-4	寛永通寶	新寛永		2.2	1.8	炭焼き窯出土
20	SX-2-7	寛永通寶	新寛永		2.4	3.2	炭焼き窯出土
21	D8-00-1	寛永通寶	新寛永		2.4	2.4	
22	表探	寛永通寶	(不明)		2.3	2.1	
23	SX-2-5	寛永通寶	(不明)		2.4	2.1	炭焼き窯出土
24	SX-2-8	寛永通寶	(不明)		2.4	2.4	炭焼き窯出土
25	G4-88	寛永通寶	佐銭	1717	2.5	2.7	
26	H3-73-14	寛永通寶	小銭	1740	2.3	2.1	
27	SX-2-2	寛永通寶	元銭	1741	2.3	1.9	炭焼き窯出土
28	G5-50-1	寛永通寶	元銭		2.3	2.2	
29	表探	天保通寶		1835	3.2×4.9	20.1	
30	D7-44	文久永寶	背波	1862	2.7	3.5	
31	G9-22・32-1	文久永寶	背波		2.7	3.4	
32	D8-77-1	文久永寶	背波		2.7	3.7	
33	F8-55・65-1	文久永寶	背波		2.7	3.5	
34	D8-77-1	寛永通寶	新寛永	1697	測定不可	測定不可	34と35は融着している
35	D8-77-1	寛永通寶	鉄銭	1739	測定不可	測定不可	34と35は融着している

第16表 陶磁器以外の焼物の出土点数

	口縁	底部	その他	合計
土師器 (甕)	13	20	85	118
土師器 (杯)	14	13	47	74
須恵器	3	3	19	25
カワラケ	23	7	18	48
焙烙	55	65	51	171



第62図 遺構配置図 (1/500)

第3章 大堀切遺跡の調査

第1節 旧石器時代および縄文時代

旧石器時代の石器出土地点は、1か所であった。遺跡の立地する台地の西側から入り込む谷に面している。(第62図)

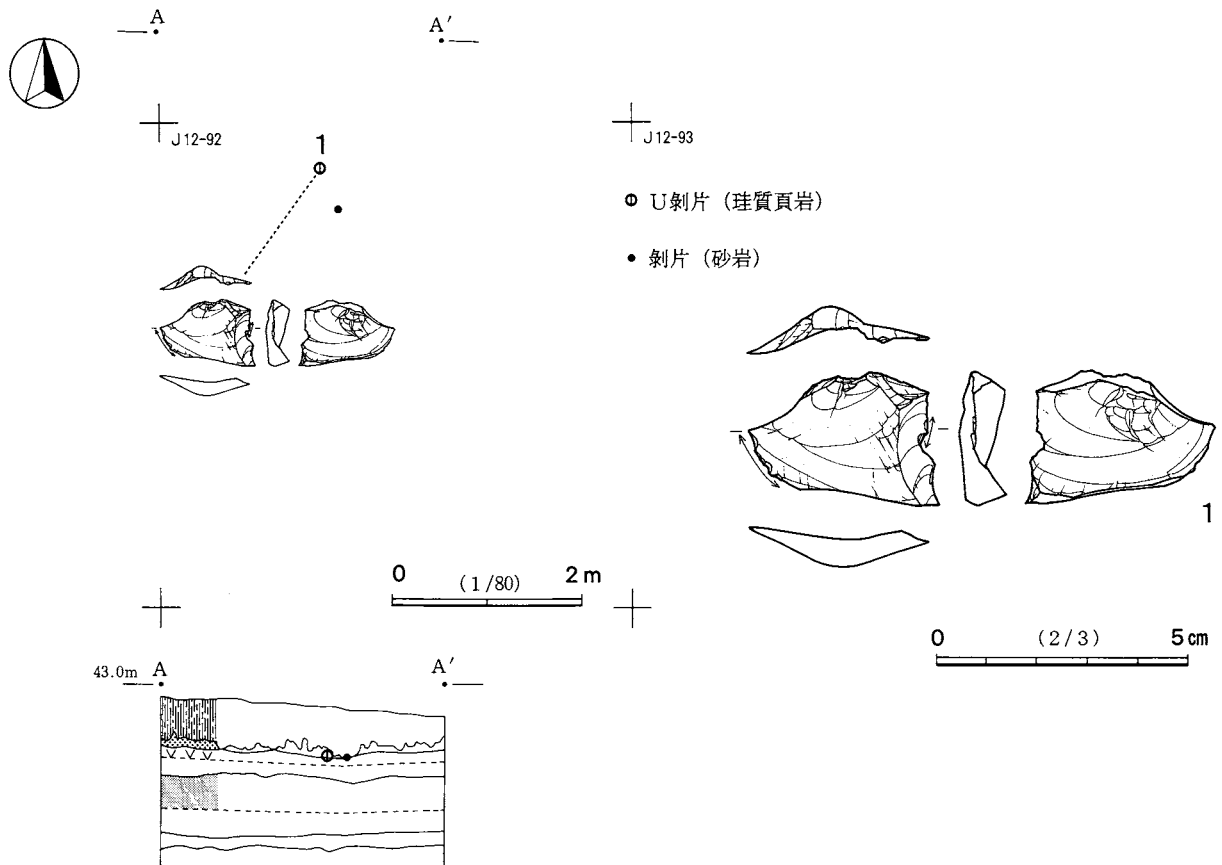
縄文時代の遺構は、陥穴1基、土坑1基が検出されている。遺構数は少ないが、調査区全体からかなりの量の遺物が出土している。(第62図)

1 遺構と出土遺物

(1) 旧石器時代 (第63図、図版27、28)

J12-92グリッドから石器が2点出土した。出土層位はVI層上部である。

1は珪質頁岩のU剥片である。右側縁中間部と先端部左側に、微細な剝離痕が観察される。



第63図 旧石器時代遺物出土状況

(2) 縄文時代

P-006 陥穴 (第64図、図版27) I 12-78グリッドに位置する。隅丸長方形を呈し、上場規模1.7m×1.2m、深さ1.8mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底の平面形も隅丸長方形である。断面形は逆台形を呈する。出土遺物はなかった。

P-007 土坑 (第64、65図、図版27、28) J 11-67グリッドに位置する。円形を呈し、直径65cm、深さ40cmを測る。断面形は逆台形を呈する。確認面上で棒状の石製品と、大形の深鉢形土器の破片が出土している。1～3は同一個体と考えられる深鉢で、小さい底部から器壁が大きく広がるように立ち上がり、口縁部で強く内湾する器形を呈する。縄文施文後2本一組の微隆起線が曲線状に配されて、その間が磨かれるように磨り消される。二次焼成によって、場所によりかなりもろくなっている。底径は7.5cmである。4は砂岩の棒状石製品で、石剣未成品と考えられる。断面長方形になるように研磨されているが、場所によって粗整形の痕跡と考えられる剝離痕が残存している。

P-007 付近出土遺物 (第66～68図、図版28～31)

P-007 土坑の検出されたJ 11-67グリッド付近からは、多量の遺物が出土した。時期的にもほとんど同時と考えられ、また、内容から見ても竪穴住居跡の存在を窺わせるのに十分と言える。ここではあえて竪穴住居跡ないしはそれに類する遺構が存在したと考え、P-007 土坑が検出されたJ 11-67グリッド付近から出土した遺物を独立して取り上げる。

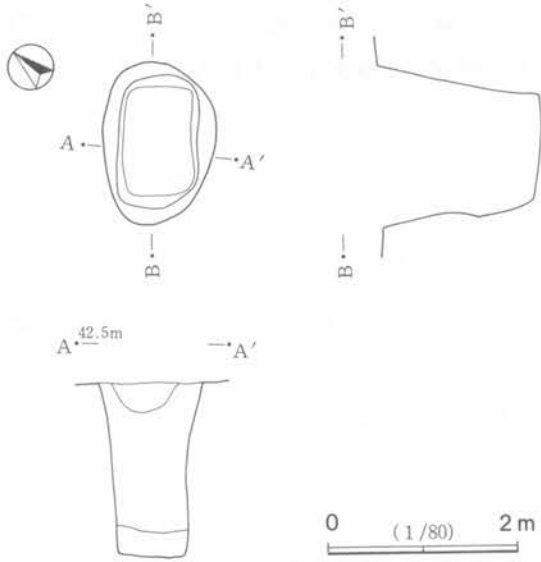
1～3は器形復元できた深鉢である。1は口径24.2cmの深鉢で、口縁部に突起が付けられ、そこに向かって磨消縄文帯が左右からはいる。なお、右側の懸垂部の縄文は省略しているが、中央の球状部と同じくRL縄文が縦方向に施文される。2は口径17.4cmのやや小型の深鉢で、懸垂文が胴部くびれ部で入り組む。3は口径23.0cmの深鉢で、口縁に沿って微隆起線が付けられ、突起が付けられる。4～6、9～12は曲線状の磨消縄文が配される。7、8、13～20は口縁に沿って微隆起線が付けられるもので、磨消縄文は観察されない。21～27、29は口縁に沿ってナヅリ状の沈線又は細沈線が巡らされる。30～33は口縁部に沿って無文帯が見られる。35は口唇直下からすぐに縄文が施される。36～38は口縁部が外反しないもので、38は口縁に沿って沈線が巡らされる。28は櫛描沈線を地文とするもので、口縁部は微隆起線が付けられ、それに沿ってナヅリ状の沈線が巡らされる。39～49は磨消縄文の、50～56は微隆起線の、57は沈線のみそれぞれ胴部破片である。58～61は単節縄文が、62～64、66は無節縄文が、67は櫛描沈線が施される。68～71は底部及びその直上である。72、73は耳飾りの破片で、重さはいずれも3.9gである。74は土器片錘で、重さは7.2gである。土製円盤の転用品と考えられ、一部に研磨痕が観察される。75は小型の土製円盤で、重さは3.0gである。打ち欠き調整の後、一部に研磨調整を施す。77は安山岩の石鏃である。76は石鏃未成品で、安山岩である。

2 グリッド出土遺物 (第69～73図、図版30～32)

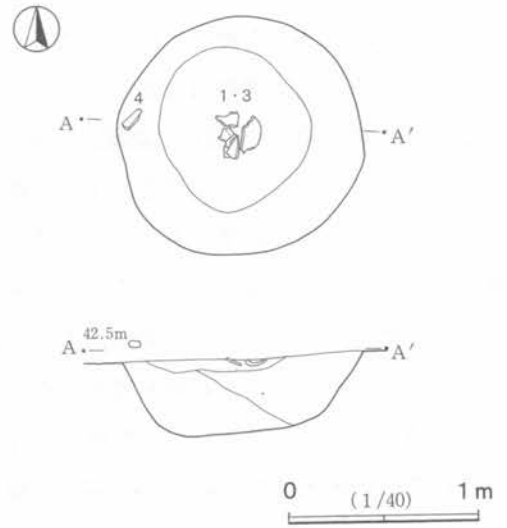
第I群土器 (1～7)

縄文時代早期の土器群である。沈線文系土器のみ出土した。1は細沈線が平行に施されるもので、三戸式から田戸下層式に比定される。2～5は幾何学的な沈線と貝殻腹縁文が組み合わされる。田戸上層式である。6、7は無文土器で、胎土は粗く石英粒を多量に含む。

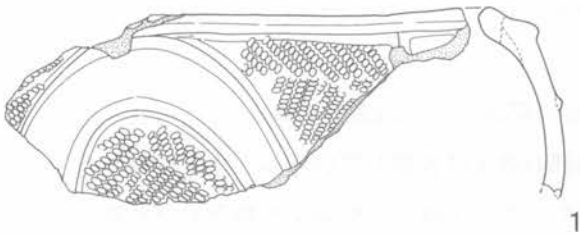
P-006



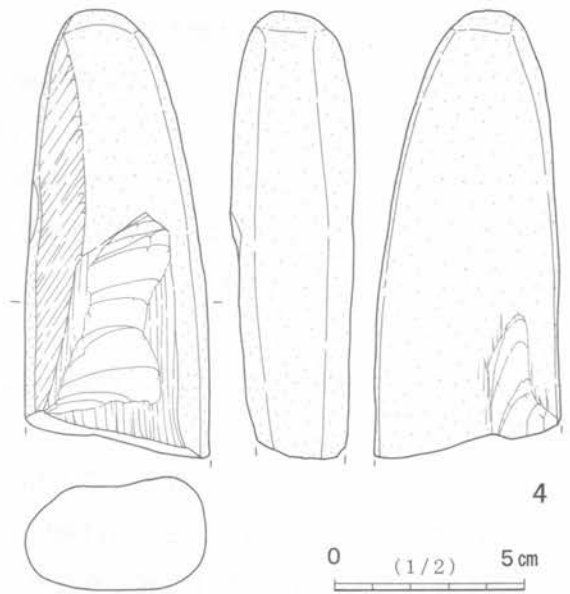
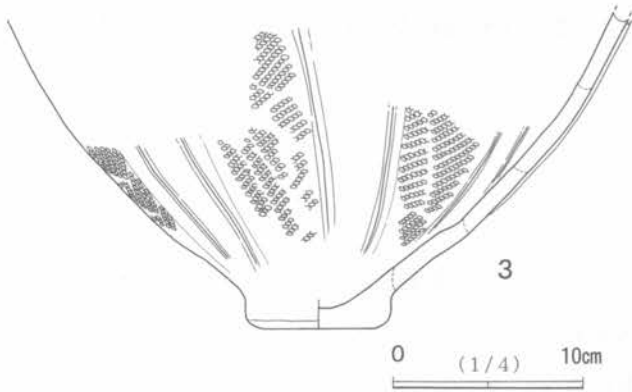
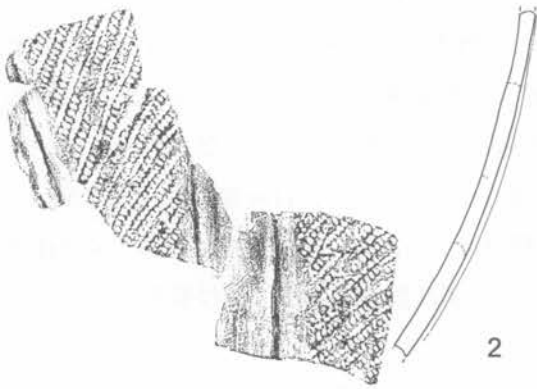
P-007



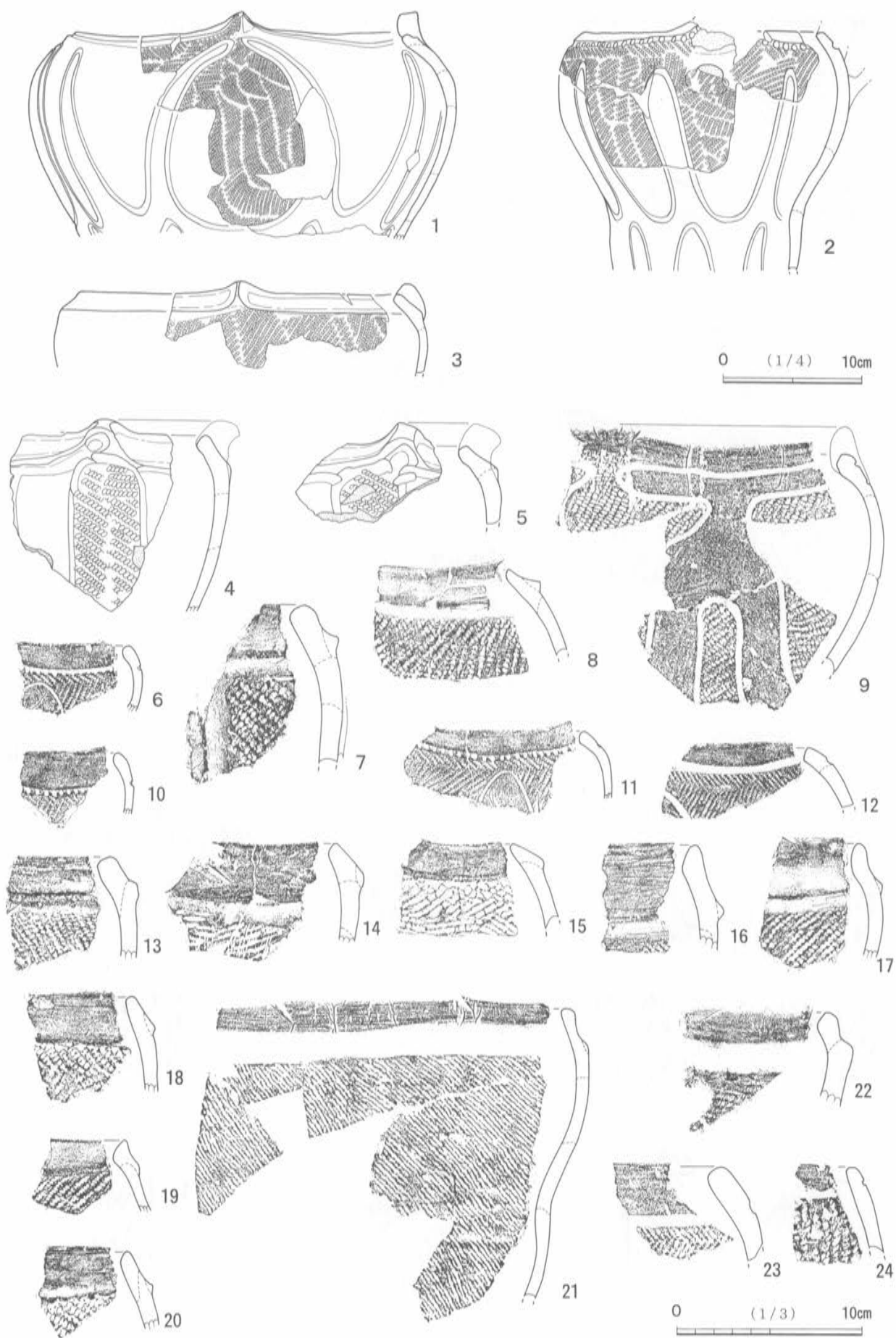
第64図 縄文時代遺構



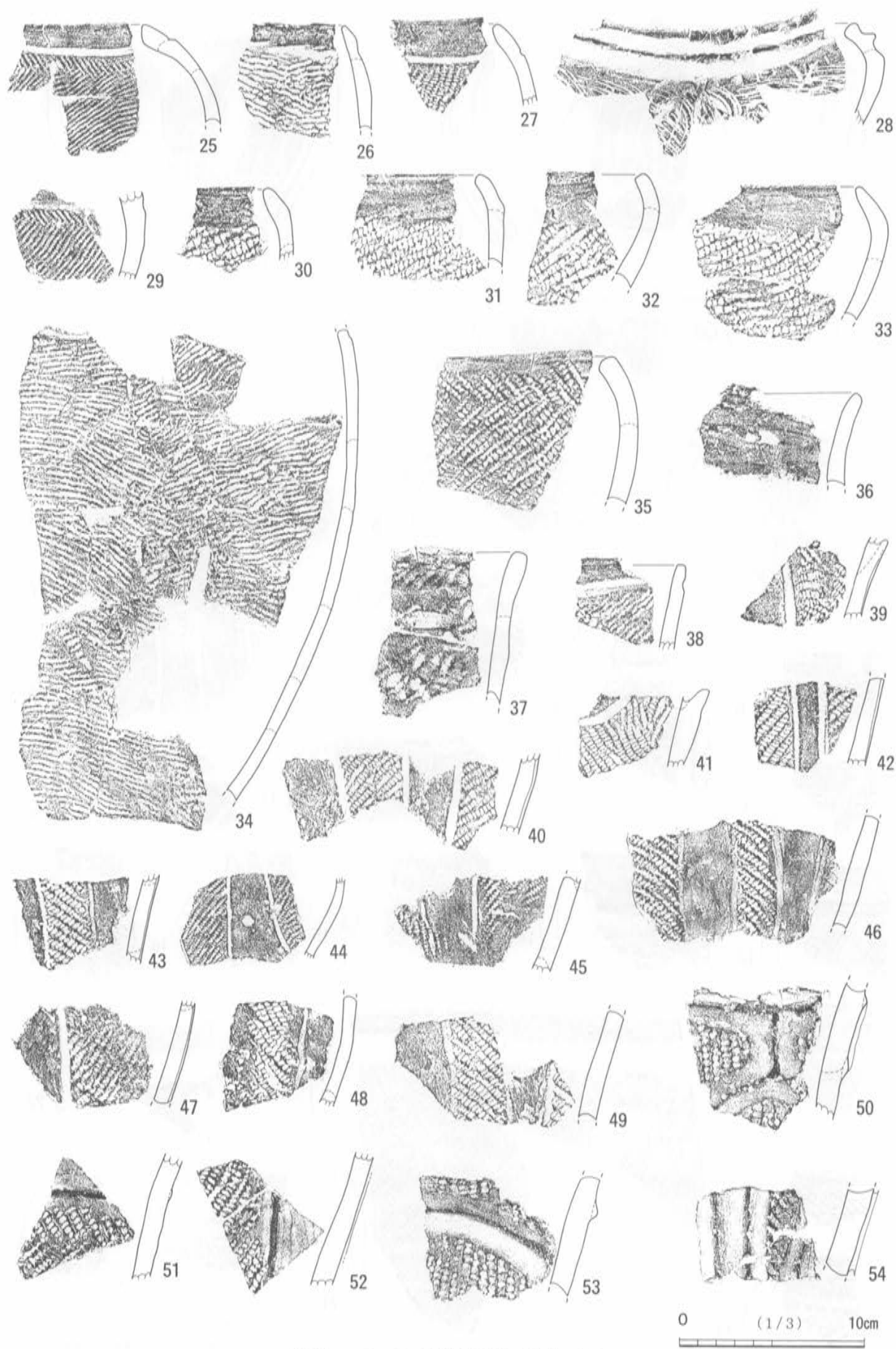
遺物出土状況



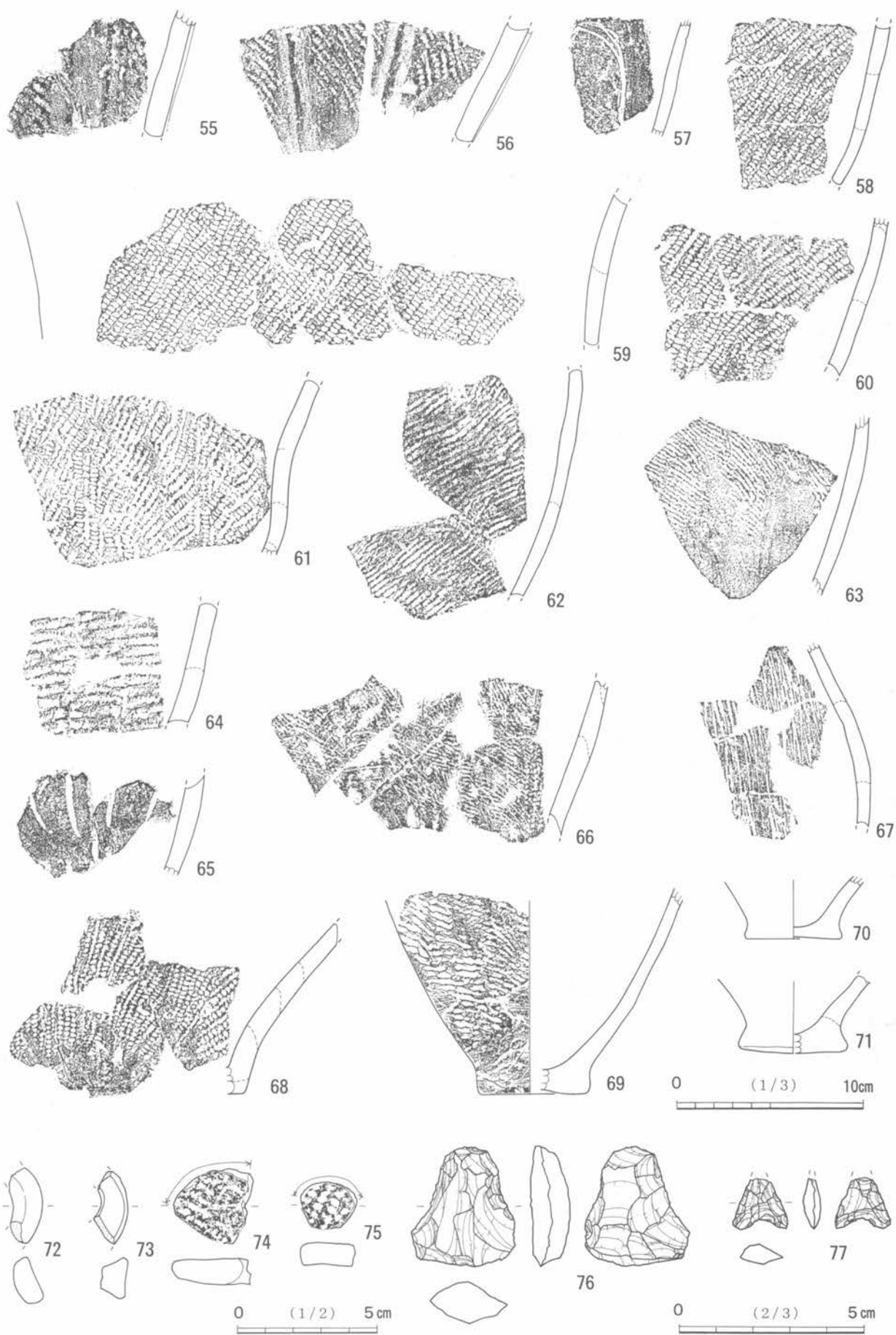
第65図 P-007土坑出土遺物



第66图 P-007土坑附近出土遗物(1)



第67图 P-007土坑附近出土遗物(2)



第68图 P-007土坑附近出土遗物(3)

第Ⅱ群土器

縄文時代前期の土器群である。

第1類（8～19、21）

前期前半の羽状縄文系土器を一括した。8は羽状縄文が施される。9～17は縄文が施される。18、19、21は半截竹管による沈線が施される。

第2類（20、22～25）

前期後半の竹管文系土器を一括した。25は半截竹管による沈線文が施される。22～24は貝殻腹縁による変形爪形文が施されるものである。

第Ⅲ群土器

縄文時代中期の土器群である。

第2類（26～82）

縄文時代中期後半の加曾利E式土器で、最大多数を占める。26～27は太い隆帯ないしは沈線によって区画された文様帯をもつ。加曾利E式の中でも古い段階の特徴を有している。28は口縁に沿って円形刺突が施される。29、30は沈線に区画された磨消縄文が施される。31～38は口縁に沿って微隆起線が配される。39、40、42は口唇直下で強く屈曲する。41、43～48は口縁に添って沈線が施される。49～53は口唇直下が無文帯となる。56は口縁部が外反しない。54、59、60は胴部破片で、細い沈線に区画された縦位の磨消縄文が施される。58、61～65、67は微隆起線が配される。68～72、74は単節縄文、73、75、78は無節縄文、77、79、80は櫛描沈線がそれぞれ施される。81、82は無文のものである。

第Ⅳ群土器（83～91）

縄文時代後期以降の土器である。数は極めて少ない。83は堀之内式土器である。84～86は加曾利B式の精製土器である。87～89加曾利B式の粗製土器である。90、91は安行Ⅱ式の精製土器である。

第Ⅴ群土器（92、93）

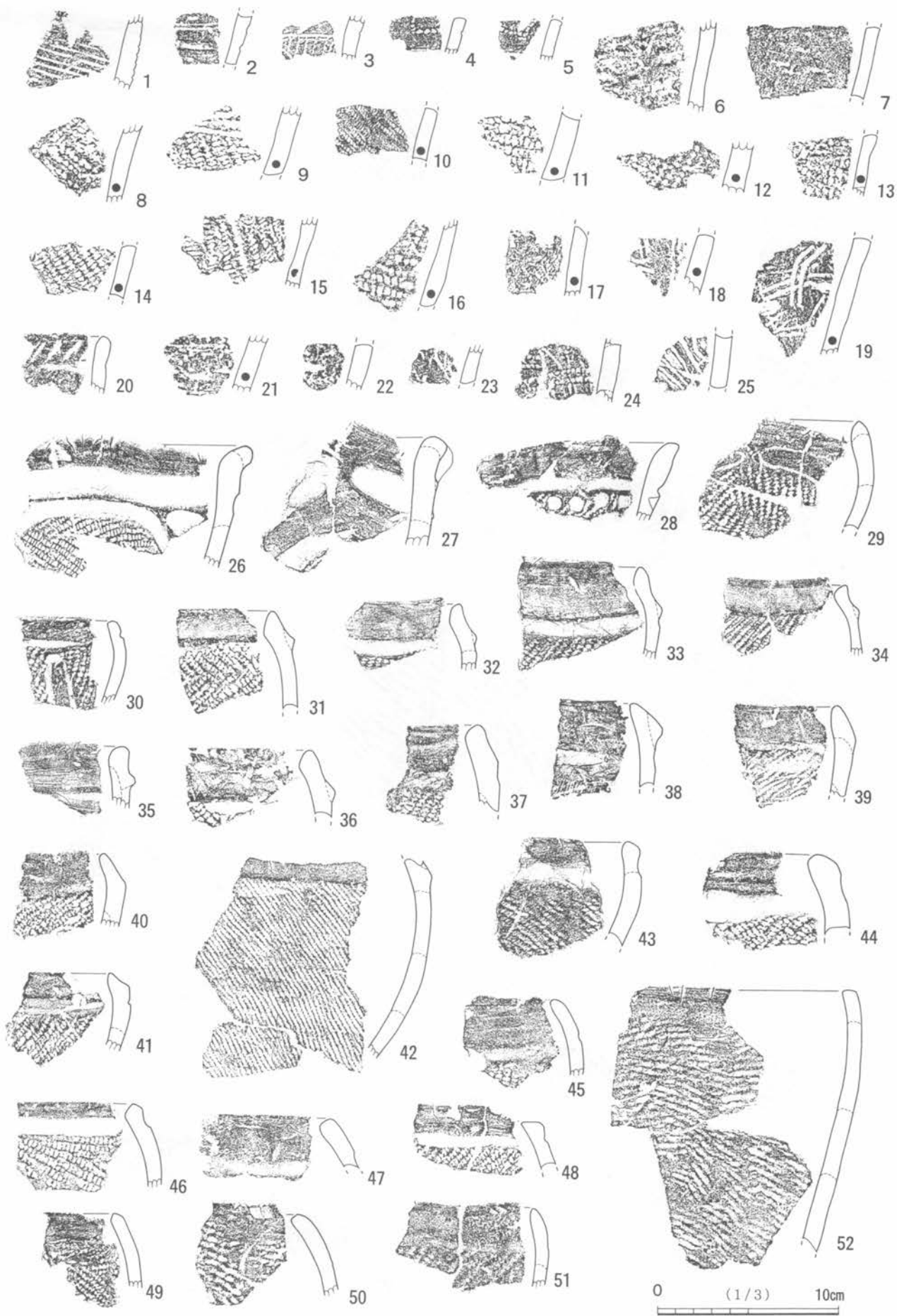
底部を一括した。時期は加曾利E式終末から加曾利B式にわたるものとみられる。

土製品（94～99）

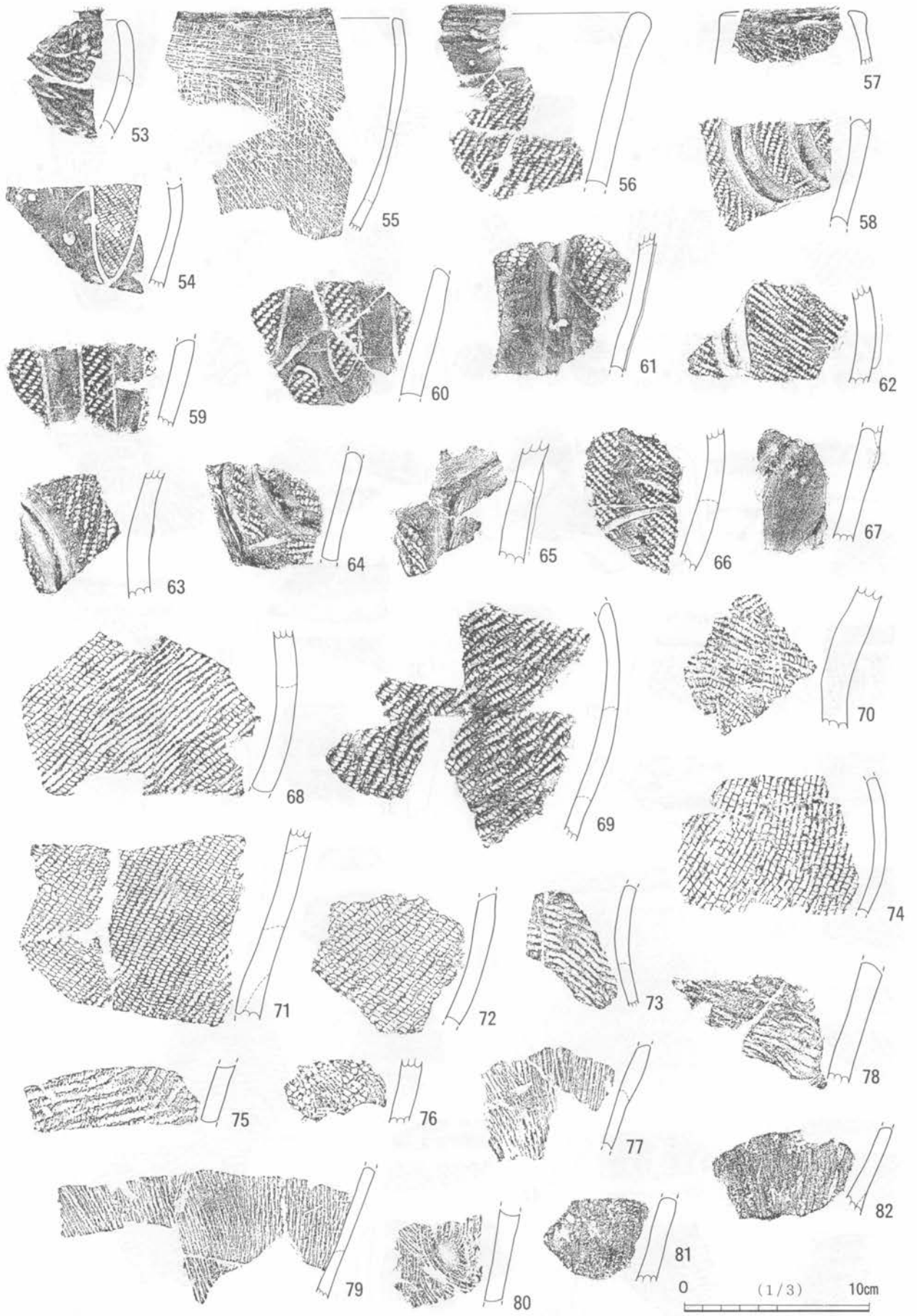
94、95、99は耳飾りである。重量はそれぞれ12.9g、1.9g、3.8gである。いずれも土器片を素材として、内側と外側を丁寧に研磨して仕上げている。96～98は土製円盤である。重量はそれぞれ11.6g、12.6g、7.1gである。いずれも土器片を素材として打ち欠き調整の後、粗い研磨調整を施している。

石器（100～105）

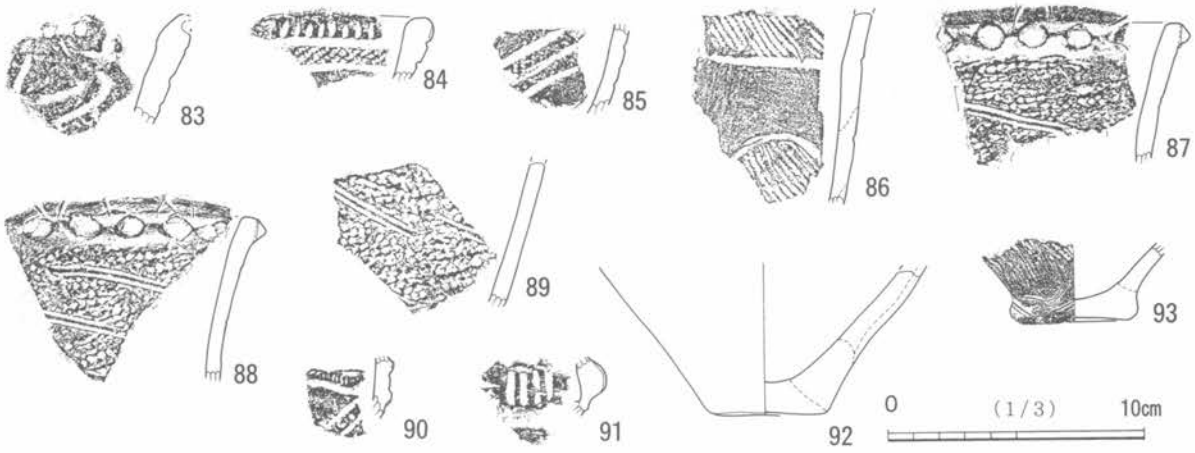
100～102は石鏃である。いずれも安山岩である。103は分銅形の打製石斧である。裏面中央部に装着痕が観察される。104は石剣である。研磨によって丁寧に整形される。105は砂岩の凹石である。表裏両面中央部に敲打痕が観察されるほか、周縁部のほぼ全体に著しい敲打痕が観察される。敲石としても使用されたと考えられる。



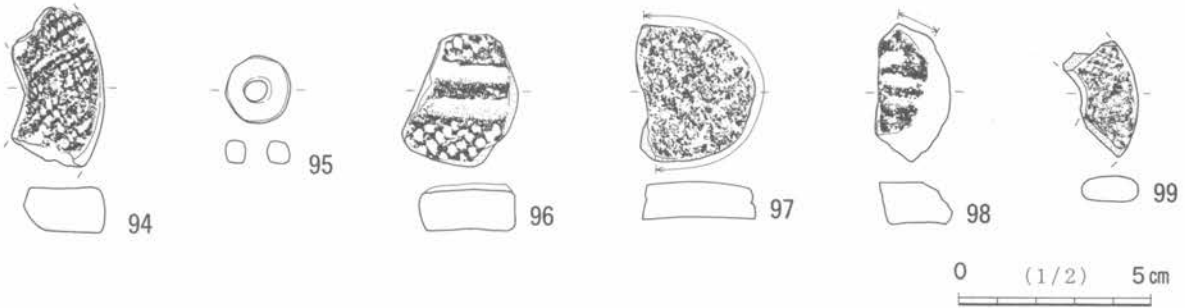
第69図 グリッド出土縄文土器 (1)



第70図 グリッド出土縄文土器(2)



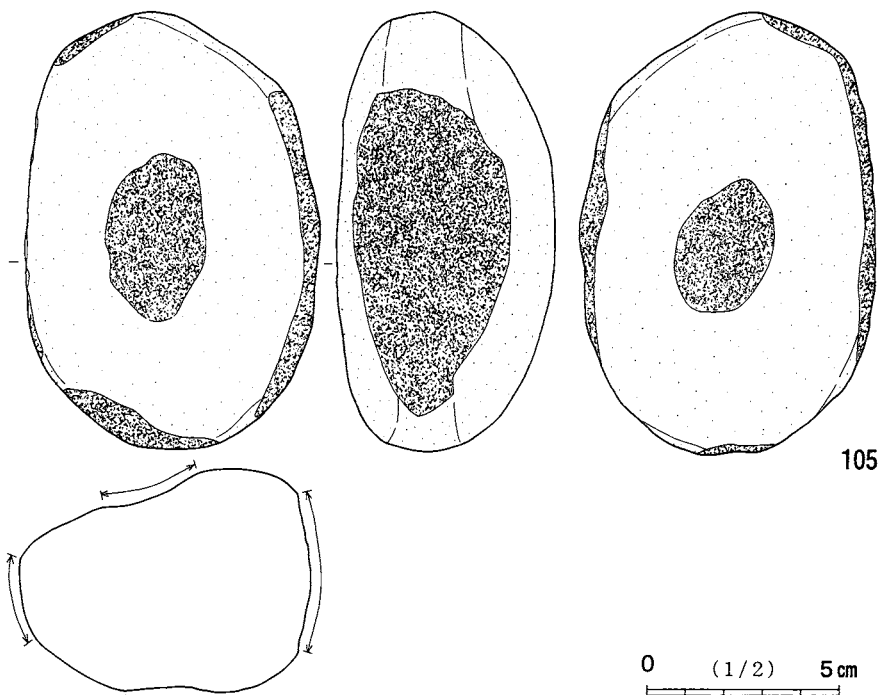
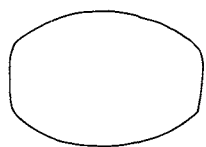
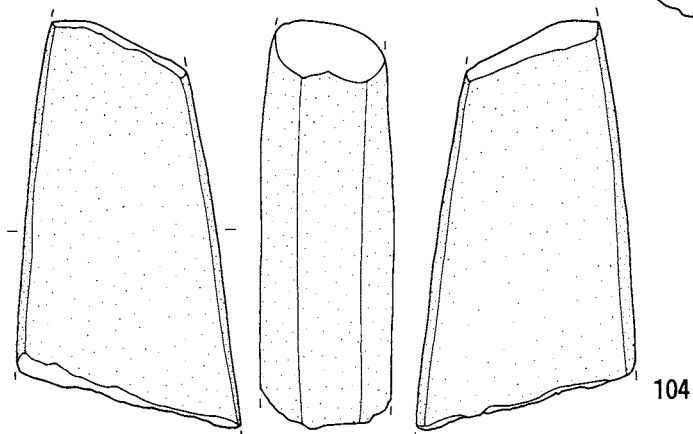
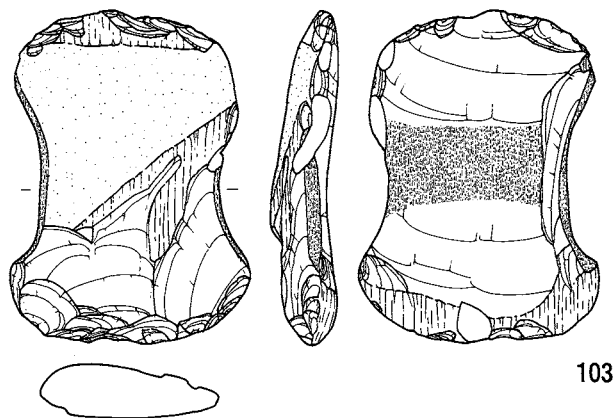
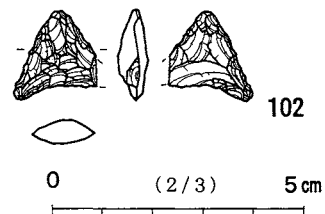
第71図 グリッド出土縄文土器 (3)



第72図 グリッド出土縄文時代土製品

第17表 出土石器属性表

No.	遺物番号	器種	長さ × 幅 × 厚さ (mm)	重量 (g)	挿図番号	打面 種類	打面 調整	頭部 調整	背面構成	背面 種類	打角 (°)	石材
1	J12-92-001	U剥片	25.8 × 37.5 × 9.0	6.1	第63図 1	多	×	○	I. III	b	115	珪質頁岩
2	J12-92-002	剥片	16.0 × 17.5 × 3.4	1.1		線	×	×	II	c		砂岩
3	J11-67-003	石剣未成品	115.5 × 49.0 × 32.5	273.1	第65図 4							硬砂岩
4	J11-67-006	石鏃未成品	31.5 × 28.3 × 11.0	9.3	第68図 76							安山岩
5	J11-67-006	石鏃	13.5 × 14.8 × 4.8	0.8	第68図 77							安山岩
6	J12-04-003	石鏃	22.8 × 15.0 × 4.0	1.0	第73図 100							安山岩
7	J11-96-002	石鏃	20.8 × 17.5 × 4.5	1.3	第73図 101							安山岩
8	J11-92-002	石鏃	18.0 × 16.5 × 6.0	1.4	第73図 102							安山岩
9	表面採集	打製石斧	86.0 × 63.0 × 18.5	99.1	第73図 103							黒色緻密質安山岩
10	表面採集	石剣	104.5 × 58.2 × 35.0	359.4	第73図 104							硬砂岩
11	表面採集	凹石	112.8 × 78.0 × 57.5	726.6	第73図 105							石英ハン岩



第73図 グリッド等出土縄文時代石器

第2節 中近世

1 遺構

大堀切遺跡は、調査前には民家があったためか、ローム地山の削平が著しく、したがって、遺構の残存状況も極めて不良である。ただ、畑地で比較的地山の残存状況も良いと考えられる昭和60年の調査地点には、旧石器時代、縄文時代、近世以外の遺構が検出されないことから、元来遺構が希薄な地点と考えられる。

(1) 炭焼窯

P-001 (第74図、図版27)

J12-84グリッドに位置する。直径1.1m、深さ0.35mの円形を呈する。床面及び壁面には炭と焼土が付着している。床面はほぼ平坦で、南東隅に小ピットをもつ。

P-002 (第74図、図版27)

J12-84グリッドに位置する。主軸を北北東-南南西に向けた、隅丸方形の土坑である。大きさは1.5m×1.2m、深さ0.20mを測る。床面及び壁面には炭と焼土が付着している。

P-003 (第74図、図版27)

J12-64グリッドに位置する。主軸を北西-南東に向けた、隅丸方形の土坑である。大きさは1.8m×2.0m、深さ最大0.45mを測る。床面は中央が丸みを帯びた方形に掘り窪められている。床面及び壁面には炭と焼土が付着している。

P-004 (第74図、図版27)

J12-16グリッドに位置する。焚口の幅は0.5m、焼成室の直径は1.9m、煙道部の奥行きは0.4m、最大幅は0.3mを測る。耕作による攪乱が著しい。

P-005 (第74図、図版27)

J11-67グリッドに位置する。隅丸方形の土坑である。大きさは1.5m×1.5m、深さ0.25mを測る。床面及び壁面には炭と焼土が付着している。

2 遺物

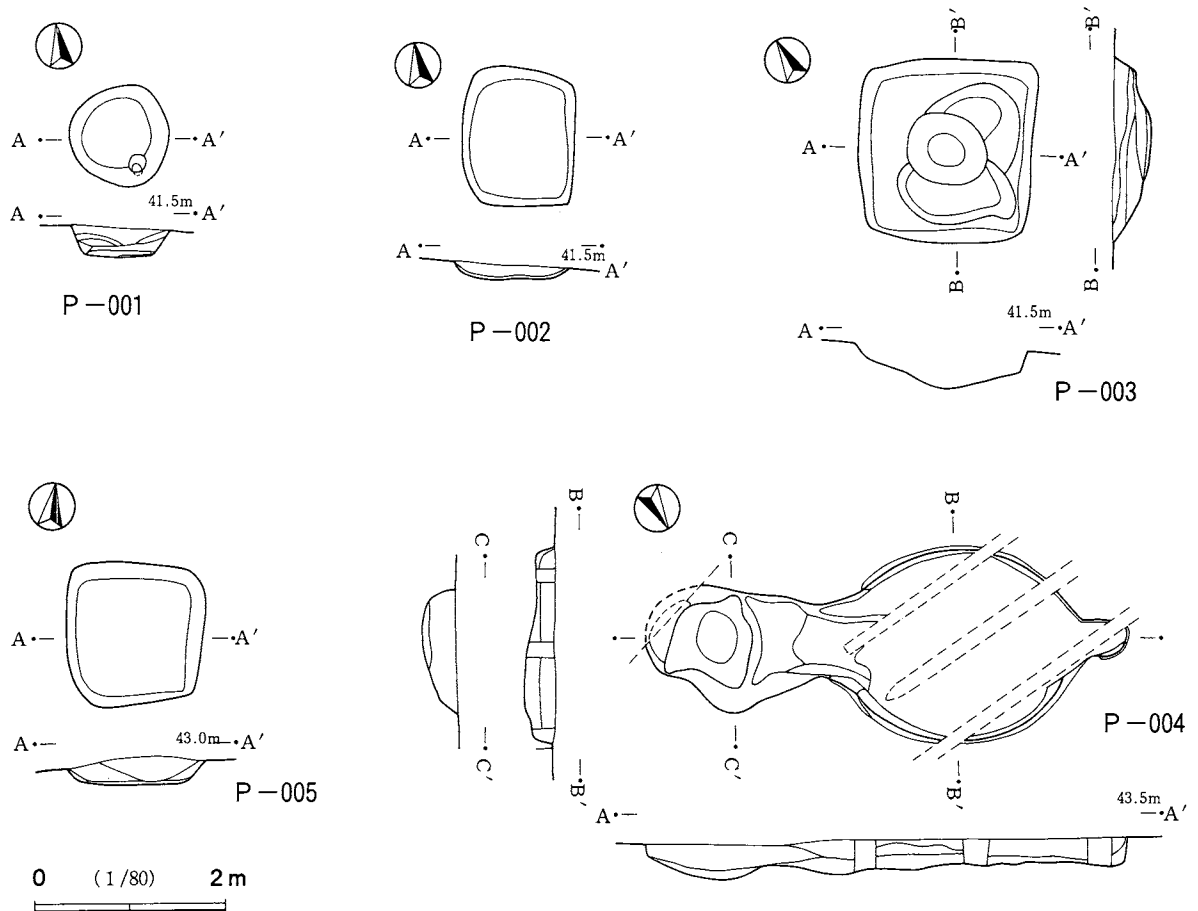
奈良・平安時代の土師器1点のほかはすべて中近世の遺物である。土器・陶磁器・石製品・金属製品などがあげられる。検出遺構が少ないためか、遺物の総量も極めて少ない。

(1) 土器

土師器杯 (第75図、図版32)

1はJ12-64グリッド出土の土師器杯である。口径は13.4cm、底径は7.4cm、器高は4.3cmを測る。胎土は緻密で、白色砂粒を多く含む。かなり黒色に近い灰色を呈する。焼成は良好で、硬質である。内外面ともに火襷が顕著に残る。

カワラケ (第75図、図版32)



第74図 近世遺構

2はJ12-83グリッド出土のカワラケ底部破片である。底径は5.4cmで、胎土中には鉄分塊と白色砂粒・銀雲母細粒含み、薄い灰褐色を呈する。確実に中世のものである。

(2) 陶磁器

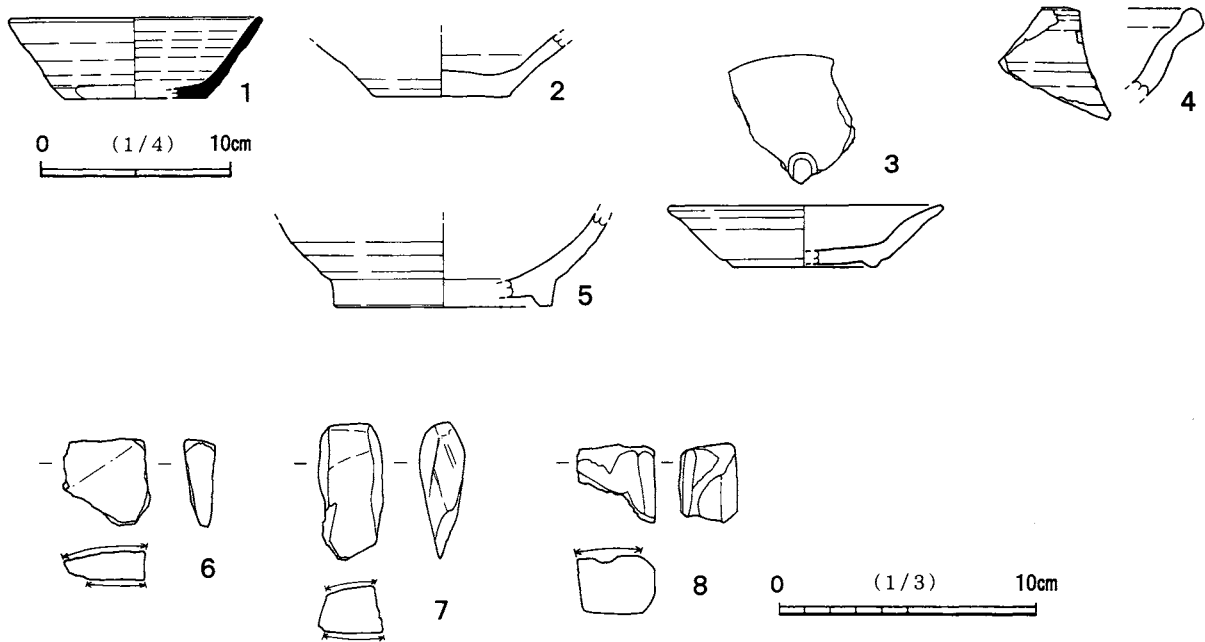
近世陶器には瀬戸美濃産、肥前産、その他常滑産や産地不明のものが見られる。磁器には肥前産、瀬戸美濃産や産地不明のものが見られる。

皿 (第75図、図版32)

3はJ12-83グリッド出土の美濃大窯産端反皿で、胎土は薄い灰褐色で砂粒を含まない。内面には印花がある。全面施釉であるが、変色が著しく釉葉の種類がはっきりしない。おそらく灰釉であろう。口径10.9cm、高台径5.8cm、器高2.4cmを測る。16世紀代の遺物である。

鉢 (第75図、図版32)

4はJ12-64グリッド出土の瀬戸産錆釉鉢の口縁部破片である。口縁端が内側で膨らみ玉縁状になる。5はJ12-84グリッド出土の瀬戸美濃産の鉢類底部破片で、高台径は8.5cmを測る。内面は飴釉で、外面は残存部範囲では無釉である。外面には明瞭に回転ヘラケズリ痕が残る。



第75図 土師器、カワラケ、皿、鉢、砥石

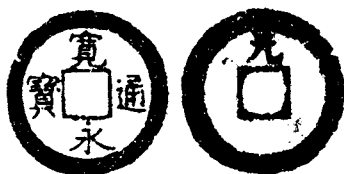
(3) 石製品

砥石 (第75図、図版32)

いずれも小型の砥石で、凝灰岩質である。6はI12-77グリッド出土で、14.3gを測る。扁平な2面を研ぎ面として使用している。7はJ12-20グリッド出土で、24.0gを測る。やはり2面を研ぎ面として使用している。8はJ12-64出土で、23.5gを測る。1面を研ぎ面としている。

(4) 銭貨 (第76図、図版32、第18表)

寛永通寶が1点出土している。



第76図 銭貨拓影図 (1/1)

第18表 出土銭貨一覧(直径・重量は小数点以下2桁目を四捨五入)

挿図番号	遺構番号・グリッド-遺物番号	銭貨名	種類	初鑄年	直径(cm)	重量(g)	備考
1	J11-76	寛永通寶	元銭	1741	2.2	2.1	

第4章 まとめ

第1節 縄文時代

上宿遺跡、大堀切遺跡からは縄文時代の遺構は少なかったものの、遺物はまとまった量が出土している。ここでは隣接する成田松尾線調査区の成果及び古宿・上谷遺跡の成果と比べながら、調査の成果についてまとめたい。

上宿遺跡においては調査区北側にまとまった遺物包含層が検出された。小さい沢を隔てて西隣の成田松尾線調査区からは、やはり遺物包含層が検出されている。痩せ尾根ではあるが谷に面して生活が営まれた痕跡を示している。

遺物は早期から晩期まで出土している。燃糸文土器は前半の井草式を中心としており、成田松尾線の成果と同じ傾向を示す。成田松尾線の調査でまとまった資料が出土した沈線文系土器は、今回は量的には少なかった。ただし、このとき出土した燃糸文期終末から沈線文期初頭にかけてとみられる無文土器が、今回も出土している。なお、成田松尾線調査区内で検出された石鏃製作跡は、今回の調査区のF11、G11グリッド付近に相当するが、全体に削平が著しく、検出することができなかった。成田松尾線調査区で最も多量に出土した条痕文土器は、今回は極めて少ない。前期羽状縄文系土器は、前回に引き続きまとまった量が出土した。今回は、成田松尾線調査区ではほとんど見られなかった、黒浜式でも古い段階に属するループ文を主体とする土器が多いのが注目される。前期後半の竹管文系土器は、前回に比べ出土量は少なかった。成田松尾線調査区でほとんど出土しなかった半截竹管文土器が今回ある程度出土している一方で、前回まとめて出土した貝殻充填文土器は全く出土しなかった。中期前半の土器は、成田松尾線では初頭の下小野式を中心としていたが、今回は阿玉台式がやや多い。中期後半の加曾利E式は、大堀切遺跡及び隣接する古宿・上谷遺跡の中心的時期である。古宿・上谷遺跡においては加曾利EⅢ式期に集中的に遺構群が構築され、それ以降後期初頭にかけて急速に消滅していく様相が明らかになったが¹⁾、大堀切遺跡からは古宿・上谷遺跡が衰退に向かっているさなかの加曾利EⅣ式期に相当する遺物が、最も多量に出土している。調査所見では包含層のみ存在とされているが、竪穴住居跡が存在した可能性が強く、古宿・上谷遺跡の集落跡との関連を検討するべきであろう。調査規模に比べて耳飾りや土製円盤が多量に出土した点も、古宿・上谷遺跡との類似性をうかがわせる。なお、上宿遺跡はこの時期は最も遺物量が少なくなる。後期前葉の称名寺式、堀之内式の遺物は、成田松尾線調査区も今回の調査区も極めて少ない。後期中葉の加曾利B式期には今回の上宿遺跡の調査では極めて多量の遺物が出土している。成田松尾線の調査区はもとより周辺からも、この時期の遺跡はほとんどなく、際だって特徴的である。時期としては加曾利B2式を中心とするが、この時期に特徴的な集合沈線が施された資料が全くと言っていいほど欠落しているのは注目されよう。後期安行式に相当する遺物は成田松尾線調査区からは全く出土せず、今回も極めて少なかった。晩期は今回は極めて少ないものの、成田松尾線調査区からは姥山Ⅱ式や前浦式の資料がまとめて出土している。また、谷をはさんで北側の井森戸遺跡からは、晩期終末の荒海式の良好な資料が出土している。

簡単にまとめると、古宿・上谷、上宿、大堀切の3遺跡は、全体としては早期から晩期まで連綿と人間

活動の痕跡が刻まれているが、時期によってそれぞれの遺跡で遺構や遺物の分布に少なからず違いが見られるほか、同じ遺跡内の地点ごとに観察しても、出土遺物に微妙な時期差が見られる。生活の場の設定に際し何らかの選択基準が存在し、生業活動に合わせて活動拠点を展開したことが想定される。

第2節 中近世

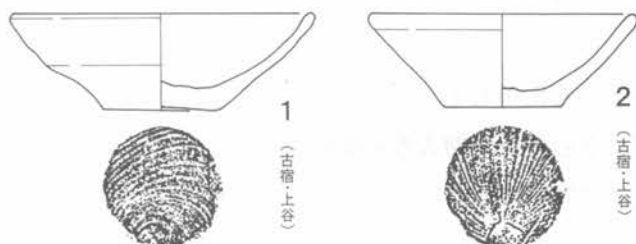
遺跡は国道296号や主要地方道成田松尾線及び旧道により大きくAからGの7地点に分割される。それぞれ全く遺物を出土しない地点や、遺構に伴い比較的多くの遺物を出土する地点が存在する。

遺物は表10～13のように、18世紀でも後半以降19世紀にかけてのものが圧倒的である。

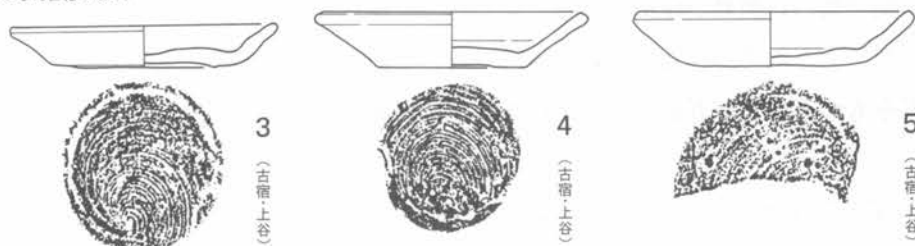
本文中で述べたように第50図の2～5は17世紀後半から18世紀にかけて、6及び7は18世紀半ばから19世紀初め頃と考えられる。

ここで先に報告書が刊行された古宿・上谷遺跡¹⁾及び今回の上宿遺跡の成果から、岩山地区のカワラケの編年を以下にまとめてみた。

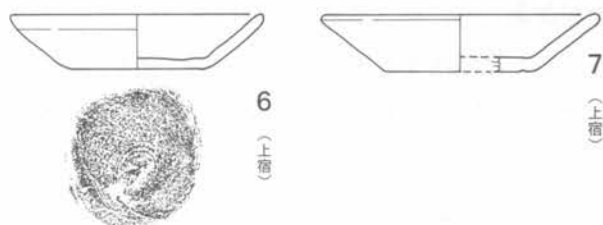
I 期 (16世紀代)



II 期 (17世紀後半から18世紀はじめ)



III 期 (18世紀後半から19世紀はじめ)



第77図 カワラケ編年図 (1/3)

	1	2	3	4	5	6	7
口径	12.0	10.5	10.5	10.9	11.0	10.0	10.9
底径	4.5	4.5	6.5	5.8	6.5	5.5	5.7
器高	3.7	3.6	1.6	3.1	2.1	2.1	2.2
成形	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ
調整	回転糸切り	?	回転糸切り	回転糸切り	回転糸切り	回転糸切り	回転糸切り

I期は酒々井町長勝寺脇館跡や本佐倉城跡などの戦国末期の主要城館から出土する中世末期の典型的なカワラケである。この時期の主要城館では、木製の桶を模倣した外面にタガを数本もつ、土師質や瓦質の火鉢が見受けられる。

II期に入ると器高は低く、口径、底径とも大きな皿形のタイプが主要形態となる。内面立上がり部がくぼんでいるのがこの時期の特徴である。しかし、胎土は砂粒を多量に含むもので、中世から余り変化が見られない。この時期は佐倉市弥勒東台遺跡で出土した、扁平で平底の大振りの内耳をもつ焙烙が見られる。16世紀から続く木製の桶を模倣した、外面にタガを数本もつ土師質や瓦質の火鉢は、この時期を最後に見られなくなる。

I期とII期は器形の変化が大きく、時期的に見ると16世紀末から17世紀前半に大きな画期があったようであり、この中間にさらに一時期入る可能性がある。

江戸カワラケとほぼ同一の形態になるのがIII期である。おそらくIII期以降急速にカワラケの出土量は減少すると考えられる。県内では灯明具として用いられるカワラケはこの時期少なくなり、志戸呂産や瀬戸美濃産、信楽産の陶器製の灯明具が圧倒的に多く見られ、近世末期のカワラケの資料では地鎮や胞依カワラケを除いて余りないように思われる。焙烙は底部が丸い江戸市中に見られるものと同形態になる。この焙烙は団子状の耳をもつもので、丸底に砂目が付くタイプである。江戸遺跡における小林・両角編分類B I類に当たる。

最後に、空港南部工業団地内に所在する古宿・上谷遺跡及び上宿遺跡の調査成果を簡単にまとめてみる。古宿・上谷遺跡は中世後期には土豪層の墓地であったが、16世紀にはその痕跡をあまり見だせなくなる。その後17世紀前半ころ、再び墓地という埋葬の場になった可能性がある。その墓地が機能しなくなる17世紀半ば以降、新たに隣接する平坦な場所や斜面部を段状に成形した土地に住居が建てられ、安定した生活の場となっていったようである。その後18世紀後半以降集落の中心が上宿遺跡へと移った。

- 注1 鳴田浩司・岡田光広 1998『空港南部工業団地埋蔵文化財調査報告書1』（財）千葉県文化財センター
 2 藤井直正・川口宏海・小長谷正治 1998「近世の醸造遺構と変遷－伊丹郷町遺跡の発掘調査より－」日本考古学協会第64回総会研究発表要旨 日本考古学協会
 3 渋江芳浩 1987「近世農家のイメージ」貝塚40 物質文化研究会
 4 市川正史 1992「中世から近世の集落」『神奈川県下における集落変遷の分析』神奈川県立埋蔵文化財センター

写 真 图 版



井戸遺跡

上宿遺跡

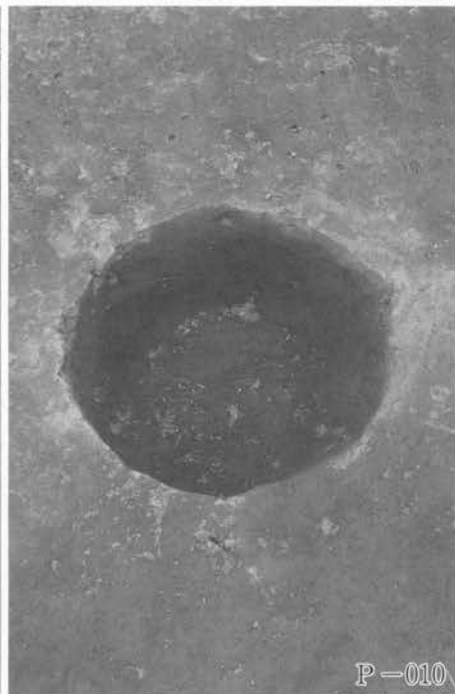
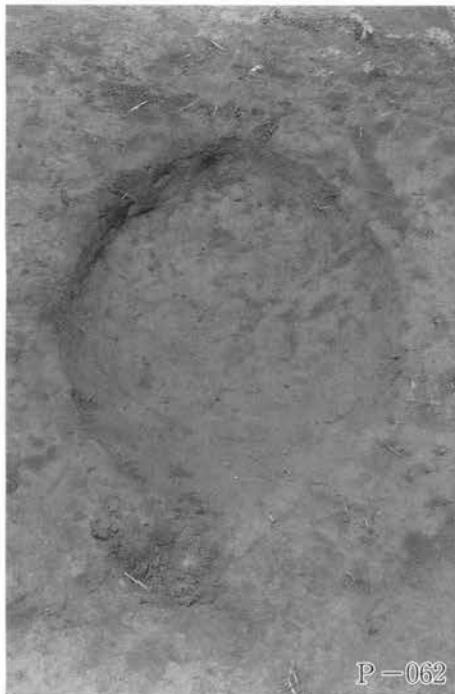
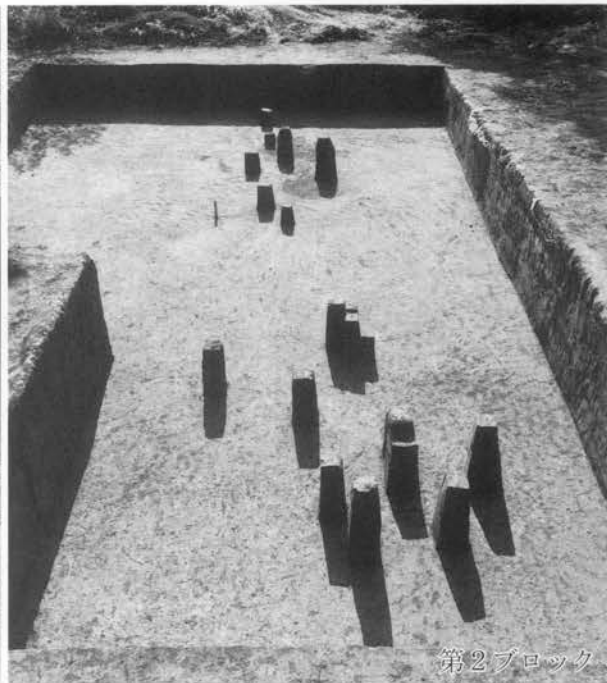
大畑切遺跡

古宿・上谷遺跡

遺跡周辺航空写真（昭和58年撮影、約1/6,500）

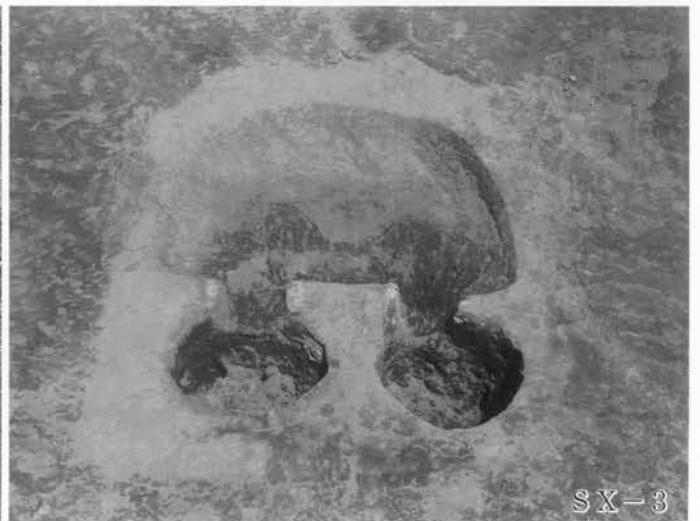
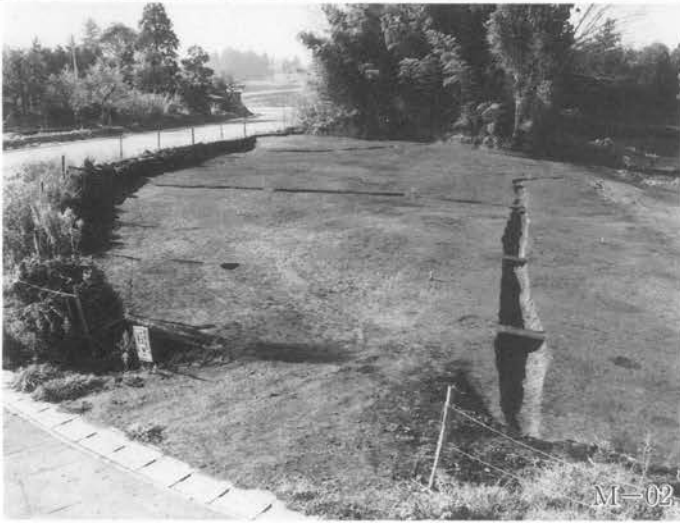
図版 2 上宿遺跡





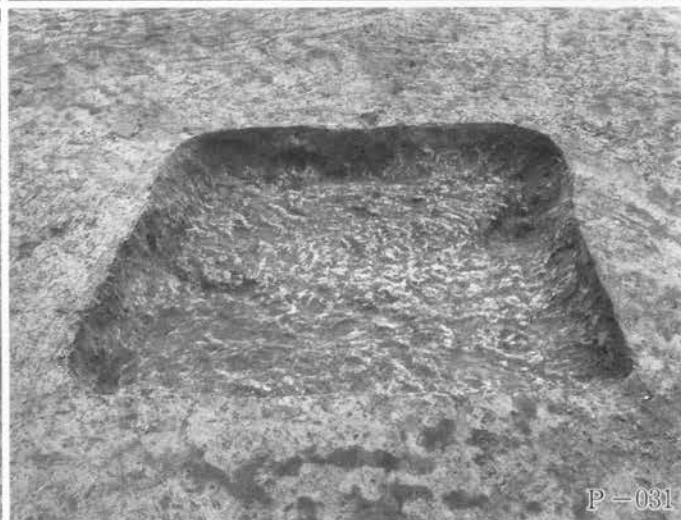
图版 4 上宿遺跡





図版6 上宿遺跡

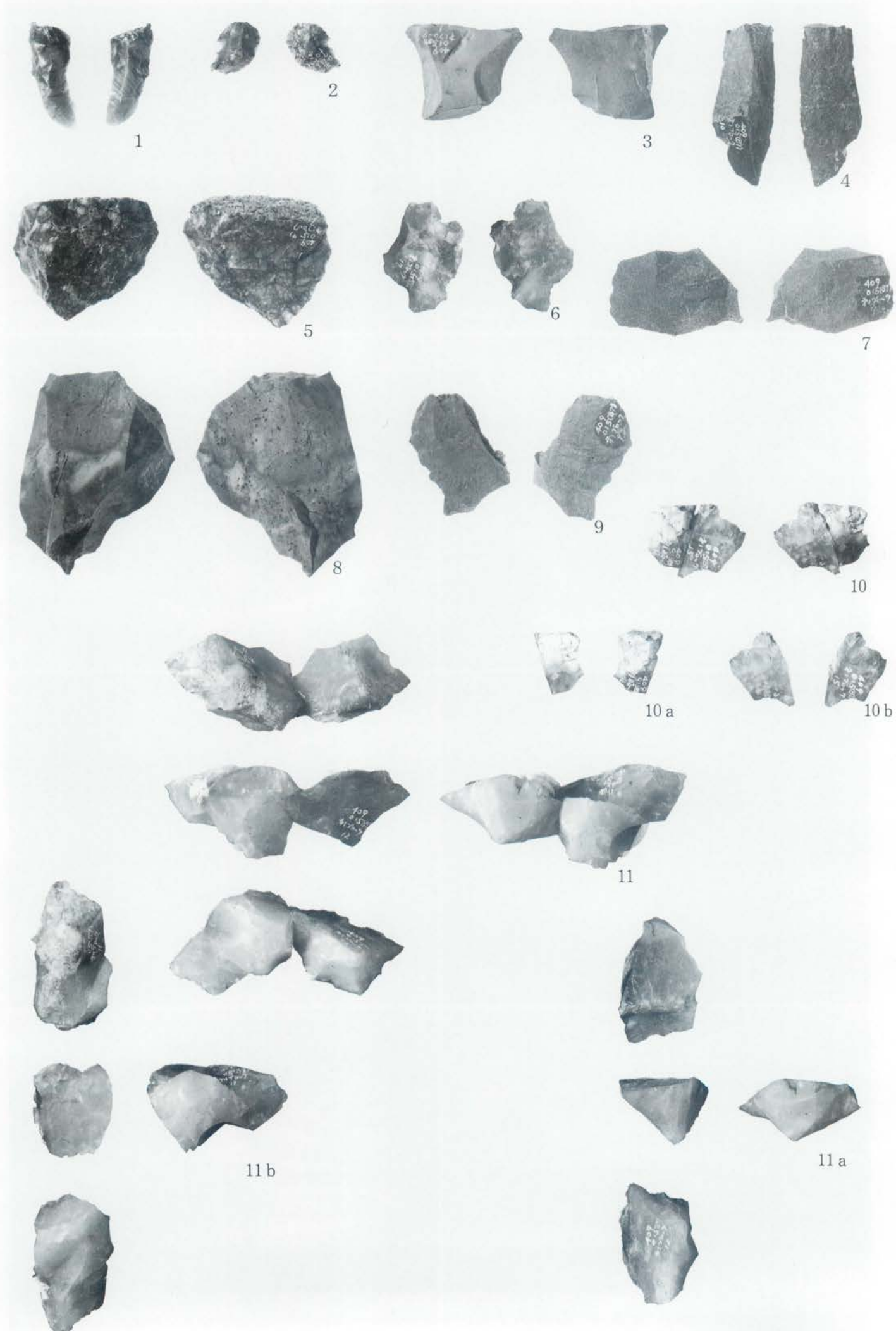


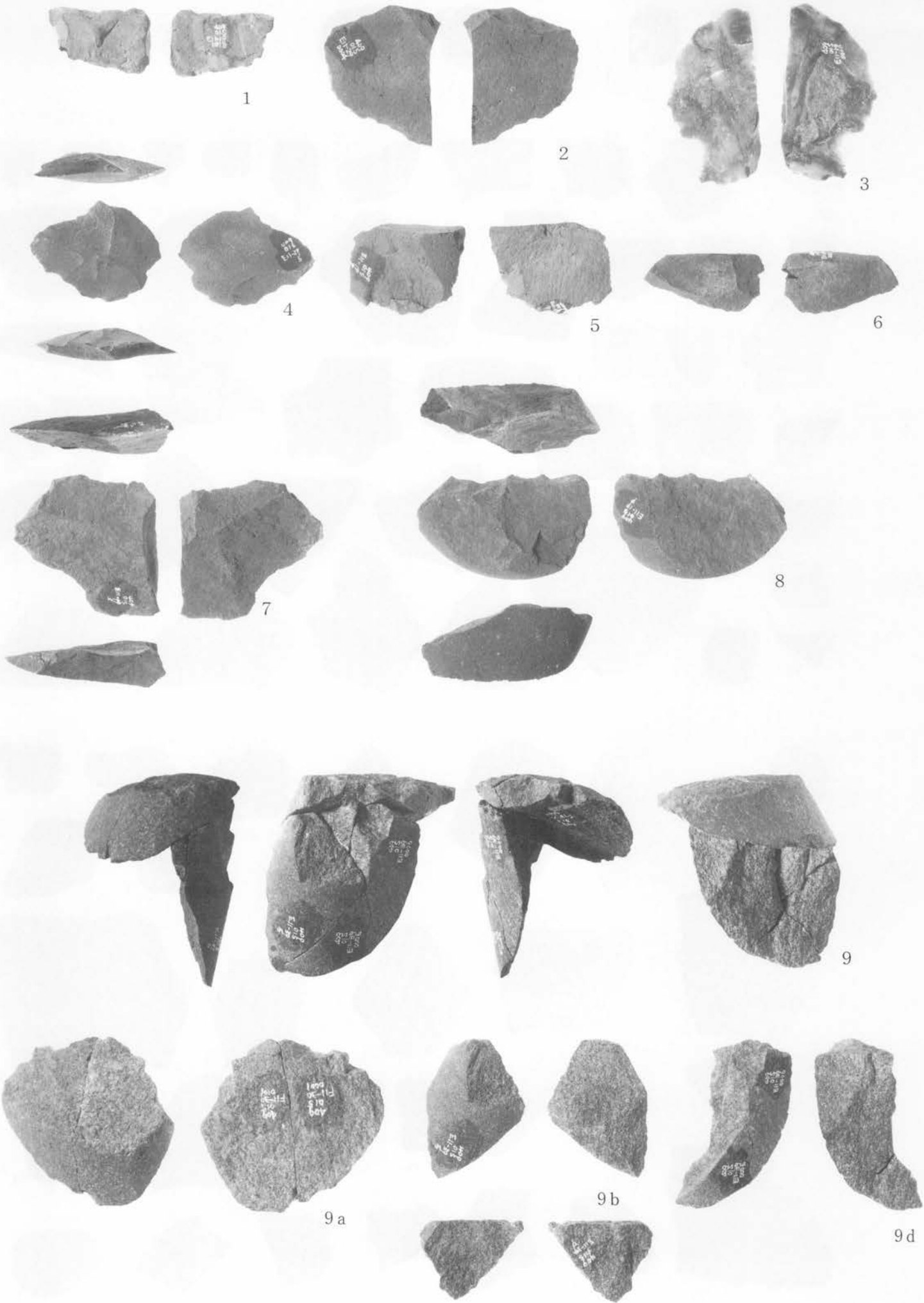


図版 8 上宿遺跡









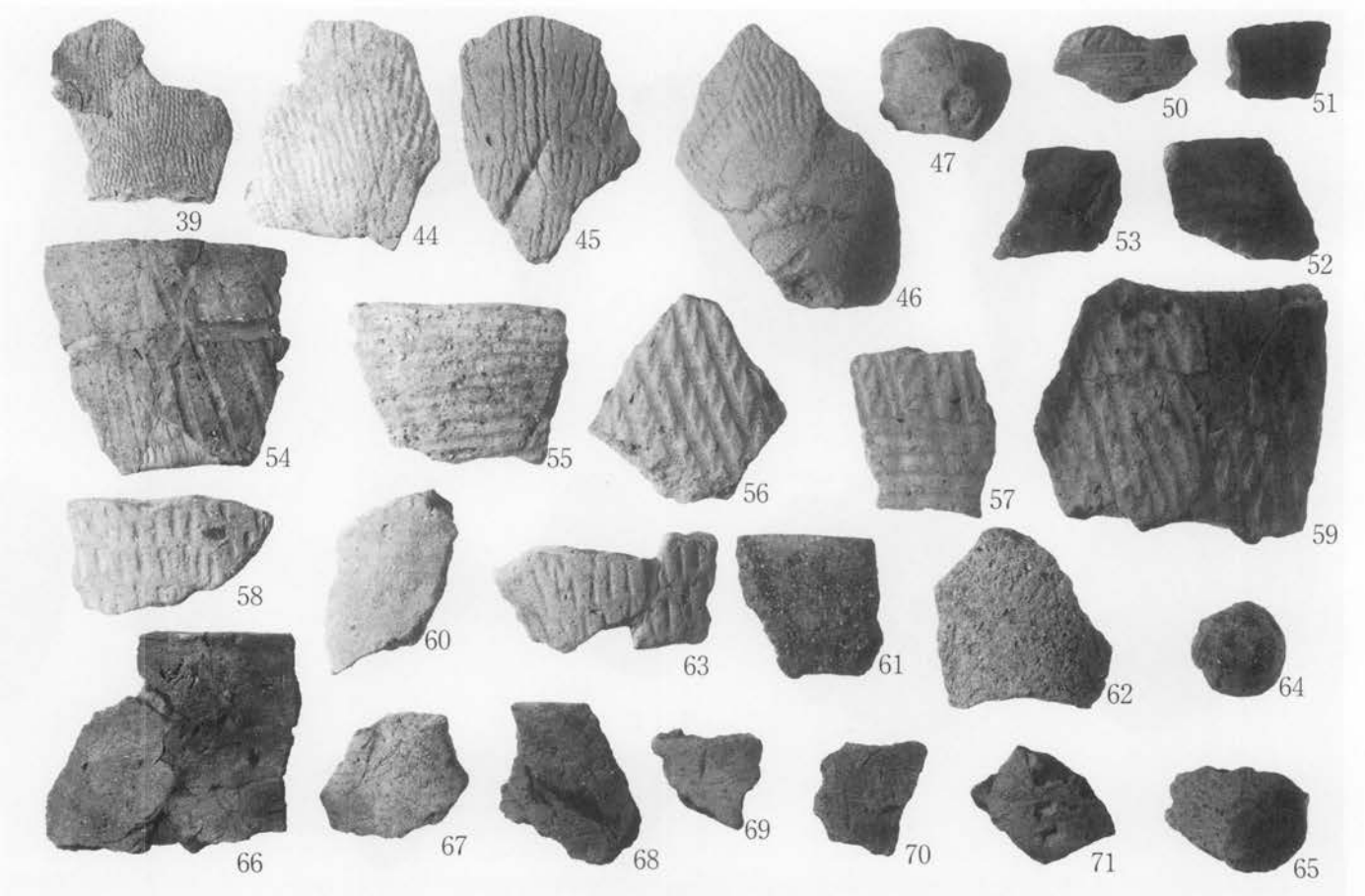
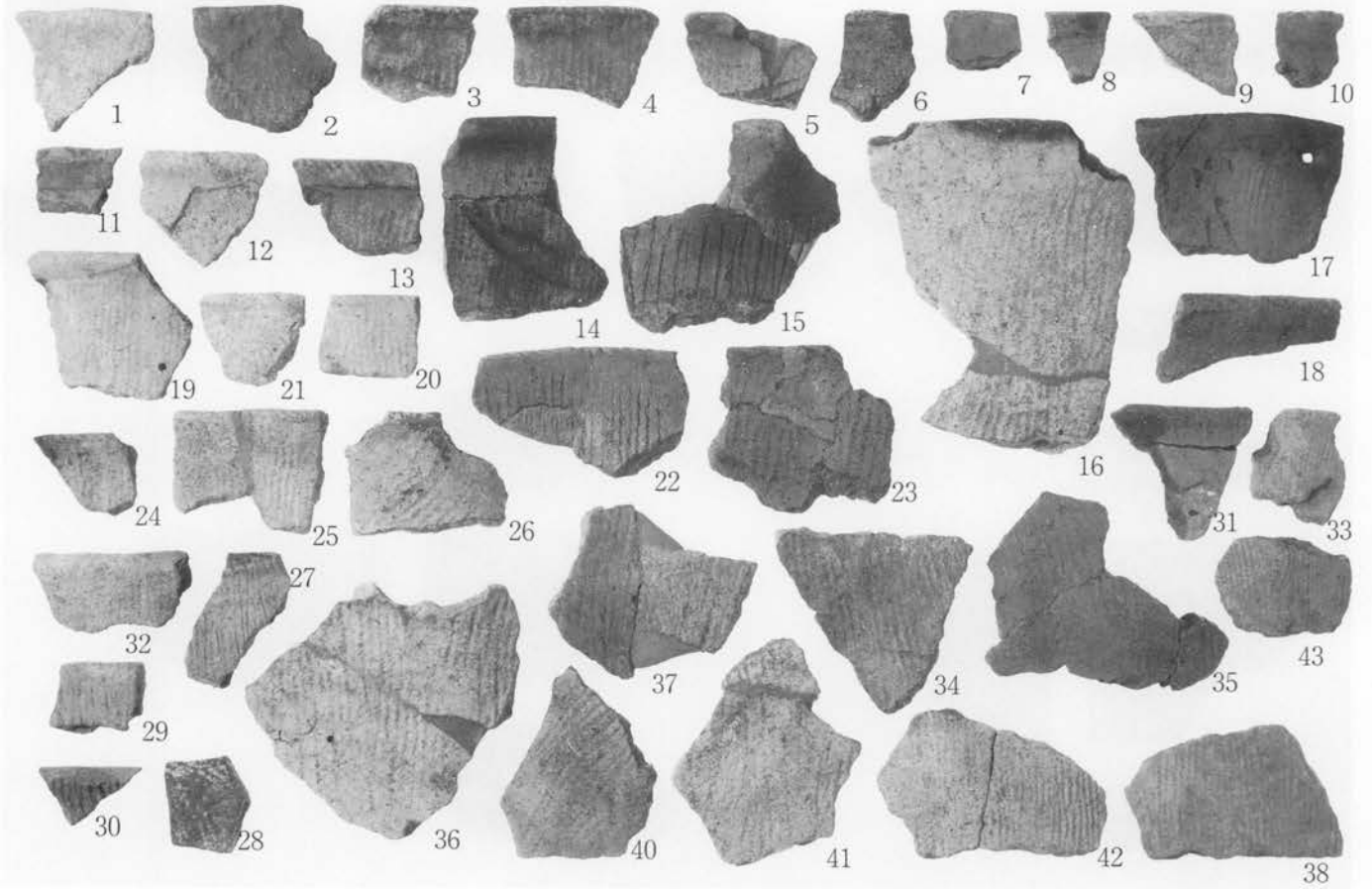
図版12 上宿遺跡

第3ブロック

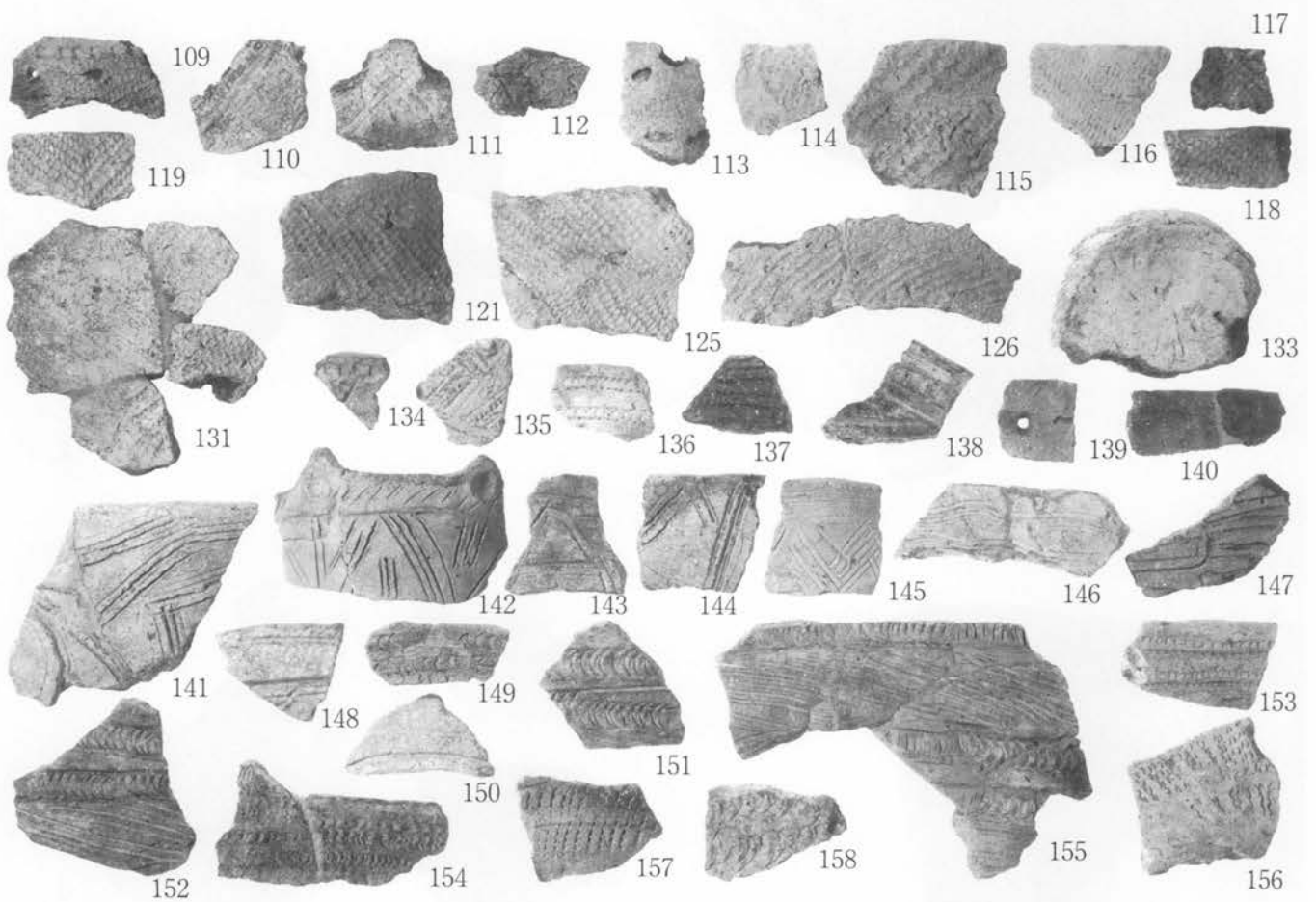
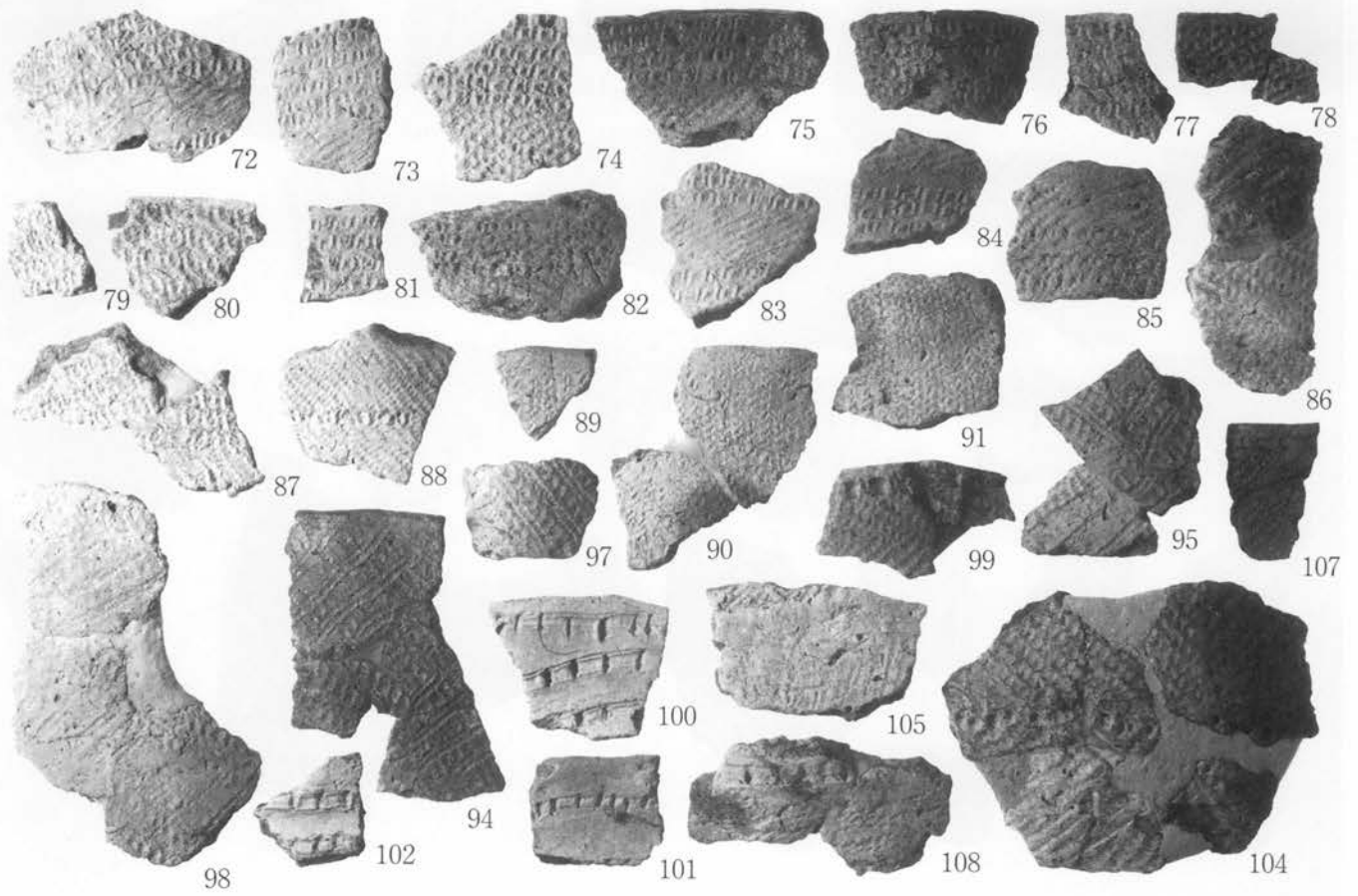
単独出土



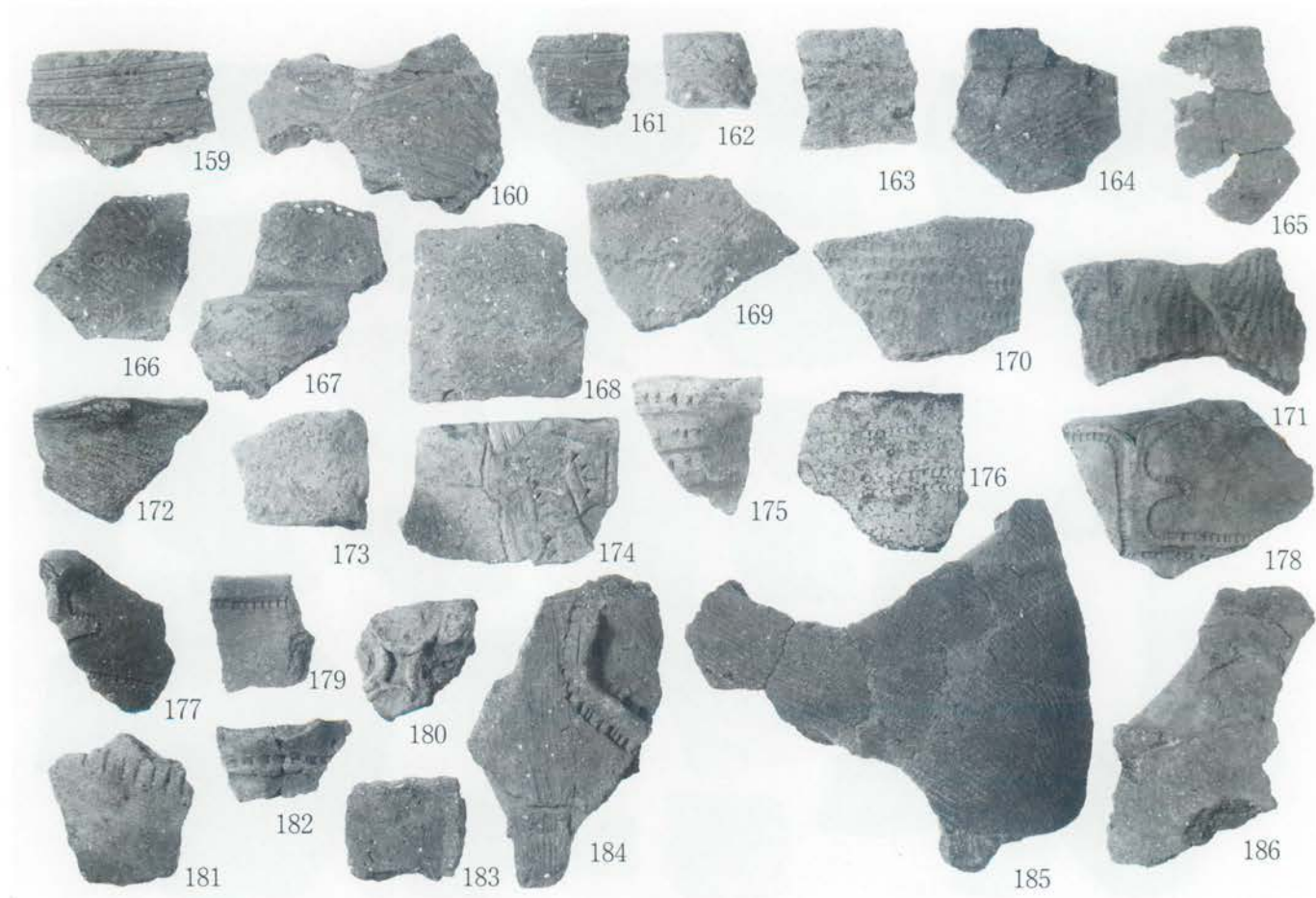
旧石器時代遺物 (3)

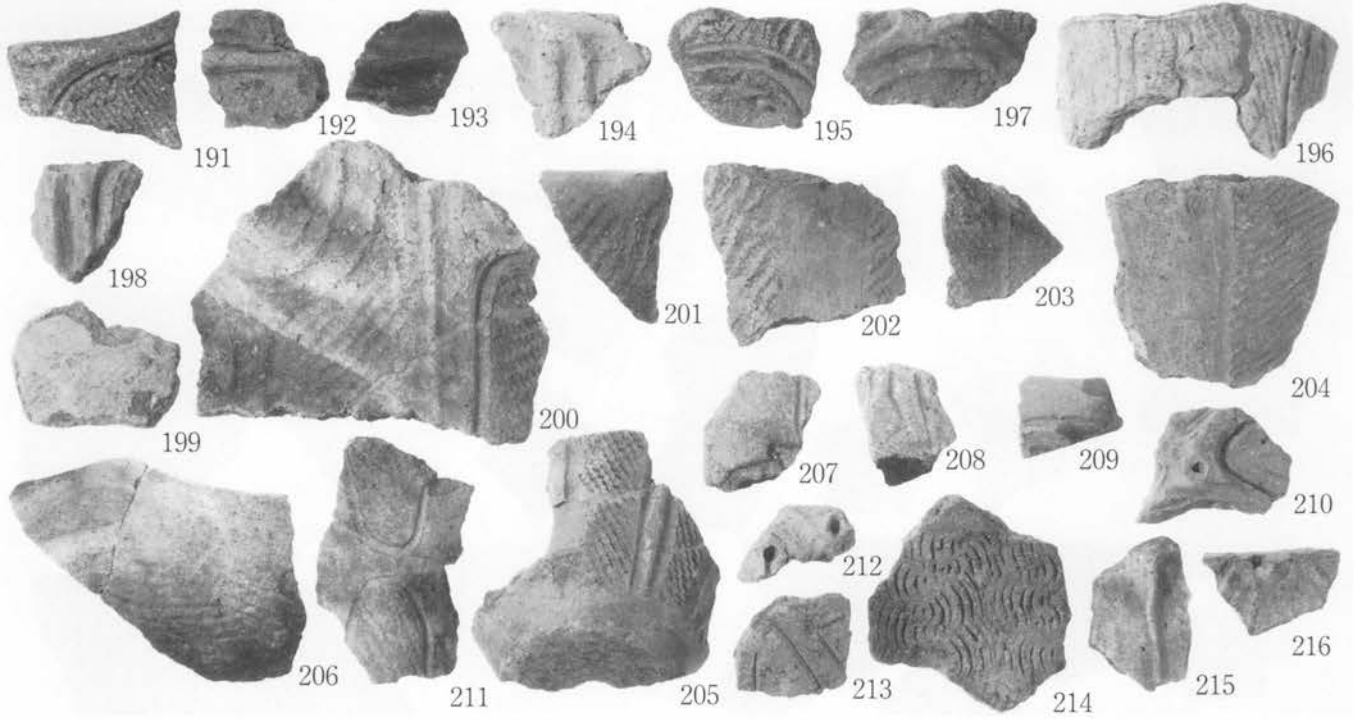


グリッド出土縄文土器 (1)



図版14 上宿遺跡





217



218



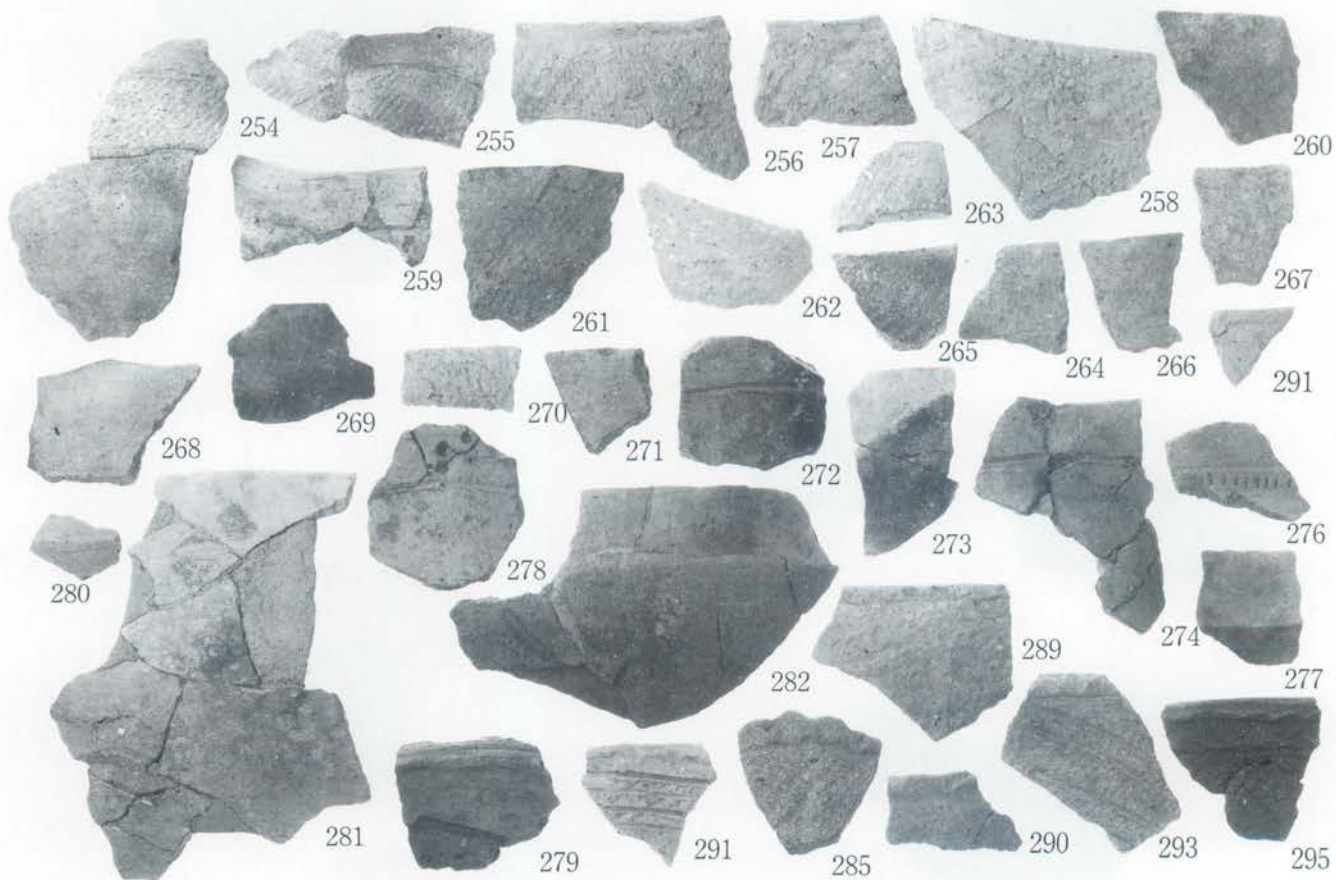
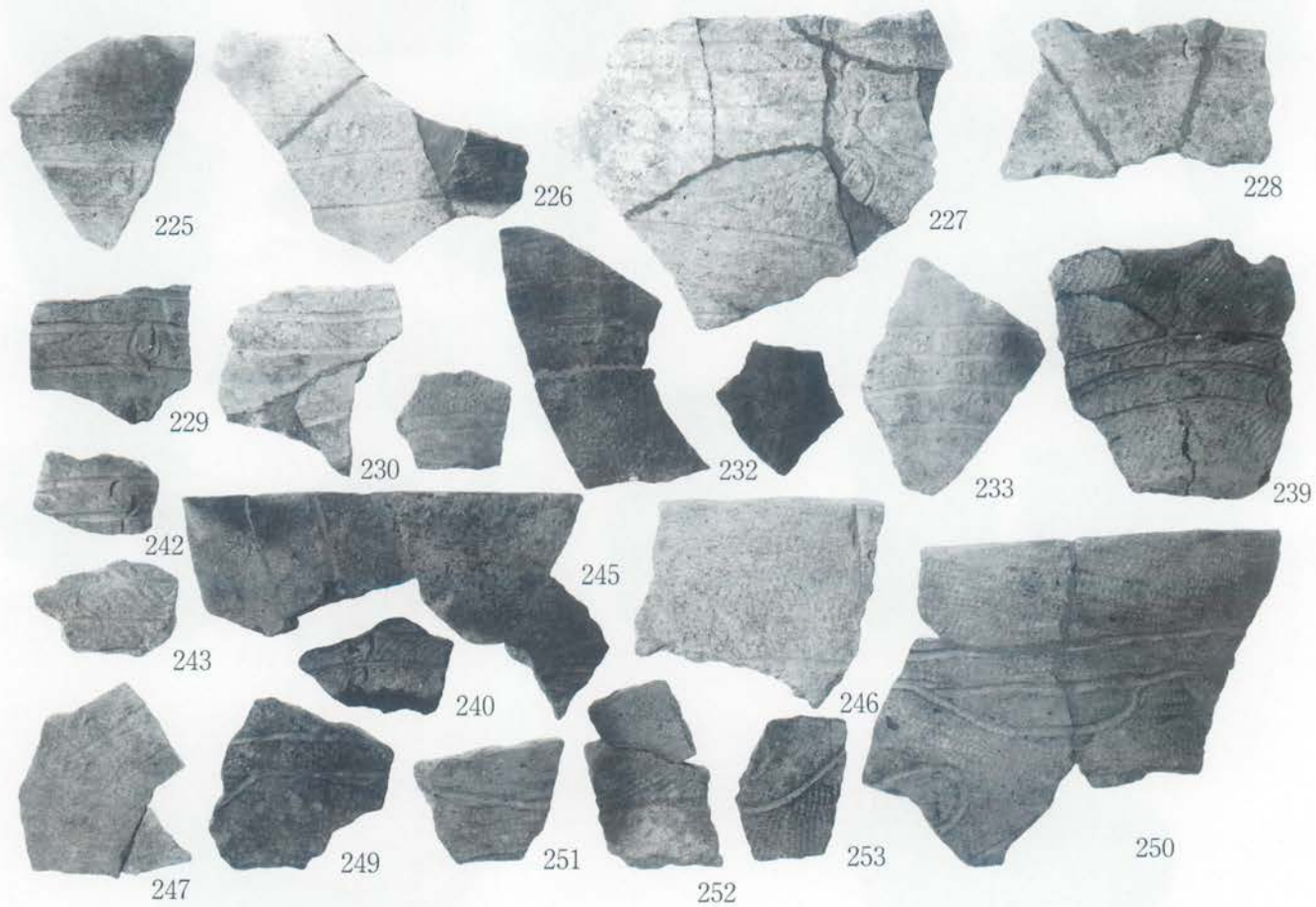
221



222



220





298



301



299・300



303・304



302



305



224



223



332



306



309

307



308



314



311



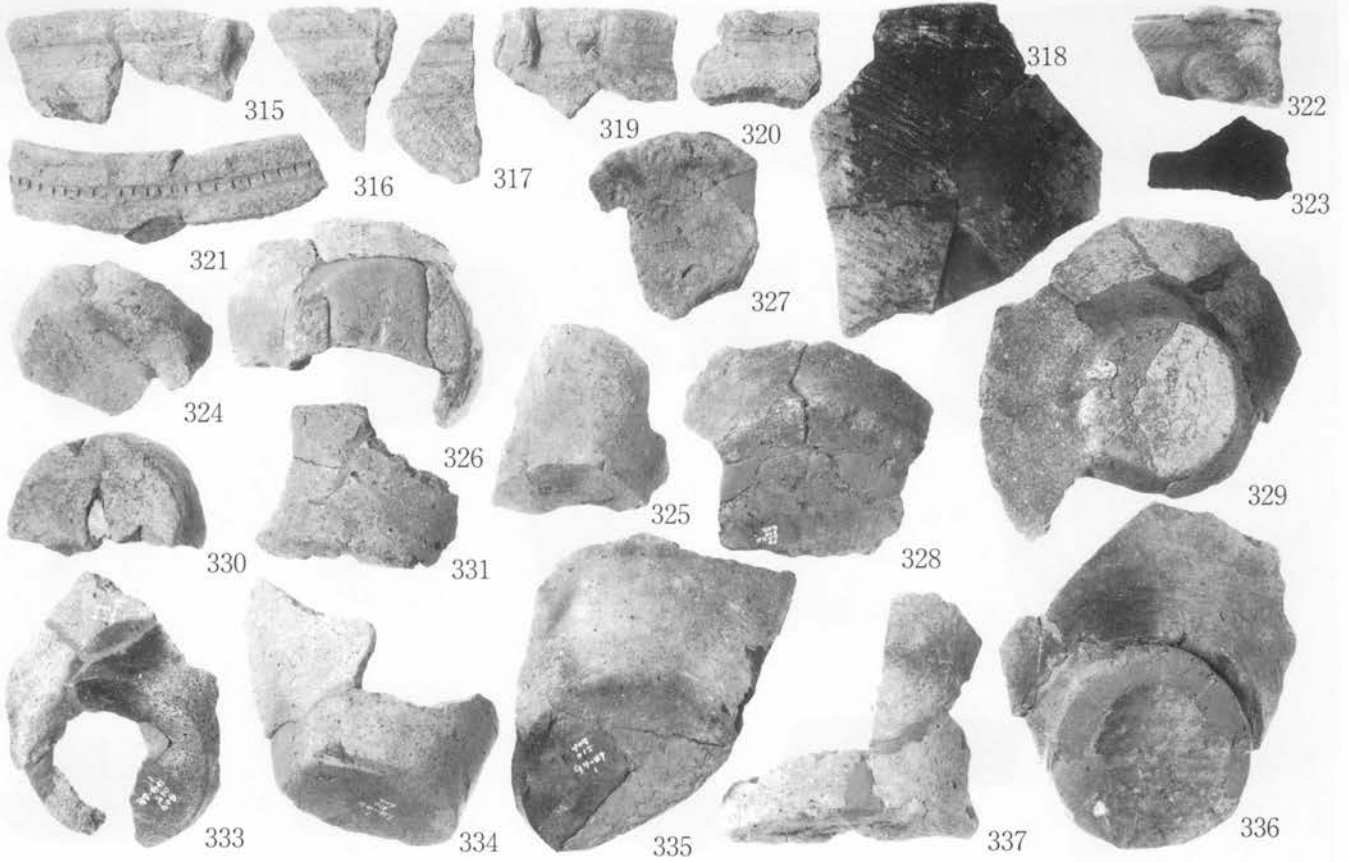
313



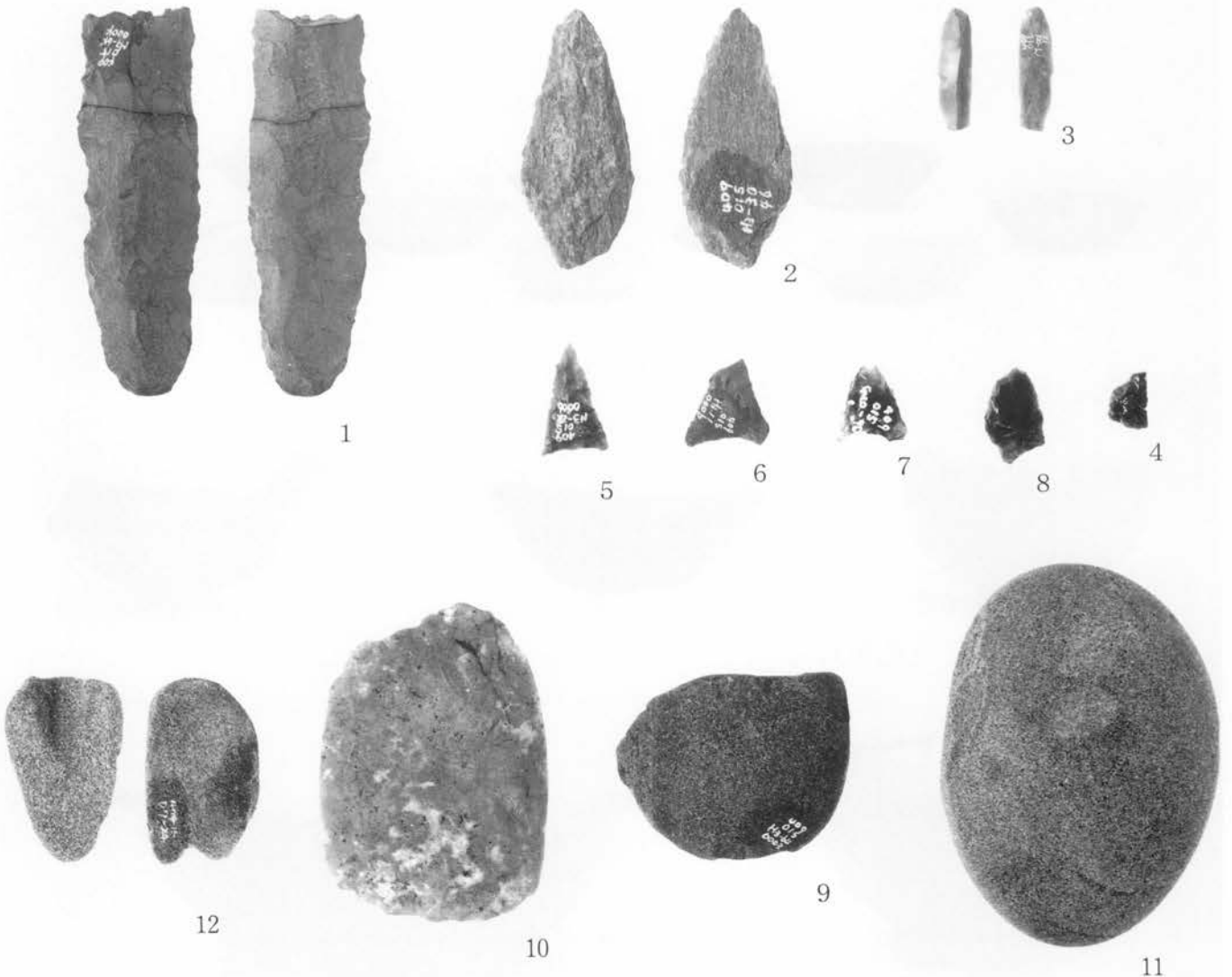
312



310

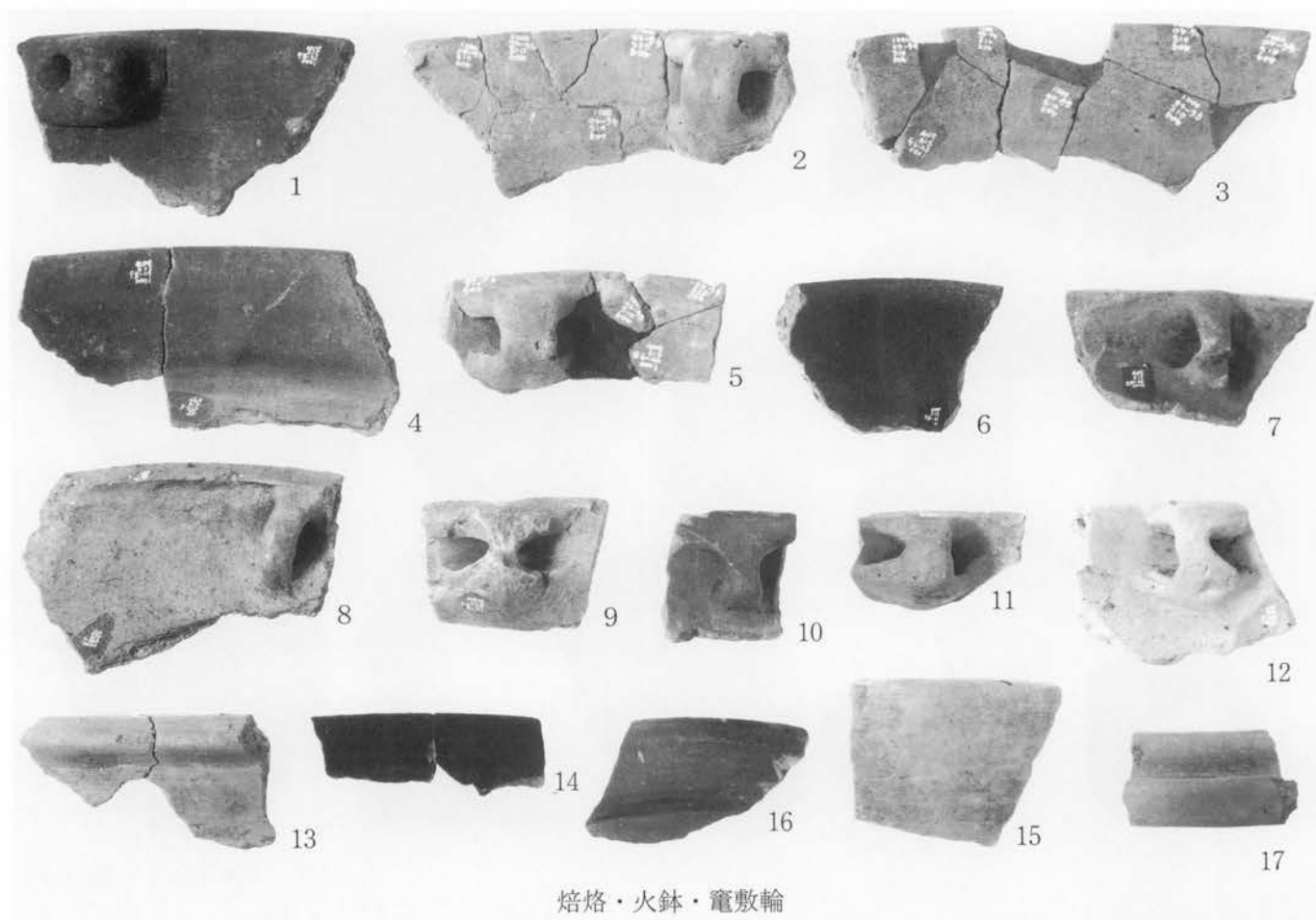


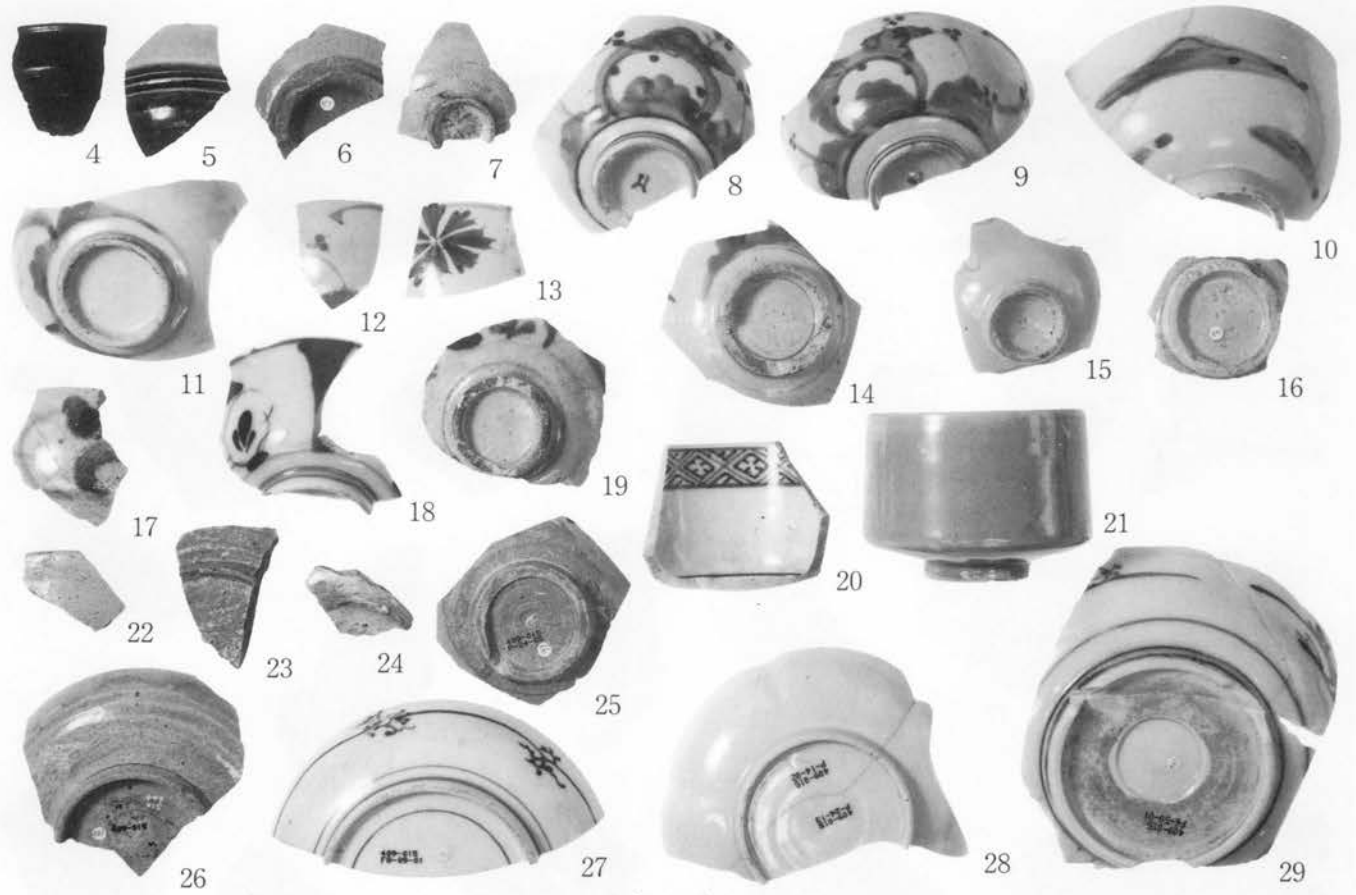
グリッド出土縄文土器 (8)



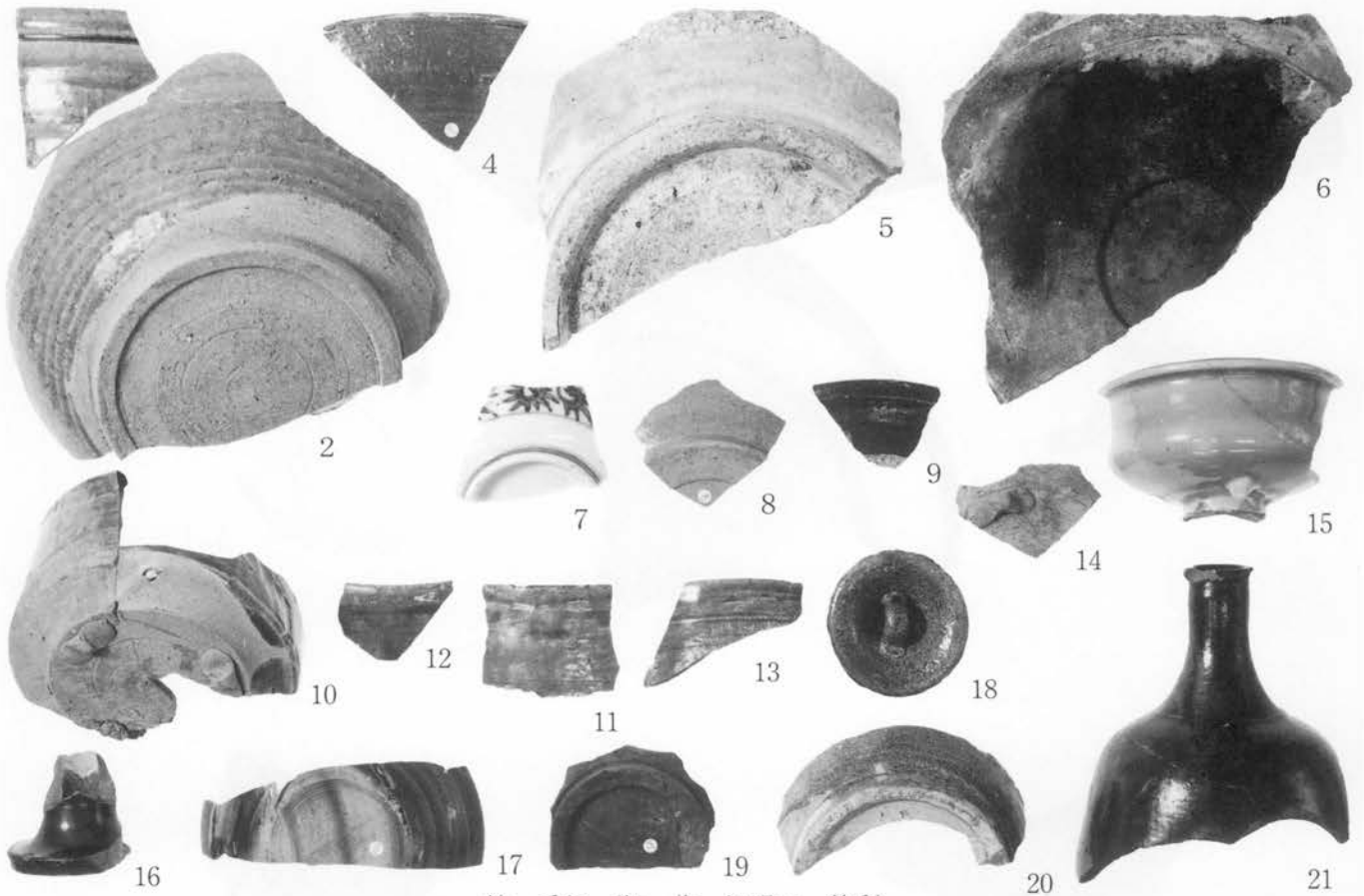
グリッド出土縄文時代石器

図版20 上宿遺跡





碗・皿類



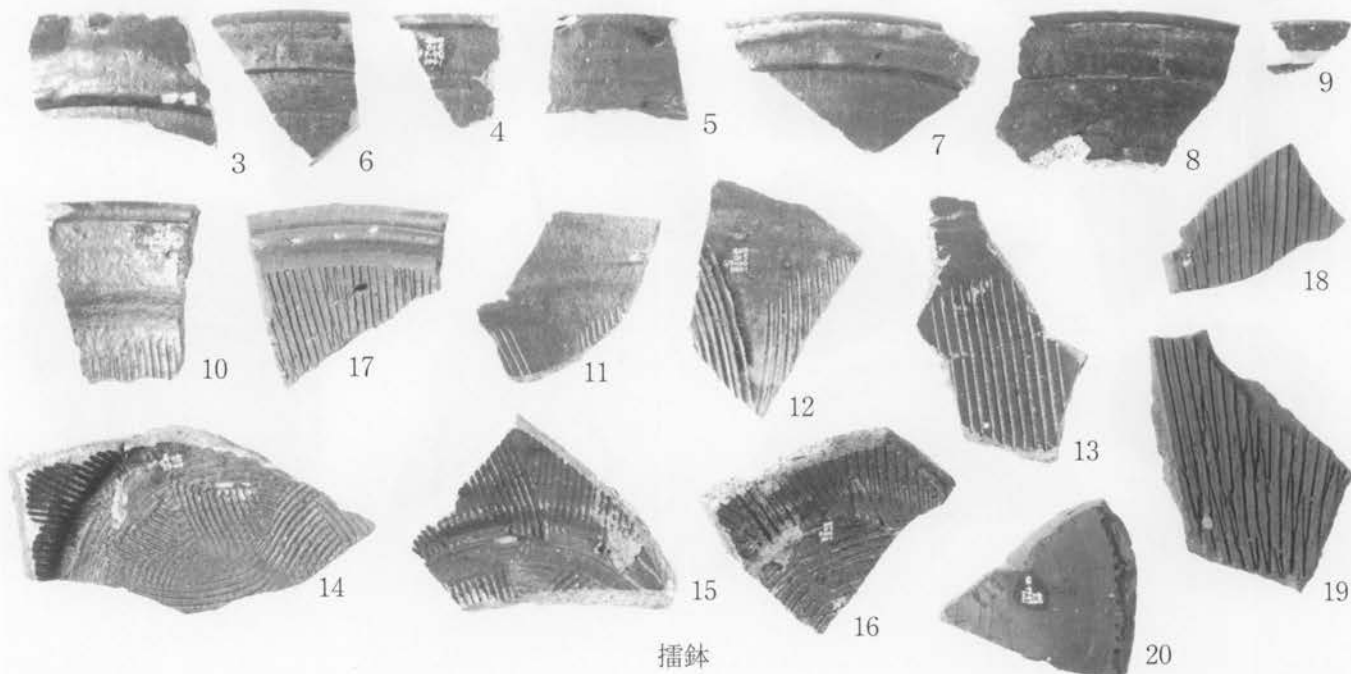
鉢・香炉・瓶・蓋・灯明皿・德利



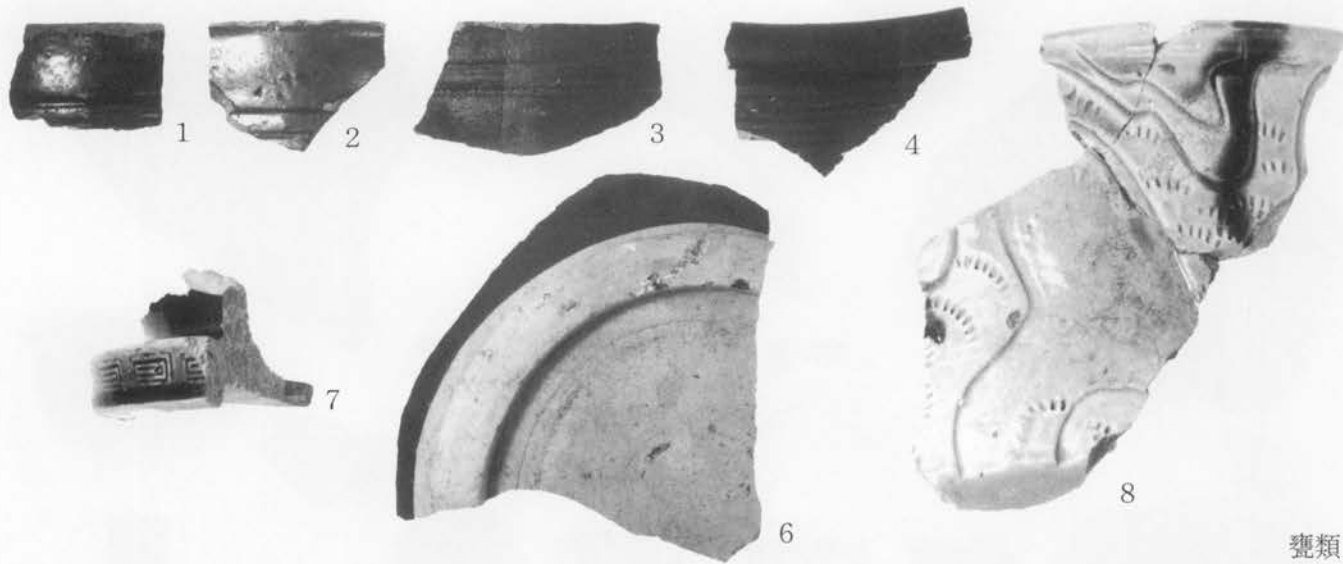
播鉢1



播鉢2



播鉢



甕類



甕類5



甕類9



土人形・泥めんこ



賽子



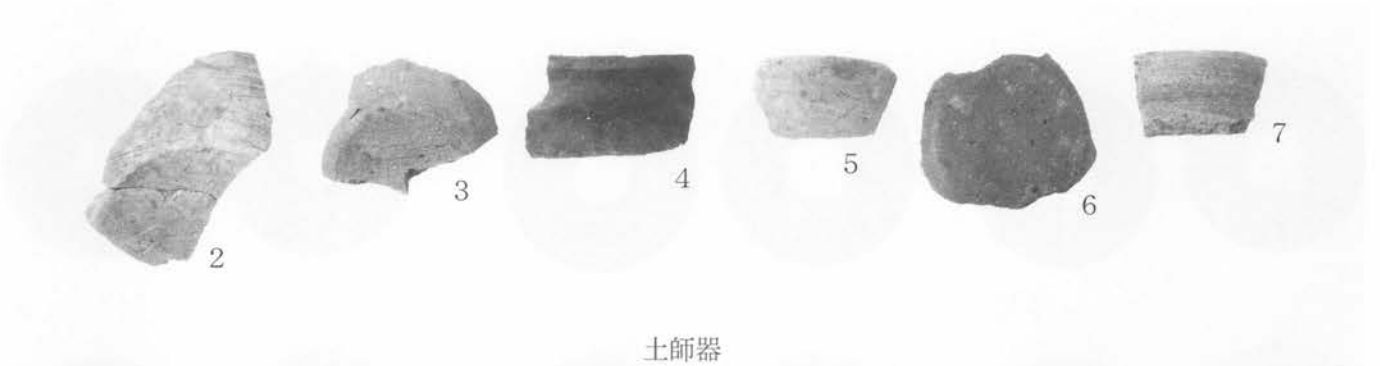
石臼



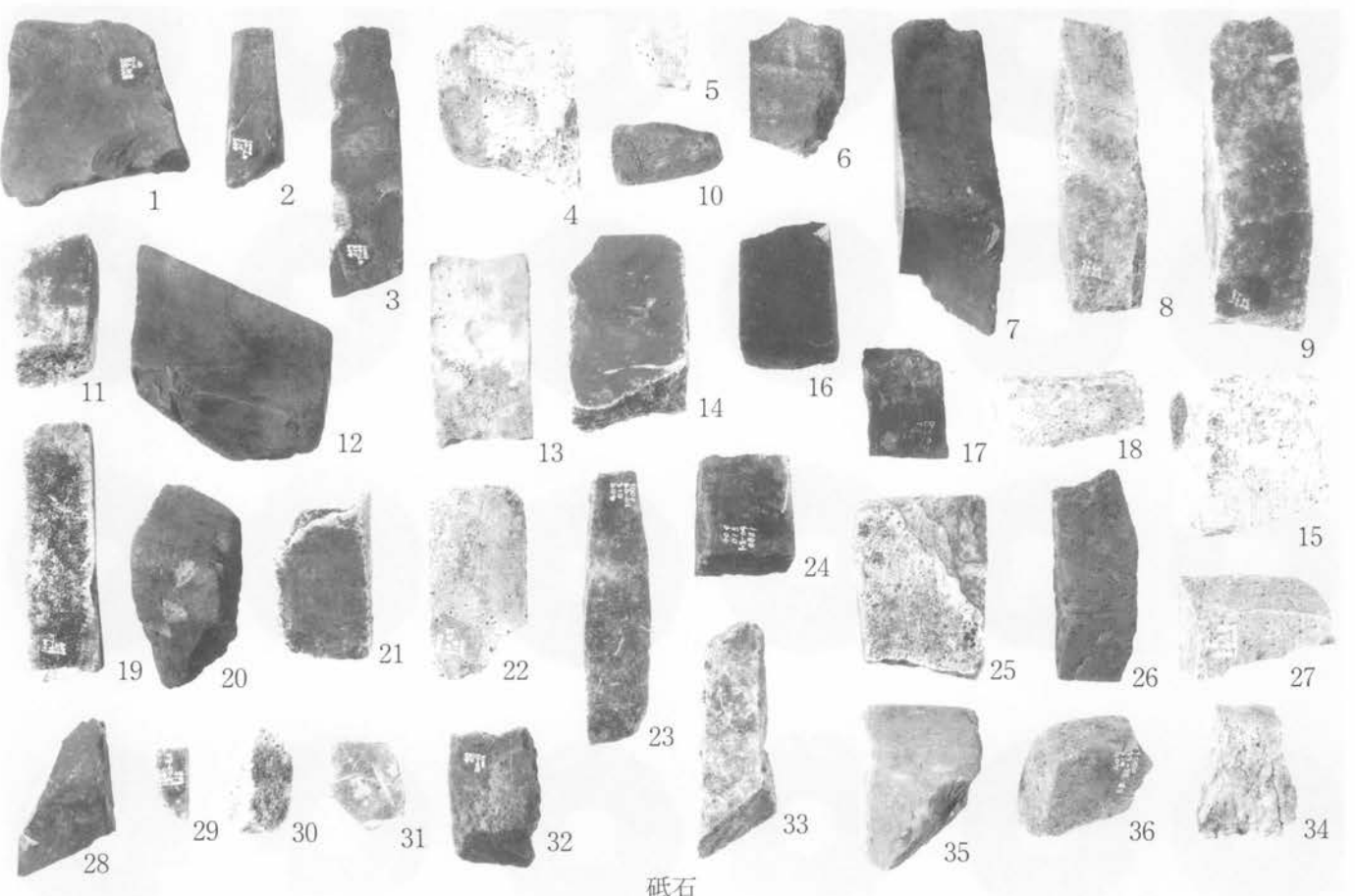
土師器 1



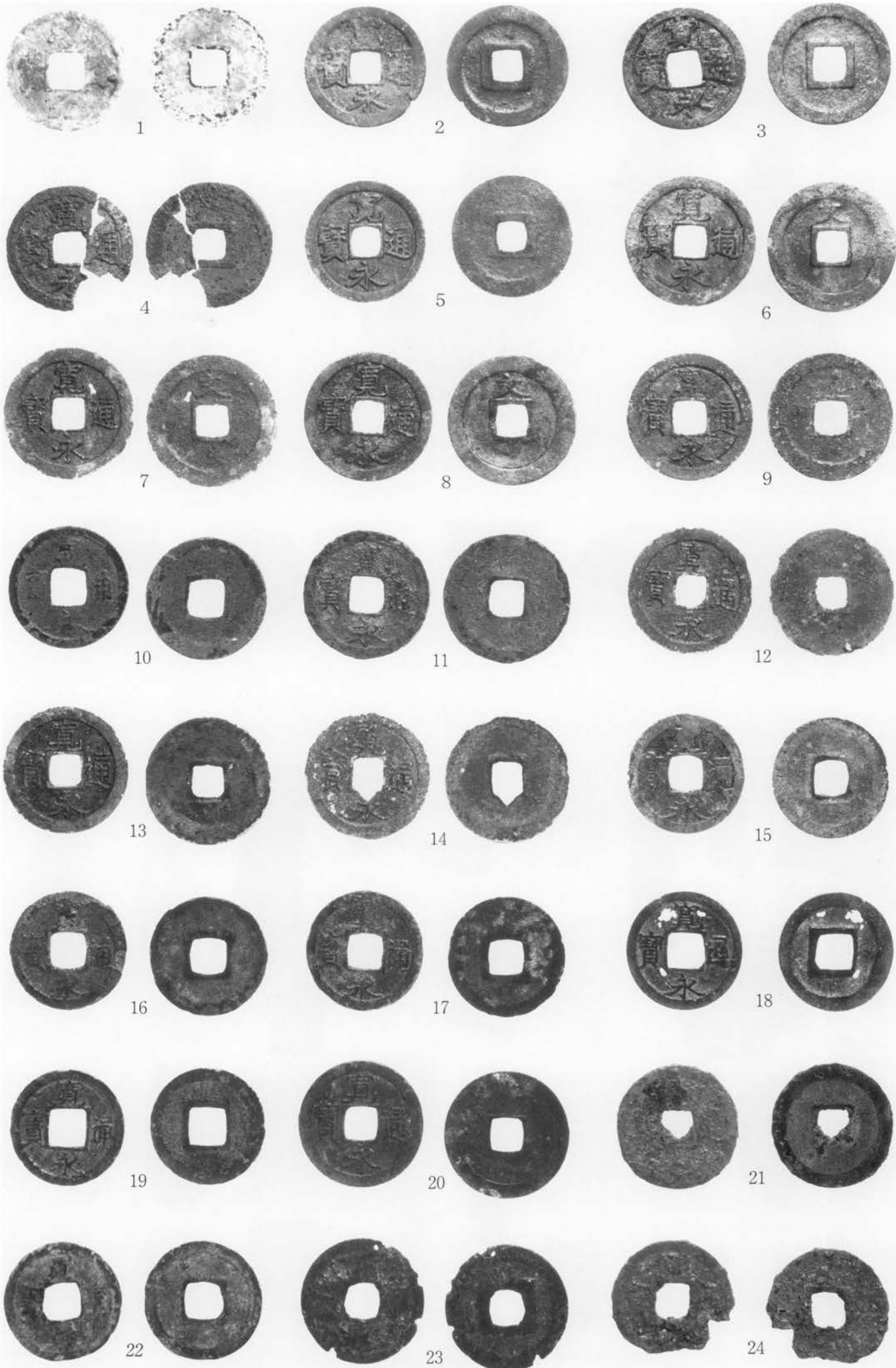
土師器 8

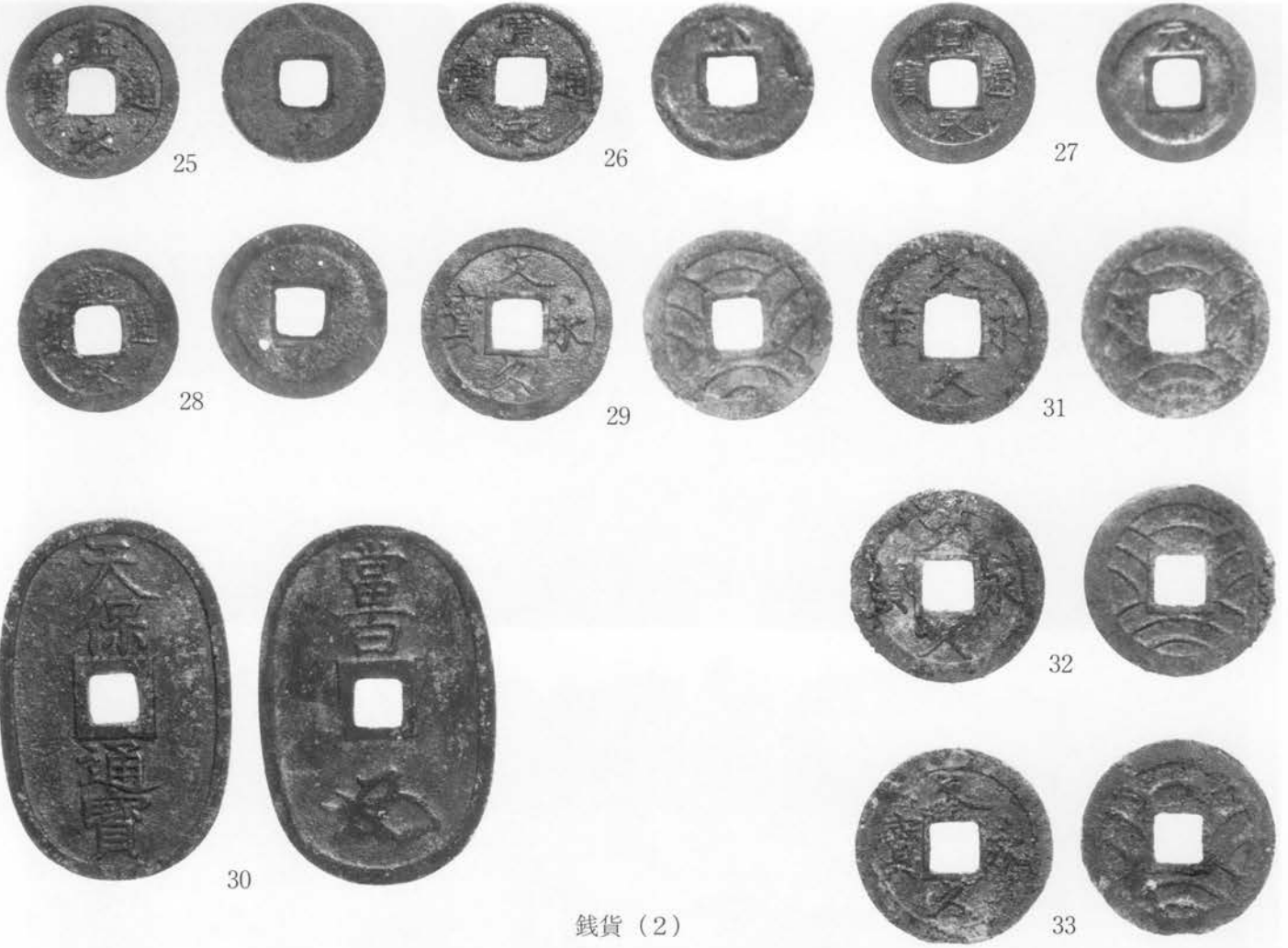


土師器

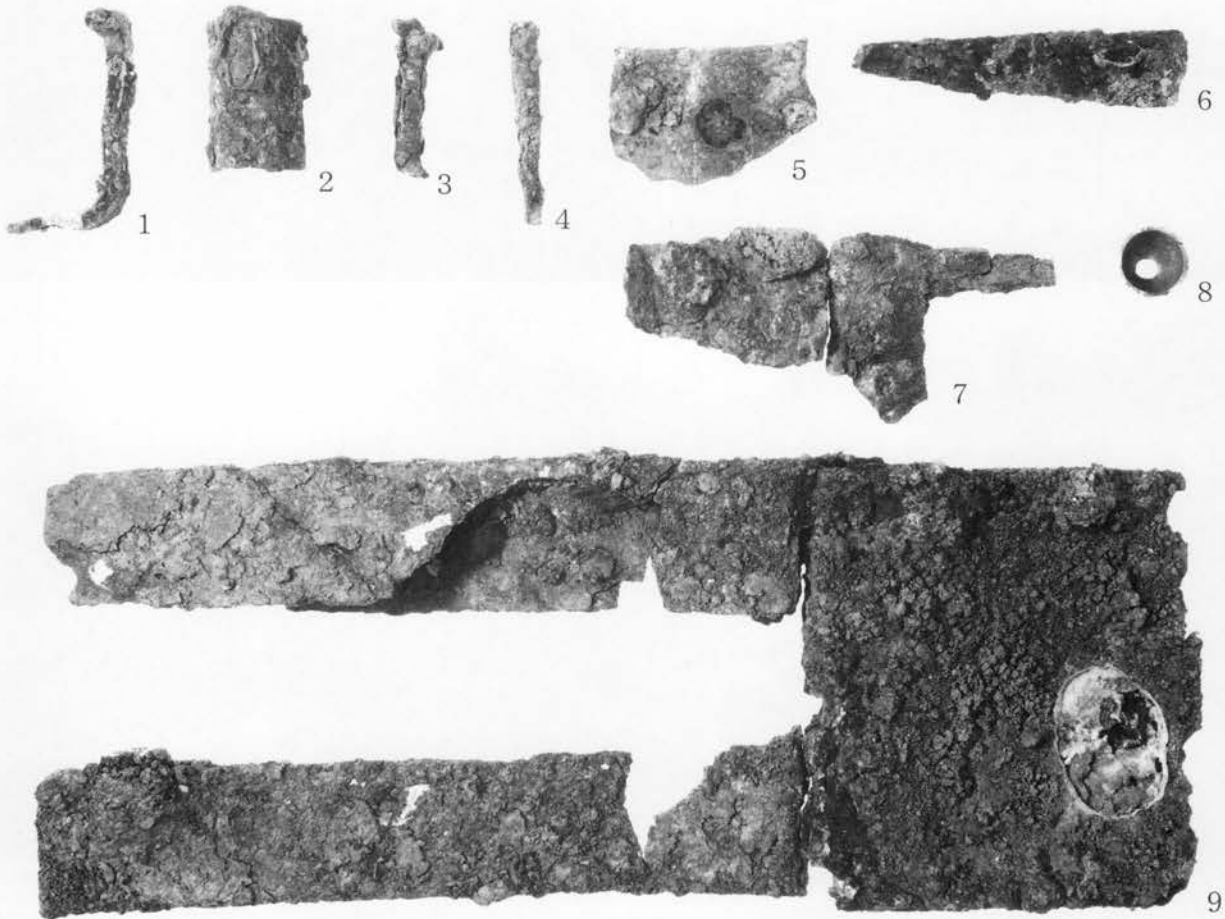


砥石





錢貨 (2)



金属製品





旧石器



P-006



P-007



P-001



P-002



P-003



P-004



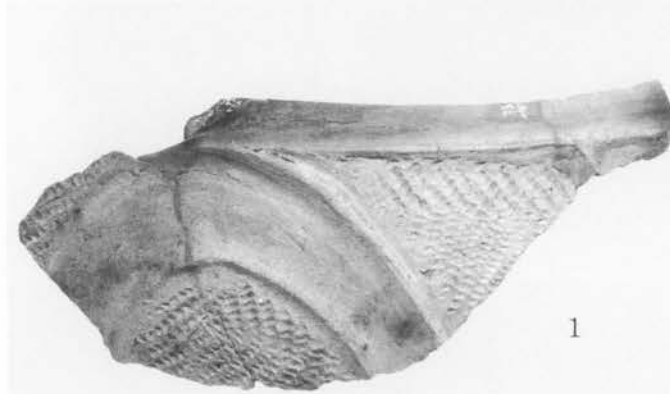
P-005

図版28 大堀切遺跡



1

旧石器時代遺物



1



2



4



3

P-007土坑出土遺物

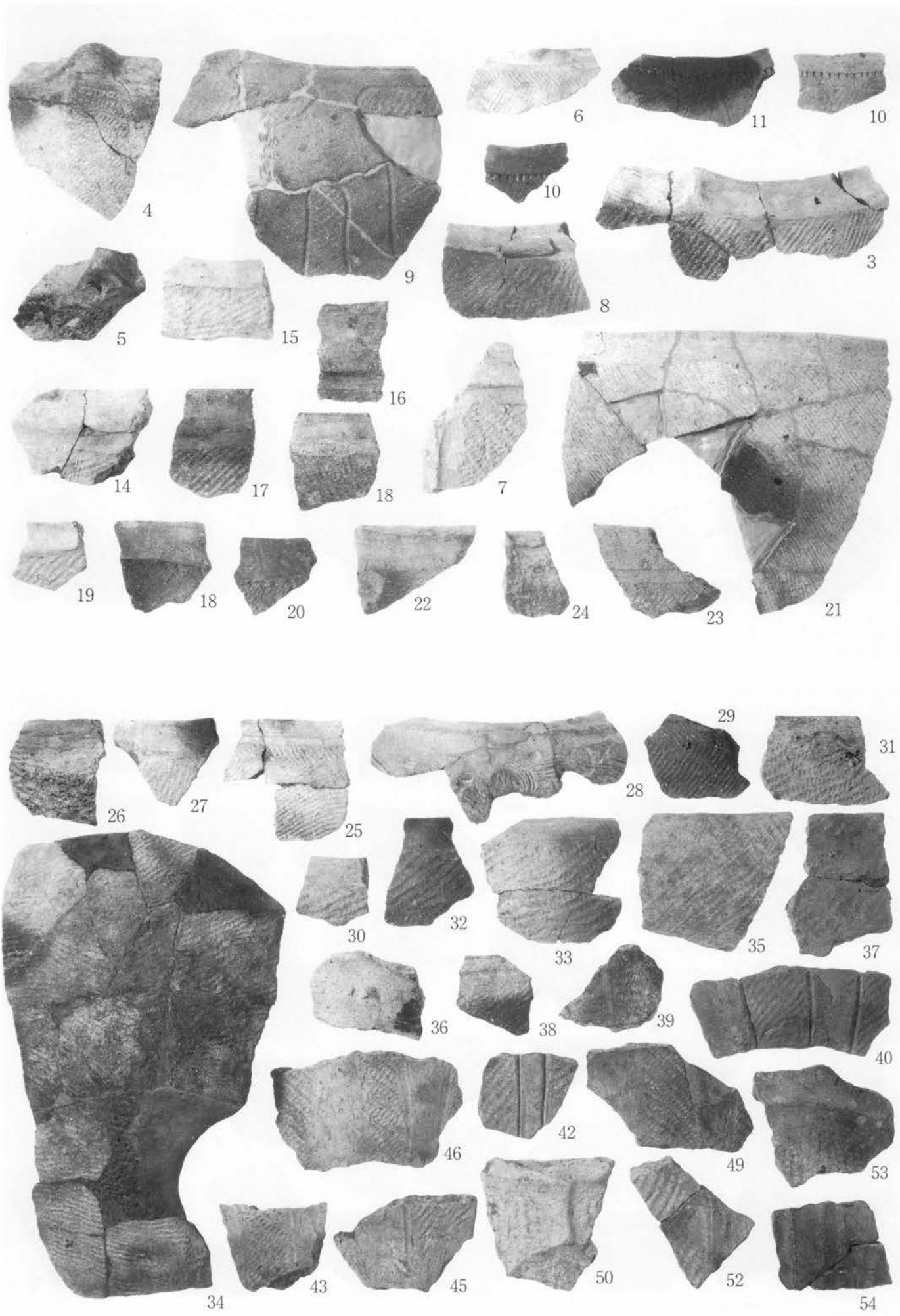


1

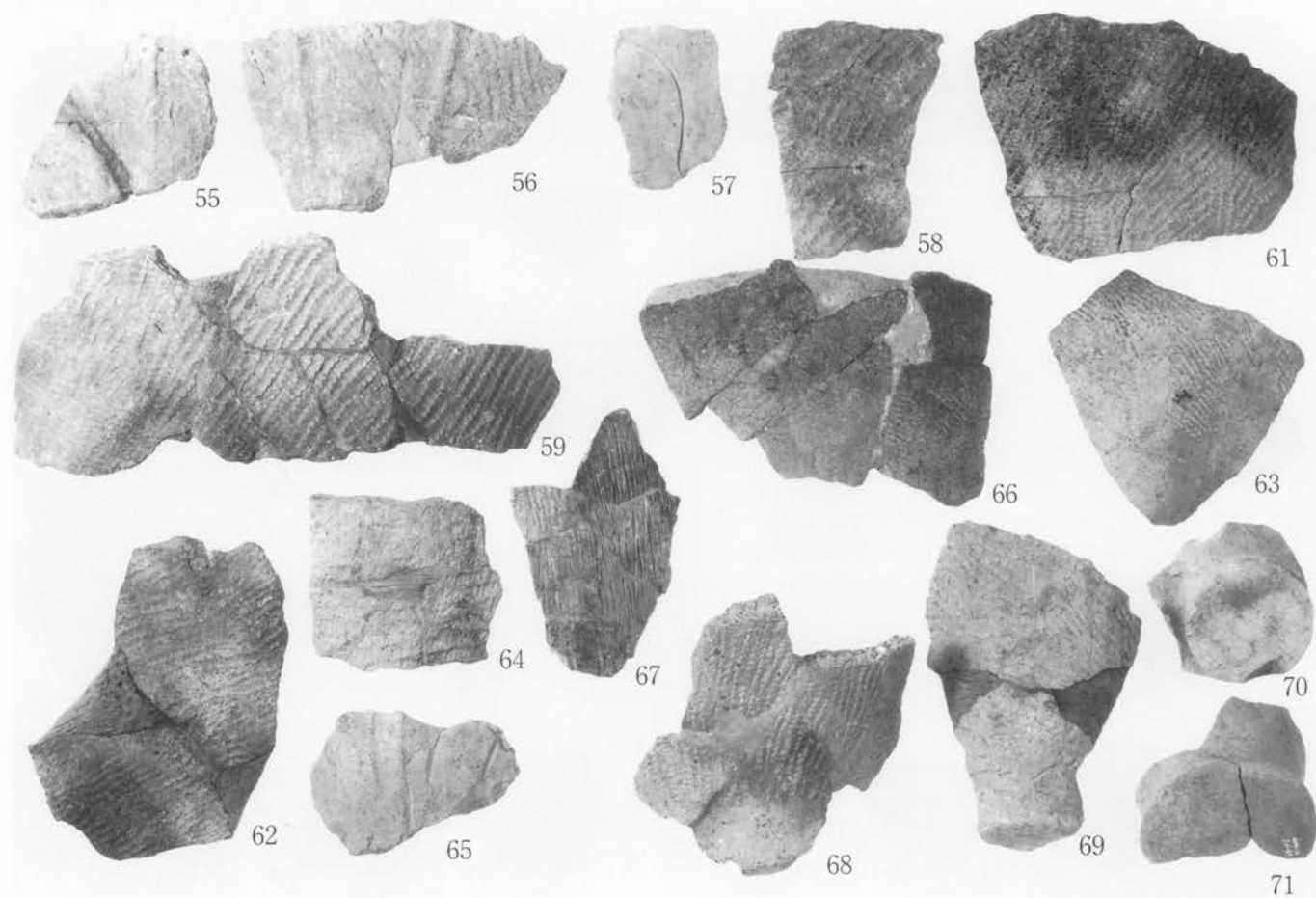


2

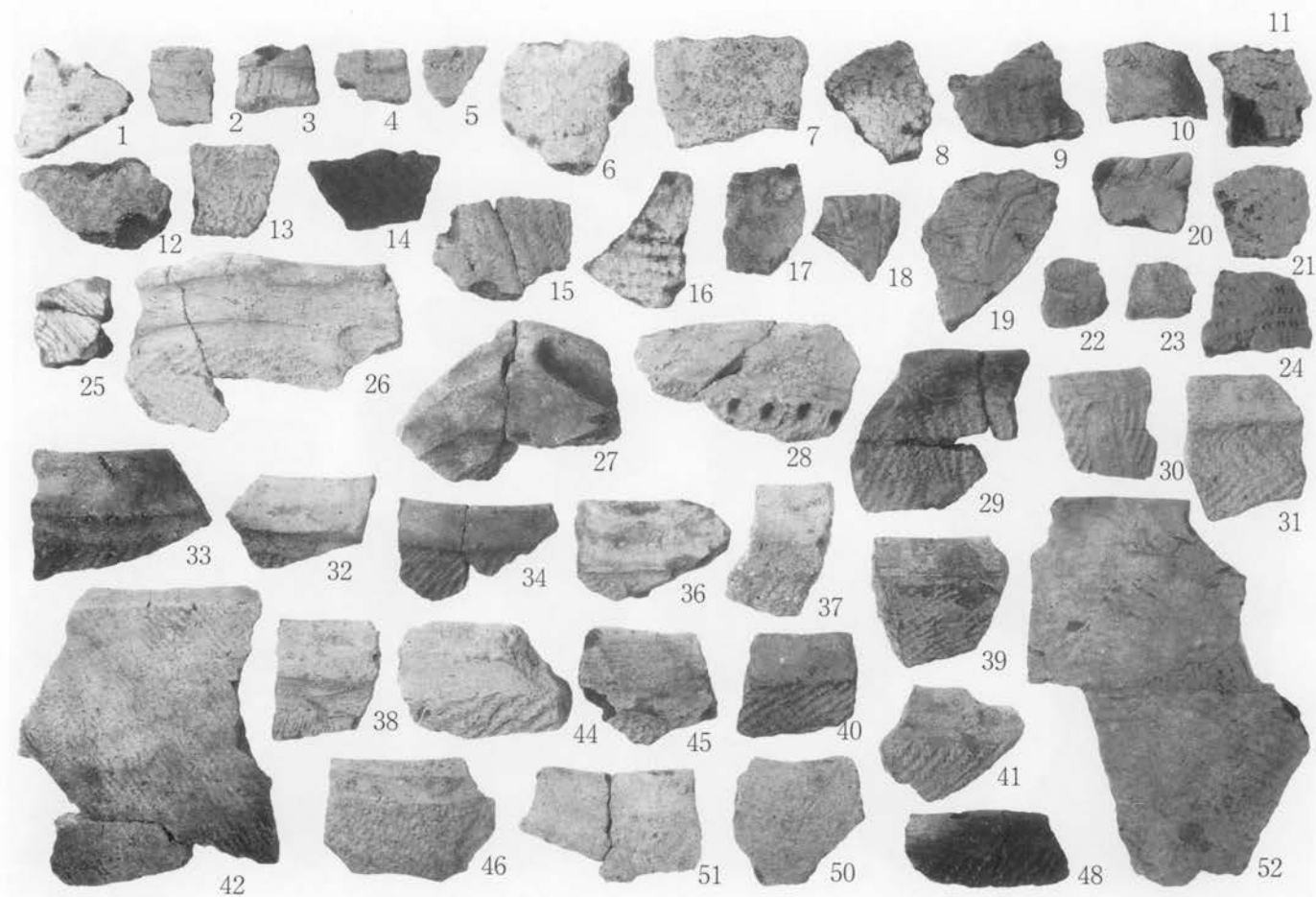
P-007土坑付近出土土器(1)



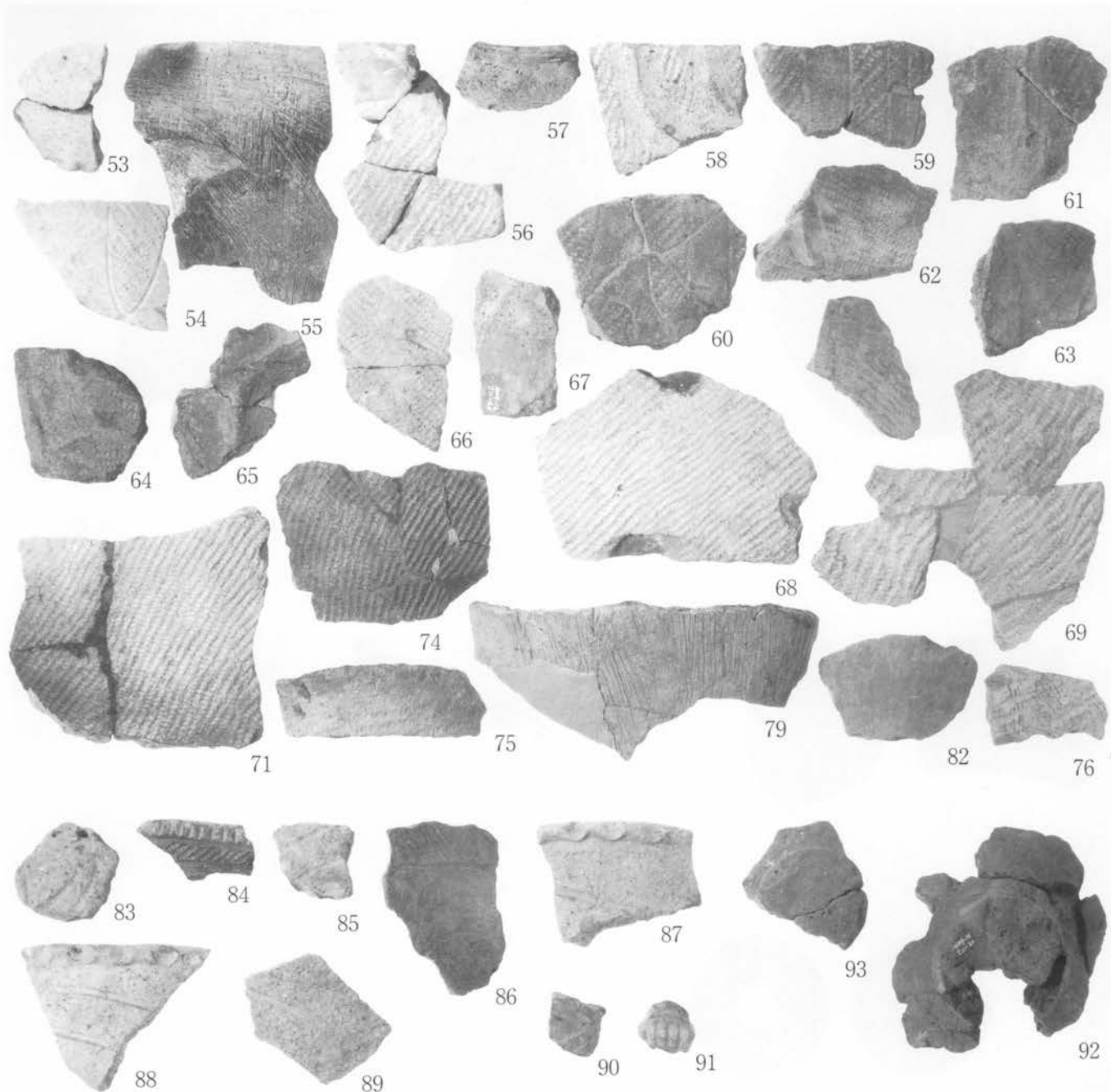
P-007土坑付近出土土器(2)



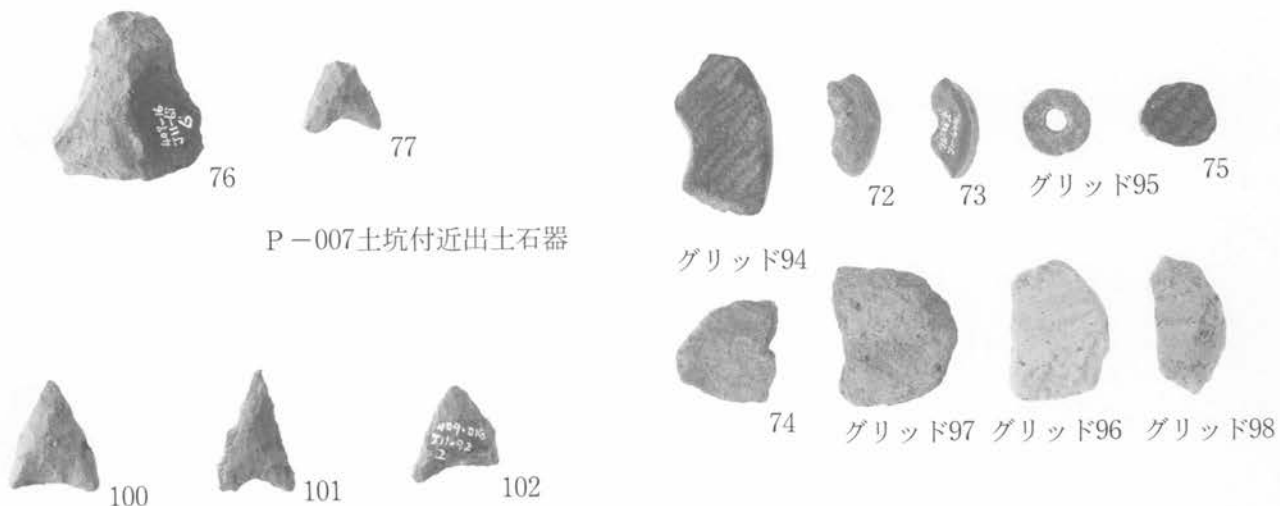
P-007土坑付近出土土器(3)



グリッド出土縄文土器(1)



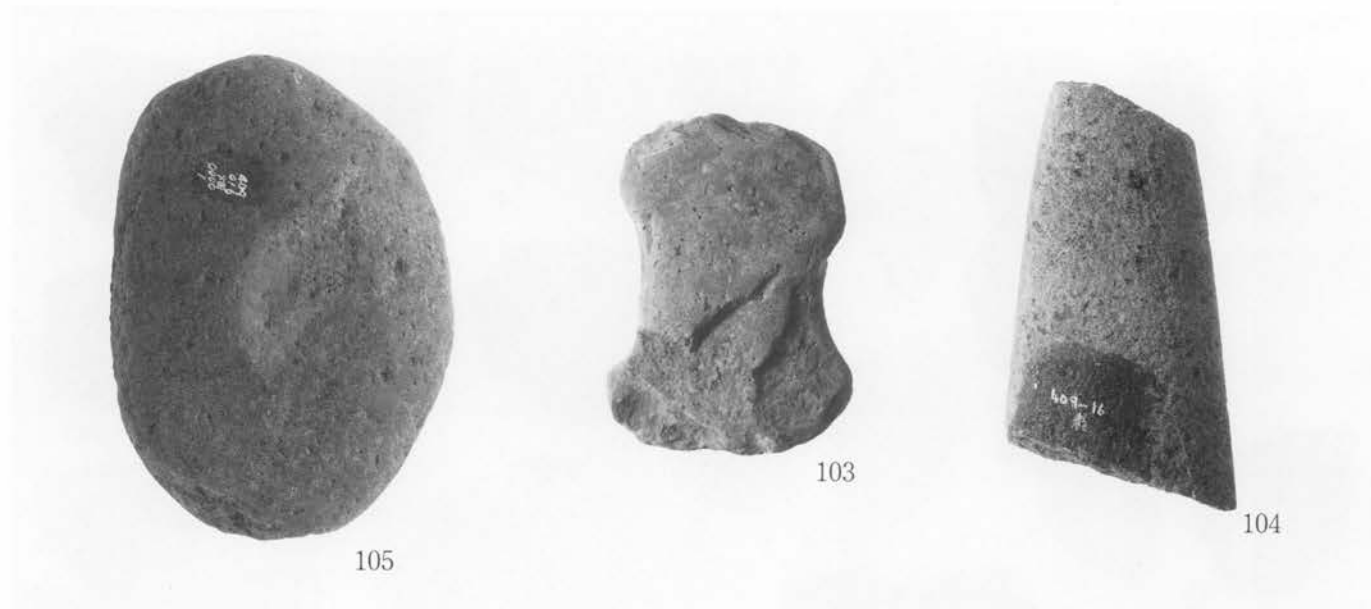
グリッド出土縄文土器 (2)



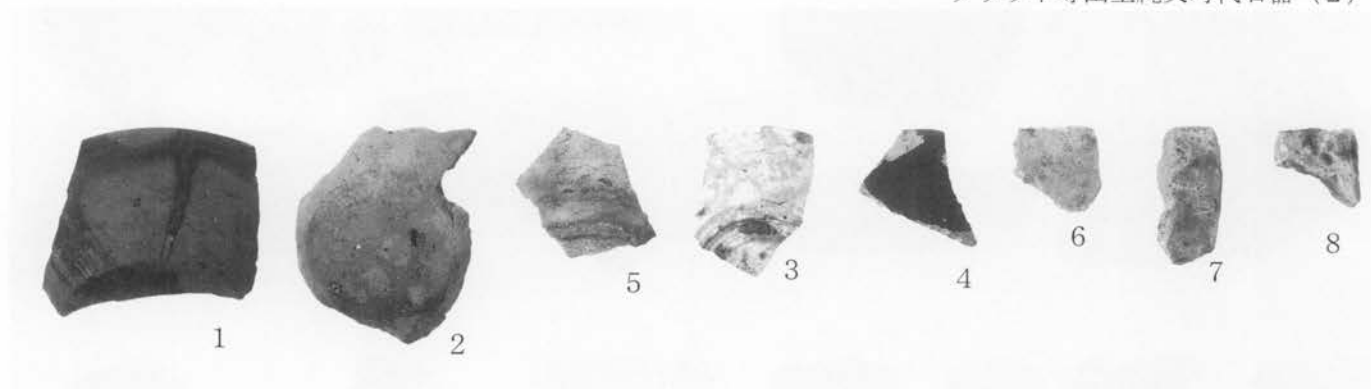
P-007土坑付近出土石器

グリッド等出土縄文時代石器 (1)

縄文時代土製品 (数字のみのものはP-007付近出土)



グリッド等出土縄文時代石器（2）



土師器、カワラケ、皿、鉢、砥石



銭貨

報告書抄録

ふりがな	くこうなんぶこうぎょうだんちまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしよ							
書名	空港南部工業団地埋蔵文化財調査報告書							
副書名	山武郡芝山町上宿遺跡・大堀切遺跡							
巻次	2							
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	353							
編著者名	鳴田浩司、安井健一							
編集機関	財団法人千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地2 TEL043(422)8811							
発行年月日	西暦1999年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみ 上宿	千葉県山武郡芝山町 岩山字上宿	12409	015	35度 43分 55秒	140度 24分 20秒	19840120～ 19910628	38,900	工業団地造成に伴う事前調査
おほ 大堀切	千葉県山武郡芝山町 岩山字大堀切	12409	016	35度 43分 50秒	140度 24分 25秒	19840120～ 19851112	11,800	工業団地造成に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上宿	包蔵地	旧石器	石器集中地点 3ブロック 単独出土 2地点	楔形石器、二次加工のある剥片、微細剝離痕のある剥片、剥片、破片、石核、接合資料		X層からIX層下部にかけてを主体とする。 調査区北側の痩せ尾根上に良好な包含層を検出。加曽利B式を中心とするほか、燃糸文土器、前期羽状縄文系土器がまともって出土した。 近世後期の農村の屋敷や土蔵が、それまでの掘立柱構造から、礎石や地業を伴う建物へと変化していく過程が明らかになった。		
	包蔵地	縄文	炉穴 1基 陥穴 11基 土坑 2基	縄文土器(早・前・中・後・晩期)、尖頭器、細石刃、石鏃、石鏃未成品、二次加工のある剥片、打製石斧、敲石、凹石、石錘				
	包蔵地	古墳、奈良・平安		土師器・須恵器(6世紀から9世紀)				
	屋敷跡	中近世	方形周溝状遺構 1基 土坑列 2条 竈 1基 粘土貼り土坑 4基 井戸 2基 土坑 7基 炭焼窯 1基 土蔵 1基 溝 2条	カワラケ、火鉢、焙烙、竈敷輪、焜炉、瀬戸美濃皿・皿・鉢・香炉・瓶・灯明皿・徳利・播鉢・甕・瓶掛・水瓶、肥前碗・皿・鉢、京都・信楽系碗、常滑甕、堺産播鉢、泥めんこ、土人形、砥石、石臼、賽子、北宋銭、寛永通寶、文久永寶、天保通寶、釘、包丁、鉄鍋、唐鋏、煙管雁首				
大堀切	包蔵地	旧石器	石器出土地点 1地点	微細剝離痕のある剥片、剥片		土坑の周囲から中期末の土器が多量に出土。竈穴住居跡が存在した可能性が高い。		
	包蔵地	縄文	陥穴 1基 土坑 1基	縄文土器(早・前・中・後期)、耳飾り、土製円盤、土器片錘、石剣未成品、石鏃、石鏃未成品、凹石、石剣、打製石斧				
	包蔵地 包蔵地	奈良・平安 中近世	炭焼窯 5基	土師器 カワラケ、瀬戸美濃皿・鉢、砥石、寛永通寶				

千葉県文化財センター調査報告第353集

空港南部工業団地埋蔵文化財調査報告書 2

－山武郡芝山町上宿遺跡・大堀切遺跡－

平成 11 年 3 月 31 日発行

編	集	財団法人	千葉県文化財センター
発	行	千 葉 県 企 業 庁	千葉県中央区長洲 1-9-1
		財団法人	千葉県文化財センター
			四街道市鹿渡 809-2
印	刷	株式会社	エリート印刷
			千葉県中央区市場町 6-8
			電話 043-225-5881
